連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 11 No. 3

第43号

December 2020

対人援助学会

NO. ４３　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者＠短信	執筆者全員	005-016
障害者福祉援助論	千葉　晃央	017-020
臨床社会学の方法（31）	中村　正	021-030
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団　遊	031-033
カウンセリングのお作法（25）	中島　弘美	034-039
集団精神療法について（休載）	藤　信子	
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援（9）-	岡田　隆介	040-045
「Family history」（2）	団　士郎	046-050
社会的養護の新展開　12	浦田　雅夫	051-052
幼稚園の現場から　43	鶴谷　主一	053-061
福祉系対人援助職養成の現場から43	西川　友理	062-067
ああ、相談業務	河岸　由里子	068-072
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	073-075
ドラマセラピーの実践・研究・手法（3）	尾上　明代	076-083
対人援助学＆心理学の縦横無尽	サトウタツヤ	084-092
きもちは言葉をさがしている（42）	水野　スウ	093-100
ノーサイド（34）	中村　周平	101-102
路上生活者の個人史	竹中　尚文	103-105
周旋家日記（休載）	乾　明紀	
男は痛い！（37）	國友　万裕	106-111
役場の対人援助論（35）	岡崎　正明	112-115
臨床のきれはし（11）	浅田　英輔	116-118
発達検査と対人援助学（2）	大谷　多加志	119-122
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	123-135
家族と家族幻想（4）	坂口　伊都	136-140
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―（28）	村本　邦子	141-163
病児保育奮闘記（最終回）	大石　仁美	164-165
対人支援　点描（24）	小林　茂	166-168
精神科医の思うこと（19）	松村　奈奈子	169-171
馬渡の眼	馬渡　徳子	172-175
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	176-183
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	184-186

そうだ、猫に聞いてみよう（20）	小池　英梨子	187-193
先人の知恵から　（30）	河岸　由里子	194-198
私の出会った人々（休載）	関谷　啓子	
うたとかたりの対人援助学　（16）	鵜野　祐介	199-202
あぁ結婚　（16）	黒田　長宏	203-205
PBLの風と土（15）	山口　洋典	206-211
接骨院に心理学を入れてみた（14）	寺田　弘志	212-217
現代社会を『関係性』という観点から考える（14）	三浦　恵子	218-225
マイクロアグレッションと私たち（休載）	朴　希沙	
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（12）	迫　共	226-229
「余地」―相談業務を楽しむ方法－（12）	杉江　太朗	230-233
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（番外編②）	松岡　園子	234-238
生体肝移植ドナーをめぐる物語（11）	一宮　茂子	239-253
「盲ろう者」として、自分らしく生きる（休載）	中條　與子	
こころ日記「ぽちぽち」 partⅡ	脇野　千恵	254-256
MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～（6）	高名　祐美	257-261
原田牧場 Note（4）	原田　希	262-264
みちくさ言語療法　（3）	工藤　芳幸	265-268
かけだ詩（3）	川畑　隆	269-273
ブルーグレーの肖像（3）	天川　浩	274-277
応援、母ちゃん（3）	玉村　文	278-280
HITOKOMART	篠原ユキオ	281-284
新連載２回目　アダルトグッズ OL 日記（2）	楊　梓（ヨウ　シ）	285-286
新連載２回目　キャリアと文化の心理学	土元　哲平	287-299
新連載２回目　フランスのソーシャルワーク	安發　明子	300-336
新連載　コロナ禍の中「幾度となく会い、語りあうことの意味」を考える	本間　毅	337-350
新連載　この世界で生きるあなたへ-国境なき医師団の活動をふりかえって-	河野　暁子	351-353
編集後記	編集長＆編集員	354-355



ハチドリの器 26

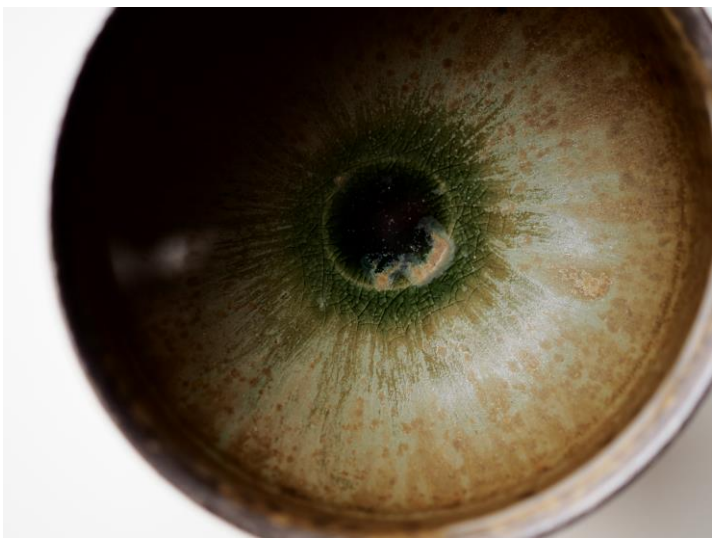
見野 大介

Mino Daisuke

上：蒼天釉香物鉢
右：樫灰釉浅鉢
左下：暁紅釉香物鉢
右下：樫灰釉茶盌







第 43 号
執筆者
@短信

GO TO コロナ号

本間　毅　新連載

日曜にも関わらず、前日の 2020 年 2 月 16 日に開催された専門家会議（正式の呼称や構成員は不明、議事内容も見当たらないまま、現在は「分科会」と呼ばれています）を境に、全くの異分野から登庸された厚労省トップ K 氏の、不自然なヘアスタイルと口調が微妙に変化し始めたことに気付かれた方はいらっしゃいますでしょうか。翌 2 月 17 日昼のニュースで、相変わらず原稿を棒読みする K 氏の眼差しは明らかに泳いでいました。その瞬間、「これは中国の一部の地域とクルーズ船だけの問題ではない、長い危機の前触れだ」と私は確信しました。周囲には「考えすぎ」、いや根拠がないので「妄想」とも言われましたが。そういえば 2019 年の第 11 回大会の企画ワークショップで、このごろ妙に蓮如上人の「白骨の御文」が頭に浮かんで仕方がないとカミングアウトした憶えがあります。

昼休みのうちに、家内のバースデープレゼントと考え予約した「ねじまき鳥クロニクル」の観劇をキャンセルし、ひと月後に当研究会の第 11 回事例検討会でプレゼンテーションを担当する二人の医師と、30 名を超える参加希望者全員に検討会と懇親会の中止を知らせるメールを送信しました。

その夜、帰宅した私の顔つきは「脱魂したシャーマン」のようだったと妻は言います。呑気に口笛を吹きながらパスタを茹でている場合ではない。徹底的に自分と向き合い、井戸（id イド）を掘込まねばならない時が来たのです。

2020 年 2 月 17 日、我々が住んでいた世界のねじは、確実に一巻きされ、当研究会の活動も完全にフリーズしました。それをデフロスト（解凍）したのは、11 月 13 日～15 日に開催された第 12 回大会だったのです。

コロナ禍の中、「幾度となく会い、語り合うことの意味」を考える
P337～

河野暁子　新連載

2006 年から 2011 年まで参加していた、国境なき医師団の活動について書いています。ずっと心の中にあったものを、ようやく文章にすることができました。長い間寝かせていた物語は熟成され、当時の私では書けなかった内容になったと思います。ひとまず 3 回の連載を目指します。お読みいただければ嬉しいです。

この世界で生きるあなたへ
～国境なき医師団の活動～
P351～

楊　梓（ヨウ　シ）　連載第二回

最近、麻雀をやり始めました。中国出身だが、麻雀をまともにやったことがないです（笑）。麻雀用語がほとんど中国語のカタカナ読みのことが初めてわかって、しかも標準語ではなく、どこかの方言も混ざっているような読み方で、とても面白かったです。麻雀の歴史や日中ルールの違いなどますます興味が湧きました。

アダルトグッズ ＯＬ日記
P285～

土元　哲平　連載第二回

今回は、私の博士論文についてのテーマで執筆させていただきました。博士論文執筆中は、オールボー大学（デンマーク）やヌーシャテル大学（スイス）などに、毎年文化心理学を学ぶために留学していました。最近では、2020 年 3 月にヌーシャテルに滞在しましたが、まさにコロナの時期での滞在になり、非常に印象に残っています。

ヌーシャテルには、文化心理学の集中講義と、研究に関する議論をするために渡航しました。ただし本来は、この渡航は、スイスだけでなくブラジルでの国際学会参加を含んだ、3 月末までの渡航になる計画でした。それが、コロナによって、3 月 19 日に途中帰国となってしまったのです。

スイスでは 2020 年 3 月 16 日に緊急事



態宣言が出され、街が静まりました。店舗はほとんどが閉店になり、スーパーが開いている程度でした。大学も休講となったので、研究活動も中断せざるを得なくなりました。航空便を変更できたものの、鉄道やフライトの中止が相次いでいたため、日本に本当に帰れるかどうか、とても不安に感じていました。

スイスに滞在中は、絵を描いていました。絵を描くと、どこか気持ちがすっきりします。この絵は、緊急事態宣言前に描いたものですが――スイスの美しいアルプスと、ヌーシャテル湖を描きました。遠くにうっすらと見える山脈が、写真だとどうしても見えづらく、ホテルに戻ってから写真をもとに想像して、絵に描いたものです。

ヌーシャテルも、今は少しずつ活気が戻ってきているのでしょうか。あの美しい、小さな町にまた行きたいと、時々想います。前回は不安の中での滞在・帰国となってしまいましたが、今度はゆっくりとした時間を過ごしに行きたいものです。

キャリアと文化の心理学
P287～

安發明子　連載第二回

フランスでは 11 月 23 日現在外出制限が功を奏して 9 万人まで増えた 1 日あたりの陽性者数が 4000 人にまで下がっている。しかし、そもそも 1 日あたりの検査数

が日本の 15 倍から 30 倍あったので、「海外は危ない、日本はまだ大丈夫」という日本の報道には違和感を覚え続けていた。かつ、こちらの週ごとの死者数の合計は 5 月以降去年や一昨年に比べて多いわけではないということも日本では報じられていない。日本の感染者数についてフランス人は信用していない。福島の原発事故のときの政府の対応が再三引き合いに出される。信頼を得るには透明性こそが大事であると思う。

調査先の福祉機関はどこも「腕の見せどころ」と言わんばかりに元気で、創意工夫や新たな取り組みを日々話し合っていて明るい。

特に 11 月に入ってからはクリスマスに向けたプロジェクトの数々が話し合われている。例えば「逆のアドベントカレンダー」企画は全国的に毎年展開されているものだが、参加者はクリスマスまで毎日一つずつプレゼントをリュックか箱に詰めていき最後にラッピングして、男性用女性用ユニセックス、女児用男児用のいずれか書いてホームレスやシェルターにいる人にプレゼントするものだ。クリスマスを暖かい気持ちで過ごせるように、マフラーや暖かい下着、歯ブラシやいい香りのシャンプーやきれいな柄のバスタオル、ハンドクリーム、文房具、楽しい気持ちになる読み物、チョコレートやドライフルーツなどが喜ばれるらしい。誰かの幸せを想い毎日つめていく楽しみも味わうことができる。

皆で力を合わせなるべく良い年末が過ごせますように。



(写真は町の薬局前に置かれた PRC 検査のテント「結果は 15 分、予約なし、8 時半から 20 時まで」と書いてある。無料で何度でも受けられる)

フランスのソーシャルワーク
P300～

玉村　文

先日、職場の若手職員数名を対象にした研修の講師を引き受けました。2 年ほど現場を離れている間に若手職員の顔ぶれも変わり、初めましての出会いもありました。そんな普段接点のない若手職員との交流の機会にもなり、少し人となりを知り合える貴重な機会になりました。

研修は知識の伝達や支援観の共有だけではなくて、どんな人が何を言うのかで受け止め方が変わっていくものだと思っています。今回、わたしのことを知らない若手職員へ、わたしの人となりからお伝えすることにしました。どんな思春期・青年期を経て、現在に至るのか、どんなキャリア形成を描いてきたのか、そのうえで研修テーマの話に入っていきました。一方的に自己開示をする気恥ずかしさはあったのですが、できるだけ正直にそしてキラキラしていないリアルな自分を提示することに勤めました。そうすると、ああ、研修の講師って参加者と向き合うことだけじゃなくて、自分とも向き合うのだなと気づかされました。日々の現場ではなかなか築いにくい、同僚観の絆を研修という場では作れるのではないかと思います。現場を少し離れて研修という形で、ともに学び合う場に身を置く重要性を感じました。同僚とリスペクトしあえる関係を築きたいなーと強く思う今日このごろです。

応援　母ちゃん！（1）
P278～

川畑　隆

前号の「かけだ詩②」の「帰着点」ですが、一字抜けて、「騙しやすい」が「騙しすい」になってました。「や」が抜けたら血が出ますなんて言ってる場合じゃなくて、そもそも文字の少ない原稿ですから、さらに目をさらにしたいと思います。

94 歳の母が福岡の特別養護老人ホームにこの春からお世話になっていて、しばらく面会禁止だったのですが、15 分間の予約制で会うことができました。他府県からということで、面会の 2 週間前からは会食を控えるようにとの注文もつきました。施設の入口では消毒→手洗い→消毒と厳重でした。老人に感染させたらそりゃたいへんですからね。

アクリル板越しかなと勝手に想像していたのですが、玄関ホールのソファーにふつうに座ってマスクをつけました。母からの「隆はどこに住んでるのか？」「自分はどこにいるのか？」…それが話題の中心でした。私のことも兄たちのこともわかっているようで、「元気に過ごしてらっしゃいますよ」と職員のかたからうかがいました。

施設はけっこうな山の中でした。「自分はどこにいるのか？」…私もちょっと不安になりました。

「かけだ詩　②」
P269～

天川　浩

紅葉の時期になりました。私もまだ一枚も売れていませんが、プロの写真家の端くれとして、京都の左京区の下鴨神社に紅葉撮影しにいきました。素晴らしい紅葉を前に快調にシャッターを切っていきましたが、本殿にお参りして、お賽銭を入れようとしてカバンを見ると、お札とポイントカードの入った財布が見当たりません。落としたと思い、二時間ほど探しましたが、ある訳ありません(笑)交番に行きましたが、「もっかい戻って探して来い」と回答されました。電車の役務室で、事情を説明しましたが「あなた自身が落としたんでしょ？自己責任ですよ」と門前払いされ、下鴨警察署の落とし物係りの綺麗な女性警官に「お金借りられるかもって甘い考えで、ここに来たんですか？」とトドメを刺されて呆然としましたが、これはもう歩いて帰るしかない、と意を決し、11 月だというのに 25℃もある炎天下を 5 時間歩いて、帰路に着きました。脱水症状になりかけて、東福寺の交番に「頼むから腰掛けさせてくれ」と頼むと、署員の方が、ジュースをさしだしてくれました。慈雨とも甘露とも思いました。

そして、ふと思いました。「私には、こんな時に『助けを求める人間はだれ一人としていない』のだ」ということでした。とてもよい勉強になりました。これからは鎖で財布を体にグルグル巻きにして外出したいと思います。無縁社会がなくなりますように活動していきたいです。

ブルーグレーの肖像

P274～

篠原ユキオ

断捨離の中で長い間書庫の隅に並べていた百科辞典を捨てた。70 年代にはちょっとした家には必ずあった平凡社の大百科辞典である。一度も開くことのなかった刊もある。多くの家庭でもただ並んでいるだけという家も多かったのではないかと思う。イザという時のためにと大学を出た頃に買ったものだったが結局、活躍の場は数えるほどしか無かった。一緒に亡妻の文学全集も捨てた。世の常識や知識はどんどん古くなる。自分自身も更新できなくなったら断捨離かなと思ったりする。



HITOKOMART

P281～

原田　希

牧場の仕事と家事で一日があっという間に終わる生活。原稿もわずかな時間を見計らって一日5行ずつというペースです。勤め人時代からなんでもソツなくやってきて、内心はアップアップしていても、それを見せない主義でした。

牧場でも貫いてきたけれど、もう体力がぎりぎりです。ごはん作りを機械に任せることにしました。具材と調味料を入れてボタンを押すだけの電気自動調理鍋を購入。これは大助かり！ありがとうハイテク！クリスマスのビーフシチューもこれにお任せしよう。年末年始も休まず働いている酪農家ですが美味しいものが食べられるならがんばれます（単純）！

原田牧場 Note

p～

工藤　芳幸

大阪に引っ越してきて 9 年目にしてようやく部屋が片付き、きれいな床が見えました。毎年とにかく自転車操業で、少し片づけては放置。途中、大阪北部地震で本棚が全部倒れた事態を経て、大量の本を段ボールに入れてブックオフと往復してようやく…です。自分の身のまわりのことを後まわしにして、外向きのことばかりしてきた時間だったように思います。今年新しかったことは、オンラインの読書会に参加し始めたことです。仕事絡みの読書ばかりしてきたので、ちっとも読み進めることができずに悪戦苦闘していますが、なかなか良いと思って自分でも新たなオンライン読書会を企画。現在、3 つの読書会を並走中です。また、読書会で読んでいる本から派生し、引っ越し前から放置していた本を引っ張り出してきて、隙間を見つけては自分のペースで読み進めています。長女が書店員のアルバイトをしていて割引がきくというので調子に乗って新刊本を仕入れてしまい、ブックオフに売って空いたスペースがまた埋まってきているので、年末までにはまたブックオフに行かないと…と思案しているところです。

みちくさ言語療法

P 265～

高名祐美

コロナ禍。終わりのない自粛生活。職場は医療機関。感染予防のため、私には「Go to travel」も「Go to eat」も縁がない。兵庫県の孫に会いに行きたいが、それもかなわない。自宅と職場の往復に、スーパーへ食品の買いだしをするだけの日々。

研修会や学会は中止からオンライン方式へ。会場に行かずとも自宅にいながら学べるはずなのに、なぜかテンション低め。パソコンと向き合う時間が多くなり、眼精疲労と肩こりが悪化する。

そんな日々に、最近楽しい出来事があった。職能団体の会長を拝命していた時代、副会長を務めてくれた二人の仲間と久しぶりに会ったのだ。一人が私の住む地域に、講演で来ることになり、もう一人も便乗してやってきてくれた。外食は禁止なので、我が家で出前のお寿司をふるまいながら思い出話に花をさかせた。

三人で会うときは、なぜかいつもプレゼント交換になる。今回私は色鮮やかなマフラーを準備したのだが、もう一人もマフラーを準備していた。それがまた話題になって、会話が盛り上がる。いただいたマフラーは最近の通勤に重宝している。他の二人も私が選んだマフラーを気に入っていただけたようで、ラインにメッセージが届く。もう一人から、マフラーのお礼にとプレゼントが郵送されてきた。またそれで盛り上がる。

仕事以外で「人と会う」「人と話す」「人の話を聴く」その醍醐味を久しぶりに味わった。やっぱり私は人と向き合うことが好きなのだな。そう思った。七尾まで来てくれたお二人に感謝。

MSWという仕事

P257～

大石仁美

プライドの壁

TVドラマの中で、「何か私に出来ることがあれば」と申し出た人に対して、「憐れみは要らない！私にだってプライドがある！」と叫ぶ場面を見てドキッとした。

無意識に人を傷つけていることは一杯あると思う。確かにそうだ。同情や哀れみは人を傷つける。だけど待てよ。なんか違う。自己弁護かもしれないが違和感がある。「そんなプライドなんか捨てろ！」と私は叫びたい。

困難にぶち当たって、苦しんでいる人を見たら、何かしてあげたいと思うのは自然の心理。それを上から目線の同情だと言って切り捨ててしまうのは、かなりのひがみ根性。確かにプライドは大切だ。自分が自分であるための最後の防波堤かもしれない。

「不必要に相手の心に踏み込まない」という鉄則さえ守っていれば、「助けてほしい」「助けたい」と思い、自然に素直にお互い心が動くとき、人から人へと繋がる温かく強い力が沸き上がることを私は知っている。

人が喜ぶ姿を見ることはとても嬉しいこと。例え同情からであったとしても、喜ぶ姿に接し、もっと何かしたい、自分に何かできることはないかと思い始めたとき、出

来ることの限界に気づき、物事の大きさに気づき、そして小さな自分に思い至る。

つまり、助けてもらった人が素直に喜ぶと、助けたほうの心に変化が生じ、たとえ上から目線だったとしても、それは消失するのである。 プライドの壁が人を不幸にする。プライドが高いと誰も幸せにはなれない。

病児保育奮闘記（最終回）

P164～

岡田隆介

「子どもからこんなことを聞かれたら」シリーズが終了し、次の「家族援助、二つの取っ掛かり」シリーズに取っ掛かる。次の準備ができてないと不安になる、この強迫性は昔からだ。いい加減に解放されたいと思う一方で、そんな自分も悪くないとも思う。つまるところ、どの自分も嫌いじゃないのだ。めでたし、めでたし。

エア絵本 –ビジュアル系子ども・家族の理解と支援（4）–

p40～

一宮 茂子

【毎朝 10 分間のすこやか体操】

毎日、あるセンターに行って朝 10 時から「すこやか体操」をしています。もう何年つづいているのでしょうか。少なくても足かけ 7 年以上にはなると思います。たった 10 分間ですが、真面目にすれば筋肉トレーニングにもなります。参加者はそれぞれの年齢や体調にあわせて身体を動かします。今年はコロナの影響で集まる人数は 20 人くらいです。もうすっかり顔なじみになりました。私が毎日「すこやか体操」に参加する理由は、日々の生活のリズムを整えること、地域社会と繋がりをもつこと、さまざまな人たちに出会うこと、地域の情報収集をすることなどです。在職中や大学院生時代では味わえなかったこの生活。ありふれた生活の繰り返しですが、何よりも心のゆとりと安らぎが嬉しくおもわれる毎日を過ごしています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語

P239～

松岡 園子

昨年から習い始めたジャズダンスの発表会が 11 月に行われ、私はこれが初舞台でした。コロナ対策も叫ばれる中、こうした舞台を企画し実施に移していかれたインストラクターの先生や関係者の方々のパワーは凄まじいものでした。

「ダンスを通じて伝えられるものがある」という信念のもとに指導を続けてこられている先生や、踊ることが大好きな仲間からは、身体表現の場に立つことができる喜びを教えてもらいました。

これまで何かを表現するといえば文章を使うことが多かったですが、身体を使って表現していくこともこれから更に深めていきたいと思います。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

P234～

杉江 太朗

児童福祉現場で働く杉江と言います。職場では、ZOOMが大盛況である。私自身のパソコンも「ずーむ」と返還すると「ZOOM」と勝手に出てくようになっている。私の職場では、ZOOMを使って、子どもと親の面会や、会議、実習、そして研修などが行われるようになった。時間を選ばず、感染を防ぐその方法は何と便利なことだろうか。プライベートでもZOOMでの研修が増えている。そのおかげなのか、そのせいなのか、遠方への出張が皆無になっている。研修をきっかけとした、新しい土地への旅行も当然ない。今までは、新幹線や飛行機などの路線の広がりの影響で、移動中にもパソコンを使い、日帰り出張の範囲が広がり、忙しさを増したように思っていた。ZOOMはその先を行き、その範囲から離れずとも繋がることが出来るようになった。なんと素敵なことなのか。ただ、そのせいで新しい土地にアクセスできなくなったのは、寂しい限りでもある。

「余地」–相談業務を楽しむ方法–

P～

迫 共

ひとり親支援のための一般社団法人 1×1（ワンバイワン）を立ち上げ、代表理事に就任しました。サッカー日本代表の長友選手が呼び掛けた基金から支援を受けて、静岡県下で食料配布会を行い、新聞にも取り上げられました。コロナ禍の状況で、こども食堂よりも直接支援が必要なご家庭が顕在化しているように思われます。年末にかけても食料配布会を実施します。支援を必要とする人たちが、無事に年を越せますように。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P226～

朴 希沙（Kisa Paku）

私事ですが、9 月末に子どもが生まれました。妊娠中も大忙しで過ごした日々。実際子どもが生まれてきたらどんな気持ちになるのかなあ、かわいいと思えるかしら？やっぱり特に最初はめちゃくちゃ大変なんだろうか…と不安もいっぱいでしたが実際生まれてくると「か、かわいい…‼」自分に似ているからとかそんなんじゃなくて、出す音や仕草、表情やにおいまでとてつもなくかわいくて驚きました（笑）また私は幸運にも授乳や産後の回復も順調だったので、そこまで大変な感じもなく、「思ってたより大丈夫かも」という気持ち。でもその一番の理由はうちにお手伝いに来てくれている近所の人たちがいるから。産後から特に 1 ヶ月間は毎日家族以外の人にうちにいてもらって、色々なことをおしゃべりしつつ家事や育児を手伝ってもらっていました。そんな我が家で今流行っている言葉が「コミュニティで（子どもを）育てる」。家族だけの閉じた空間から飛び出してコミュニティで子どもを育てる取り組みを始めてみよう！と試行錯誤しています。山あり谷ありですが、新しい出会いや学びも多い日々。

またここ数年取り組んでいたマイクロアグレッションの翻訳がついに完成し、12 月に『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』として明石書店より出版されます。もう amazon でも出ているのでぜひチェックしてみてください。これまで『対人援助学マガジン』で紹介してきた内容ももりだくさんの、日本では初めて翻訳出版されるマイクロアグレッションの基礎文献です。

マイクロアグレッションと私たち

休載

浅田 英輔

うちの協会の相馬事務局長が仕事で仲

良くしている保健師さんから「町立図書館にこころのケアの特設ブースを作りたいから協力してほしい」と相談を受けた。当会役員みんなで「あれがいいこれがいい」とアイデアを出して、それをもとに検討して作られたブースがこちら。私がおすすめした本もあってうれしい！

町立の図書館なのに、なかなか攻めたラインナップ。三戸町は、11ぴきのねこのまちでもあります。一度見に行かなければ！



臨床のきれはし
P116～

三浦　恵子

ボランティア仲間から次のような話を聞きました。

関東圏外に住む義母から電話がかかってきたとのこと。彼女は私同様関東圏に在勤在住しつつ，義父母の遠距離介護を続けていました。しかし今回のコロナ禍で義母からは自分が居住し働いている地域のことを「コロナの国」と称され，エッセンシャルワーカーでもある彼女に対しての差別的な発言もあったとのこと。

彼女の義母は「コロナが怖い」と自宅に閉じこもり，インターネットが使える彼女に対して様々な物資の要求を続け，彼女も介護帰省できない代替であると考え，繁忙な業務の合間にそれに応じていました。自分の仕事と義母の対応に本当に疲弊する思いだったと聞きました。

そんな彼女に対し，ある日その義母から「特別給付金が出た。高級な寿司が食べたい」と電話がかかってきた時には，さすがに力が抜ける思いがしたといいます。彼女は特別給付金については様々な団体等への支援に使うことに決めていたためその旨を伝え，義母の要求をさりげなく断ったところ，「そんなことやっている人なんて見たことがないわ」と言下に否定されたとのことでした。

今回の原稿の内容にも関連しますが，どれだけ多くの人がコロナ禍に向かい合っているのか「閉じる」ことで見えないことが一杯あるのかと感じた出来事です。彼女の義母は今、Go-To キャンペーンに協力するのだという名目で観光地や温泉に繰り出しているとのことでした。「こうして金を使わないと経済が回らないのよ」「私たちが経済を回すのよ」と彼女を揶揄するように言い放ったとのことでした。

彼女のため息交じりの相談を受けながら，これは嫁姑アルアルの問題ではなく，今回の原稿で私が述べさせていただいた，「開く」ということを知らないままで過ごす人を身近に抱えることの大変さや，その人自身もまた世界を狭めているという不幸について実感しました。

更生保護護官署職員

（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P218～

黒田　長宏

私には菅新総理大臣と同じところと、右頬の真ん中にシミがある。メンズケシミンという商品があるのを知り、購入して使い始めた。まだ消えていない。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P203～

山下桂永子

3 日前、インフルエンザ予防接種を受けました。ここ数年は毎年受けているんですが、毎回予想の 1.5 倍ほど痛いです。3 日経っても腕がパンパンに腫れてだるいです。

そういえば小さいころから痛い、辛（から）い、熱い、冷たいものが苦手です。炭酸も飲めません。ちなみにドッキリもホラーも鬼ごっこも苦手です。なんでわざわざ怖い思いをしないといけないのか全く意味がわかりません。どうやら人間としてのいろいろな閾値が狭いみたいです。心だけは狭くならないようにしたいのですが、そういうことが好きだったり得意な人からの「大丈夫やって」「大人になったら食べれるって」という言葉、うっかり信じちゃって「だまされたうそつき！」ってなることが大人になってもしばしばあります。

今回からは、対人援助マガジンに新しいテーマで書かせていただきます。ちょっと前置きが長くなってしまって、ほぼ題名の説明だけで終わってしまったのですが、プロローグと思って読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P184～

尾上明代

自分の表現活動の一つとしてダンスをしているが、コロナ禍になってからは、オンラインで個人レッスンを受けている。先生は香瑠鼓さん。（著名な振付師・アーティストなので、ご存じの方も多いと思う。）私のお気に入りメニューの一つは、好きな自然界の景色をイメージしたり、その「モノ」になって即興で踊ることだ。

今週は、昔、旅したことのある、カナダのビクトリアにある植物園に「行った」。ピンクのバラがたくさん良い香りを放ちながら咲いていた。その中の１本になって私は踊り出す。先生がその雰囲気にあった曲をすぐに選んでかけてくれた。私の雰囲気が曲選びに先行したが、曲がかかると、さらに私がその曲に合わせる。それを見た先生が、私の動きを取り入れつつ、違う振付で踊り出す。それに私がミラーリングする。という風に、一体感と新たな「発展的変容」が交互に混ざったダンスとなった。音楽とリズムとともに身体と表情で「表現」すると、「ああ、身体と心に良いことをした！」と実感する。こういう贅沢が、リモートで間身体的にできているのは、すごいことだ。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P76～

松村奈奈子

コロナコロナな毎日。
でもコロナ第２波と第３波の短い間に、「今はいいよね？」とオープンカフェでお友達と会う事しきり。いやー、人に会うっていいなぁ。お互いに話したい事＆聞きたい事がたまっていたので、話は尽きません。たわいもない女子トークがメインですが、医療関係者ばかりなので、ちょっとした医療

情報交換もできました。そして、今は第3波。「コロナ収まったら、また会おうね」が合言葉です。

精神科医の思うこと
P169～

鵜野祐介

このほど、『センス・オブ・ワンダーといのちのレッスン』（港の人）という本を刊行しました。よろしければぜひお買い求めください。



うたとかたりの対人援助学
P199～

柳　たかを

DIY ファイアーピット

奈良県の我が実家は JR 線路そばにある。敷地の線路沿いの高さ 1.5 メートルほどだったカイヅカイブキ(針葉樹)と桑の木が年を経るごとにどんどん成長し、陽の光も視界もさえぎるほど大きくなってしまった。桑は成長が早く枝が上にも横にも伸び広がり高さ幅ともに 5～6 メートルにもなり線路側に伸びた枝のために JR から文句がきそうだ。

インターネットには色々な庭木の適切な剪定時期や剪定方法を解説してくれるサイトがある。おかげで昨年は伸びた木々の剪定をかなりやり遂げてスッキリしたが、1つ問題があった。

剪定後に出た大量の切り枝の処分だ。軽トラックに切り枝を満載し　ゴミ焼却場で焼却処分してもらったが、1 回目、2 回目と持ち込んだ時、職員に聞かれた。

「あと何杯あるの？」

処分場では毎日膨大な量のゴミ・廃棄物が焼却処理されている。車で地上 3 階の高さにあるゴミ投入口に行き、トラック 3 台分の駐車スペースからはるか下方の炉内にゴミを投げ入れるのだが、充満する腐臭・匂いがキツイ。ここで作業する人は毎日大変だ…

持ち込むゴミは 100 キロまで無料、100 キロまでに抑えて数回に分けて持ち込む輩もいるかもしれない。神経質になるのも理解できる。

そういうことならば、我が剪定ゴミは自宅で薪にして燃やそう。昭和の昔、大人は長屋の前の生活道路で廃材・落ち葉などで焚き火（とんど）をした。残り火で焼き芋を焼いたりして食べた。

時々、薪や落ち葉を燃やすぐらいは可能なスペースがある我が敷地だが、大量の切り枝を敷地内で定期的に焼却するにはちゃんと焼却設備を作ったほうがいい。味気ないドラム缶炉より焚き火を楽しめる設備を作ろうと思い、調べるうちファイアーピットなるものを知った。炉を石や耐火煉瓦で囲みバーベキューなども楽しめる。このくらいなら自分にも作れそうだ。

焚き火に照らされ物想いにひたる姿を妄想をして「楽しいかも」と決定。

2.5 メートル四方のレンガ敷の中央に直径 1.3 メートルの炉をうがつ。昨日はレンガの下のコンクリート床を打ち終わり乾燥を待っている、このあとレンガ敷きの予定。以前はコンクリート打設なんて素人の自分にできるのか不安だらけだったが今回で 2 回目。

DIY は完成がゴールとは限らず、製作途中に苦労と背中合わせのやりがい・楽しみがあると思う。団塊世代、日々の DIY 作業に気づきや発見をさせてもらっています。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P176～

小林茂

今年も10月から体調が安定しない。今年の11月はこの年最高度にスケジュールが立て込んでいて堪える。北海道に来てから何時くらい経ってのことか、ずいぶんと風邪をひきやすくなり、風邪をひくと回復までに異様に長引くようになった。免疫力というか、免疫機能が落ちているようだ。年齢のこともあるのかもしれないが、これまでの仕事の忙しさなどがたたって持病持ちになったこともあるかもしれない。

しかし良いこともある。3年前までよりも一年一年、生活状況は大きく改善しつつある。毎年、ささやかでも成果を受け止められている。何事も一つ一つできることを積み重ねて、物事をより良く変えていけるのではないかと希望が持てている。素直に「ありがたいなぁ」「感謝だなぁ」と思う。短信を書くのにあたって、そんなことを感じることができました。

＊温泉話題は、新コロナの影響もあり？このところ新規開拓できずに留まっています。出歩くことがあれば掲載します。

対人支援　点描
P166～

中島弘美

カウンセリングの仕事を始めたころ、不登校状態にある子どもさんとそのご家族に数多くお会いし面接をした。20 代のときは、思春期の子どもたちと年齢が近く、いまから考えるとジョイニングしやすかった気がする。

かれこれ 30 年以上たった今、ジョイニングしやすい年齢を考えると、初老や定年退職前後の世代になる。今後は、メインの相談が思春期カウンセリングから高齢者対象の思秋期カウンセリングへ幅広い世代に移行することになるだろう。

思秋期という言葉はあまりなじみがないかな？エルダーカウンセリングがいいかな、それとも、高齢支援相談がいいかな？

終活などの言葉が飛び交う昨今、これまでの経験を重ね合わせて、今後長くできることは何かをゆるりと考えている。

カウンセリングのお作法
P34～

団遊

例年の人間ドック。今年はコロナの影響で医師面談もなく、検査終了後すぐ帰れる予定だった。ところが看護士から居残り指令。待たされたあげく「不整脈が出ている」と知らされた。14 年目にして初めてである。後日、心臓エコー検査と 24 時間ホルター検査を受けることになった。追加

検査当日、エコー検査後、身体にペタペタと心電図を取るラインをつけられ、首から小さなお弁当箱みたいなものをかけられる。「これで普通に 24 時間過ごしてください。お風呂はダメ。行動記録をこの用紙に書いてください」と言われ、素直に実施。不自由はないが、つい、さっき小便した時間を忘れたりしてしまう。

検査結果は、本号の発刊タイミングくらいに聞きに行くことになるそうだ。不整脈が出ていなければもう一度、になるかもしれないらしく、それは勘弁だ。「不整脈、顔を出してくれよ！」と願うなんて、なんだかおかしな気もするけど。

人を育てる会社の社長が、
今考えていること
P31～

村本邦子

コロナ以後、マイクロツーリズムに精を出している。最初の頃は、大阪の街をひたすら歩き回っていたが、夏になってすっかり歩かなくなり、時々、車でどこかに出かけて、花を見たり、森を歩いたりして、近くの道の駅で土地の野菜や果物をどっさり買って帰るという遊び方になった。県境を越えることもあるが、基本的に、オープンスペースの自然を堪能している。

元気なうちは遠くを旅して、老後は近場を車で回ろうと計画していたが、老後が早くやってきた感じだ。日本にも素晴らしい自然がまだまだたくさんある。そして、車は電気になった。

周辺からの記憶 —東日本大震災

家族応援プロジェクトー(22)
P141～

國友万裕

今ダイエット中です。ボクシングジムに通い始めました。実はここの息子さんが教え子で、「是非、来てください！」と言われたからです。彼は真面目ないい子なので、彼にトレーニングしてもらおうと無料体験。50 年ぶりくらいでなわとび(笑)。やってみると意外に楽しいものです。チケット会員になりました。

彼はイケメンでかっこいいので、大きな鏡の前で二人並ぶと見劣りするから、それがモチベーションになっています。1 年後にはもっとスッキリした体になって、彼と並んでボクサー姿の写真を撮ってもおかしくないところまでいこうと頑張っています笑。

その頃には 57 歳。おじいさんボクサー笑です。

男は痛い！
P106～

古川秀明

新型コロナウィルスの影響で令和 2 年 2 月以降の講演会&ライブは全て中止の状態の上に、過酷な免許更新となりました。だけど警察署の女性検査者の思いがけない優しさに触れ、温かい気持ちになれました。

講演会＆ライブな日々

P123～

西川友理

京都西山短期大学で、保育士・幼稚園教諭の養成をしています。それから、支援者に向けた当事者研究会や勉強会を定期的に開催しています。その他社会福祉士養成などにもちょっと携わらせていただいています。

実は趣味で自由律俳句(季語、形式等にこだわらない俳句。種田山頭火、尾崎放哉などが有名)を書き溜めています。今の所、句集を出したいとか句会に参加したいということもなく、徒然なるままに、自分の精神安定の手段としてぼつぼつと詠んでいます。

「コロナの今を、残そう。コロナに関する句、詩、和歌、書を集めたいと思います。賛同される方はいらっしゃいますでしょうか。」

初夏、たまたまこの企画の主催者であるタグチユウスケさんのメッセージを知った私は、その瞬間に「強く賛同します、意味あることだと思います」とメッセージを送りました。

その渦中にいるからこそ見える、生活の中の気付きを記録しておくこと。それがあとから大きな意味を持つ。それを体感的に知ったのは、この『対人援助学マガジン』を書かせていただいているから、だと思います。

そして今年 9 月、集まった句から選出されたものが『コロナの詩　みんなでつくろうコロナ句集　Kindle 版』として発売されました。

私もいくつか作品を選出していただいています。(本名ではありませんが…俳号というのもまだ恥ずかしくて、自分ではペンネームと思っています)読む人が読んだら私とわかる作品もあるでしょうが、今はまだちょっとどれが私かは内緒にさせてください。でも、誰が書いた句も生活の実感をともなった、ぎゅっとした句になっています。よろしければどうぞ。句集ですので、あっという間に読めてしまう、小さな作品集です。売り上げは制作費を上回った時点で、コロナ関係の寄付に回されます。まだ、上回っていません(笑)

コロナ句集製作委員会（著）タグチユウスケ(編集)『コロナの詩　みんなでつくろうコロナ句集　Kindle 版』めがね＆カレー書房

「自由律俳句、詩、短歌、書。コロナ禍で詩人たちは、今を残そう、と呟いた。10 年後、20 年後、100 年後の仲間たちのために 。



福祉系対人援助職養成の現場から
p62～

坂口伊都

Zoom での研修、会議、打ち合わせ等が増えました。今回は Zoom あるあるを少し紹介します。大学生相手に話をしましたが表情が見えないので話し難いですね。

ある程度、気持ちを無にして話している私がいます。外部講師として参加した次の日にコロナの感染者が出てキャンパス立ち入り禁止になったそうです。

Zoom は、家ですることが多いので、ピンポンが鳴ったり、犬が鳴いたり、ネコが Zoom に乱入して落ち着きません。雄ネコの方は、来客があっても顔を出す性格ですが、雌ネコの方は来客があると一目散に逃げだして隠れます。でも、Zoom に乱入するのは決まって雌ネコの方で、今なら映るというのがわかっているかのようにやってきます。不思議です。

Zoom での大失敗は、夜の打ち合わせがあって、昼に「今日の 19 時だな」と確認していたのにも関わらず、晩御飯のハンバーグを作っていたらすっからかんに忘れてしまいました。それからは、カレンダーに Zoom 予定を書き込むことにしています。Zoom は気軽のようで、複数参加になると、ねぇねぇという雑談が難しいですね。家でするのが楽なような、面倒くさいようなと思うのは私だけでしょうか。

家族と家族幻想
P136～

河岸由里子（臨床心理士）

【最近思うこと】スクールカウンセリングをしていると、色々な男の子に遭う。家族にもよるのだろうが、男の子の様子が変わってきた。

10 年前ころから、女子の方が元気で、男子は元気がないなと思うようになった。その 3-4 年後くらいから、リストカッターやオーバードーズが男子に増えたなあと思うようになった。そして最近は、過呼吸発作を起こす男の子が増えてきたなと思う。リストカットやオーバードーズ、過呼吸発作は多くの女子に見られた症状で、男子は少なかった。それが増えてきた。

肉食系女子と草食系男子と言われたことがあったが、その延長線上にこの状況があるのだろうとは想像していたが、こんなに早く来るとは思っていなかった。

ミジンコは生息環境が悪くなって増えすぎると、皆雌になるという。人間も地球上で増えすぎたのだろうか？温暖化も進んでいる。電磁波やら5G やら放射能汚染やら、環境が悪くなっている地球上で、人類は生き残れるのか？

我が家のすぐ近くの雑木林が無くなり、太陽光発電のパネルが建てられている。北海道の自然もいつかは壊れてしまうのかもしれない。なんだかなあ・・・。

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし
主宰

ああ、相談業務
P68～
先人の知恵から
P194～

岡崎正明

GOTO トラベルで近場の温泉に家族で行かせてもらった。古い旅館を見て名探偵コナンの好きなうちの子は「殺人事件が起きそう…」と期待と不安半々の感想を述べていたが、起きた事件といえば夜中にカメムシが出たくらいだった（それでも妻には大事件だったが）。

高級旅館ではないが1泊2食のちゃんとした食事が出て、家族 5 人で 2 万円もかからなかったのだから相当格安だ。ありがたいことである。

嬉しい反面「このお金は誰が補填するのだろう…」と考えないでもなかった。それは将来の私になるのか、それともこの子たちか、そのまた子どもになるのか。詳しい理屈は分からないが、結局先延ばしにするだけのことなのかもなーとも思ったり。でも今を生きなきゃいけないから、時には先延ばしも必要だろう、なんて思いもよぎる。

温暖化や原発や領土問題なんていう大きなテーマから、我が家の収納やたまった写真の整理まで、私たちは何かと先延ばしながら、ズルズル生きていくしかない生き物なのかもしれない。やれやれ。どっかで向き合わないと。でもまったく先延ばししない生き方というのもまた、あまり健康的ではないような気もしたり。バランスが難しいなあ。

役場の対人援助論
P112～

大谷多加志

今号の執筆者短信を書こうとして、ふとマガジン 39 号の執筆者短信を読み返しました。発行日は 2019 年 12 月、新型コロナの脅威に世界が覆われる前夜でした。

39 号の執筆者短信には、いつも通り、執筆者それぞれの日常（日頃の悩みや葛藤、これからの展望など）が雄弁に語られていました。もちろん、そこに感染症の影などありません。当たり前と思っているものが失われるのは一瞬で、そこには明確な予兆も有効な対策もなかったりするのだと、改めて実感します（39 号の短信には、執筆者の中島弘美先生が阪神淡路大震災で同様の感覚を持たれたことが書かれていて、今読むからこそのインパクトがあります）。

新型コロナの影響が顕在化しつつある春先に、17 年勤めた職場を退職し、あれこれ掛け持ちのごった煮生活に移行しました。もし去年辞めていなければ、今年退職を決意することは難しかっただろうなぁと思います。今年は、大学での仕事に加えて、地域の小児科での心理相談や保育園の訪問などを始めましたし、対人援助学会にも初めて参加できました。新しいことを始めると、また次にやりたいことが見つかったりもします。最近の願望は、マガジン執筆者の皆さんに会いに行くことです。遠からず実現したいなと思い、ここに書き記すことにしました。

発達検査と対人援助学
P119～

馬渡徳子

今年もライフワークの一つである「人権講話」で、県内の自治体や学校、職場を回っている。

過去 19 年間には、講演の後に質問時間を設けても、殆ど直接質問を頂けることはなく、代わりにアンケートに、回答依頼を含めての質問や、感想等の様々な反応を戴いてきた。

しかしながら、今年は違っている。

必ず、「自分の他人への怒りや、許せない気持ちを、どのように処理していますか?」「アンガーマネジメントが流行っていますが、効果はあるのでしょうか?」という直接質問とアンケートへの返信を求めての質問や感想を記載頂いている。

「正しく新型コロナを恐れよう!」といわれるが、「非日常事態の長期化」にて、かなりしんどい日々も、あったのだろうなと察すると、自分自身も振り返り、胸が熱くなる。

私は、今年は、途中から、以下の絵本も

ご紹介している。この絵本は、定年まで保育士をされていた娘の配偶者のお母様より、ご教示頂いた。コロナ禍にて、TV でも、紹介されたとのこと。放課後児童デイサービスの支援員をしている息子も、よく子どもたちに読み聞かせているという。

☆オーレシー・シアン・ショウ・シーヌ 垣内磯子訳 **ガストンのきぶんをととのえるえほんシリーズ** 『おこりたくなったら やってみて!』『かなしくなったら やってみて!』『こわくなったら やってみて』『ねむれなかったら やってみて』『やきもちやいたら やってみて』主婦と生活社☆

そのうえで、①先ずは、自動思考を否定する必要はないこと。②自分の気持ちを切り替えるスイッチにつながる何か「魔法の決まり事」をつくること。例えば、私は、「父の死をきっかけに左手から右手に付け替えた時計を観て、父の口癖だった『逆に』という言葉をつぶやく」③寝る前に必ず、「今日の自分に贈りたい『褒め言葉』」を口にして、今日の自分をしっかりと労うことを習慣とする。

この絵本は、我が家にも置いてあり、③は、孫たちにも伝えて、孫がお泊りに来たときは、必ず実行するようにしている。

対人援助学マガジンの執筆者である水野スウさんの『褒め言葉のシャワー』は、20 万部を超えたそうだ。

「人権講話」では、事前の打ち合わせでキャッチした招聘先の状況に応じて、団士郎さんの『家族の練習問題』から一話と、『褒め言葉のシャワー』から抜粋して朗読し、講演の最後に『憲法 13 条の唄』かスウさんの作詞された『ふるさと』を唄い、二冊の本と CD を招聘頂いた学校や職場、団体に寄贈させて頂いている。

今年は、この件にまつわる、嬉しいエピソードもあった。

何と!その学校に、団士郎さんの本が全巻揃っているという。そして、そのきっかけをつくられた先生方より、研修参加環境が整い次第、「いしかわ家族面接を学ぶ会」へのワークショップへの参加をご希望頂けた。これで、またその地域での、垂直型ではない水平型の分野を越えた「つながり」が拡がっていくなあと思うと、ワクワクして、嬉しくて、直ぐに事務局仲間に報告した。まさに、「継続は力なり!」だ。

馬渡の眼
P172～

団士郎

73歳にして25歳時以来の独身生活になった。みんなそうなると言えばそうなのだが、やっと就職した独身時代に未来など皆目見えていなかった。しかし今回の独身生活は、どうのこうの言ったところで先が見えている。

限られた時間をどのように過ごすかは、自由に決められる。コロナ禍で多少不自由はあるが、残された時間をどのように使おうと気ままである。そんな時が人生に許されるのは僅かなタイミングだ。

朝起きる、さて今日は何をする予定だったかな？どの締め切りに手を付けようかな？しかし良い天気だなぁ。京都散歩など楽しんでから仕事場に行くかな？どこで電車を降りようか？お昼は何を食べるかな？

そんなことを思い巡らせながらマガジンを作ったり、月刊連載漫画を制作したり、ワークショップの展開ppを作ったり。

Zoom による新しい企画も二つ順調に歩み始めているし、中国語版「木陰の物語」が12月には上海で発行されるはず。有り難いことに、まだまだ楽しみの多い人生である。

*

そう思って、悠々と編集作業をしていた。そしたら編集会議前日になって、自分の原稿を保存ミスで消してしまった。

思い出しながらもう一度書くエネルギーはなかったので、今回は休載にしようかと思った。ところが、校正用にプリントして、あれこれ書き込んだ紙が残っていた。

それをスマホで音読入力した。あっという間に9割方復活した原稿が出来上がった。それを今から明日夜の編集会議に向けてやり直しだ。

最近こういうミスが身辺に続発だ。用心用心と言っても、それでおさまるなら起こっていない。

「Family history」(2)
P46～

鶴谷 圭一

幼稚園業界もオンラインでの研修が多く開催されるようになってきました。ZOOM で視聴するぶんにはなんの問題も感じてなかったのですが、主催する方に回ったとき、

その苦労を身に染みて感じました。

沼津市私立幼稚園協会で初の研修会を主催。会場となるホテルの ZOOM アカウントと機材を使って配信するわけです。当初は、会場で講演していただく様子をライブ中継するだけのはずが、講師の先生が「ZOOM では音声が聞こえないとまずいから」と動画にまとめてきて下さいました。

さて、こうなると配線が複雑になるんですね。

①会場で撮影しているカメラの音声 ②会場に数本あるマイクの音声 ③PC から出る動画の音声。この 3 種類の音源を会場のスピーカーと ZOOM で配信しなければならない訳です。

我々も素人、ホテルの人も素人、しかも機材はかなり年代物。

開始 2 時間前から準備し始めて･･･PC のメモリーが足りなくて途中でダウン！ 会場の音声が ZOOM で流れない！動画の音が会場に流れない！･･･などのトラブルが続出！

2 時間かけてなんとか開通し、ホッと開始したのも束の間･･･「音声が途切れる！」「反響して聞きとりにくい」の連絡が続出(>_<)。

結局、最初の挨拶はゴメンナサイで、動画の配信に切り替わり、なんとか研修は実施できました。

･･･次回からは専門家を頼もう、もしくはライブ中継と ZOOM の併用なんて難しいことはやめよう･･･と心に決めたのでありました。もっと新しい機材だったら問題なくできたのかもしれませんね。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール office@haramachi-ki.jp
インスタ haramachi.k
ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から
P53～

水野スウ

東京調布のクッキングハウスへ恒例の、とはいえ半年遅れで、おはなしの出前に行ってきました。今回のマガジン原稿は、そのおはなし会の報告です。コロナの緊急事態宣言下も休まずレストランをあけ

続けてきた、クッキングハウス代表の松浦幸子さんの想いにもふれているので、あわせて読んでいただけたらうれしいです。

さて今回の短信では、京都在住の若い友人、長瀬正子さんが自費出版した絵本、『子どもの権利と新型コロナ』(発行元／ちいさなとびら　税込 1100 円)の紹介をさせてくださいな。

正子さんは子どもの権利について研究していて、大学でも教えています。今年4月、「国連子どもの権利委員会」が、コロナのある世界でその権利が守られるよう出した声明を、平野裕二さんの翻訳を経て、正子さんがさらにやさしい日本語に訳しました。友人の momo さんがあたたかなイラストを描き、子どもが自分の気持ちを書き込めるスペースもあったらいいねと、ブックデザイン担当の mai works がワークブック仕立ての絵本にしました。

子どもとおとながこの本を一緒に読むことで、自分が大切にされる存在であること、その大切さにはちゃんと根拠があることを、子ども自身に知ってもらいたい、と正子さんは願っています。彼女は子どもの頃、「子どもの権利条約」というものがあると知ったことで、それがこの先のいろいろ大変なことを乗り越えて生きていく知恵や力になる、と感じたそうです。

今年の春以降、コロナで子どもたちは沢山のがまんを強いられているけど、その気持ちがちゃんと聴かれること、子どもが自分の考えや意見を言えること、子どもにもわかる言葉でコロナの説明がおとなたちからされること。どれもみな大切な、子どもの権利です。



さらに詳しく知りたい方は、正子さんのブログ、子どもと家族の小さな図書館「ちいさなとびら」をどうぞご覧ください。
https://chisanatobira.exblog.jp

絵本は mai works の webshop で通信販売しています。http://mai-works.com

きもちは言葉をさがしている
P93～

荒木晃子

「GO TO トラベル」、「GO TO イート」を利用したことがない。普段から、神経質でも、慎重な性格でもなく、逆に、陽気で外出好き、美味しい・楽しい・新しいと聞けばどこへでも出かけるほどフットワークはいい方だとの自負がある。来るもの拒まず、会いたい人には会いに行き、食べたいものは(お財布と時間・体力が許す限り)遠慮しない。そんな自分が、連日、自宅で 2 匹の愛犬とじゃれ合い、飽きることなく自炊生活を続けている。対面で面会するのは、現在進行中の研究プログラムや講師依頼のプログラム打ち合わせ、対面カウンセリングを希望するクライエント、自宅向かいの高齢女性など我が家に出入りする人たちのみ。結果として、対面希望に呼応する体制となっている。

自宅向かいの高齢女性は、晩年一人暮らしになった私の母を気遣い常に交流を持ち続けてくれた方である。他にも、重篤な脳障害を持つ子どもの母親、一型糖尿病の疾患を持つ方など、感染リスクの高い方々との接点が多いため、私が感染するわけにいかないのだ。そして、もうひとつの自粛理由は、私自身が重篤な薬剤アレルギーを持つ、ということ。今年 1 月、インフルエンザに罹漢した際も、相当な覚悟をもって治療薬を服用したばかり。薬を使っても使わなくても、結局は命がけ、という点ではどちらもハイリスクなのだが、自分がハイリスク群であることの自覚はないようだ。それがいいか悪いかは別にして。どうぞ皆さん、ご自愛ください。共に春を迎えましょう。

生殖医療と家族援助
P73～

中村　周平

2回連続でお休みして申し訳ありませんでした。思い出しながら書き出すことも多く、大切なことはしっかり記録しておく大切さを改めて感じています。短い文章で大変申し訳ありませんが、これから継続的に発信させていただきたいと思っております。

ノーサイド
P101～

山口洋典

「見えないものと 闘った一年は、見えないものに支えられた一年だと思う。」

これは大塚製薬のカロリーメイトの CM「見えないもの」篇の一節で、私は 11/18 付で YouTube にて公開された後、複数の友人から勧められて目にしました。同社のホームページの紹介文で「すべての受験生と、そして先生に贈る CM です。」と掲げられていることもあって、とりわけ教育関係に携わる友人の中には、コロナ禍の日々を想い起こし、さしずめ走馬灯のように受け止めたことで、涙をこらえずにはいられなかったと記しているものもありました。

確かに昨年の今頃は、まさかこのような仕事と暮らしが送られているとは想像だにしていませんでした。ちなみに前掲の CM の 120 秒バージョン(https://www.otsuka.co.jp/adv/cmt/tvcm202011_01.html)では、先述のフレーズの直前に「授業動画作るのも大変だよ。まさか早送りしてないよな？」と教員が動画内で語っているシーンが収められています。私は涙さえ流れなかったものの、自分の営みや思いが映像として遺されたように思え、阪神・淡路大震災の後に AERA (1995 年 2 月 20 日号)の特集で「君は神戸に行ったか」と掲げられた記事を目にしたときと、何か通底する思いを抱いたことをここに記させていただきます。

PBLの風と土
P～

見野　大介

10月末に年内最後の個展が無事終わり、あとは注文の制作を残すのみとなりました。

今年はコロナで仕事もどうなるかと思いましたが、無事に年越しできそうです。来年もまだまだコロナの影響はありそうですし、仕事も健康面も引き続き注意が必要ですね。

ハチドリの器
P4

千葉晃央

子育て世代真っただ中だが、歯科に連れて行ったことがない。虫歯率は大激減だそうだ。歯科がコンビニより多いといわれているのに。背景にはフッ素と人工甘味料の普及がある。一方、そのフッ素、人工甘味料の副作用といわれているのがガン、鬱、認知症など。事実、自殺、ガン、認知症の増加という事象も当然といわざるを得ないか。

映画「プラスチックの海」を観た。20 年弱、リサイクルに関わったものとしては、その誇りも感じることができた。数千メートルの海底にもペットボトルなどのプラスチックのゴミが転がり、プラスチックが食物連鎖に入り込む。ペットボトルのバーコードを活用したドイツのデポジット方式、人体などの生き物に取り込まれたメカニズムなども明快に紹介されていた。プラスチックの影響で、肺疾患、ガンなどにつながることも示された。

こうした時代の中での影響は避けられない。とはいえ、現状を理解し、できるところからやるしかない。プラスチックを見分けることができない生き物たちが地球上で山ほど暮らしているのは事実。その動物たちと共生してきたウン万年の歴史。たかが百年もいきない人間の頭で考えて、舐めてはいけない。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P17～

脇野　千恵

やはり、コロナ禍の話題に事欠かない日常です。自分の年を忘れることはないけれど、高齢者のリスクが高いと言われると、「えっ、私のこと？」と気がついてしまう自分に笑ってしまいます。いたって元気だからでしょうか。まだフルタイムで働く事が出来ています。

最近は、学校への出前性教育に招かれる機会が増え、中学生とのふれあいを楽しみにしています。教材研究に時間をかけることも大切にしています。何より好きなことができるって嬉しいです。

さらに、早期退職した元教員からの誘いで、週2回塾の手伝いをしています。有難いことに頭を使う機会は十分にあり、ここでも個別での子どもたちとの対話を楽しませてもらっています。これからも、頼まれたことはなるべく断らずに、自分のため、人のため、社会の一員として活動していくことをモットーにしたいと思っています。

今年も暮れようとしていますが、2020年をどのように記録しておこうかと考えています。

こころ日記「ぽちぽち」partⅡ
P254～

竹中　尚文

10 月に入って、同居する母親の変化がスピードアップした。ここ数年、彼女の認知機能に衰えが見られるようになった。92歳になればそんなものだ、と思った。年齢が老化のすべての尺度ではないことも分かっているが、そんなものだと思った。チョットした発熱で病院に連れて行った。受診して薬の処方箋を出してもらえると思っていたら。入院と言われた。後日、担当医から老衰ですと言われた。老衰を死と同意語のように思っていたが、身体の機能が老化によって衰えることであると理解した。妻が、退院をして自宅で死を迎えることは可能かと尋ねた。看取りを前提として、11月半ばに母親は退院した。◆妻の決断に私は、少し驚いた。私は、母が病院か老人施設で死を迎えるのだろうと思っていたからだ。妻は、コロナ禍の中で母を医療施設にいさせたくないといった。一人で死に向かわせるのは可愛そうだといった。父親が死んでから、私たち夫婦は母親との同居を始めた。妻と母との関係はギブ・アンド・ギブだなと見ていた。そして、妻は母親の看取りを決断した。家庭内関係の収支は赤字も黒字もないのかもしれない。◆共に暮らすうちに死を迎えることについて、母親は自分の希望を述べたものだった。死を目前にして延命治療を望まないとか。私たちの家庭では、「死」という言葉ではなく「お(極楽)浄土に行く」といった。「お浄土に行くときは･･･」とか「お浄土に行ったら･･･」などという話し方をしたものだった。死に至る過程や死そのものや死後について日常会話で話していた。母親の希望を私より妻の方がよく聞いていた。おかげで母親は自分の望むような死に向かっている。◆将来の起こることについて希望をしたことが、その通りになるとは限らない。だから、人生を生きる面白さがある。希望通りにならないからと、希望を持たない人がいるらしい。つまらない生き方だ。希望を持つべきである。生きるということは死に向かっていることである。だから死に希望を持つのである。その希望は周囲の人たちに伝えておかねばならない。「棺桶の蓋は自分で閉めることはできない」という言葉は、自分の死は必ず誰かの世話になるのである。自らの死というが、自分だけの死ではない。それは生が自分だけのものでもない、ということだ。私たちは関わり合って生きている。死も関わり合ってのことだし、死後も関わり合っている。

路上生活者の個人史
P103～

中村正



小学館発行の『月刊スピリッツ』(2021年1月号/2020年11月28日発売)という漫画誌に連載されている「こころのナース夜野さん」(水谷緑)に虐待親たちのグループワーク「男親塾」が登場した。コロナ禍の直前の3月のグループワークに取材に来られてその後も二時間ほど話し込んだ。熱心な方だ。漫画のためにコメントを求められてやりとりしていた。丁寧に学んだことを漫画にしてくださった。その発売日の 11 月 28 日、「日本子ども虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会」で「男たちの暴力をどうするか一虐待する父親への「男親塾」の取り組みから一」と題してオンライン講演をした。1 時間の講演だったが、この 30 頁程の漫画を読んでもらう方がわかりやすいと思う程によく書

けている。これを男親たちと児童相談所の職員に配布して、男親塾とは何かについて理解をしてもらうこととした。みなさんもどうぞご覧ください。

臨床社会学の方法
P21～

寺田　弘志

新型コロナウイルスの流行がいっこうに収まりません。買い物かごの紫外線除菌装置「ジョキンザウルス」がイオンで導入されました。

続いて、紫外線を使ったお札の除菌装置が日立オムロンによって開発されました。1分間に1000枚ものお札が除菌できるそうです。1枚当たり0．06秒。紫外線の殺菌力はすごいようです。

紫外線のない環境では、お札の上でコロナウイルスは1カ月も生きているという研究結果が報告されています。

前の号でも書きましたが、当院では、お札も硬貨も紫外線除菌しています。雑誌や空気をはじめ、除菌しにくいものが短時間で除菌できるので、重宝します。紫外線殺菌、お勧めです。

接骨院に心理学を入れてみた
P212～

サトウタツヤ

あいついで二つの小説を読んだ。
村田エフェンディ滞土録 ／ 梨木香歩著
舟を編む ／ 三浦しをん著
前者・「滞土録」の「土」とは「土耳古」つまり「トルコ」。
後者・「舟を編む」の「舟」はここでは辞書のこと。
前者ではオウムが、後者では辞書の紙質の開発が、伏線として良い味を出していた。

対人援助学と心理学の縦横無尽
P84～

浦田　雅夫

「戦争孤児」、駅を転々とされていた「駅の子」だった O さんとお出会いで来た。「人は出会いで変わる。」 私も、O さんとお会いできて本当によかったと思いました。何をしなければならないのか、自分のミッションを確認できました。ありがとうございました。

社会的養護の新展開
P51～

小池英梨子

そうだ、猫に聞いてみよう
P187～

ABC 朝日放送のニュース番組「キャスト」が人もねこも一緒に支援プロジェクトの活動を密着取材して、2回も特集番組を放送してくださいました。ありがちな「多頭飼育崩壊、悲惨、飼い主が悪い」という形の報道ではなく、社会問題であること、支援の内容も堕胎手術をせざるを得ない状況があることなどしっかりとした内容になっていると思います。

キャストの YouTube から見ることができます。良かったらご覧ください。



障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第１回

福祉の独自性とは？

千葉 晃央

これまで、障害者福祉の現場での経験を思いつくままに書いてきた。そのリアクションとしてよくいただいたのが、障害者福祉の現場に実習にいくときに読んでよかったという声や障害者福祉の現場で働くことになったときに読んで助けられたという声だった。

これから、15 回を目途に体系的に進めることを試みてみたいと思う。もし自分が今からこの現場に行くのであれば、どんなことを学んでおきたいか。もしくは後輩にどんなことを伝えたいか？という思いに従い、書き始めてみたい。

社会福祉学独自の立場から支援する

はじめに伝えたいのは、福祉という考え方です。正式にいうならば「社会福祉学」ということになります。私はあくまで、現場目線です。そして、目指すのは利用者さんの利益です。ある事例を取り上げます。

【事例】

午前中の作業時間、シール貼りの作業をしていると、突然、Aさんが立ち上がり、その場で耳をふさぎながら、何度も跳んでいます。時々、大きな声を出しています。

こんなことが現場で起こりました。その場ではしばらくすると収束してその日の支援の時間が終わりました。しかし作業後の職員連絡会で、その行動をどう理解したらよいかという声が上がりました。

作業場職員 A さん：

あれは何日もこの作業（シール貼り）が続いているからではないかな。普段している作業（ネクタイ梱包）の注文が少なくて、たくさん注文のあるシール貼り作業をしているからかもしれないなぁ。

作業場職員 B さん：

そういえば、朝作業場に来た時も少し頬が赤く、

熱っぽかったのかもしれない。

担当職員Ｃさん：

昨晩新しい洗濯機が自宅に来て、気になるようで何度も洗濯機のところにいき、確認をしていたとご家族から聞きました。そのため、一日のルーティーンが遅れて、寝たのが深夜の 3 時頃だったそうですよ。

ベテラン職員Ｄさん：

毎年この時期は、地域のお祭りがあって、彼の自宅の近くはいつもお神輿が置かれる場所になっています。夜まで太鼓の音や、観光客も多くて騒音がひどく、日によっては人通りが多くてもみくちゃになっているよね。昨日がその日じゃないかな。

作業場職員Ｅさん：

あの時、そういえば彼がいつも使っている椅子を他の人が使っていて、そのことも気になったんじゃないかな。

こんなことが話し合われました。どの職員もよく見ていますし、背景を理解しています。そして、どの意見もそうかもしれませんし、そうでないかもしれません。その正解・不正解を決めることはそんなに重要ではありません。なぜなら人は、様々な刺激や作用を受けて日々を暮らしているからです。閉ざされた空間で上記のようなことしかない！と言い切れるならば、正解に近づくことは一定可能かもしれませんが（それでも無理）人は、オープンなところ（システム論ではオープンシステムといいます）で生きています。入力は常にあるのです。そして、ずっとその人を観察する人はいません。そして頭の中をみることもできませんし、さらに一つの気持ちだけで動くとも限りません。つまり、人はたまたま見たテレビや隣の人の会話にも刺激を受けて生きるのです。その総合的な反応、総合的な判断で（なんとなくも含めて）時間を重ねているのが人間です。つまり、本人しかわからないし、本人にもわからないかもしれない。それが常なのです。

ただし、職員が上げた影響を与えたかもしれない一つの要素があるのは事実です。その要素がたくさん浮かぶことは、すなわち支援の手段のチャンネル数になります。では、今回はその作用を構成した要因を考えるときに、大事な 3 つの視点を上げます。「心理」「生理」「社会」の 3 つです。

心理

これはその人の心の中です。どんな気持ちだったのか。どんな気持ちがベースにあるのか。というあたりです。ここでは、椅子がいつものものではないイライラ、いつもの作業ではないことが続いた不安と残念感かもしれません。

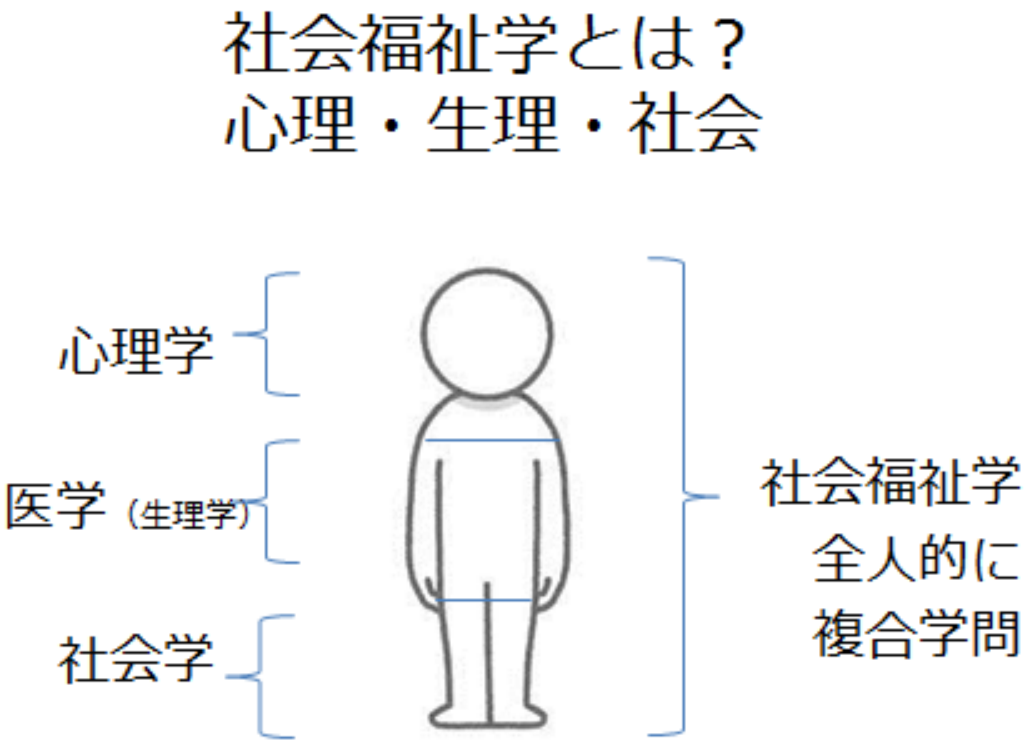
また、心理的な発達段階での課題もベースにあることを忘れてはいけません。

生理

生理学、医学ともいわれる肉体的、身体的なところです。寝不足、熱っぽさが疑われる赤い顔などです。体調の面を指します。

社会

騒音、お祭りなどは実際の影響が生活にあることです。いつもの時間のバスが混んでいたり、すぐ着くはずの通勤経路が観光客が多くて、なかなか目的地につかなかったりとか、実際に環境とし



て、いつもと違う状況があるか？などの視点です。他にも、現実的な環境だけでなく、文化的に歴史的にどういうところにいて、どんな立場であるかなどの社会構造の意味も含まれています。

最近では「サイコ」「バイオ」「ソシオ」とも言われたりします。これは一つの行動があった時に、この 3 つの視点からぐらいからは、様々考えようということです。一つの行動があった時、その職場のチームでこれら 3 つの視点ぐらいからの考察は事例のように浮かんでくると優秀です。

即ち、ある場面をみたら、この 3 面からはどうかな？ということを常に考えることで鍛えられます。気持ちはどうかな？体でつらいこと、痛いところないかな？この時期はどんなことが彼の周りで起こっているかな？年齢的にどんなことを起こっても当たり前かな？…そのあたりを問いかけてたくさん浮かぶことが大切です。

できれば避けたり、少なくなったりするとよいという行動があれば、そこに変化が起こるような作用をもたらすことができるのは、これまでに浮かんだ 3 つの視点です。寝不足なら静養する時間を設ける、作業環境ではいつもの椅子にしてみるなど、そこが変化のきっかけになる可能性があります。

心理・生理・社会という 3 つの視点でみることがまずは福祉専門職としては求められます。できれば一つでもいいので精通していると非常に役に立ちます。心理なら心理学、生理なら医学・生理学、社会なら社会学です。そしてその 3 つの角度を複合的にみるのが社会福祉学の独自性といわれています。心理学でも、医学でも、社会学でもない、社会福祉学独自の視点とは、その人全体としてとらえるところにあります。それを「全人的にとらえる」という言葉で表現したりします。

心も理解し、生理的医学的に体のことも理解し、社会的背景、環境も理解する。それらを複合してとらえ考える。社会福祉学が「複合学問」といわれる所以です。心だけみるのではない。体だけ見

るのではない。社会環境だけをみるのではない。その人を全人的にとらえるのが社会福祉学の独自性です。

支援者は「理解者」になる

実際に、ソーシャルワークの理論も手法も心理学、医学、社会学等をベースに築かれてきています。このような視点でとらえていくプロセスを古くは「社会診断」といいました。今ではアセスメントといわれています。そこには、まずは対象者の理解が大前提にあります。人は誰でも理解されたいと欲求を持っています。理解をしてくれる人がいるだけで救われます。目の前にいるクライエントを理解する。究極はその言葉に尽きるといっていいでしょう。

理解してくれる人がいる。そこから支援は始まっています。それは「証人になる」というところで整理されているナラティブアプローチの考え方にもある通りです。あなたの頑張りを知っている人がいる、その証人がいるのです。

人は誰でも理解されたい。それが第 1 回目のポイントです。支援者は「理解者」になる、から始めましょう。次回はかかわりの方向性のことになります。「自己実現」「言語化」がキーワードになるでしょう。

BACK ISSUES

障害者福祉は何を失ったのか？40 2020 年 3 月

暮らしやすい地域になったのか？39

2019 年 12 月

利用者さんの呼び方は、これでいいのか？38

2019 年 9 月

カメラ 37 2019 年 6 月

窓を救え！36 2019 年 3 月

別れ 35 2018 年 12 月

人生をかける意味があるか？34 2018 年 9 月

業務の適正化はできるのか？33 2018 年 6 月

安全衛生委員会 32 2018 年 3 月

施設というコミュニティ 31 2017 年 12 月

職場づくり 30 2017 年 9 月

健康管理 29 2017 年 6 月

音 28 2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27 2016 年 12 月

事件について 26 2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25 2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？ 24

2016 年 3 月

連絡帳 23 2015 年 12 月

におい 22 2015 年 9 月

作業着 21 2015 年 6 月

食べる 20 2015 年 3 月

通勤 19 2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18 2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17 2014 年 6 月

触れる 16 2014 年 3 月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15 2013 年 12 月

20 年前のノートから 14 2013 年 9 月

そうじのねらい 13 2013 年 6 月

個別化の暗部 12 2013 年 3 月

グループワークの視点 11 2012 年 12 月

実習生がやってきた！10 2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9 2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7 2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6 2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5 2011 年 6 月

職員の脳内回路 4 2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2 2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1 2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(31) 男らしさを「聴く」

–他者をとおして自己の欲望を実現させるコントロール行動の意識と態度–

中村 正

はじめに－声を聴いてみると

男たちと脱暴力への対話をしていると男性性の意識がよく見えてくる。特徴的だと思えるグループワークでの発言をいくつか紹介し、男らしさの声として社会と関わらせながら聴き、暴力を肯定して生きている男たちのワードがつくるワールドをみていこう。

1. 名誉－「そんなに褒めないでください。」

グループワークでの発言が前向きであり、参加態度が真面目だったので、肯定的なコメント（以下、下線は筆者による）をしたところ、「そんなに褒めないでください。」という男性がいた。これは謙遜ではない。この言い方にはトゲがある。グループワークのファシリテーターを批判しているのだ。「あなたは私を褒めるに値する男性なのか。」といっている。「そんなことで褒められるほど安っぽい男ではない。」とも考えている。「そんなこと」というのは脱暴力プログラムのことを指していて、児童相談所が勧めた男親塾なんかで「勉強」させられ、そこへの参加態度がよいことぐらいでという意味である。少年刑務所で性犯罪再犯防止プログラムに関与していたときにも同じような発言を受刑者から聞いた。「こんなプログラムで解決できるのですか？」と。

褒めて欲しくないという意識の手がかりは「名誉」の観念にある。褒められることは「名誉」なことだ。しかしそうした「名誉」を与えてくれるのは自分よりも権威と地位のある者からでなければならないと伝統的な男性性意識は考える。そうしないと自分の「名誉」が誇れず、面子（メンツ）が保てないからである。すべてが男性的な力関係の秩序の中に納められている。褒めることと子育ての関係も同じだ。この男性性意識がバリアーになり、肯定的に他者と関わるということができない。むしろ叱責だけが前にでる「指導的な子育て」になっていく。

また、この意識は秩序の下の者から発信されることもある。この意識を持つことでパワーが実感できるからだ。従属的な地位にある者が上の者に抵抗する際、男性性をたよりに威信を保つことができる。こうなると、地位あるものは脅威を感じるかもしれない。この力学を元にした「モビング mobbing」という現象がある。場合によっては下からの、複数人による攻撃、つまり集団いじめである。

ここから大きな社会問題につながる。「名誉殺人（honor killings）」である。女性が、

親や親戚が認めない相手と交際や結婚をした場合、家族や親族の名誉を傷つけられたことになる。この場合、家族が女性本人やその相手を殺害することができる。つまり女性の身体は公共的な管理の対象なのである。これは女性差別の強い国や地域で報告されている。国連人権高等弁務官は世界で毎年約 5000 人の女性が「名誉殺人」で殺害されていると発表した（2010 年）。この背景には女性を従えられない男性は地域社会において男性としての尊厳を失ってしまうという男性優位の規範がある。父のための名誉共同体の存在である。これを支える「名誉文化」がある。

ローカルな大阪で開催しているグループワークでの小さなつぶやきだった「褒めないで欲しい」という言葉の裏には、「俺をなめるな」という感覚を窓口にして暗澹たる男性主導型共同体がみえてくる。

さらにこれは次のような議論とも重なる。通例は「謙遜、気さくさ、丁寧」と訳される condescension について論じられていることである。

微細な権力作用を読み解く分析枠組みの提示にあたって、condescension という言葉に注目したい。condescension とは、両義的な意味のある言葉で、良い意味では、へりくだり、謙遜、腰の低さ、丁寧を意味し、悪い意味では、人を見下すこと、恩着せがましいことを意味する。Oxford English Dictionary には、「自発的な犠牲によって、優位であることがもつ特権をさしあたり放棄すること、身分や地位が異なることを丁重に無視すること」であり、同時に、「劣ったものに対する愛想の良さや恩着せがましさ」を意味するとある‥。一方で、対等の立場に立ってへりくだる態度を示し、他方で、恩着せがましさや偉そうな態度を示す condescension の両義性の背景には、condescension が認識される状況に関わる人びとの間の上下関係や権力関係があると考えられる。上下関係や権力関係を背景として、condescension の言動を差し向ける者と、差し向けられる者のどちらのパースペクティブをとるかによって、あるひとつの言動が反対の意味をとることを示す。condescension は、権力関係のダイナミズムにいかなる効果を及ぼすかによって、善意とも侮辱とも捉えられるような性質の言葉であると言える。ある者と別の者が権力関係におかれている場合、権力を持つ者による「善意ある」言葉や行動が、その言動が向けられた者にとっては、自らが劣っていることを暗示的に確認させられる機会となることがある。そのような効果をもたらすものとして、condescension の言動を理解することができるだろう。権力関係にある場合、権力を持つ者からそうでない者に向けられる善意ある言動は、場合によっては、象徴的な暴力として作用することがある。（http://subsite.icu.ac.jp/cgs/docs/CGSjnl011_01f_Toraiwa.pdf、虎岩朋加「日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力」2020 年 11 月 30 日最終アクセス）。

褒めることの拒否だけではなく、アサーションのコミュニケーションや多様性（ダイバーシティ）の尊重も理解されにくい。伝統的な男性性はこうしたことと相性が悪いようだ。他者との関係づけが自己中心的だからだろう。マウンティング行動とも関係している。発言の背後には無意識の男性性が横たわる。日常の相互作用に社会秩序を読み取っていく社会学の研究方法は脱暴力臨床や臨床社会学の展開にとっても有益である。

2. 脱力－「脱暴力のグループワークにくると脱力していくようで疲れる。」

「脱暴力のグループワークにくると脱力していくようで疲れる。」と感想をもらした男性がいた。妻に指示されて参加していた。男の子三人の父親で、まだ 30 代だった。スポーティな出で立ちの筋肉質な印象の男性だった。会社員である。威圧的な態度で突っ張っている様子も見えてくる。DV で保護命令が発出されるような暴力ではなかったようだが、妻はその威圧的な態度に辟易していたようで、グループワークに参加することを指示したという。それでも参加してくるだけ立派だ。とはいえ、いやいやしぶしぶの参加だったのでこうした感想をもらした。家でも、会社でも、傍若無人な態度なのだろう。男親塾では、暴力行動としてのパワーのさらに背後にあるコントロール行動についても話題にし、パワーによるのではないコミュニケーション的行動を勧めていることもあり、彼の男性的な思考と流儀からするとすべて腑に落ちなかった様子である。

「Ｉメッセージと You メッセージ」、「レポートトークとラポートトーク」、「アサーショントレーニング」等のコミュニケーション練習をしたが、これがまどろっこしいと感じたらしい。彼が保持する「力の感覚」は、マッチョな身体感覚や関係性のコントロール感に根ざしている。ここが根っこにあるので理解が進まない。そうではない身体感覚や関係性のあり方に入れ替えていく必要がある。

しかし時間がかかりそうだ。他の男性たちの経験からすると、力の感覚を保つために身体が疼くらしい。その場合は、筋トレなどの取り組みが有効であるという。男性的身体にはボクシング、ブレイクダンス、スケボー、格闘技などのエクササイズ系が奏功するという男性たちが多い。ストイックに自分自身にたがをはめるようでもいいのだろう。こうした行動をとおしてセルフコントロール力の向上が計られていく。しかし、こうした力の感覚を、家族をはじめとした親密な関係性に持ち込むと双方が混乱する。

では、親密な関係で発揮できるようなパワーの感覚や観念とはどんなもので、それを養うにはどうすればよいのだろうかとグループワークで話題にした。パワーの感覚や観念が他者と対峙するような競合的な想定のなかにあることが浮かび上がる。パワーの感覚は他者と協働することではなさそうだ。そこで幼い頃からの育ちのなかで暴力的でなく「すごい！」と思えた父親のエピソードをたくさんだしてもらうことにした。「本当の人間的なパワー」と仮に名付けた。

話されたエピソードは、幼い頃の父親との記憶が多かった。よい男性性や父性の思い出をたどることとした。ある男性がこんな話をしてくれた。幼い頃は田舎暮らしだったという。おもちゃやゲームはなく、父親が竹とんぼや竹馬を器用につくってくれた思い出がある。一緒に遊んでいた友だちたちが「おまえの親父、すげえな！」と言ってくれたことが誇らしかったというエピソードが話された。暴力をふるっているばかりではない父親の、肯定的な思い出がだされてくる。これはマッチョな力ではなく、まったく異なる種類の「力」に満ちているような話だとコメントをした。他の男たち

からもこれとよく似たことが思い出された。

パワーとしての力ではなく、ストレングスとしての力とでもいえるだろう。前者の観念からするとパワーは物理的な力の行使としての暴力につながりやすい。男親塾はパワーの意味を変えていくことを意図している。暴力ではないパワーの感覚をこうした体験から相互に学んでいくことをめざしている。「脱暴力すると力がなくなっていくようだ」という言葉を発してくれたので、そこを穴埋めするための別の作業が必要になるのだと気づくきっかけになった発言だ。当の男性、その点から褒めたら、多少の笑みはこぼれたがまだ十分に納得はできていないようだった。

3. 友情－「暴力を振るい合えるほどの関係なのです。」、「喧嘩しない夫婦はいますか？」

「暴力を振るい合えるほどの関係なのです。」という発言があつた。これは子ども期の記憶に根ざした意識である。男性の育ちの過程にある伝統的な男らしさにつきものの競争感覚や連帯意識の反映である。わかりやすいのは、スポーツ根性漫画によく登場する関係だ。あえていば少年ジャンプ的な雑誌漫画の世界である。喧嘩の後の友情が想定され、思春期少年の心象風景のように描かれてきた。女性との成熟した情愛的な交流の前に、児童期から青年期にかけての同性同士の情緒的交流を含めた友人関係がある。ギャングエイジのグループ、チャムシップ・グループ、青年期にかけてのピア・グループといった同性同士のつながりをとおして体験される感情的な絆がある。

家族以外の仲間集団体験の重要性である。長じて、親密な関係という二者間系に再現、投影される。なかでも同性同士の関係には「モデルとライバル関係の共存」がある。ここには同性愛的な面も含まれる。異性愛主義を前提とした親密な関係への通過点のように位置づけることはすべきではないが、親密な関係へと移行していく感情構築体験としてこうした同性同士の関係性がある。

「モデルとライバル関係」は同志的でホモソシアルな関係となりやすい。ギャングエイジは行動に、チャムシップは言葉を介して構成されると指摘されてきた。行動的な特性は反抗的な文化に染まりやすい。言葉をとおした一体感の確保は、のちに私が「メンズトーク」と名付けるようなものに近い。たとえば性的な冗談をとおして男性同士の絆を確認することである。ジェンダー秩序や家父長制的意識が流れ込み、ミソジニー（女性蔑視）の意識へと展開していく。「メンズトーク」は大人になっても職場の飲み会などでよく見られる光景だろう。ホモシアルな意識と態度とミソジニーがこのワードから構築されていくので、要注意である。

加害男性たちは、同じような言い方をする。「愛しているからこそ暴力を振るう。」、「暴力もコミュニケーションのひとつ。」、「単なる夫婦喧嘩ですよ。喧嘩しない夫婦がいますか？」と語る。一体感、連帯感、つながりなどの言葉と近いところで親密な関係が意識されている。都合のよい感情規則なので被害者には理解できない。

DV や虐待の理解にとって、青年となる前の男性同士の関係における感情的交流の重要性がわかる発言だ。

4. 監禁と所有－「僕の好みの女性になってほしい。」

ケースによっては被害を受けている妻の話を聞くこともある。そうすると関係の内実がみえてくる。愛情という名の下、身体的暴力とは異なる体験を語ってくれた。「自分のものを買うときにいつも一緒に付いてくる。『僕の好みの女性になってほしい』と言う。自分が自分でなくなっていく感じがする」、「交通の便の良くないところに住んでいるので本当は免許が欲しい。必要なのに、免許を取らせてくれない。『運転が下手だから』って言う。だからいつも彼の車で行動することになる。」と。

これらはコントロール行動である。モラルハラスメントという。モラルハラスメントのことを中国語では「冷暴力」と表記すると中国の留学生が教えてくれた。漢字のリアルな表現力である。

モラルハラスメントはフランスの精神科医、マリー＝フランス・イルゴイエンヌが展開した概念である。加害者が相手を不安に陥れるためによく使う方法としてモラルハラスメントを整理し、例示している。「相手の意見や趣味、考えを嘲弄し、確信を揺るがせる。相手に言葉をかけない。人前で笑い者にする。他人の前で悪口を言う。釈明する機会を奪う。相手の欠陥をからかう。不愉快なほのめかしをしておいて、それがどういうことか説明しない。相手の判断力や決定に疑いをさしはさむ。」である（『モラル・ハラスメント』(マリー＝フランス・イルゴイエンヌ著・高野優訳/紀伊国屋書店)。

現在では、こうした概念をもとにして暴力の再定義の議論がされている。親密な関係における暴力の定義は拡張されてきた。たとえば「イスタンブール条約（欧州評議会)」(女性に対する暴力及びドメスティック・バイオレンスの防止に関する欧州評議会条約、2011 年）という）がある。これはジェンダーの暴力としての定義が前面にでている（森秀勲「欧州評議会イスタンブール条約 ― DV 及び女性に対する暴力への対応 ―」、『立法と調査』2020.7、No.425、参議院常任委員会調査室・特別調査室)。

さらに英国でも DV の定義に追加された事項がある。心理的暴力である。「重大犯罪法(serious crime act ）の 2015 年改正で「家庭内虐待（Domestic Abuse」として、「親密な、あるいは家族関係においてコントロールするあるいは強いる行動」が追記された。いくつか例示されている。「友人や家族から孤立させる」、「デジタルツールを用いて監視する」、「(どこにいくか、誰と会うか、着るもの、寝る時間など）日常生活を統制する」、「お前は価値のないやつだと繰り返して言う」、「辱める行為・相手に自己非難を強いる」、「プライバシーを明かすと脅す」である。

こうした定義の拡張は、親密な関係における暴力を Coercive Control として位置づける研究に裏打ちされている。スタークは、「脅迫、監視、貶め、コントロール、孤立」を DV の定義とすべきだという(Stark,E.2007,*Coercive Control: How Men Entrap Women in Personal Life*, Oxford University Press)。

こうした動向の中心にあることは、相手の心と行動をコントロールすることに焦点を当てている点である。

筆者もこんな体験をした。女子学生から

の相談である。木曜日の午後 1 時からの授業の前に携帯メールがあったという。「俺のとっている講義が休講になったのでこれから会いたい。」と。彼女はこれからはじまる筆者の講義をとっている。それは「社会病理学」で暴力の話をした直後だった。彼女は相談に来たくらいなので休まずに授業にでている。きちんとノーといえたはずだ。しかしわだかまりがあり悩んだことに悩んでいるということを話に来てくれた。これはモラルハラスメントの「被害性」の特徴である。愛情が薄いと思われないかという気持ちが心をよぎったという。相手は一方的である。彼女の時間に勝手に侵入しているともいえる。「あなたも同じようなことをしたことはあるか」と筆者は聞いた。したことはないという。彼女はきちんと彼の時間や生活に配慮している。恋人同士なら時間割くらいつかんでいるからだ。この次元ですでに対等ではない。彼女は相手の時間に侵入していない。しかし感情面で悩んだ自分の扱いに困惑していたのだ。もちろん彼の行動は暴力そのものではない。とはいえ彼女の心に波紋を招いた。見えないけれど、ざわつく行動である。愛情規範としてマインドがコントロールされているともいえる。モラルハラスメントによる被害性の特徴がここにある。

5. 正義－「暴力かも知れませんが、これは正義です。」

暴力加害者に「これは正義です。」という発言は多い。しつけのためにもやむを得ないことだったとも言う。加害者は暴力には理由があると考えている。社会も同じ考えをもっている。国家が戦争を起こすことも同じだろう。暴力は常に正当化されてきた。男性の身近な対人関係や家族のつながりから戦争への意味づけまで同心円的に関連している意識だ。

こうしたことは身近にある。コロナ禍の、いわゆる「自粛警察」、「マスク警察」である。時代が人間の攻撃性を顕在化させている。同じことは以前から SNS でもみられる。中傷が激化している。たとえば性被害を実名で告発したジャーナリストの伊藤詩織さんへの攻撃、自死した女子プロレスラーの木村花さんの番組における行動への中傷が記憶に新しい。

同じ理由だが、以前アンパンマンのことを本マガジンにも書いた（第 15 号）。「アンパンマンをみたくない！」という息子のエピドードだった。再掲しておく。

母子でシェルターに避難したことがあるという若い母親の DV 被害体験を聞いた。心を痛めたのはアンパンマンをみたくないという 5 歳の息子の話だった。アンパンチというシーンが夫の暴力場面と重なるのだという。子どもたちが好きなアニメをみることができない程に面前で暴力を振るっていたのかと思うと聞いているだけで辛くなった。さらに妻にはその文脈も辛いのではないかと心の中で思ったが質問はできなかった。アンパンマンの暴力は、暴力が行使される際の常として、バイキンマンという悪をやっつける「正義のための暴力」として使われる。暴力を振るう夫も同じような言い方をする。「殴らせるお前が悪い」と。・・・男性の暴力を支える信念が垣間見える（アンパンマンの名誉のために一言。アンパンマンは自己犠牲的でもある。少々複雑なつくりになっているが殴る人は都合のよいところだけを真似る）。この正義の暴力という意味づけは、社会のなかではよくある

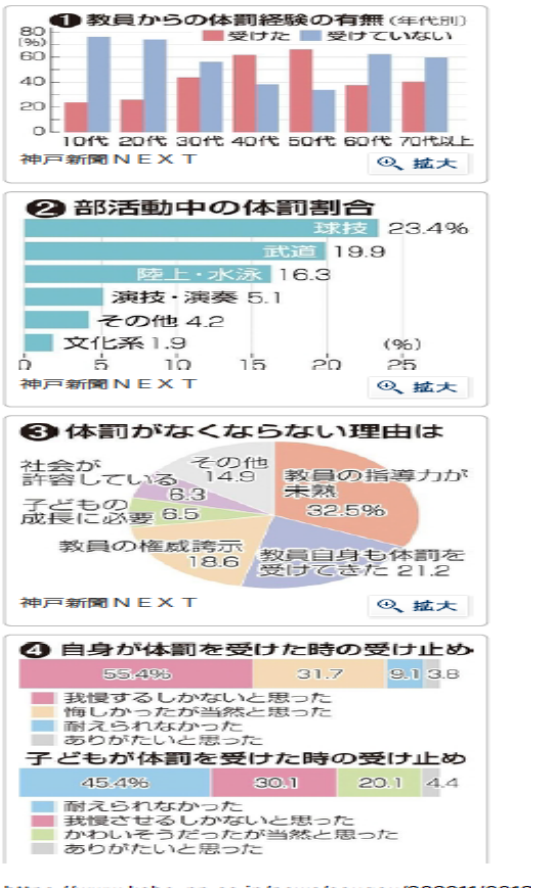
記号（勧善懲悪物語、テロ対策、暴力で強くなるなど）として流通し、個々人の動機として汲み上げられる。暴力、いじめ、ハラスメント、虐待、体罰などの対人暴力を正当化する説明として作用する動機の語彙となっている。もちろんそれは加害者にとっての正義なので身勝手な正義である。特に男性の暴力加害者によくみられる語彙である。彼らは「糺すこと」が好きである。その基準は自らが設定する。警察になりたがるとでもいえようか。コントロール感が満たせるからだろう。他者非難も好む。怒りの火種を至る所からみつけてくる。怒りは自らを活性化させるてっとり早い感情だからである。

この発言は、社会のなかに暴力を肯定する意識が存在していることを示すものだ。脱暴力に向かう行動変容にとっては無視できない声である。

6. 愛のムチ－「暴力は役に立った。」

「暴力を振るわれたけどそれを乗り越えてきた自分があるんです。」、「罰としての暴力を受けてきたのですがそれは役立ちました。」と話す男性は多い。これは体罰を容認する社会の意識とも相関している。こんなデータがある。

体罰を振るい、生徒を骨折させた教師が犯罪として起訴された事件があり、神戸新聞がこのテーマで調査をした。「体罰を受けても、教員の思いを肯定的に受け止めた人ほど、体罰を容認する傾向が見られた。受けた体罰を「ありがたいと思った」人のうち、体罰を「必要」「程度や理由によっては必要」としたのは 82%に達した。「悔しかったが当然と思った」とした人でも容認派は 60%に上った。子どもを持つ親のうち 2 割が「子どもが体罰を受けた」とし、体罰の時期としては 2010 年代後半から現在にかけても多く、体罰は根強く残っている可能性がうかがえる。ただ、自身が体罰を受けて「耐えられなかった」とした人は 9％なのに、子どもが受けた時には 45%となり、36 ポイントも増えた。」（2020/11/14 付け　神戸新聞 NEXT「先生の暴力・本紙アンケート詳報」（市民調査）。



暴力を肯定していく思考と行動のメカニズムがこのように機能している。体罰を否定していない社会ではこの発言のように暴力を再生産されていく。暴力の連鎖は愛や指導の名の下に語られていく。

7. 嫉妬－「それは誰だったのか？」

被害を受けた妻たちがさらに語る。「『習い事をしている』と言うと、『それは男性から教わるのか』って聞いてくる」、「『同窓会に行く』と言うと嫌な顔をする」、「病院にいくと男性の医師だったかと聞いてくる」と。

嫉妬である。所有の意識と裏腹である。束縛的な愛情もあるかも知れないが、妻たちが苦痛を感じている点が重要だ。虐待で子どもが保護された父母の話で、主要には妻への態度である。子どもにはどんな態度だったのかについては聞いていないが、嫉妬心の強い父親と子どもの関係にもこうした意識はあるだろう。

もはや情熱的な恋愛でないだろう。嫉妬心が常識を越えるとストーキングになる。「ストーキング行為規制法」では程度の深刻なものが例示されている。法律の定義の「つきまとい等」とは、「特定の者に対する恋愛感情その他の好意の感情又はそれが満たされなかったことに対する怨恨の感情を充足する目的で、その特定の者又はその家族等に対して行うこと」とされている。この発言の延長線上にはこうしたストーキング行為がある。以下、列記しておこう。

「つきまとい、待ち伏せ・、押し掛け、うろつき」、「監視していると告げる行為」がある。さらに、「お前をいつも監視しているぞ」と告げる。帰宅した直後に「お帰りなさい」等と電話する。「面会や交際の要求」もある。面会や交際、復縁等義務のないことを求めたり、贈り物を受け取るように要求するのだ。「乱暴な言動」を発する。大声で「バカヤロー」と怒鳴り、「コノヤロー」と粗暴な内容のメールを送信することもある。家の前で車のクラクションを鳴らしたりする。無言電話をかける。携帯電話や会社、自宅に何度も電話をかけてくる。また、「汚物等の送付」をする。汚物や動物の死体等、不快感や嫌悪感を与えるものを自宅や職場等に送り付ける。そして「名誉を傷つける」。中傷したり名誉を傷付けるような内容を告げたりメールを送るなどする。さらに「性的しゅう恥心」を侵害する。わいせつな写真を自宅等に送り付け、電話や手紙で卑わいな言葉を告げ恥しめようとする。

ストーキングの背景にある嫉妬は、俺のものだという所有の意識の裏返しである。先に紹介した監禁ともよく似ている。

8. トラウマ的な絆－「彼といると安心する。」という被害者

「DV を受けているのに彼といる方が安全だと思うような意識になったことがある。実家に逃げていると追いかけてきたり、メールが頻繁に入ったりするので結局一緒にいることで落ち着く。」として、元の関係に戻ることが多いという。「在宅 DV」と言われるように、一時保護の後に自宅に帰る女性が多い。自立に至ることもあるが、そうではなく元の関係のなかに舞い戻る。しかしその帰住先の環境は変わらず、加害者対策も講じられていないので男性は変化していない。保護された後の展望がないと、やはり現状に戻るしかない。

ここには「トラウマ性の絆(Traumatic Bonding)」が垣間見える。これを加害者は利用し、暴力を正当化する。暴力や加害者との同一化という。虐待されている子どもや被害者が、自らの安全の可否を握る虐待者に同調することで、なんとか自分を守ろ

うとする行動のことである。

脱暴力のグループワークに参加する男性の妻にもこうした被害者がいる。「私がいなければこの人はダメになってしまうんです。」、「私がなんとかしてあげないといけないんです。」といいながら関係を続けていく。人間関係そのものに依存するアディクション（関係依存症）ともいえる。自分自身を大切にし、自分自身の問題に向き合うよりも、身近な他人の世話に気を遣うようにコントロールされている。

9. 直面化－「俺たち子育てしていないよな。」

虐待対応では、子育て支援の前にすべきことがある。父親の脱暴力の課題である。それは面前 DV の課題の切り取り方ともいえる。男親塾、以前は「お父さんのための子育て支援塾」としていた。これに対して拒否感がだされた。ある日、男性たちが語りだした。

「この名前だと参加しにくい。」
「どうして？」と聞いた。
「俺たち子育てしていないよな。」（⇒直面化に必要な核心となる覚知だった）
「だったら＜おとこ塾＞はどうだ。」
「でも、それはマッチョなおとこを育成するみたいだ。」
「親だけど、でもおとこ性がまずは問題だな。」
「子育てしていないのに虐待するって、じゃあその暴力は何？」
「妻との関係はどうなの？」と聞いた。
「子育てやらせっぱなしだよな。」
「DV はしなかったけど、きちんと育てられないことにはイライラしていたな。」
「DV の定義も変化してるよ。」と私。

子育てしていないのに暴力を振るうことへの気づきは DV や面前 DV の理解につながる。父親へのペアレンティング教育の前に、妻とのパートナーシップが問題だと理解してもらう。彼らの暴力が子育てに随伴するものではないとすると、では何に随伴するのか。男性性と父性に随伴する行動と考えていくこととした。男性であることと父親であることに宿る暴力こそが乗り越えの対象だと位置づけ、男たちの意見をもとにして「男親塾」と名付けた。こうして脱暴力の取り組みが本格化した。

虐待の起こる場面は家族（親密圏）が多い。その虐待は男性たちのケア行動に内在するのではない。異なる原理がケアに持ち込まれている。男性性とケアの関連が焦点である。女性性・母性が虐待に関わることとも異なる。家族制度がこれを媒介にしている。しかし、すべての男性・父親がそうなのではないので、暴力を振るう個人のパーソナルな要素をも視野にいれる。とはいえ、心理化しないようにも配慮する。そこで別の補助線をひく。それが男性性ジェンダーと生育歴の問題である。二つを重ねると男性の暴力という視点の重要性が浮かぶ（中村正「男たちの『暴力神話』と脱暴力臨床論–家庭内暴力の加害者心理の理解をもとにしてー」、『子どもの虐待とネグレクト』第 22 巻第 1 号、日本子ども虐待防止学会、2020 年）。

男性の暴力としての課題を虐待対策の一環に組み込むべきことへと当事者の男性たちとの対話をとおして気づいていった。DV と虐待の関係はずいぶんと以前から存在している。千葉県野田市の事件だけではない。さらに日本の父親は一般的にみて子育てに

関係する時間が少ない。イクメンという名付けが必要な程に無関心である。イクメンとしてもてはやすことがそもそも不自然である。そう考えると虐待する父親だけに子育てのためのペアレンティングをすることはおかしな事でもある。日本の父親全般がネグレクトなのだから、虐待父親だけに養育力向上を施すことは矛盾である。まずは、家族関係を媒介にして、ペアレンティングとしての課題ではないパートナーシップの課題としての虐待の再定義を行うことへと課題を定式化した。そうすると、さしあたり子育て支援に焦点を当てるのではなく、男性性の問題に焦点を当てるべきことになる。注力すべきはそこにあるので「子育てをしない方がよい」という局面もありうることになる。男性へのペアレンティングには注意が必要なのだ。

さらに、筆者は、親密な関係における暴力は、対象にかかわろうとする主体の欲求がもとになっていると把握している。コントロール行動に焦点を当てるということは、対象となった他者をとおして自らの欲望を実現させることに他ならない。親密な関係性という意識がそれを正当化させる。元の関係に戻ってしまう被害者の心理もここに根ざす。これらは加害者対応の内容と被害者の自立支援に欠かせない配慮点である。

男性相談としての彼らとの対話には困りごとを聴くことが奏功する。問題解決型の対話ができ、男親塾へと至った例である。

まとめ－他者をとおして自己の欲望を実現するコントロール行動

まとめておこう。男らしさの声を聴くことで見えてきたのは、背後に横たわる男性性の文化である。暴力を肯定する意味の貯水池のようである。暴力を定義すれば、身体的暴力も含めてさらに広く、「他者をとおして自らの欲望を実現させようとする行動」となる。つまりコントロール行動である。男性に限らないが、身体的で物理的な力の行使とも重なり、ジェンダー秩序や家族制度という社会的な諸力が男女には非対称に作用することもあり、暴力性をもちやすい男性性とコントロール行動という面に注目をしている。

まずは脱暴力を目標にしたパートナーシップ構築を目指していくことになる。この関係は家族をつくる以前からの、同性同士の関係も影響している。マウンティング的なモデルとライバル関係が思春期の男性同士のなかにある。男性の育ちのなかに暴力生成の契機が複数あるとすると男性問題の射程は広くなる。

紙幅の関係で議論できていないことは、ここで紹介したような、男たちの「地」としてのナラティブの外部にある「図」としての無意識の男性性であり、ジェンダー表象としての社会・文化のことである。周囲にはそれらを聴く力が必要となる。これは男性相談や加害者対策・暴力臨床とは何かという問いを超える男性性研究のスリリングなテーマである。

社会病理学・臨床社会学・男性問題研究
なかむらただし/立命館大学教授
（2020 年 11 月 30 日受理）

人を育てる会社の社長が
今考えていること
vol. 8

会社はどうあるべきか

新型コロナウイルスの影響がおさまらない。そんな中「これからの会社はどうあるべきか」を考えている。

＊＊＊

先日、日英を行き来する友人の演劇プロデューサーが、「日本では著名な劇作家や劇団主宰者を中心に“劇場の灯を消すな”と頑張っているが、ヨーロッパでは関係者が自ら完全に灯を消し、その上で“さて、これからどう創ろう”と議論している」と話していた。

私が主宰するアソブロック株式会社には、アイドルをプロデュースするチームがあるが、そのチームの統括者も「今をどう乗り切るかを考えるのではなく、如何にこれまでとお別れしてイチから考え直すかが大事だ」と話している。

言っていることの本質は同じだと思う。そしてそれは、会社についても同様だと思う。新型コロナウイルスは、変化を促している。例え有効なワクチンが開発されたとしても、コロナ以前には決して戻らない。助成金を含めた各種支援があるうちに、経営者が考えるべきは、今をどう乗り切るかではなく、会社の仕組みをどう組み立て直すかであろう。その選択肢のひとつに「一旦閉じる」ということも、ネガティブに捉えず含めておくべきではないかと私は思う。

＊＊＊

ニュースをご覧になった方も多いと思うが、ANA や JAL のキャビンアテンダントが家電量販店のノジマで働くそうだ。

ワークシェアリングは、景気が悪化した際に雇用を守りながら企業も守るための方法で、それ自体は目新しいものではない。勤務日が減る分給与も減るが、解雇は極力回避できる。日本だと、みずほ銀行が「週 3 日、4 日の勤務も認める。働き方の多様化へ対応」という言い方で実施し、話題になった。

ただ、これまで私の知る限りでは、多くのワークシェアリングは単一企業あるいはグループ内で調整することが大半で、飛行機から洗濯機に乗り換えるのは、従業員的にも寝耳に水だっただろう。

ここで私が気になるのは、対象者がこの乗り換えを「一時的な対処で、コロナが落ち着けば元に戻れる」と考えて出向するのか、それとも「これも何かの縁だから新しい勉強の場だと思い、キャリアを再構築していこう」と考えているのかである。なぜなら、コロナが落ち着いても「元には戻らない」と思うからだ。もし前者の気持ちで受け入れる人が多ければ、会社はトラブルの種をそこら中に蒔いているようなものだ。

「解雇できない社員なんて危なくって雇えない」と、竹中平蔵さんが言ったとかで炎上していたが、経営者が守るべきは雇用ではなく、従業員の生きがいや人生だ。そのゴールに向けて、解雇が手段になるケースが、私はあると思う。

＊＊＊

相変わらず、兼業必須の話題で、アソブロック株式会社への取材依頼が多い。私が兼業を推奨するのは、人の成長を支援する意味合いからだが、会社にイノベーションを起こす仕掛けとしても、新規事業部なんかを作るより、兼業はずっと有効だと考えている。それは、個人が忖度行動を控えるため、大きな流れとして正しい方向に向かう傾向が強くなるからだ。例えば、上司への発言に忖度をしなくなったり、例え少数派でも自分が正しいと思う行動をとってみたり。怖さが減る分、挑戦的行動も促進される。そのような多様性は、イノベーションの源泉に他ならない。

忖度行動が消える要因は、兼業により、キャリアアップや収入確保への道を、自らの力で描けるようになることが大きい。つまり、個人の資質ではなく、環境変化が理由だ。分かりやすく言えば、「ここで嫌われても、あそこがある。だからいい意味で遠慮はしな

い」と、主体的行動が発揮されやすくなるのだ。

人は、守るべきものが多いほどリスク回避的に振る舞う。言い換えれば、守るべきものを減らしてあげれば、リスクを取った思い切った行動を誘発できる。その手段として有効なのが、兼業というわけだ。

ちなみに、一方で人は、極限状況に置かれると、リスクを取った思い切った行動を取りがちな面もある。ギャンブルで負けが込むと投資額に抑制がなくなるのがそれだが、組織ぐるみで隠ぺい工作をしたり、不正に手を染めたりするのも、これが原因だ。

多くの経営者が知るところだが、「ぬるま湯体質」が一番危ない。のぼせもせず、冷えもせず、長く入っていられる。お湯の温度を変えずに、「新規事業部」を新設し、一人カッカしている経営者が、なんと多いことか。

＊＊＊

時代は「自らキャリアを主体的に設計していく」ことを、すべての人に求めている。言い換えれば「役に立つ人間であり続けられるように考え、努力しろ」ということだ。そんな時代の会社は、そうなろうとする従業員を支援することが、大きな存在価値であるように思う。

「卒業生が自慢です」というのは、大学のキャッチコピーでよく見かける表現だが、会社も同じであり、今後、ますますその点がフォーカスされるであろう。「元リクルート」や「マッキンゼー出身」が、転職市場で一目置かれるように、自社の出身であることを武器にできる会社になれているかどうか。そういう目で会社を見つめ直すことが、経営者には改めて求められていると思う。

文／だん・あそぶ
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な８つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

カウンセリングのお作法　第二十五回

CONカウンセリンオフィス中島　中島(水鳥)弘美



高齢の方に対する支援　基本姿勢

今回は、高齢の方と接するときの基本姿勢について話します

高齢者といっても、おひとりおひとり特徴はことなります。

つい最近、定年退職をした人、継続して仕事をしている人、数多い趣味とともに暮らしている人、ボランティア活動をしている人、孫育て中の人、お互いに支えあいながら生活している夫婦、後期高齢者と呼ばれる七十五歳以上の人、何かの持病を持つ人、元気な高齢の人なども、もちろん多くおられます

そのような高齢者について、介護福祉士や社会福祉士などの対人援助職を目指す学生さんが、

「おじいちゃんやおばあちゃんと子どものころから仲良しだったので、高齢者と接するのは慣れているから、高齢者施設で働きたい」

「いつも身近にいたので、高齢者の方と接する仕事に就きたいと思っている」

という話を耳にすることがあり、若い人たちが高齢者に関心を向けていて、うれしく感じます。

一方、高齢の人々も、自分よりもうんと若い、孫のような年齢の人たちに対して、好感を持っているようで、中には、同世代よりも若い人や職員さんと話すほうが楽しいという人も多いです。若い人が周りにいて、きびきびと動く姿をみるのはすがすがしい気がします。

それでは、若い人と高齢の人が出会えばすぐに歩調が合うかというと、それはなかなか簡単にはいかないようです。

高齢の人がたびたび口にすることは、

「若い人には年寄の気持ちはわからない」ということです

あまりにも、年寄り扱いをされることには抵抗がありますが、年寄りの気持ちは年寄りになってみないとわからないだろうと思いが強いようです。

少し話をうかがってみると、

「たとえば、若い人に車椅子を押してもらうと歩く速さが早すぎて、落ち着かない、どんどん歩いていく、もっとゆっくり周りの景色を楽しみたいのに、くたびれるのです」

という。

自分の孫や、若い人や学生さんたちと関わるのはうれしい反面、彼らのテンポで車いすを押して歩くと、高齢の方にとって、早すぎる、もっと年寄りの時間の流れがゆったりペースであることを知ってほしいというのです。

確かに、思い浮かぶことが多くありそうです。

高齢の人々



仕事をしています



孫育て中



支えあいながらの生活



後期高齢者

高齢者と接するときの基本姿勢

「出かけるのは面倒ですね」

私たちは、高齢者の方に対して敬意を表する気持ちはありますが、高齢者の感じ方を具体的に理解することがこれまで以上に、必要かもしれません。

それでは、手助けや、支援を必要としている人と接するときの基本姿勢について、場面を想定して考えてみましょう

あなたと利用者さんである高齢者との関係は

「あなたが利用者のところへ支援員としてすでに二、三回訪問したことがある」

として考えて下さい。

●ひとり暮らしのタロウさんは、話し友達がほしくて公民館での囲碁サークル活動に参加したいのですが、出かけるのが面倒なために参加するかどうか迷っています。

このような場合どのような対応や言葉かけを行いますか、考えてみてください。

基本姿勢　出かけるのは面倒ですよね

出かけたいと思っているのなら、どうしたら出かけられるのか、何を手伝おうという気持ちに支援する立場は考えがちですが、まずは、感じ方、気持ち重視です。

ここでの基本姿勢は、タロウさんの気持ちを受けとめて、出かけるのは面倒という思いを理解を表します

新しいことにとりかかるのは年齢を重ねると負担になります。同じことをくりかえす行動に比べて、初めてのことやたとえやりたいと望んでいることでも、体を動かしたりすることは、億劫です。

そのために、出かけない理由、行かない理由をたくさん持っています。

「午後から雨が降りそうだからやめておくわ、雨の降らない日に行くわ」

などです。

ここで、言葉かけとしては、

「どんなことから面倒だと思われるのですか」

どのような理由を持っているのかを尋ねます。

それが、足が痛いとか、初めてのところは苦手だとか、さまざまな事情が浮かびあがってきます。

最初は見学だけでも良いとか、公民館までの送迎があるとかの情報を提供しつつ、最終的には、

「今日はどうされますか」

と改めてお気持ちを確認するために尋ねます。どちらを選んでも利用者さんの決定を重視します。

一人暮らしのタロウさんは、話し友達がほしくて公民館での囲碁サークル活動に参加したいのですが、出かけるのが面倒なために参加するかどうか迷っています。

どのような対応で、言葉かけを行いますか?



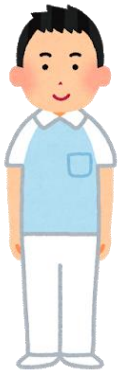
出かけるのが面倒





基本姿勢

出かけるのは面倒ですよね



どんなところから面倒だと思われるのですか？



足が弱いし

新しいところに行くのはちょっとねぇ

高齢者と接するときの基本姿勢

事情をきかせていただけるようにする

もうひとつ考えてみましょう

あなたは対人援助職系の学校卒業後、勤務二年目の職員として考えて下さい。

特別養護老人ホームに入居しているいつも物静かなイチ子さんは、茶話会の席で陽気に振る舞っている職員のあなたに向かって

「若い人はいいね。いつも元気で」

と、少し語気を荒げて言いました。

あなたは、どのような言葉かけを行いますか？

基本姿勢

いつもと違うイチ子さんの態度は何かのサイン、何かを伝えたがっているのかもしれませんが、どのようなお気持ちなのかわかりません。イチ子さんの気持ちをぜひ理解したいという態度を示します。

語気を荒げていることから、機嫌が悪そうと決めつけて、理解できていないうちにさきに謝らないことも大切です。

対応の例

職　員）このお菓子、きゃ～おいしそぉ～

イチ子）若い人はいいね。いつも元気で。

職　員）（イチ子さんのところに近づき）

イチ子さん、どうされました？

イチ子）別に。

職　員）本当ですか確かにそうなのですか、

・・・今でなくてもまた後でもぜひお気持ちを聞かせて下さい。

イチ子）いやぁ。

話してもらうことは難しいけれど、話したいことや希望がある場合には、言葉にして説明してもらうように、心がけます。

ときには、状況に応じて、ワンダウンポジションの態度も必要です。

「私たちの対応で、何か良くないところ、失礼がありましたら、おっしゃってください。」

と、尋ねます。

職員の態度がやかましいと思ったのかもしれませんし、体調がすぐれないのかもしれないし、面会予定の息子さんが来られなくなってさびしくなったのかもしれません。

すべてを理解することはかないませんが、お互いが何を考えているのか感じているのかできるだけ、言葉にすることを心がけます。

特別養護老人ホームに入居しているいつも物静かなイチ子さんは、茶話会の席で陽気に振る舞っている職員のあなたに向かって

「若い人はいいね。いつも元気で」と、少し語気を荒げて言いました。

どのような対応で、言葉かけを行いますか？





若い人はいいねいつも元気で！



基本姿勢

どうされましたか？何かありましたか？





CON 子さん　心理カウンセラー

できるだけお互いの気持ちを言語化するようにこころがけます

「お気持ちお聞かせください」

ビジュアル系 子ども・家族の理解と支援

十　子どもとのやりとり（思春期編２）



家族援助あれこれ

「子どもからこんなことを聞かれたのですが、先生だったらどう答えますか？」、家族からよくこんなことを聞かれます。それを思い出しながらまとめてみました。

ご承知のように、この種の問いかけに正解などありません。書いてあるのは、思いっきり個人的なものです。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許諾を得て、木陰の物語と家族の練習問題から転載しました。

（１１）得意・不得意

不得意を克服しろ
言われても無理や。
んなもん、やる気が
でるわけないやろ





「苦手を克服したら全体のかさ上げができる」は学校の常套句だ。けど、誰だって頑張れるのは好きと得意なんだから、そこに注力すればいいじゃないか。それだってかさ上げはできるし。肝心なのは、取っ掛かりのよい入り口を選ぶことだと思うよ

？

（１２）学校の意味

学校は何のためにあるん？自分を殺してまで行くところやないと言う人もおるけど





確かに、勉強だけなら学校じゃなくてもなんとかなる。でもね、校内のどこかに自分の居場所を見つけるサバイバル体験は他ではできない。これは、社会で生きていくための予行演習だ。学校にいっぱいある理不尽さ、それらと折り合う力を磨くことだってそうだ。これは社会を生きぬくワクチンだな。学校でしか経験できないことはちゃんとあるんだよ

？

（13）恋愛相談

カノジョから「友だち以上やけど恋人未満や」て言われてんけど、意味わからん





①見る・聞く・話すの視聴覚と言葉のレベルでつながるのは「知人」。②加えて、見えない部分・語られない部分をイメージして理解しあうのが「友だち」。③ さらに、互いに触れること・譲ることが心地よければ「恋人」。どう、わかりやすいだろ？

?

（14）快楽・快感

四六時中、欲望は尽きんし欲求は抑えられへん。こいつらなにもん？どこから湧いてくんねん？



欲望は、動的な“欲しい”と静的な“好き”に分かれる。食欲、仕事、装飾物、アルコール・薬物・ギャンブルなどは“欲しい系”だ。興奮・衝動が圧倒したら、過食、仕事中毒、買い物症候群、依存症などになるかも。一方の“好き系”は文字通り好みが関係し、イメージするだけでジワッと幸福感が得られるのが特徴だな。「どこから」に答えるなら、前者の本能的なものは大脳基底核関連、後者の好き嫌いや快不快は大脳辺縁系だ。次に欲求。その代表格は社会的評価や自己実現への欲求だ。我慢や努力とセットになっていて、与えられるだけでなく与える側でも満足感は得られる。ここでの善し悪しや損得の判断は大脳新皮質だから、このほうがレベルは高い。答えになってない？？

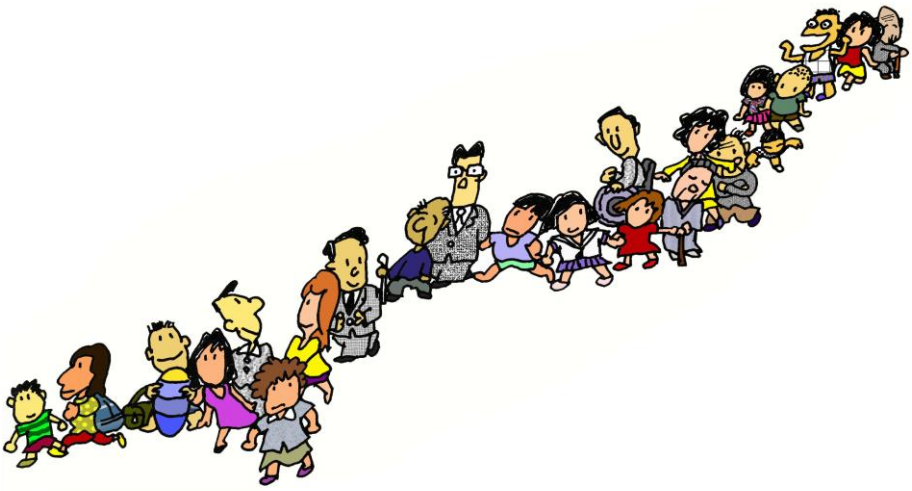


？

Family History

（2）

団士郎／団いどむ



第 1 回目を書いてみて、こんなペースで進めると終わらないほど膨大なことになる予感がした。そんな詳細なわが家のヒストリーなど、誰が関心あるものかと思う。私自身も半分は我が家のファミリーヒストリーだが、もう半分はどう調べれば、どこで宝の山に遭遇できるのかに惹かれている。そういう作業が一番苦手な私は、得意とする次男の調査報告が楽しみだ。

＊

刻々、きざみ続けられているのがファミリーヒストリーだなんてことぐらいわかっていた。しかし最新のヒストリーが妻の七十歳での死だとは考えもしなかった。配偶者の死は中高年男性にとって、最大のストレスであると耳にする。だが今のところ私には、あまり実感がない。寂しいことではあるが想定内の事態であり、長く連れ添えばそれがいつ起きるかは誰にもわからない。

自分にそんな事は起きないなどと非科学的な信念さえ持たなければ、あぁ、それが今日だったのか、早いなぁ。でも 47 年間、他人同士が婚姻継続してきたんだものなぁと考えられるのも年の功だろう。

人はとかく、自分だけは別だと思いたがる。だから何かが起きてしまった時、過剰に精神的反応をする

のではないか。生まれたとは必ず死ぬものとして存在するということだ。そこに約束された時間も順序もない。おおむね最長でも 100 年ほどの生物であると理解していたら、長い短いもその範囲内。今何歳だろうと、それまでの人生がさかのぼって短くなる事はないのだから、40 年、50 年、60 年、70 年、そこまでに何ができたかを己に問えばよいことだ。

第二回

次男が調べたことを、延々と書いてゆくつもりはない。私にとって発見というか、歴史のつながりや重なりの面白さが実感される出来事。私の個人史が近代日本史と重なっていること。あるいは人の営みが昔からそれほど大きく変化しているわけではないことが、明らかになれば面白いと思って書いている。変わることと、変わらぬことの狭間で私たちは 100 年足らずの物語を生き、そして死ぬ。

＊

２０２０年９月２７日、妻の四十九日法要を済ませた。我が家にとっては古い習慣である法事の後の「かねよ」。食事会を大津・逢坂山大谷にあるうなぎ料亭で実施した。

開業百数十年と書かれているが、我が家が利用し始めてからも百年近い。私が生まれる前から、大津で商売をしていた祖父や、その上の代にも馴染みの店だ。その席での挨拶で、１１人の出席者に向けて私はこう話した。

「ここは今から五十年ほど前、典子と私が結婚することになり、双方の親の顔合わせを設定したときに使った店です。ここの小部屋で私の両親と典子の両親が顔合わせました。はじめての経験で、そこそこ緊張していた記憶があります。

その時の六人のうち五人がもう亡くなりました。五十年をそれほど長い時間だとは思いませんが、現実はあの時の顔ぶれが、今は私一人になっているほどの時間でもあります。そう思うと人の世の新陳代謝は、想像よりはるかに早い感じがします。ことさらそれを悲しいとも不安だとも思いません。私にとっての次の世代、そしてさらにその次の世代がもう中学生になる年齢です。

こういうことを実感するために、ときにはこんな昔ながらの行事を、昔ながらの場所でしてみるのも意味のあることかもしれません」

＊

五十年前のあの日のことで、私の記憶ではなく、いどむが典子からきかされたこととして伝えられたことがある。ひょっとして私も聞いたことがあるのかもしれないが、全く記憶にない。知らされていたらこんなことを忘れるはずがないと思うのだが…。

それはお開きになって帰宅したときのことだそうだ。伊吹(妻の旧姓)の両親が、「団さんは利喜三さんのご実家、西田さんの縁者やなぁ…」と語ったのだと言うのだ。

典子とは同志社大学の心理学専攻の同窓で、私が結核で 1 年留年したことで卒業時に同級生になった。戦後生まれの多くがそうであったように、そこからの恋愛結婚と言うカテゴリーだ。ところがその相手が、私の家と古いつながりの中にあったと言うのだ。

どういう事かというと、1885 年生まれの私の祖父（留吉）は、大津の西田さんという商店で、丁稚の頃からお世話になっていた。そしてその西田家の主の三男が、1930 年頃に伊吹一族の家に養子に行き、典子とは親戚関係にあったのだ。だから典子の両親は、大津の西田家の事をよく知っていた。同じように、私が高校生の頃に亡くなった私の祖父も、その後わたしが結婚することになる京都の伊吹家のことを知っていたことになる。

私の祖父からすると、世話になった店の主の坊ちゃんが養子にいった先の一族の娘さんを、自分の孫が妻に迎えることになったのだ。その結

婚の時まで生きていたら、何と言っただろうか。

もう近年では家柄だとか身辺調査等と古典的で差別的なことを口にする人もなくなった。しかし、当時はまだ、一概にそうも言えなかった。典子の両親が対面の場でそのようなことを口にしなかったのは適切だった。伊吹の両親は、家の格などということに全く思いがないというわけではない人だった。

しかしそれにしても、そんなつながりが私と典子の背景に存在したのは、今になって思うと不思議なことだ。NHK「ファミリーヒストリー」を見ていても、日本の夫婦の多くが夫の姓を名乗っていることが多い。どちらにするか、夫婦別姓を戸籍法が認めていない状況では必須決定事項だ。昔のことだから妻は当然のように団典子になった。

しかし旧姓伊吹典子。この「伊吹」にもファミリーヒストリーは当然あって、番組でも母方のルーツを探ることも同時並行的に行っている。

いどむの調査

「調査してみて分かった事は、昔と比べるとネットで調べられるようになって、いろんなデータがそこに挙げられている。ネット検索で何か出てくるような名前や人、家なら、他でも資料を当たることが可能だ。しかし誰も彼もがネット検索で辿っていけばルーツにたどり着くというものでもない。

明治 10 年ごろから定期刊行されている紳士録も、現在ネットで調べられる。国会図書館には揃っていて、行けばコピーもできる。発刊から 50 年以上経ったものなら、著作権が切れているから、検索して自宅の PC でコピーも可能だ。

国会図書館にはいろいろなものが収蔵されていて、19 時まで開いているので調査の助けになる。印刷の受付は 18 時までかな。

「そういうことって行ってみて初めてわかることやろ?試行錯誤にめげんのやねお前」

「名前検索から始めて…、今はとにかくネットがすごいよ。事前にそこでアタリがつけられるから、現地に行ってみても、はずれ、空振りは少ない。

この前も国会図書館で「朽木家」のことを調べていたら参考になるものがあった。閲覧申請で出てきた本のデータをネットで調べたら、発行元がわかった。市販品かと思ったら保存会のような所の自費出版的な本だった。取扱店が二軒あって定価 5000 円。これが京都府福知山市の出版社。電話で代引き注文して手に入れた。

これは、五月(さつきさんは団久子、士郎の母の母つまり母方祖母)の出身家族を調べる手掛かり。

「桐村弘文堂って知ってるよ。文房具とか印刷、本屋のような。昔京都府の児童相談所に勤めていた時、福知山には10年余り住んでいたもんなぁ。いどむは小学校入学早々までそこで育ったやん。

でも住んでいた11年間にこんな話題をした記憶がない。だから私たちは誰も知らなかったのだと思う。いやいやそういえば今、大河ドラマでやっている明智光秀は福知山城主だった時期があって、藤竹のおばあちゃん(五月さん)はその縁の末裔だとか聞いたような気もする。

この話を、今回入手した本で改めて調べてみると、どうやら戦国時代の城主・明智光秀ではなく、その後の江戸時代に福知山藩主となった朽木家の末裔だったということが確認できた。しかしながら、いろいろな記録が残っているものだ。

＊

社会的な立場、役職にあった人は公式記録に残っている。私の母の原家族、「藤竹」は藤竹信之(母方祖父)が日本陸軍の職業軍人であったために、その記録が残されることになった。

私にこの祖父の記憶はほとんどない。葬儀に出席したのが 1 番の記憶だ。京都市下賀茂の教会で行われたその場で、就学前の私が牧師の言葉を受けて、大声でそれを繰り返したと笑い話にされたことだけ覚えている。

教会での葬儀だったことが、ずっと後になって不思議な気がした。クリスチャンの一家だったわけではなく、祖父は歳をとってから自分１人洗礼を受けてクリスチャンになったと聞いた。理由は知らない。誰かが話しているのを聞いた記憶もない。士郎の母が生きてるうちなら、その事情を知っていたかもしれないが、話題になった事はなかったと思う。。

近年、関心を持ち始め、第一回で取り上げた母方祖父の兵籍簿のことが強く気になりだした。出身は熊本の人。熊本の名門、旧制中学済々黌から陸軍士官学校に入り、その後、陸軍大学校に入学している。陸軍大学校受験資格は、隊付き勤務二年以上の中尉と少尉だそうである。陸軍大学校の在籍者名簿や、その後の事は「日本陸軍」の配属地ルートから調べるといろいろなことがわかるらしく、いどむが膨大な資料を発掘してきてあれこれ話してくれた。

熊本・中学済々黌からは多くの陸軍大学校入学者を出しているらしい。その中には陸軍大将、中将、少将に名を連ねる人が多い。母方祖父も陸軍少将が軍暦最終肩書である。藤竹信之は49歳で予備役となり、京都に暮らし銀行員になった。そこで5人の子供を育てた。

團家

「團の家は商売人やん。だったら團家の事なんか出てこないよね。そういう記録はどうなってるの?同じルーツ探しでもずいぶん調べ方が違うことになるね」

＊

少し余談。私の現在の戸籍名は団 士郎である。結婚するまで、正式には團士郎だった。婚姻届を出す時、それまで様々な場で書き間違えられてきた「團」ではなく、間違いのない「団」にした。合理的な考え方からの選択である

同時に本籍はいつも、現住地に移して今に至る。世間には、ながらく訪れたこともない土地に、ルーツだと言うので本籍を残している人が多い。公式手続き等では本籍地の謄本が必要だったりするから面倒なだけだと思うのだが。

私は姓の漢字表記も本籍地も合理性を採ったことになる。大したいわれもない家柄や、先祖話に心惹かれているわけではない。むしろ逆の考え方をするタイプだ。

＊

團家のことを、兵籍簿ルートではなく、仏壇の引き出しから出てきた過去帳なるものに登場する人名をたどっていくと、福井県小浜から大津への流れが登場する。

商売をしていると税金、屋号、商工会の記録等に、必ずではないが登場する。納税記録等でも出てくる。サラリーマン勤め人では登場しない。

さらに團家を深掘りできた理由は、出身が武士だからだ。家系図のことなど他の人と話してみると、「うちは農民の出だから、苗字もクソもない！」という話もあった。

西暦 1900 年までくらいなら、いろいろネット検索で調べることが可能だ。１００年ぐらいは誰でもたどれるが、それが限界ということになる。

今、先祖の調べ方がブームで、そんな本も出ている。これまで2度くらい世の中にブームがあって、最近のは3回目のブームらしい。お寺に聞いてみたり、親戚に手紙を出してみたりすると分かることもある。十通に一通も返信はないだろうけど、何か話したいことがある人もいる。出身地、宗派、同宗派の寺に手紙で、こういうことを尋ねてみるのも方法。

＊

「それで、調査はその後どうなった？」

小浜の清厳寺跡で話を聞いた後、小浜藩・酒井の殿様のお城近くを歩いてみると、城跡のすぐ近くの神社に奉納された絵馬と並んで、屋敷地図がかけられていた。その名前の中に團家があって、どの辺りに屋敷があったのかを推定できた。

その地図の記載を見てみると、向こう三軒両隣の藩士の姓も分かり、そこに興味深い名前があった。

三軒隣りの矢部家の次男は、のちの梅田雲浜と名乗る人物。先進的な考え方をする若者で、彼は家を出て、地元を離れた大津で私塾を始めた江戸末期の儒学者。最終的には安政の大獄で摘発され獄死することとなった。その功績を記念した石碑が大津市に建立されているが、その場所というのが、私（士郎）が通学していた大津市立長等小学校の北校舎と呼んでいた校門の横なのである。

六十年以上前の事だから、その間、校舎新築などを経ていて、私の通学時代に今の場所にあったかどうかは定かではないが、そんな縁の存在を発見することになった。

江戸末期から明治にかけて、小浜藩の武士でいるという事は、「麒麟がくる」みたいな戦は全くやっていない。もっぱら藩の経済活動従事である。

團家の記録文書には、高島（近江）の代官を命じられた事が書かれているものがある。滋賀県内に小浜藩の領地があったのだ。そこで小浜市史に記載された高島代官所を見てみると、現在の滋賀県の高島市、琵琶湖畔に小浜藩蔵屋敷のあったところを発見することができた。今は更地になっているがそこで代官を幕末の頃の数年間勤めていたことがわかる。南船木という場所で、藩の交易をしていたようである。



、

その後、明治維新の大転換で小浜から高島に来ていた團家はしばらく後、長男（雄太郎）が大津に出て商売をすることになる。

若狭湾、福井県小浜市、滋賀県高島市、大津市、そして京都の位置関係を地図で示しておく。

社会的養護の新展開 12

—戦争と子どもたち 2—

浦田 雅夫
京都芸術大学

社会的養護の新展開というタイトルながら、前回から引き続き、戦争と子どもたちについて書いている。「戦争と子ども NHK 戦争証言アーカイブ」は、子ども時代の戦争体験語る芸能人らの動画を残していて興味深い。そのなかで、昭和 20 年、終戦直前、当時、国民学校 6 年生だった芦屋小雁さんは、京都四条大宮の駅であった出来事について語っておられる。

大阪大空襲の数日後、阪急四条大宮駅付近にボロボロの服を着た人たちがいると耳にした。京都は戦争にあわない場所だと聞いて、大勢来たらしい。かつて四条大宮は阪急の終点。着の身着のままの神戸や大阪から流れてくる人たち。黒山のごとくの人、また人。そのなかに、親のない子どもたちがいた。その孤児を小雁さんは、不憫に思い自宅に連れて行き、粗飯をとらせ、同じ布団で寝かせたという。自分の弟みたいな感じで、自分のなかではその子を弟にしようと思ったが、自分の家族の分だけでも精一杯の時代、母が反対し、仕方なくその子を連れて四条大宮の駅に連れて行った。その子はどうしているか。戦争のことを思い出すたびに、そのことを思い出すという。まさに、本庄のいう「駅の子」である。

手助けしたかったが、結局一晩泊めることしかできなかった 11 歳の小雁さん。

このエピソードを聞き、私は小さい頃、野良犬の子を拾ってきた兄が、明日は野に返してきなさいと母からひどく叱られていたのを思い出した。

戦後、「浮浪児」と呼ばれた戦争孤児たちは、GHQ による治安維持の指令のもと、「野犬狩り」、「刈り込み」によりトラックに乗せられ施設へ収容されていった。しかし、当時の施設は非常に劣悪な環境であり、また駅に逃げ帰る子も多くイタチごっこだった。

浅井は、「戦争孤児問題は、国・政府の戦後処理問題の一つである。」とし、①戦争孤児問題は戦争の必然的な結果というだけではなく、子どもへの無関心＝国家の国民・子どもを守る役割の放棄であること。②GHQ が占領政策（一方的な権利の主張や相手への制限負荷の禁止）を無視したこと。③国家、政府が戦中の戦争孤児への対応と戦後の戦争孤児への対応を全く異にしたこと。すなわち、戦中は英霊の子として靖国の宝として大切にされたが、戦後は、厄介者扱いされた等、国家、政府による問題が本質にあると指摘している。一丸となり戦いが求められた後は、知らぬふり。犠牲はいつも弱い立場に集中する。

先日、NHK 等でも「駅の子」として取り上げられてきた、O さんに直接お話を伺う機会を得た。O さんは現在、88 歳。現役のマッサージ師。「1 日ひとりしか、マッサージしない

のよ」、といいながら私の背中をさすり「日本は神の国だって、絶対勝つって教えられてきましたよ、それが、戦争が終わった途端、一番犠牲になったのは子どもたちですよ。二度と戦争はしてはいけないんですよ。」と話し出された。

「親友が死んでね、徹底的に社会に逆らって生きてやろうと思っていたんだけど、駅を転々として、ルンペン刈りにあってね、伏見に行った。そこで出会った K 先生が僕を変えた。汚い汚い、僕の背中を流してくれた。絶対にみんなを呼び捨てにしないし。この人のいうことなら聞かないといけないなと思った。人は出会いで変わるんだ。」そう話される O さん。気がつけば、2 時間以上もマッサージをしていただいていた。困難な状況を生き抜いてこられた O さんが、信頼に値する大人との関係のなかで、自身の将来展望を持ち、生き抜いてこられたことがよくわかった。「盲学校へ行かせてくれたK先生はね、しんどかったら、いつでも帰ってきたらいい、いつでも帰ってきて泣いたらいいんや」と言ってくれた。

体をほぐしていただきながら、ケアの本質を教えていただいた気がした。

出典）

・NHK 戦争アーカイブス　芦屋小雁「京都に逃げてきた戦災孤児」
最終閲覧日：2020 年 11 月 30 日
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001240285_00000

・浅井春夫・川満彰『戦争孤児たちの戦後史 1』吉川弘文館、2020 年
・同上の文献において、本庄豊は、戦争孤児の取材経過のなかから、「浮浪児」のなかでも駅周辺にいる者を「駅の子」としている。

・「駅の子」　生きるために闘い続けた戦争孤児
最終閲覧日：2020 年 11 月 30 日
https://www.nhk.or.jp/special/plus/articles/20180905/index.html

・視覚障害　ナビ・ラジオ
私は『駅の子』だった
最終視聴日：2020 年 11 月 30 日
https://www.nhk.or.jp/heart-net/shikaku/list/detail.html?id=47240

43・ティーチャーチェンジ

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

原町幼稚園では、

『全園児を全職員でみる（育てる）』

をモットーとしています。クラス担任が第一義的にクラスの子どもたちの責任を持つのは基本ですが、目の前に他クラスの子どもがいたとしても、同じように対応できるマインドを育てたいこと。保育職でも事務職でも役割は違うけれども子どもを育てるための園の一員としての意識を持って欲しくてこの様な目標を掲げています。

目標を掲げてみんなが気をつければそれは実現するかというと、そんな都合のいい話はありません。目標を実現するためには、それなりの仕掛けが必要です。そのことをマネージメントと言うらしく、最近は経験を積んだ職員が「処遇改善手当」を受けるためにはマネージメント研修を受けることが必須になっています。マネージメントの概要を学んで、それをどう個々の現場に合わせて計画・実施していくかというところが肝になってくると思います。



「全園児を全職員でみる」という目標は、幼稚園時代園児270名に約14人の教職員という規模の頃から掲げていましたが、少子化で園児が減り、認定こども園定員120名に約20名の教職員という状況になったことで、以前よりずっとこの目標が達成されていると感じています。やっていることを変えたわけではありませんが、人数比率がこうも違うと、まったく結果は変わってくるものなのです。

では具体的に挙げてみましょう。

○園バスはローテーションで乗車する
○一斉活動が始まるまでは、毎朝全園児入り乱れての外遊びを推奨
○降園時間の園庭遊び担当もローテーション

・・・何も特別なことはありません、どの園でもやっていることだと思います。

教職員の心構え的なものとしては、

○目の前にいる子どもの責任はその時そこにいる大人がもつ
○お互いに子どもの話、保育の話を活発にする（週２回のミーティングで保育の報告を行っています。あとは各自自由に。）
○自分のクラスの問題は早めに公開して同僚の協力やアドバイスを得る。

・・・これも特別なことでもありませんが、この方向性で日々仕事を進めることがベースになっています。

一つ特別なことがあるとすれば、学年ごとに２クラス、全６クラス+満３歳１クラスという構成なのですが、同じ学年の２クラスは隣り合っていて二世帯住宅のようにドア１枚で繋がっていて子どもも先生も自由に往き来できるという環境も一役買っているかもしれません。（デメリットとして、隣の音がよく聞こえるので静かにしているときに歌が聞こえてきたりする）

そして、違うクラスに出かけていって、一緒に歌ったり、お弁当を食べにお邪魔したりされたり、自由時間に遊びに行ったりするというクラス間交流が普通に行われています。そんな環境の中で子どもも先生もクラス間の壁は低くなっているのでしょう。

クラス間の壁が低くなってオープンな雰囲気が醸成されるといろいろなことがやりやすくなります。担任欠勤時に替わりの保育者が入ってもスムーズですし、子どもも不安定になることもありません。シフト勤務が一般化している保育園ではごく当たり前のことですが、働き方改革を考えると「担任」というポジションの軽量化も必要と

なってくるでしょうから、オープンな雰囲気とマルチタスク的な仕事のしかたは今後必須かと思います。



ティーチャーチェンジは、文字通りクラスの先生を交換することで、研修としてもよく使われます。これを意図的に入れていきます。

まずは１学期の５月か６月頃に、同学年２人が交代するだけですが数時間とか午前中とか短い時間で少しずつ取り入れていきます。そしてしばらく経ったら３～４日ぐらい同じ人で交代を行います。チャイルドチェンジで、子どもが半分とか総入れ替えとか、部屋を変わってみたりもします。

◆子どものねらいとしては、

○クラスに固着しすぎず、人間関係を広げたり環境を変えて適応力を付ける
○新鮮な気持ちでいつもと違う先生を迎え入れられる（自分たちが先輩という意識もアリ）
○違う先生にクラスのことを説明するため、自分たちの園生活を再確認することができる
○カッコいいところを見せたいと背伸びする（いつもより自己コントロールが強化）
○保護者にも具体的な活動を通して担任一人が園の窓口ではない、全員で全員を･･･という意識も徐々に持ってもらえるように配慮していく

◆教職員側のメリットは

○職員間のコミュニケーションが活発に行われて風通しが良くなること
○先輩や同僚の保育を見て、参考になること（人数に余裕があることで、フリーポジションで関われる状況を作れることがポイント）
○ふだん非常勤勤務でアシスト担当の保育者のテクニックを見ることができる。（アシスト保育者はベテランも多いので腕を振るえる）
○担任を外れることで、自分のクラスを違う角度から見ることができ、子どもの気づかなかった一面や、違うアプローチの仕方を思いついたりする
○クラスの子どもたちへの愛着がUP
○問題のある子どもなどの情報を表面的でなく皆で共有できる
○カリキュラムは継続して担当した保育者が行うため、特別に予定を変更する必要はなく、事前打ち合わせなどを通してお互いのスキルアップも望める

◆デメリットは、年少組など園生活に慣れていない子どもがちょっと不安定になって当園を渋ったり、ベタベタ甘えが強くなったりします。また保護者からの連絡や発信をきちんと伝達しておかないとミスやトラブルに繋がります。

それでも、メリットのほうが大きいので実施する価値はあると考えています。



{やきいもおいし～！}

《実際の方法》

１学期などの部分的なティーチャーチェンジは、学年だよりや園便りで小さくお知らせして実施し、２学期の全クラスを巻き込んでの実施は、スケジュール表をお知らせして実施します。

【実際の園便りから】

保護者の皆様へ

ティーチャーチェンジのおしらせ

2020.10.9.（金）原町幼稚園　園長　鶴谷主一

（前略）

さて、運動会明けの21日から始まるティーチャーチェンジについてご説明します。

原町幼稚園のモットーとして、『全園児を全職員でみる』ということを心がけていますが、園庭や自由な時間はそれが生きており「○ちゃんが園庭のあそこでこんなことしてたよ」とか「○ちゃんがこんなこと言ってた」という情報はミーティングの時間をはじめ、教員間で共有されています。そのメリットをクラス活動の中でも取り入れていこうというのがティーチャーチェンジの目的です。

教員同士が違う視点でクラスの子どもたちの様子、保育方法を情報交換することや、子どもたちと先生がさらに親密に関わり合えるということが、子どもたちの多様な人間関係の体験に繋がります。期間中の6日間はチェンジしたままいろいろな活動を行っていきます。次の表のように担当を決めましたのでお知らせいたします。

ご家庭でもその日の担当を確認して登園するようお願い致しますとともに、お子さんにその日の様子や感じたことを聞いたりして、有意義な情報がありましたら私どもにお伝え頂けるとより効果が高まります、よろしくお願い致します。

ティーチャーチェンジ担当教員表

	備考	つき	ほし	ゆり	ばら	中 アシスト	いちご	めろん	少 アシスト	うさぎ	うさぎ アシスト
21(水)	年長組芋掘り	石川	稲葉	杉山	篠原	小川	幾見	福水	山田	藤原 西	近藤ち 高橋
22(木)	年中組芋掘り	藤原	西	幾見	大川	近藤ち	篠原	石川	高橋 茂林	稲葉 福水	山田 小川
23(金)		眞野	小川	稲葉	近藤り	篠原	杉山	西	藤原 幾見	大川 山田	石川 高橋
26(月)	年中長焼き芋	福水	近藤ち	山田	高橋	西	石川	大川	伊藤 茂林	稲葉 篠原	幾見 小川
27(火)		杉山	山田	福水	近藤ち	石川	眞野	稲葉	篠原 茂林	藤原 幾見	西 小川
28(水)	年少焼き芋 とら＆うさぎ焼き芋	篠原	幾見	石川	小川	近藤ち	山田	近藤り	西	稲葉 藤原	福水 高橋

◎その日のお迎えや持ち物、体調などの連絡はいつもの連絡方法で結構です。
　連絡事項の流れ：連絡→当日の担当教員へ→担当教員から担任へ必ず伝えます。
◎朝の時間から担当教員がクラスを担当します。
◎うさぎ組は、子どもたちの安定を重視し、担任３人のうち１人は必ず保育に入ります。 以上。

《スケジュールの組み方》

○前ページの手紙に載っていた表を、わかりやすく色分けしてみました。
　期間中の保育者の動きがわかると思います。
※表に名前のない保育教諭は事務仕事か、未就園児担当などに回っています。

○スケジュールは、それぞれの保育教諭の経験年数や、昨年まで持った学年、アシストの経験などを踏まえて相談しながら教務主任と各学年のリーダーが入れていきます。
○アシスト保育教諭は、ふだん満３歳や年少クラス、未就園児を担当しているＡ～Ｆの６人が関わりました。
◎保育後に、同じ学年を受け持った担当同士が感想を話し合ったり、受け持ったクラスの様子を担任に伝えることで、情報交換が活発に行われます。
◎期間終了後に、全体ミーティングでも、各々気づいたことや学んだことを発表し合いますので、園内公開保育などの研修と同等の効果が得られると思います。しかも、特別に日程を取って行うわけではないのでカリキュラム的な負担は軽く済むこともメリットです。
◎絵本の読み方や、声のかけ方、導入のしかたなど、ちょっとした流れの作り方などに気づきがあったことなど、１ページ目に書いた教職員側のメリットが多く得られました。

2020年10月21日～28日　ティーチャーチェンジ担当教員表

クラス→	年長/2クラス		年中/2クラス			年少/2クラス			満３/1クラス	
	年長A	年長B	年中A	年中B	年中アシスト	年少A	年少B	年少アシスト	うさぎ	うさぎアシスト
21(水) 年長組芋掘り	年長B担任	うさぎ担任	年中B担任	教務主任	アシストA	年少Ｂ担任	年少Ａ担任	年中Ａ担任	うさぎ副担 年長A担任	アシストB アシストC
22(木) 年中組芋掘り	うさぎ副担	年長A担任	副主任Ａ	年少Ｂ担任	アシストB	年中B担任	年長B担任	アシストC アシストD	 年少Ａ担任	年中Ａ担任 アシストA
23 (金)	副主任Ｂ	アシストA	アシストF	うさぎ担任	年中B担任	教務主任	年長A担任	うさぎ副担 年少Ｂ担任	副主任Ａ 年中Ａ担任	年長B担任 アシストC
26(月) 年中長焼き芋	年少Ａ担任	アシストB	アシストC	年中Ａ担任	年長A担任	年長B担任	副主任Ａ	アシストD アシストE	うさぎ担任 年中B担任	年少Ｂ担任 アシストA
27 (火)	教務主任	年中Ａ担任	アシストB	年少Ａ担任	年長B担任	副主任Ｂ	うさぎ担任	年中B担任 アシストD	うさぎ副担 年少Ｂ担任	年長A担任 アシストA
28(水) 年少満3焼き芋	年中B担任	年少Ｂ担任	アシストA	年長B担任	アシストB	年中Ａ担任	アシストF	年長A担任	うさぎ担任 うさぎ副担	年少Ａ担任 アシストC
29(木) ＴＣ終了	年長A担任	年長B担任	年中Ａ担任	年中B担任	アシストB	年少Ａ担任	年少Ｂ担任	アシストA	うさぎ担任 うさぎ副担	アシストB アシストC

《クラスブログを紹介》

○プリントで配布していた「クラス便り」をキッズリー（https://kidsly.jp/index.html）というソフトを利用してクラス内ブログとして、子どもたちの園生活の様子を発信しています。
ティーチャーチェンジの期間は、担当した保育教諭が代筆でその日の様子を書いて投稿します。くだけた表現で親しみやすくお知らせします。
マガジンを読んで下さっている皆さんにも、ティーチャーチェンジの雰囲気をお伝えできたらと思います。
※日誌も担当した保育教諭が、担任のアカウントに代筆という形でその日の記録を行います。
日誌はシステムnanotyを利用。（http://www.nanotybp.jp/）

【TC初日の年少クラス】
※マガジン掲載にあたり一部修正してあります。

▷2020.10.21🏃‍♀️💗ティーチャーチェンジ！ こんにちは☺️💗 今日からティーチャーチェンジが始まりました😆💗 初日は、私！○○組の○○が担当させて頂きました🍏❤️ いつもお隣りにいて一緒に歌を歌ったり、一緒に遊んだりはしていましたが 今日のようにがっつりいちご組さんと 一緒に遊ぶことがなかったので今日はみんなといーっぱい遊べて楽しかったです😆💗 朝は○○組だけの園庭貸切でいっぱい遊んだあとは、運動会でやった『かけっこ』のように 大きなお返事をして「よーいどん！」でお部屋にダーッシュ💦💦 お部屋では歌を歌ったり 初めての楽器を使って遊んじゃいました☺️❤️ 楽しかったね💗 また素敵な楽器を使って遊んじゃおうね☺️
ご飯の時間までは、磁石🧲でくっつく ブロックで遊んだり、玉とカゴを出して 年中さんが運動会でやっていた『玉入れ』の ようなゲームも出してみました☺️💗 初めてやったはずなのに、みんな すごーく上手でしたが•••なかなか入らなかった お友だちにはちょっとしたコツを教えると すぐにいーっぱい玉を入れることが 出来ました🙌❤️ 来年度が楽しみですね💗 今日はいーっぱい○○組のお友だちと 遊べて楽しかったです☺️❤️ また一緒に遊ぼうね💗 明日は、△△先生が○○組さんに 入ってくれます☺️❤️ 明日も素敵な1日になりますよーに🌟
今日、残念ながら○○ちゃんと △△ちゃんがお休みでした😢💦 また一緒にいーっぱい遊ぼうね☺️❤️❤️ 早く元気になってね💗



🗣️今日のエピソード🗣️ みんなで砂場にいる時 ロロくんが何やら発見！？👀 砂場のところから根っこ！？ みんなで気になって掘ってみました！「ちょっと待って！」と砂場にあるおもちゃの スコップを自分たちで選んで掘りました！ みんなよく分かっていて、大きなスコップでは なく小さなスコップを選んで掘るという☺️🙏 流石すぎます！（笑笑） 結局何もで出来ませんでしたが、まさか砂場のところから根っこが出ているとは 大人でも気づきませんでした（笑） どれだけ掘ったことやら。笑笑

【TC初日の年長クラス】
※マガジン掲載にあたり一部修正してあります。

◇2020-10-21 ティーチャーチェンジ１日目⭐
ティーチャーチェンジ１日目の今日は○○ぐみ担任○○がほしぐみにお邪魔させて頂きました😊💞 今日はみんなで芋掘りへレッツゴー🍠✨ 「でっかいいもを掘るぞ～！」 と行きのバスから気合は十分💪 その宣言通り、おおきなおおきなおいもを掘ることができました😆💞 固くてなかなか掘り出せなくて苦戦する時もありましたが、たーっくさん収穫ができました🎶小さいおいもや、おもしろい形のおいもなどなど、おいもを掘れると「見てみて～っ」と見せてくれるみんな🙌 お家でおいしく食べてくださいねっ👀✨ 元気いっぱいなほしぐみさんと過ごせてとっても楽しかったです❣ ありがとうございました✨
明日のほしぐみさんは△△先生です🌙 ○○🐰



【TC終了翌日の年少クラス】
※マガジン掲載にあたり一部修正してあります。



2020.10.29🍓ただいまー！＆ジャクパ🍓６日間の楽しいティーチャーチェンジが終了し、名残惜しさを感じながらも○○組に戻れる日を今か今かと待っておりました一(T^T)♪ ⁎*°ついに！！
『ただいまー』🍓「おかえり～ 」を言えました一!!!\(ᵕ)/♪*°
私自身、子離れできないんだろうなと痛感。こんなに離れると寂しいなんて！！ ママ達って本当にすごいです！そして、さらに感謝です(TT)ありがとうございます!!! 毎日入ってくれた先生に○○ぐみの様子を聞いて安心。私が思う以上にママ達も気になるんだろうなと改めて実感。今後も少しでも園の様子がわかるようにお話していけたらいいなと思っています。よろしくお願いします^^御協力ありがとうございました。
ジャクパは、サーキット！エイジ先生さかなクンに変身しながら楽しい時間を過ごしました。ジャンプ、くぐる、のぼる、わたる等の体をいっぱい使ったジャクパはすごく疲れたようです。給食も沢山食べて午後はゆっくり遊びました\(ᵕ)/ お手伝いマンが増えた！ お片付けが早くなった！ 優しさが増えた！ 今日だけでこんなに成長が見られて嬉しいです^^ 明日はどんな姿を見せてくれるのか楽しみっ♪♪







【TC終了翌日の年長クラス】
※マガジン掲載にあたり一部修正してあります。

2020＊10＊29 ② サプライズ⁉プレゼント🎁
いっぱいお外で遊んでお部屋に帰る際、みんなから"まだお部屋に来ないで！！"と いきなり拒絶され👀笑　10分くらい外で待ちぼうけをくらって やっとお部屋に入れてくれたと思ったら みんなからのサプライズプレゼントがっ🥺💕 ティーチャーチェンジ中に ○先生と作ってくれたようで みんなでサプライズを仕掛けてくれました一っ🙌うれしすぎる、、、っ😳💕 プレゼントももちろん嬉しかったのですが、みんなでどうやって渡すかを 一生懸命相談してくれたのを想像しただけで みんなの気持ちがとっても嬉しかったです❤️ 実は昨日くらいから ちょこちょこ小耳に挟んではいましたが、、(笑) 今日なんて、朝から"お部屋行ったらなんかあげるね！"と もはや告知までしてくれてましたが😂(笑) そんな隠しきれないところも可愛いっ🥰 しっかり告知を受けていたので、お部屋にこっそりカメラを仕込んじゃいました(笑) みんなが慌てふためいて準備をしてる姿、こそこそ相談している姿、プレゼントを隠そうと みんなで丸くなり頭で隠そうとする姿💕 終始ニヤニヤが止まらない時間でした💐
みんなありがとーっ🥺❤️



【TC初日／満３歳クラスの日誌から抜粋】

TCということにはあまりピンときていない様子だったが何人かのお友達は名前と顔を覚えてくれたようだった。天気が良かったので駅前公園までお散歩にいき、シャボン玉を楽しんだ。ふーっと吹くのも最初は息が強く難しそうにしていたが回数を重ねていくと力加減が上手になったり息を調整して挑戦している様子が見られた。今日は1人1個おやつを持って歩いたため、おやつにつられてやる気が出たのか道の歩き方も上手だったようだ。なるみ先生がいないことにお昼くらいに気が付き気にしている様子はあったが不安になったり泣き出したりすることはなかった。



◆最後に、私が10月号の園便りに書いたコラムを紹介します。

ティーチャーチェンジ、その意味

運動会明けに１日おいてのティーチャーチェンジ！すごいスケジュールだなー(^_^;)と思っているのは僕だけで、先生たちは計画通りサッと運動会の道具を片付け次の展開へとコマを進めていた。

○るちゃんコーナーに書いた「とびばこがなーい！」の声もそんな状況で発せられたものだったのだ。最初は小さいチェンジから６日間かけて徐々にいろんな先生に入れ替わっていく。

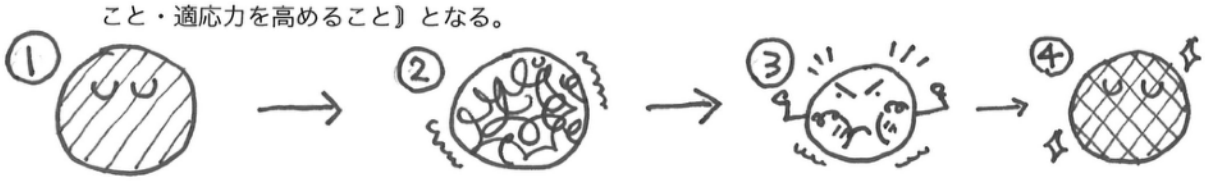
ティーチャーチェンジの報告ミーティングを行ったときによく聞かれたのが、「明日先生来るんでしょ！」「楽しみに待ってるよ！」「なにするの？」という子どもたちからの言葉をどの保育者も聞いていることで、年中長の子どもたちは誰がやってきても楽しみにしてくれていることが、ふだんからの保育者と子どもの関係を表していて嬉しいし、この活動をスムーズにしてくれていると思う。

年少組の子どもたちは、初めてで意味がよく分かっていないこともあって、最初はぽかーんとしていたり、不安を訴える子どもがいたり、落ち着かない様子も見せていたが、日程が進むうちに慣れてきていた。お家で「明日は○○先生だよ」というサポートをして頂いたことも、とても良い効果となっている。

子どもが発達するときって、

①安定した状態→②刺激が加わり不安定な状態→③安定させるためにアクティブな状態になる→④再び安定したときに前より一段発達する、というプロセスを経ていく。

なので不安定になることも次の段階へ進むステップだと考えるのがセオリーだ。いつもの慣れている先生が違う先生に代わるだけで、子どもたちには大きな刺激となって発達を促す。ここでねらっている発達は主に《信頼できる大人を増やして人間関係の幅を広げること・適応力を高めること》となる。

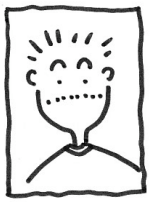


２学期、運動会あとというタイミングも絶妙だ。子どもたちはクラスの日々のルーティンがわかってるし、運動会でクラスの集団力が高まったときに、自分たちのクラスのことをよく知らない先生（知ってても知らないふりをするのがお約束）がポッと自分のホームにやってくる。「教えてやらなきゃ！」という気持ちがムクムクとわいてきて、甲斐甲斐しくホームルームのやり方を教えてくれたり、よそいきの顔になって普段は見せないピシッとした姿を見せて「すごいねー！かっこいいねー！」というお褒めの言葉を頂戴するのも子どもたちの自立心をくすぐってくれる。

そんな交流の中で、１日の終わりには保育者間で子どもの姿のエピソードが飛び交うのだ。子どもの意外な一面を発見したり、多くの情報交換（たとえば○ちゃんの苦手な給食はどうやって食べさせるかという具体的な情報から、○ちゃんは思ったよりひょうきん者だね、など子どもの様子の把握など）が行われ、共通認識を得たり一緒に喜んだり考えたりする機会が増える。先輩保育者から後輩への技術の伝達も同時に行われたり、自分のクラス運営を見直す機会にもなるので、保育者のスキルアップという面でも非常に有意義な活動となっている。さらにアシストと担任が入れ替わることで、お互いに違う立場から保育を見直すこともできるし、ふだんの役割は違うけれども保育のポテンシャルは同等に持っている（言い換えれば誰もが担任ができる）ということも肌で感じられて、お互いにリスペクトし合いながら仕事を進められるというメリットもある。

「全園児を分け隔て無く全職員で見る」というモットーは、単なるスローガンではなく、実際にこの様な活動などを積み重ねて実現していくのだ。　　園長　鶴谷主一





原町幼稚園　園長　鶴谷主一（60）
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder
Instagram：haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら
気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）

― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―

福祉系

対人援助職養成の

現場から㊸

西川　友理

施設実習が、怖い！

もうすぐ社会的養護関係の児童福祉施設（児童養護施設や乳児院）に実習に行く学生達を対象に、事前学習として、授業で児童養護施設のドキュメンタリー番組のビデオを見た後の事です。

「先生、わたし、実習怖くなってしまいました」という学生。

「怖いって？」

「あんなふうな、立派な先生になれるか、と思うと‥‥。あんなに素のままでぶつかってくる子どもと、上手に対応できるかと思うと‥‥」

「いやいやいや、別に、実習の時から立派な先生になってたり、上手に対応出来たりするんやったら、実習なんかいらんでしょ。」

「確かにそうなんですけど…なんか、色々と怖いです…」

「じゃあ次の授業では、何が怖いのか、考える時間にしましょう。それはそれとして、実習では、出来なくって当たり前だからね。沢山経験して沢山失敗していいから、多くを吸収してきて下さい

ね！」

保育士養成校での、児童福祉施設での実習の事前学習として、その授業内容には少し工夫が必要です。とにかく、現場の実態をどこまで伝えるのか、そのさじ加減が難しいのです。

法律や制度を覚え、理解する事など、システムに関する学びだけだと社会的養護の実態が見えてきません。もちろん、法律、制度、システムなどは実習に行く前にぜひとも理解しておいてほしいところであり、施設は確かにそれらのシステムの上に成り立っている者ではあるのですが、実際の実習は、子ども達や職員の方々とのコミュニケーションの中で展開されます。ですから、子ども達や職員の方はどんな方がいらっしゃるのかという事を理解していかないといけません。

かといって、入所している子どもの状況について理解を深めてもらおうと入所児の体験談を読んだり、施設の子ども達のドキュメンタリー番組を見せたり、といったことにウェイトを置くと、感情を揺さぶられることが多く、そのような授業は前後の指導を上手にしないと、単純にふりまわされるだけの時間になってしまうこともあります。なるべく現場の実態に近いものを、と考えて見せた番組の内容のリアルさに、圧倒されることもあります。絶対必要な学びではあるのですが、この部分のさじ加減がいつも難しいと感じています。

そして毎年、かなりの学生が「怖い」と訴えます。この「怖さ」の理由は「生々しい感情が発露されるかもしれない場所に行くのが怖い」「自分自身が中高生の時にいじめられたことがあるから、中高生とうまく関われないと思う」「普段中高生と話をしないから、何を話したらいいかわからない」「自分の色んなものを試されている気分になる」など様々です。さらには「何が怖いかわからないけど怖い」という漠然とした不安も出てきます。

確かに保育園や幼稚園は学生の多くが利用者として体験してきた経験がある一方、児童養護施設や乳児院を入所児として経験してきた学生は本当にわずかです。また、特に短期大学の学生の場合、ほんの１年前まで高校生だった、というような状態で、中高生も生活している児童養護施設に実習に行く学生などは、どういう立場でそこに居ればわからないというのが正直な本音のようです。他者とのコミュニケーションに自信がない学生などはなおさら頭を抱えます。

「保育実習Ⅰ（施設）」という実習科目

保育者を志望して養成校に入学する学生は、その大半が保育所や幼稚園の先生になりたいと考え、実習も当然そのようなところで行うと考えています。しかし、保育士になるための実習には必ず「保育実習Ⅰ（施設）」が課せられています。これは保育所以外の、保育士に関わる福祉施設における実習プログラムであり、養成校によっては、保育士養成

課程に課せられているいくつかの実習のうち、学生が初めて経験する実習に設定されていることも少なくありません。法的には「乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、障害児入所支援施設、児童発達支援センター（児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る）、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る）、情緒障害児短期治療施設（西川注：現在の児童心理治療施設）、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」が実習先として許可されています。

私は、この「保育実習Ⅰ（施設）」の実習で児童養護施設や乳児院に行く養成校しか勤務したことがないのですが、成人の障害者施設などを主な実習先としている養成校では、抵抗を示す学生がかなりいるとのことです。「成人の障害者の人なんて、今まで接したことがない」「どう接したらいいかわからない」「そんなところで実習するなんて、全然想定していなかった」と、やはり学生から不安を訴える声が出てくるし、時には保護者からも連絡が来ることもある、と、当該養成校の先生からお話を伺うこともあるほどです。

障害者支援施設および指定障害福祉サービス事業所で働くための資格として生活支援員というのがありますが、これになるために特に保育士資格が必要というわけではなく、またその他の資格も特に必要とされてはいません。しかし、保育士の実習対象施設に入っている以上、成人の障がい者についての学びをきちんと設定しないといけないと思うのですが、現在の保育士養成のカリキュラムにはそれはほとんど入っていません。障害福祉サービス事業所には確かに15歳や17歳といった児童福祉法上「子ども」の定義に入る利用者の方もいらっしゃいますが、それにしてももう少し成人の障がい者に対する勉強も必要ではないかと思います。いや、そもそも生活支援員の要件自体に資格が不要、つまり何の専門性もなく支援ができる仕事だとみなされていることについて、個人的には不満がありますが、これについては一度腰を据えて調べてみたいと思っています。

いずれにせよ、それだけ保育者の働く現場は多種多様であり、またさまざまな場所で活躍できる仕事である事を知り、それらに共通する保育の理念や保育士の職業倫理は何か、という事に気づく大切な実習が「保育実習Ⅰ（施設）」であると考えています。

とはいえ、ほとんどの学生はそれまでの人生で一度も触れたことのない場所に行くのですから、未知の場所に飛び込むことが「怖い」と感じるのは当然の反応であるともいえます。

この際、怖いという感情を持つ事はもう仕方がない、と割り切って、しかし少しでもその恐怖が和らぐように、事前学習のあり方を工夫します。

たとえば私は、以下のような工夫をしています。

数値的なデータに出来るだけ触れる

昨年出版されたハンス・ロスリング著『FACTFULLNESS』という本があります。この本は、2020 年度上半期、様々なビジネス書ランキングの第 1 位をとりました。ざっとまとめると「私たちの思い込みの強さは大変強く、その思い込みが世界をありのままに見ることを邪魔している。事実を正しく見て、正しく恐れ、正しく希望を持とう」という内容です。これはまさに、私が大切にしたいと思っている事前学習のポイントです。

福祉や保育や対人援助の現場は思わず熱くなったり涙が出たり怒りがわいたり優しい気持ちになったりと心が忙しくなりがちな「エモい」エピソードが多く、またそれに突き動かされてこのような仕事に就きたいと思う学生は多くいます。また、世の中にあふれる福祉の対象について書かれた文章、記事、テレビ番組などの多くは、感情に訴えかけるものが多いのです（その方が視聴者や読者に受けるものになるのでしょう）。

ただ、いかんせん感情というのはなかなか取り扱いが厄介で、ロスリングの言葉を借りれば「正しく見ること」ができなくなってしまいがちです。気持ちで走り始めた行動は、気持ちが覚めると止まってしまいます。事実よりも「自分の心にひっかかった、自分が信じたいもの」だけを見る目になってしまう恐れがあります。

こんな時、数値的なデータを客観的な視点から見ることは大変有効です。そのデータ自体を、どこでだれがどんな手法でどういう意図で集計したものなのか、といったことも含めて皆で眺めてみます。「虐待の 4 類型のうち一番多いのは何か」「虐待死亡事例のうち、生後 0 か月で死亡するケースの割合」「保育所待機児童の数、行政と民間団体の統計の差」「施設利用につながった理由のランキング」等、様々なデータを講義などで提示し、一緒にその意味や背景を考えます。

数値自体は、ただのデータであり、温度はありません。この客観的事実に対して、どう考えるのか、一人一人の考えを出してもらいます。講義後のミニッツペーパー（感想や質問を自由に書いて自由に提出できるシート）にそれらを書いてもらう事が多いです。私は講義内容にもよりますが、ほとんどの場合、提出してもしなくてもどちらでも構わない、と伝えています。しかし、フィードバックを密にしていくと、提出されるミニッツペーパーには面白い意見や感想が増えて行くように感じています。

皆で皆の意見を一緒に味わい、考える

受講後のミニッツペーパーのフィードバックを、全体に向けて、密に実施します。もちろん学生には、匿名で全員に公開する可能性がある事は事前に説明済みで、公開してほしくないフィードバックが欲しい場合はその旨を書き添えるように指導しています。

フィードバックは出来るだけ賛否両論、様々に多様な意見を取り上げます。

これにより、学生それぞれが自分の思い込みの沼にずぶずぶはまるのではなく、皆で一緒に、様々な視点から、多角的・多面的に物事を考えることができるきっかけにしてほしいと考えています。

以前、「実習が怖い怖いと思うけど、いったい何が怖いのか」ということについて、皆でこの形式を用いて意見交換をしたことがあります。皆ですり合わせていくうちに、単に怖がるのではなく「怖さの正体」が皆で把握できていき、「怖い、だから、どうするか」という議論になって言ったのが印象的でした。

現場そのものに触れる

しかし何といっても、実習の事前学習として一番良い教材は、ダントツで「現場そのものに触れること」です。「百聞は一見に如かず」で、現前とした第一次的な情報に触れるわけですから、これに勝る者はありません。子どもと直接触れ合い子どもとのコミュニケーションに慣れる事や、現場を見学させていただき、実際に空気を感じる事が、本当に何よりも勉強になります。

社会的養護の授業で、「最近の児童養護施設の設備はもう本当に一般家庭みたいな形が増えているよ」と言い、どんなに現場の写真を見せ、どんなによくできたドキュメンタリー番組を見せても、現場訪問を終えた学生は皆一様に、

「先生、施設って、本当にお家っぽいんですね！」

と、やっと納得したように言います。

「せやから、最近の施設はほんまにお家っぽいとこやでって何度も言うたがな！」

と思わず突っ込みながら、「頭でわかる」段階から「腹落ちする」段階になったことをこっそり喜びます。

しかし、今年は…。

こんなところにもコロナの影響が出るもので、実は今年度、もうすぐ初めての実習に向かう一年生が経験するはずだった、施設見学や子ども相手のボランティア、子どもを招待してのイベントなどが根こそぎなくなりました。実習事前学習の一番の教材である「現場そのものに触れる」のチャンスが、全くなくなってしまったのです。

私たち教員が「数値的なデータに触れる」「皆で皆の意見を一緒に味わい、考える」という教育をどんなに実施したとしても、どうしても足りない部分があるのです。

そこで今年は各実習先に連絡し、「事前オリエンテーション（実習約一か月前に学生が実習先を訪問し、実習内容について打ち合わせる会）の際に、園内・施設内を見学する機会を持ってもらえないか」とお願いすることにしました。お仕事お忙しい中、大変心苦しくはあるのですが…と、各施設におずおず連絡します。

すると、大変ありがたいことに、ほとんどすべての実習先がご快諾くださいました。中には、「もともと、事前オリ

エンテーションの際に、施設内を全部見学していただく予定でした！」というところも。

本当にありがたい、うれしい、嬉しい実習先様です。

今年の「実習怖い」はちょっと違う。

今年はコロナの影響もあり、イレギュラーなことも多い中、学生たちは皆、何とか保育実習Ⅰ（施設）に向かおうとしています。いつもの「施設実習が怖い」という思いに加えて、実習中の空き時間の過ごし方に制限がついたり、実習前の体調管理に例年以上の配慮が必要だったりと、緊張の強い実習になりそうです。「怖いなら怖いままでいいから、弱いなら弱いままでいいから、やってみましょう。実習先の方も、養成校教員も、皆応援しているからね。」

とにかくそう伝えて、可能な限りの感染症対策をしっかりして、そしていつものように背中をおして、送り出そうと思います。

引用文献）

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「保育実習実施基準」『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』 平成30年

ああ、相談業務

～沙那さんの話～

3

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

沙那さん家族

筆者が関わり始めたとき、沙那さんは小学校６年生。父親５８歳、母親４０歳、姉 17 歳高校２年生、兄 14 歳中学２年生、弟小学校３年生、妹４歳、弟２歳、父方祖母 72 歳の９人家族。そして猫が数匹。家は 2DK の平屋。貸家である。内風呂は無い。父親はとび職。母親は無職。

相談が始まる

沙那さん（以下本児）に関わることになった最初のきっかけは、本児ではなかった。当時、本児は不登校だったが、それよりも、妹の三歳児健診と弟の一歳半児健診が未受診だったことが問題で、学校からの不登校相談ではなく、保健師さんからの相談が発端だった。

子どもがたくさんいることから、何とか上の子の様子など情報を集めるうちに、不登校傾向などの様子がわかってきた。あの子もこの子もということで、学校から情報を貰うと、特に本児はずっと来ていないという。また上の兄も中学から不登校であるとの情報があった。姉は通信制高校に通っていた。

また、学校からの情報で、本児は学校に来ても一言もしゃべらず、勉強は中の下くらいだとの事であった。但しそれも一年ほど前の話である。

経過

はてさて、どこから手を付けるか？そもそも、３歳児健診と１歳半健診を受けていない下の二人の子についての相談である。先ずはそこからと考えた。今であれば、集団等に入っておらず、生死が長期に渡り確認できていないとすれば、現認という理由で家庭訪問が出来る。しかし、その当時はそのような制度も無かったので、１歳半健診と３歳児健診の発達検査の一部を訪問で実施するとして、保健師から一応母親にお手紙で連絡を入れてもらった。電話はあるはずなのだが料金未納なのか繋がらない状態であった。小さい子がいるので多分母親は家に居るだろう。

その家に行くにあたり、保健師から家のことを聞いた。赤ちゃん訪問の様子から、とにかく汚くてゴミ屋敷と言えるとの事。ここではたと考えた。何を着て行こうか・・・。普段家庭訪問をする時は、相手に失礼の無いように、スカートかパンツにジャケットという服装を選ぶ。しかし汚いと聞くと、そんなにきちんとした格好で行くのもと思い、検査をするのに動きやすいからと考えて、市で支給されているジャージとパーカーを選択した。

当日は、ゴールデンウィーク前の北海道では少し肌寒い時期だが、天気も良くやや暖かい日であった。近くに公用車を止めて歩いて行くと家が近づくに従い、異様なにおいが漂ってきた。つまり家全体が匂っている状態なのである。

「わー、これは大変な家だな。」と心の中で思いつつ、それでも全く意に介さない風を装いながら玄関のベルを押した。こういう家では良くあることだが、ベルが鳴らない。電池が切れているのだろう。玄関の周りは多少草が生えているが、子どもの三輪車が転がっていた。玄関前で声を掛ける。「ごめん下さい。市の相談員の河岸です。」などと声を掛けたところ、何回目かで、「どうぞ」という声が返ってきた。

引き戸を開けるとカギはかかっていなかった。玄関の中に入ろうとしたら、足を入れる隙が無い！まず三和土の半分は、大きな冷凍庫がふさいでいて、その上に、いつ食べたのかわからないが焼きそばがこびりついたホットプレートが置いてある。他にも何やらあれこれ山盛り置いてある。半分残っている三和土は大きさの異なる靴が散乱している。そして、直ぐの所にトイレがあり、ドアは開けっ放しで、匂いも酷いし、汚れてもいるのが見て取れた。

血の気の薄い、細っそりした女性が、２歳くらいの子を抱っこして出迎えてくれた。この人が母親であった。母親に上がっても良いかと許可をもらい、何とか靴を置く場所を作って上がらせてもらう。上がった部屋が台所と居間で、テレビと当時でも珍しかったテレビ電話やゲーム機などが置かれ、畳のその部屋は弁当の殻や、調味料、ゴミなのか何なのかわからないものがそこここに散らばっていた。北海道にはゴキブリがいないと言われているが、その家には小さなチャバネゴキブリが目に付いた。更に目の前にはくぼみあって、そこに石油ストーブが置かれていた。ここでストーブをつけているのかと思うと、火事になる不安も感じられた。

物を除けさせてもらって何とか座る場所を確保し、更に簡単な検査をするための場所も確保して、発達検査を実施した。二人とも身体面は問題ないようだった。やり取りなどで知的にはボーダーかなと思われた。

全部するわけではないのですぐ終わった。子どもの確認ができれば良いのと、この家族と関わるきっかけづくりの意味合いなので、あとは母親と健康状態や子どものことなどあれこれ話す。母親は、余り了解性が高いとは言えなかったが、笑顔で答えてくれた。小学３年生の次

男と長女以外の子どもたちは別の部屋にみんなでいるようだった。幼い二人の子だけが行ったり来たりしていた。祖母は今父親の妹の所に行っていていないとのことであった。

母親の話では、中学生の長男は、ポータブルゲームに熱中している、次女も同様で、心配はしているが言うことをきいてくれる状況でもないとの事。「訪問を繰り返して子どもたちと関係を作っていきたいと思うが・・・。」と伝えると、「来てくれるならどうぞ」と言うことだったので、次の約束を取り付けておいとました。

畳の上に座っていたのだが、脛や足の甲が、徐々に湿ってきた。何だろうと思っていたが、後で見てみたら、ジャージの膝から下と、靴下にシミが出来ていた。畳が傷み腐っていたのだ。だからこそ畳の一部が落ちていて、そこにストーブが鎮座していたのだ。来るときのにおいも、その家に居る間に段々麻痺して、あまり気にならなくなっていた。

それから、月に１－２回程度訪問を繰り返した。汚さやにおいは増していくばかり。夏はそれもまた強烈になる。しかし子ども達も父母も、汚いとか匂いがあるということにはまったく気づいていない。不衛生だと病気になるのかと思いきや、誰一人として最近病院にかかった経過がない。それはそれで凄いと思った。

訪問の度に、何かしら絵本やら折り紙やら遊ぶものを持って行ったりして、下の子たちと遊びながら、本児や兄と関りを持てる時間を作るようにした。そんな中、兄とは話が出来るようになったし、小学生の弟とも話せるようになってきた。しかし、本児だけはいつまで待っても一言も口をきくことは無かった。それでも一緒に折り紙をしたりすることはできていた。そして、七夕の時期が近付いた。子どもたちに、七夕祭りについて話していると、やったことがないという。だったら今度来るときに七夕飾りを作ろうという話になった。

７月初めに訪問するにあたり、笹竹を探したが、近所の花屋などでは売っていない。北海道は熊笹はあっても、竹や笹竹は生えていない。代わりになるものを作るしかなく、緑の園芸用の棒に色画用紙と針金で笹の葉を作って、笹竹らしきものを作った。沢山の色々な折り紙とハサミやノリを持って訪問した。

七夕飾りと言えば、折り紙で作るチェーンや短冊、網掛けなどがある。子どもたちは全く知らなかったので、一つ一つ教えて一緒に作った。そうした作業の中で、緘黙だった本児と関りが深められるようになった。話すことは無くてもやり取りは頷きや首振りなどでコミュニケーションが取れるようになっていった。

子どもたちと関りながら、母親や父親からも、色々な話が聴けた。家族は月 1 回皆で家族風呂に入りに行くこと、子どもたちはいじめが原因で学校に行かなくなったこと、父親は鳶職で先鋒という極めて危険な仕事をしていること、給料が多い時もあったが最近はかなり少なくなっていて生活が大変で下の子たちを幼稚園に入れたくても入れられない事など、この家族の様々な情報を得ることが出来た。こちらからは、このまま子どもたちが学校に行けないでいることで良いのか、施設に預けることを考えたことはないか、施設を活用すると、下の二人は幼稚園にも行けるだろうし、上の子たちも小さい小学校や中学校に行くので行きやすくなるかもしれないなども伝えた。父親は年齢が高く、危険な仕事で足を折ったり、怪我をしたこともあって、父母の間に子どもたちを育てていく自信が無くなっていたのもあると思うが、徐々に施設活用について気持ちが向いて行った。

こうした関りを続けているうちに、母親が第７子を妊娠し、貧血が酷く、入院が必要となった。さて子どもたちを誰が見るのか。父親は仕

事をしていて、子どもたちを見ることはできない。高校生の長女には学校もあるし、アルバイトもしているので、子どもたち全員の面倒は見られない。祖母はそのころ体調も悪く、父親の妹の所にずっとお世話になっていた。他に親戚など近くにはいないという。そこでこの機会に長女を除く子どもたちを一時保護する話になった。児童相談所にお世話になるにあたり、福祉司が家庭訪問をした。その家の汚さに驚いたのもそうだが、ゴキブリがたくさんいる家から子どもたちを預かるということで、一時保護所は大騒ぎになった。

翌日、公用車に子どもたちを乗せて連れて行こうとしたときに、母親が毛布を一枚持ってきた。「この毛布がないと下の子たちが落ち着かないから」というのである。余計なものを持っていけばそれだけゴキブリやその卵を持っていくことになってしまうが、無下に断れない。トランクに入れて、保護所へと向かった。子どもたちは母親と別れても、泣くでもなく騒ぐでもなく、皆大人しく車に乗っていた。三女の世話は本児が見ていた。当時はチャイルドシートの義務付けもなく、大きい子が小さい子を抱っこして車に乗っていた。保護所につくと、指導員の人たちが子どもたちの服を全部脱がせてお風呂に入れ、服は全て洗濯し、くだんの毛布は外で確認してから洗濯して干したそうだ。

一時保護中に子どもたちの発達検査と医者の診断を受けることも両親に了解を貰って行うことが出来た。その結果、身体面の健康状態は良かったが、精神面では中学生の長男は知的障害、３年生の妹は知的にボーダー、下二人の子もボーダーで本児は知的には問題ないが場面緘黙と診断された。そして、そのまま子どもたちは施設入所となった。子どもたちは、こうして衛生的な施設で、匂いも無い、片付いた部屋での生活を続けて行った。

母親はその後無事に第 7 子を出産。母親と父親には時々会って話を聴いていた。その中で、もう子どもを作るのは母親自身の体の問題もあるからと家族計画の話をしていった。子どもたちは夏冬の長期の休みに帰省をしていた。途中で、別の風呂付の平屋に移ったが、1 か月で風呂場がゴミ置き場に代わっていた。子どもたちが片付けるかと思ったら、そういう様子は見られず、住み慣れた家の匂いに落ち着き、くつろいでいた。

その後数年にわたり、子どもたちの様子を聴かせてもらっていた。長女はそのまま家に残り、学校卒業後、しばらく働いたのち結婚して出て行った。長男はその後高等養護学校に進学、本児は普通学級の中学校に進学して、元気に過ごした。口数は少ないものの、小さな中学校で少しずつ話せるようになって勉強も本児が一番知的に高かったこともあり、問題なく、自信をつけていったそうだ。次男は小学校にきちんと通い、三女は幼稚園に入園、三男もその後幼稚園に入園して元気に過ごしていった。お正月や夏休みの帰省の際には、両親と楽しい時間を過ごしているとのことだった。両親は子どもたちを幼稚園に通わせてもらったことや、学校で適応的に過ごせたことにとても感謝していた。

まとめ

このケースでは父母の能力の問題と、経済的にも大変な状況だったこともあって、話はスムースに進めることが出来た。しかし、このケースで学んだことは、不衛生な家で育っても、施設等で衛生的な環境にいれば、衛生的な生活が良いと思うだろうという想定が覆されたことだ。このケースの子どもたちは、匂いや知的な問題から学校でいじめられたこともあり、不登校になって行った。父母は能力的には低くても、

子どもたちを可愛がっていて、衛生面を維持することは出来なくても、親子関係は良く、優しい、穏やかな子どもたちに育っていた。それはそれでよかったと思うのだが、衛生面に気をつけられる子にはならなかったのである。

不衛生な家で育っている子は全般的に病気に強い。鼻は垂らしても大きな病気にならないのである。不衛生だから雑菌に強いのかもしれない。大きな冷凍庫には夏の間に採りためた山菜の塩漬けが沢山入っていた。父親はこうした形で家族の食料を補填していた。世の中が衛生的になり、子どもたちは清潔な衣服をまとい、毎日風呂に入るようになった。その結果、月に 1 回しか風呂に入っていないこのようなケースの子どもたちは、匂いがきついと言われ、先生方からも保護者が注意を受ける。母親が洗濯をしたとしても、部屋そのものに匂いがある以上、衣服に匂いは染みつく。前回の話でも時代の話をしたが、このケースも時代を感じるケースであった。戦中や戦後のまだ豊かになる前の日本であれば、このケースが問題となることは無かっただろう。

最近でも、小学校や中学校で時折においがきつい子や衣服が薄汚れている子がいて、先生から相談されることがある。子どもたちが嫌がるし、いじめの原因になるからと。確かにそうだろう。しかし、そういう子を受け入れられる土壌を学校にも作らないといけないのではと思う。自分たちの持っている枠組み、考え方が正しいと思ってしまえば、他の生き方考え方を受け入れることは難しくなる。もっと大きな枠組みで、他の人を受け入れられるようになることが必要であろう。

小さい時から慣れ親しんだ生活は、それが良いか悪いかではなく、それ以外の生活には中々馴染めない。我々支援者はもっと良い生活に子どもたちを入れてあげたいと思う。その方が子どもたちも幸せなはずと。しかし本ケースの様に、それが必ずしも幸せではないこともある。教育を受けられ、将来的にプラスになるような生活を出来たことは良かったと思うが、そういう支援者の思いと子どもたちの思いのずれをしっかり考慮しないといけない。何が良くて何が悪いのか、その子の立場、目、気持ちで考えられる支援者でありたいと思ったケースであった。

対人援助学マガジン第 43 号

生殖・医療・家族・援助

～性を選んで生きる人々～

荒木晃子

もし、戸籍の性が間違っていたら？

当然のことながら、出産直後の子どもには、自分のセクシュアリティの自認はなく、決めることもできない。性別の決定は、医師、助産師等の医療者の判定にゆだねられ、親は医療者が判別した子どもの性別を戸籍に登録することになる。戸籍上の性別は、生まれた時の生殖器の形状で医療者により決定されることは前回述べたとおりである。一般に、親は戸籍に掲載する性別を踏まえ、子どもの名を付け、その子にふさわしい（と感じる）衣服やおもちゃを与えるかもしれない。一例として、生まれてくる新生児のために産科施設で用意する肌着（おくるみ）は、男の子にはブルー、女の子にはピンクとの慣例がある。生まれたての新生児は、医療現場ですでに生殖器により性別が判別され、戸籍に登録される前から性別だけは決められていることになる。与えられた性には、その児の意思は反映されていない。

その後、子どもの成長の初期段階でもある性自認のない乳幼児期には、子どもの養育者の指向や判断により戸籍の性別に見合う環境下で養育されることが日常となり、その生活環境の中で子どもは発達・成長する。

性自認の方向性を決める養育

子どもが一定の年齢になり、保育園、幼稚園に入園する頃になると、保育士、保母など家族以外の養育者とのかかわりが生じる。公園デビューとも呼ばれる、乳幼児に他者と触れ合う経験とは異なり、保育園や幼稚園では他者との協調性や社会性が求められ、性別により異なる規範が示されることが多い。養育時には、トイレ、更衣室、身の回りの持ち物、集合・整列時など、男の子・女の子それぞれに別々のルールが設けられることもあるだろう。ある保育士によると、通園する幼児の中で、自分が男の子なのか女の子なのか区別できない児には、「オチンチンがついている子は“男の子”、無い子は“女の子”」と説明するという。「わからない子は、自分のパンツの中を確かめて、“ある”子は男の子、無い子は女の子の列に並ぶ」そうだ。おそらく「性自認がない」とはそういうことなのだろう。子どもの養育現場では、性自認を持たない（あえて未発達とは表現しない）幼児期から、戸籍上の性別を意識する養育・指導がすでに始まっているのである。

あるトランス男性は、幼いころ通園していた保育園や自宅近くの公園で“自分の性に関する不思議な経験”をしたという。

「オチンチンが付いている子は男の子。無い子は女の子といわれ、自分にはまだオチンチンが生えてない、いつか生えてくるのだと思っていた。家に帰り母に『ぼくのオチンチンはいつ生えてくるの？』と聞いても、ただ母は笑っているだけ。だから、いつか自分にも生え

てくるのだと信じていた。自分は、幼稚園に入る前、3 歳になったころから赤やピンク色の服やスカートを身に着けることに違和感があった。おもちゃも女の子が好むものではなく、男の子のおもちゃを欲しがったそうだ。公園では、男の子と一緒に遊びたかったのに、いつも女の子の集団に連れていかれるのが嫌でたまらなかった」

この体験を語ったトランス男性は、成人年齢に達するまで戸籍上の性別で生活し、社会人になり収入を得て、「戸籍の性を変える手術」に必要なお金を貯め、性別変更手術を受けたという。戸籍の性別を女性から男性に変更し、心（性自認）も体（戸籍）も男性となった今は、「やっと自分らしく生きていける。好きな女性と結婚し法的に婚姻関係を結ぶことができる。法律上の夫婦になり家庭を持つのが夢だった。子どものことは、これから彼女と話し合って決めたい」と語った。

そのトランス男性は、確かな性自認のない幼児期から自分の性別に違和を感じ始めていた。その違和は、その後の成長と共に核心に変わったという。戸籍の性別変更まで、間違って“与えられた性別”で生きることを余儀なくされ、その間に味わった彼の心情は察するに余りある。

戸籍の性を強化する教育

小・中学校、高校・大学等の入学時、教育施設へ提出する書類には、戸籍の性別が記載されることが通常である。家族以外に、養育者・教育者による子どもの育ちへのかかわりが生じる教育現場では、入学書類に記載された性別で名簿を作成し、在校生・在学生の処遇を決め、教育機関毎に定められた規範に沿った対応を心がける。中でも、小学校高学年以降、子どもの性の発達・成長は著しい。男子は男性のからだの特徴、女子は女性のからだの特徴が顕著に可視化され、自身のからだの変化に少なからず戸惑いを覚える経験は誰にでもあるだろう。なかには、それまで違和を感じることのなかった性自認（自認していた性）の特徴へ大きく変化を遂げる自身の体に、初めて違和感を持つ少数の青少年が存在することを忘れてはならない。性自認に違和を覚える時期は、年少期から老年期までひとそれぞれである。恋愛経験や婚姻を経ても経なくても、戸籍の性別とは異なる「自認する性」を確信する時期は個別であるという。ひとくちに「多様な性」といっても、人それぞれに個性があるように、100 人のセクシュアルマイノリティ当事者には、100 通りの多様な性とその選択肢があるのかもしれない。

性が可視化されるとき

家族以外に他者との接点を持ち、同世代の人間関係が広がるこの時期には、性的な関心が他者に向かう（性的指向）の自覚が芽生える時期でもある。一般に、人間の発達段階として「性的な関心が異性に向かう」ことを恋愛感情と称し、青年期の心と体の発達・成長の特徴でもある。

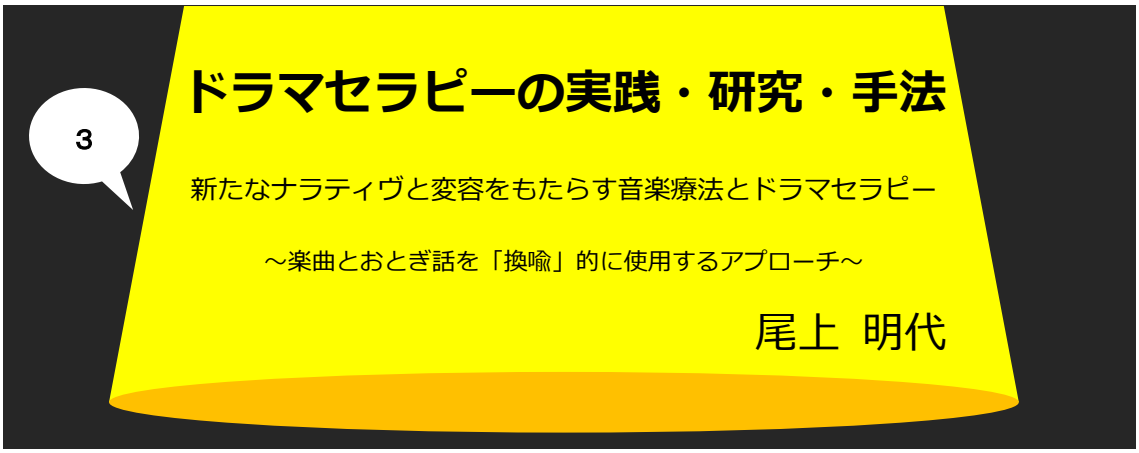
性的な関心が同性に向かう、同性にしか興味を持てない当事者は、自認する性に揺らぎを覚え、「同性に性的関心を持つ自分は普通ではない」と感じることもあるという。自身の性（的指向）が可視化され、「恋愛の対象は異性である（はず）」との既成概念に、感情がそぐわないことに戸惑いを覚えるためなのかもしれない。自身の性に揺らぎを覚えると同時に、性的指向が同性に向くといった

自覚は、自分の内なる性の可視化への恐れをも誘発することにつながる可能性がある。

このように、同世代の他者と一定期間継続的なかかわりを持ち、教育機関というコミュニティで共に過ごす青年期は、性自認に違和を覚えるトランスジェンダーとはまた異なる、ゲイやレズビアンといった「同性愛者」の自覚が生じる時期でもある。同性愛の自覚が芽生える時期は、「初恋の相手が同性だった」、「親友だと思っていたが、今から思えば恋愛対象だった」と様々で、男女共学校であったか否かの関連はないと考える。

教育現場で習得する性役割のほかにも、社会人になって以降に社会から求められる性役割、また、生殖年齢になると親・義家族・パートナーから求められる性役割と、次々課題として山積する性役割には、セクシュアルマイノリティでなくてもその重責に押しつぶされそうになる若者たちは多く存在する。

次号では、成人し生殖年齢を迎えたセクシュアルマイノリティ当事者の声を届けたい。



心理療法では、セラピストとクライエントとの間に「第三項」を媒介させてプロセスを進める。一般のカウンセリングにおいては、ことばによる対話やその話題など、そして芸術療法やクリエイティブアーツセラピーにおいては、言うまでもなく、音楽、ドラマ、絵などのアートである。

「大切な音楽」の語り

今回は、まず少年刑務所で少年受刑者に対する矯正教育の一環として、「大切な音楽」についての語りを導入している松本佳久子さん(2015)の音楽療法を紹介するところから始めたい。

松本さんの介入方法は、少年たち一人ひとりに、自分にとって「大切な音楽」をあげてもらい、それらをグループで聴いたり歌ったりし、その楽曲にまつわる思い出などを語り合うという内容だ。彼女は、ジェローム S.ブルーナーがナラティヴについて「法的ナラティヴ」（過去についての固定化された語り）と「文学的ナラティヴ」（「可能なるもの、象徴的なものを見ようとする」、現実に束縛されない語り）の 2 つがあると述べていることを紹介している。この二つの対比は、とてもわかりやすく、また少年たちに働きかける方向を定めるときの良い指針になると考える。

「法的ナラティヴ」から「文学的ナラティヴ」への移行（あるいは「法的ナラティヴ」の再構成）の媒介物として、「大切な音楽」が使われているのは素晴らしい。事例に出て来る少年マサシは、初めの何回かのセッションでは、何も

語ることができなった。彼が発表できるまでには、時間が必要だったのだと思う。しかし、他の少年たちの語りを聴き、歌うプロセスを経た後、自身の「大切な音楽」を語る段階で、強い感情の表出と豊かな語りが生まれる。私は、「大切な音楽」とともに、マサシは人生を再び生き直していると感じた。

苦しい過去に対峙することは、たやすいことではない。しかし、場に支えられて、硬直して変更できない物語から命が芽生え、新しい物語が創出され始めていることがわかる。ここには、やはり第三項である「大切な音楽」の重大・重要な作用がある。単に、好きな楽曲を発表し語るのではなく、ともに聴き、演奏し、歌うという心身両面での共感とリズムが創るミラーリングも大きな力として働いている。このように、自由、楽しさ、創造力などが発揮できる場では、単に辛い出来事を語るだけでは起き得ないようなことが起きる。

もう一つ重要な点は、グループのリフレクション作用である。セラピストと一対一で実施されるセッションと比べて、同じ立場にある仲間の語りがお互いに反射し合い、光が自身に照らし出され、触発される場となっている。さらに忘れてはならないのは、本人のプロセスをゆっくりと醸成し、見守るセラピストの存在である。

人が、今の状況になんらかの行き詰まりを感じているとき、このような、現実とは異なる仮想空間と時間に移動してものごとを見て感じて描写することがとても大事になる。そこでこそ、それまでなかったもの、（あっても）見えなかったものに遭遇できると言える。

このとき、エネルギーとして大事なものの一つは、spontaneity（自発性、自然発生性）である。これが新しい気づきをもたらすという言い方もできるだろう。この spontaneity が湧き出るような、自由で安心できる関係がグループの中に創られていなければ、良い結果は生まれない。これもセラピストの大切な仕事の一つである。

換喩的置き換え

この音楽の介入方法は、即興演奏ではなく、クライエントが選んだ既存の楽曲を使っていることが特徴である。そこでのナラティヴを、松本さんは「人生における重要な人や出来事を、それらのそばにあった『大切な音楽』に置き換えた語りである」とし、これを「換喩（metonymy）的置き換えである」という。

ドラマセラピーにも、既存の物語を使用する手法がいくつかある。多くの中からクライエントが「これだ！」と選び出した、いわば「大切な物語」もまさ

に「換喩」であり、そのときのその人にとって、その物語でなければならない必然性・切迫性がある。そこから本人が意識できてなかった新たな物語が語られ始め、洞察に繋がり、回復に向かうことが多い。特にクライエントがトラウマティックな体験をしている場合、そのような記憶に近づき適切に扱うことは難しく、それが言葉にできないという性質ゆえに、「換喩」としてはたらく楽曲やおとぎ話を使う介入方法は、優れたアプローチである。クライエントを守りつつも、必要なところに届き、変容のプロセスを起こせる可能性が出てくるからだ。深刻な被害や加害の体験のある、上記の少年受刑者たちにも当然有効であることがよくわかる。

隠れた物語を発見する

次に、Yehudit Silverman（ユフディット・シルバーマン）の神話とおとぎ話を使ったアプローチを紹介したい。この手法の解説や彼女の活動については、以前このマガジンでも取り上げた。興味のある方は、そちらも参考にしていただければと思う。
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol15/18.pdf

Yehudit は、カナダのコンコーディア大学大学院・クリエイティブアーツセラピー研究科で教鞭をとりながら、モントリオールの臨床現場でアート/ダンスムーブメント/ドラマセラピーを実践してきた優れたセラピストである。彼女が開発した「隠れた物語を発見する～神話とおとぎ話を使ったセラピー」は長年の臨床経験から生まれたものであるが、その源泉は、実は子ども時代にさかのぼる。

彼女の子ども時代には 2 つの大きな困難があった。学校でほんの何人かしかいなかったユダヤ人であった Yehudit は、皆とは違う他者として存在すること（仲間外れ）を早い時期から体験することとなる。独りぼっちで校庭にいるとき、他の子どもと同じような外見であればいいのにとか、「魔法の力」が使えたら良いのにと願ったこともあった。想像の世界では「魔法の力」が働いて、歌ったり踊ったり、詩や物語を書いているときは、自分が自由であり、生きていると感じることができた。祖母がおとぎ話を読んでくれて、魔法の世界に連れて行ってくれることもよくあった。つまり、人生の早い時期から、彼女は想像力と創造力を癒しに結び付けていたのだ。自分の感情を自分の外に表現できることに意味や希望を見い出したという。

もう一つの困難は、弟が重い先天性の心疾患をもって生まれたことだ。家族は常に彼の状態を注意深く見守らなければならない状況だった。彼女は「良い人たちに悪いことが起こる」ことを小さいころから学んでしまったという。しかし同時に、与えられた運命にどう応酬するかが重要だということを、弟が示してくれた。彼は他のだれよりもさきに、ツイストダンスを踊り、冗談に笑い声をあげ、まだ珍しかったオープンカーを運転したのだ。彼は 46 才で心臓発作で亡くなるまで、人生を生き切った。

声の出なかった「白雪姫」

では次に、既成の物語が「換喩的」置き換えとして選ばれ、演じられたときに、どのようなプロセスが起きるのかがわかる事例を 2 つ紹介する。

一つ目は、Yehudit がまだセラピストになる前にダンス教師をしていたときのエピソードである。生徒の 1 人で、かすれたような囁き声しか出せない 30 代の女性がいた。彼女はその何年か前に場面緘黙という診断を受けていた。彼女は Yehudit に、一緒に「ワーク」をしてほしいと頼んだ。当時 Yehudit にはセラピーの知識がなく、その意味がよくわからなかったが、「じゃ、無料でやってみましょう」と返事をして、一緒に探索することにしたのだ。子どものころからおとぎ話が大好きだった Yehudit が、心惹かれるお話はないかと聞くと、生徒はすぐに「白雪姫」と答えた。その生徒が選んだのは、毒リンゴを食べて倒れ、深い眠りにつく瞬間の場面だった。白雪姫というキャラクターと、そしてその瞬間に没頭した彼女は、偶然その部屋に置いてあった大きな入れ物を、物語に出てくるガラスの棺に見立てて中に入った。そこに横たわると、「棺」をバンバンと叩き始め、そして、ある時点で突然、完璧に正常な声で「私を出して！」と叫んだのである。Yehudit が衝撃を受けたのは言うまでもない。その生徒は、白雪姫としてもう一度そのセリフを言うように Yehudit に指示されるまで、自分が正常な声を出したことに気づかなかったそうだ。この後から、彼女は少しずつ回復し始め、普通の声を取り戻したという。

この体験後、Yehudit はダンスセラピーとドラマセラピーを学ぶことを決心し、クリエイティブアーツセラピストになったのである。彼女は、「子ども時代に仲間外れを体験して芸術と物語を通して意味を見い出したこと、そして身体的困難をもつ弟がいたことが、このセラピー手法を開発するに至る踏み石になった」と述懐している。

食べることを拒否する「ドロシー」

もう一つの事例は、Yehudit がセラピストになってモントリオールの病院で実践を始めたころのものだ。クライエントは重い拒食症の 16 才の女性で、極度の栄養不良から心臓にも影響が出ていた。初対面のとき、Yehudit は少女が食べずに毛布の下に隠していた食べ物を黙って捨てると、おとぎ話が好きかと聞いて少女を驚かせた。急に笑顔になった少女は、「オズの魔法使い」が大好きだと答える。

それから数か月、2 人はこのお話を一緒に演じた。彼女は一切の食べ物と、すべてのセラピーを拒んでいたが、Yehudit が食べ物や体重についての話題を決して口にしなかったので、このセラピーだけは受け続けた。病院のベッド、という制約はあったものの、少女はお面や衣装などを作り、オズの魔法使いの登場人物たちになった。彼女は自分を主役のドロシーだと認識していて、聖地オズに連れて行ってくれる竜巻（つまり食べないこと。彼女はこの２つを同一視していた。）は「良い」ものだと語った。オズでは、自分は特別な存在と感じられて、自分がきちんとコントロールできる（主導権を握っていられる）のだという。このような秩序が保たれている感覚を保つために、彼女には食べないこと（＝竜巻）が必要なのだ。Yehudit は、「彼女は、オズでは魔法の世界に入ることができて、飢餓という幸福感を体験していたのだ」と説明する。病院スタッフがどれだけ食べさせようと試みても、それは自分に無秩序をもたらす脅威であると少女は捉えていた。身体はどんどんやせ細っていき、心臓がもたずに死に至ることが危惧された。自分がさらされている危険を、少女が「直接の体験」として感じないかぎり、治療への協力は得られないと理解した Yehudit は、彼女の認識に真っ向から挑戦する代わりに物語の中でアプローチし続けた。そして、少女に竜巻役として、（自分である）ドロシーに話しかけてもらうことにした。

ある日、竜巻役になってドロシーに語っていたとき、少女は突然狂ったように笑ったあと、役から降りてブルブル震えながら泣き出した。初めて竜巻（＝拒食症）が悪意ある無秩序であることを体験し理解した瞬間だった。これが回復への始まりとなった。難しい行程ではあったが、この物語を演じながら自身の拒食症と向き合うことができるようになり、その後退院して高校に復学した。

半年後のフォローアップで、少女はこう語った。「私はオズにいると魔法にかかったみたいで、しっかり秩序を保てる感覚がありました。食べるという無秩序や、自分自身が身体の中にいる感覚がある「カンザス」には戻りたくなかっ

たの。拒食症になってないと自分というものを見つけることは難しかった。自分は誰でもなくて、何でもなくて、「カンザス」は本当にうんざりだったわ。でも今はオズの真実を知ったの。竜巻/飢餓は私の友だちではなくて死をもたらすものだっていうことがわかりました。」

Yehudit は「物語は、私たちが行く必要のあるところへ安全に連れて行ってくれる。登場人物を演じるプロセスで、ふだんアクセスできない自分の中の隠された自分と繋がることができる。」と説明する。

意識の深いところに埋もれているものに触れる媒介物としての芸術の力、クライアントの内部にある創造力を信じること、そして安全な場を創りコンテイナーとして見守るセラピストの存在により、ときには言葉にしえなかったことを語るナラティヴが創出され、変容、回復が起きるのである。

アウトリーチによる「第三項」としての「アバター」

話は一旦変わる。

先日オンラインで開催された対人援助学会で、中村正理事長の企画・司会による基調講演を拝聴した。講師の 1 人、安發明子さん（パリ在住のリサーチ・コーディネーター/ライターで、本マガジンでも前号から連載を開始されている。）が、フランスの児童福祉分野の素晴らしい理念や対人援助実践についてのお話をたくさん提供して下さった。

すべて興味深い取り組みであったが、たとえば、国家資格をもつ専門家「路上エデュケーター」や「ネットエデュケーター」が活躍し、さまざまな子どもたちに「届ける福祉」がしっかり張り巡らされているという事実には目を見張った。そのような環境が整っているゆえに、困難な家庭状況にある日本の子どもたちが、適切な相談相手がいないことから SNS を通して見知らぬ人に助けを求めた結果、事件に巻き込まれる現状を聞いたフランスの人たちはとても驚いているということであった。

私が特にインパクトを受けた実例の中から一つを紹介したい。それは、子どもに人気のあるオンラインゲームに、児童保護機関のキャラクターをアバターとして投入したというアイディアである。コロナの休校期間 1 ヶ月で、困難な状況にあった１２００人もの子どもが、そのアバターに相談をし、そのうち３５０人が具体的な支援につながったという。

日本では子どもの「ゲーム依存」がたくさん問題になっていて、とにかくスマホを使わせないようにさせるとか、辞めさせることに躍起になっているのに

対して、この取り組みは、いわば「逆手にとる」かたちになっていると思う。ゲームの中に支援者が入って、多くの子どもを助けたとは、何という創造的な支援活動だろうか！

子どものゲームについては、ちょうど前半で紹介した少年受刑者のマサシの話と繋がる。彼は子どものころ、親からの虐待と学校でのいじめの中で、唯一の親友が勧めてくれたゲームとその主題曲「カルマ」に没頭していたという。「正直、逃げる方法みたいのがわからなかったんですね。そういう嫌なことも忘れられたのでその歌を好きになった感じですね。」と語っている。彼は、この音楽とゲーム、そしてその親友の存在により生き延びていたのだ。このような貴重なナラティヴを聴くと、ゲームに没頭している人を「依存症」などとひとくくりにして、「治療」しようとするのは、子どもたちの置かれている状況を見逃してしまうことにも繋がるのではないだろうか。なぜゲームにはまっていたか、1人 1 人のナラティヴを丁寧に聴くことがいかに重要であるかということを、マサシの語りが、改めて示していると思う。フランスのネットエデュケーターは、「アバター」になってこのマサシのナラティブのようなストーリーを子どもたちから、聴いているというのである。

フランスでは、親学校というのもあるそうだ。子どものスマホやゲームについて心配している親が申し込みをすると、親、子、心理士やエデュケーターたちが 4 週連続で集まって、ゲームについて皆で話すことができる。その中で、子どものゲームが問題だと思っていた親も、たとえば親自身の問題があったことに気づき、親子関係を良くしたら、結果的に子どもがゲームをしなくなった、というようなことが起きるのだと伺った。

つまり、「依存」ということばは当てはまらず、家庭の困難などが「ゲーム依存のような形」で表現されているのだという理解をしている、と安發さんは説明された。

事例が興味深いだけでなく、このような創造的で、かつ家族・コミュニティ全体を対象とする支援や介入方法を思いついて、すぐに実行に移せることは、本当に大切なことだと思う。フランスでは、物理的・精神的・法的にそのような環境が整っているということがあるから可能であるとも言えるが、しかしどこであっても、私たちは、対人援助や日々の暮らしの中で、創造的で全人的な支援を生み出すことができると考える。

私が、ドラマ・セッションの中でプレイフルで創造的になる練習や、即興練習を常にたくさんしてもらう目的の一つが、まさにこのことなのである。

上記のオンラインゲームで、支援者アバターに相談した子どもたちは、きっと深刻な状況にあったこととは思うが、彼らがゲーム（架空の世界）の中に出てきた「支援者」に相談する、そして「支援者」がアバターを演じながら相談

を受ける、その様子が目に浮かぶようで、ドラマセラピストとしては、わくわくせずにはいられなかった。

そこにあるもの、そこで起きていることを否定するのではなく、まず受け入れる、さらにそれを活かして、子どもの最善のために使う！そのためには、支援者の心と身体が目の前の状況に自由で柔軟にひらかれていることが肝要だと思う。

今回は、「第三項」として音楽やドラマを使うクリエイティブアーツセラピー、中でも「換喩」としての楽曲や物語を使用するアプローチについて紹介した。

子どものゲームを使用したフランスの事例では、ゲームにおける物語、またはアバターそのものが「換喩」的に働いているとも言える。セラピーの中での使用ではないが、子どもたちがすでに存在している空間・時間に支援者がアウトリーチし、彼らがすでにハマっている「媒介物」に飛び込んで、そこで支援するという素晴らしい事例であったので併せて紹介した。自ら支援を求めることができない、またその方法を知らない子供たち、そして支援を受けることに動機付けがなされていない人たちを援助しようとするときに、非常に役立つアプローチといえる。

文献・資料

松本佳久子. 非行少年へのグループアプローチ―「大切な音楽」についての語りによる意味生成と変容. 臨床ナラティヴアプローチ. 森岡正芳. ミネルヴァ書房, 2015, pp179−193

Silverman,Y. The Story Within: Myth and Fairy Tale in Therapy. London, Jessica Kingsley, 2020

Author Yehudit Silverman: “5 Things Anyone Can Do To Optimize Their Mental Wellness”, Huffington Post’s *Authority Magazine*（2020 年 10 月 27 日発行）

対人援助学&心理学の縦横無尽（29）

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大（１）2008 年まで

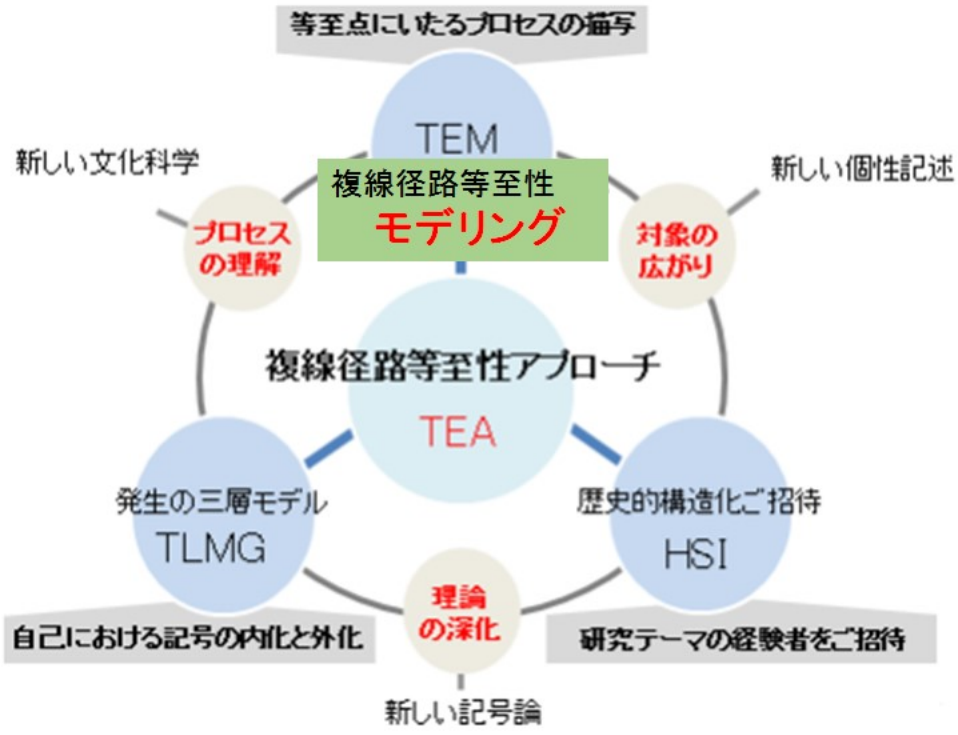
サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・土元哲平

1　Valsiner 教授と日本の心理学

1−1　はじめに

このエッセイでは、ヤーンの愛称で親しまれている Jaan Valsiner 先生(1951 年 6 月 29 日生)の 70 歳の誕生日を祝う準備をする。私たちがヤーンと共に TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発してきた過程やヤーンが日本の質的心理学のコミュニティに貢献してきたことを紹介していく。

TEA は、3 つのサブコンポーネント(Sato, Yasuda, Kanzaki and Valsiner, 2014)、すなわち、Trajectory Equifinality Modeling(TEM)、Historically Structured Inviting(HSI)、Three Layers Model of Genesis(TLMG)から構成される文化心理学における方法論である。



さて第 1 著者であるサトウタツヤがヤーンのことを初めて知ったのは 1997 年であった。当時、第 1 著者は福島大学行政社会学部助教授であり、東京大学文学部（心理学研究室）に心理学史研究のためにサバティカル滞在をしていた。受入教員は高野陽太郎教授であった（佐藤隆夫教授ともその時に出会い、いわゆる腐れ縁が今に至るまで続いている）。そして、同時に教育学部の箕浦康子教授の「ミクロエスノグラフィーの方法論セミナー」に毎週参加していた。そのセミナーでヤーンの名前が出てきて、研究の面白さが印象に残ったのである。

その後、第 1 著者がヤーンに初めて会ったのは 1998 年 8 月 12 日。彼が 47 歳、私が 36 歳の時だった。第 1 著者は心理学史の研究と明治時代の日本人心理学者の足跡を調べるための科研費調査グループの一員（代表・西川泰夫教授）としてクラーク大学を訪れたのである。ヤーンは日本の心理学史研究者たちをもてなす昼食会を開いてくれた。この時はサバティカル滞在していた北海学園大教授小島康次先生（当時）に大変お世話になった。





TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する本格的な学術交流が始まったのは 2004 年である。立命館大学は 2003 年度にヤーンを客員教授として招聘した。なぜ第 1 著者が彼を招聘しようと思ったかというと、彼の発達心理学と心理学史の両方の分野での優れた業績を尊敬していたからである。

1−2　ヤーンの考えを知る

ヤーンの招聘が決まったのは 2003 年初頭であり、彼が実際に日本に来るまでには 1 年の猶予があった。そこで、私たちはヤーンの本を読んで勉強することにした。立命館大学のメンバーに加えて、当時京都大学の教授だったやまだようこ先生とその教え子たちなどが参加してくれた。

使ったテキストは、『Comparative study of human cultural development』（Valsiner, 2001）であった。とにかく参加者全員にとってとても難しかった。恐ろしい経験ですらあった。私たちが彼の考え方をよく知らなかったことが原因だが、その学問的背景についても知らなかったので難しかったのである。

集中講義は、立命館大学の高木和子教授（当時）や大学院生の他に他大学の院生や教員も参加するにぎやかなものになった（保坂裕子・川島大輔・徳田治子・斎藤久美子の皆さんの顔が確認できる）が、日本人は皆わからないことだらけ。しかしそれなりに知的にくらいつく講義となった。





以下のうらる（URL）アドレスに一非常に短いが一動画がある。

http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/0128/MVI_0626.AVI

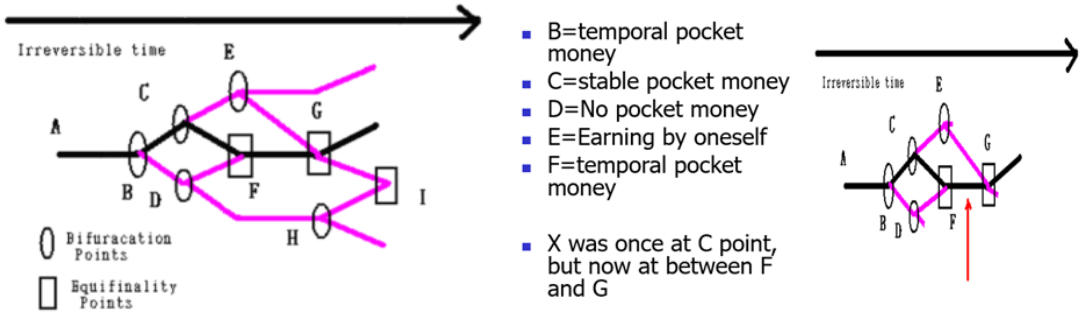
http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/0129/MVI_0654.AVI

そして、第 1 著者は日本の心理学者たちと共に 2004 年 1 月 25 日に文化心理学シンポジウムを企画した。ヤーンに加えて、当時日本に一時的に滞在していたアメリカやドイツの心理学者を迎えてシンポジウムを行ったのである。第 1 著者は、子どもがどのようにお小遣いをもらい始めるのか、を発表しようと計画した。第 1 著者

が分析しようとしたケースは以下の様であった。

韓国のある子どもが、一度、母から定期的なお小遣いをもらったけれど、管理できずに叱られてお小遣いを取り上げられた。しかし、韓国では、子どもたちがオヤツをたべる時に、誰か一人が順番に全員分支払うという習慣がある。だから、彼はまとまったお小遣いが必要であり、彼は母にもう一度定期的なお小遣いをもらえるようにお願いしている。

このケースを私は最初、タイムライン的な一次元で表していた。しかし、同時に私は物足りなさを感じていた。ナカナカ分析の視点が定まらなかったのである。その時、第 1 著者は、何が起きたのか、正確には覚えていない。確かなことは、ヤーンの「発達における等至性」というダイアグラムをみて、このスキームが分析に使えると感じ、分析に試してみたということである。そして、このダイアグラムは、私たちを苦しめたあの本（Valsiner, 2001）に掲載されていたものである（Fig.3.4;P62）。溺れる者は藁をも掴むという心境だったのであろうか。いずれにせよ、このダイアグラムの助けを得て、定期定額のお小遣いをもらうという現象を二次元で表すことができたのである。



1−3　シンポジウム後のヤーンの感想と驚くべきオファー

ヤーンはこの文化心理学シンポジウムについて以下のようにコメントしている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この文化心理学シンポジウムは、日本人とアメリカやドイツの客員研究者が一堂に会して、心理学における文化現象の新しい研究方法を構築する方法について議論するという、本来の目的を最大限に満たしたものでした。今回の発表では、これまで知らなかった新しい知見をいくつも得ることができ、とても嬉しかったです。やまだようこ氏は、日本とヨーロッパのライフコースの描写がどのように異なるのかを、日常の文脈の中で生活者の生活を整理するという同じ文化心理学的機能を果たしながら、エレガントな発表をされていました。抱井尚子氏は、クリティカルシンキングの文化的規制の問題を参加者のオープンな議論の中に持ち込んで、ハワイの異なる情報提供者が、クリティカルなアプローチで思考を進めることが何を意味するのかをどのように概念化しているのか、また、人と権威の意見との間のダイアローグがどのように進行するのかを示しました。 サトウタツヤ氏は、子どもたちがお小遣いをもらうーもらわないという現象が、ミクロ文化的な交渉と、子どもたちの価値社会化というより広い社会問題とを結びつける上で、いかに重要であるかを示しました。箕浦康子氏は、第三世界の国々で国際援助--医療サービス--を導入するためには、文化心理学がいかに必要かを示しました。妊婦がより良い妊産婦医療を受けられるようになるためには、文化心理学的な障壁が多く存在することが示されました。Friedlmeier 氏は、同じ基本的な社会的プロセスである親が子どもの感情をコントロールするというプロセスが、ドイツと日本では２つの異なる構造的な形態をとることがあることを示しました。 最後に小嶋秀夫氏からは、すべての発表について建設的なまとめの解説がありました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊





さて、シンポジウムの次の日か二日後、ヤーンは第 1 著者に思いがけない提案を投げかけてきた。それは、彼と一緒に本の一章を書こうというものだった。第 1 著者はそんなことを全く考えていなかった。シンポジウムが終わってヤレヤレ、と思っていた程度である。しかし、この提案は第 1 著者とその時の大学院生・未来の大学院生がより大きなネットワークの一部になるための第一歩であった。

彼はまた別の提案をしてくれた。その年の 8 月に中国で開催される ″国際心理学会議（ICP）″に参加しないかと誘ってくれたのである。「心理学における方法論的植民地主義の終焉：サンプルから個人の体系的研究への回帰」というシンポジウムでエントリーしているので、そこに参加して立命館大学のシンポジウムの内容を発展させて話してほしいという話である。いきなり登壇者が増えていいのか？むちゃくちゃな話である。

この話は全く予想外のことだったが、第 1 著者は参加することにした。当時大学院生だった第 2・3 著者の安田裕子、木戸彩恵と一緒にデータ分析や発表の準備をすることにした。この過程で TEA を用いてデータ分析するためのコンセプトの一部が明確になっていったのである。彼女らは現在、大学の教員であり、このエッセイの共著者でもある。ヤーンからの 2 つのオファーとその受諾の決断は、TEA の発展の大きな礎となっただけでなく、私たちの人生そのものを大きく変えていくことになったと言えるだろう。

1－4　2004 年 1，2 月における日本の研究者との交流

ヤーンは札幌（北海道大学・北海学園大学）や奈良（奈良女子大学）の研究者との交流の機会を持った。また、ATR（国際電気通信基礎技術研究所）でロボット研究を、京都大学霊長類研究所で比較認知科学研究を、それぞれ視察した。日本の研究者たちは、彼の深い心理学理論だけでなく、その気さくな人柄にも魅了された。2004 年、ちょうど日本質的心理学会が設立され、初の大会が秋に計画されていた。大会実行委員長の京都大学・やまだようこ教授（当時）は、第一回大会のメインゲストにヤーンを招聘することを提案し、奈良女子大学の麻生武教授（当時）はもろ手をあげて賛成した。彼もまた、ヤーンに魅了されていたからである。こうして、ヤーンは同年に二度目の来日が決まり、以後、何回も来日することになり、交流の輪も広がっていった。

さてヤーンは離日後、途上のドイツから、「ありがとう！ ... 日本滞在後の生活は全然違う...」というタイトルのメールを第 1 著者に送ってきた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本の後のヨーロッパはとても混乱して荒れて見えた…私は普段ヨーロッパを理想としているが、今はドイツでさえも混乱して見えていて、パリはどちらかというと田舎っぽく見えた…エストニアの魂の上に日本の影響があってそう見えたのだと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本が素晴らしくオーガナイズされている国だという彼の印象はそれ以来揺らぐことはない。そして、このメールの後段には進行すべき仕事についての言及があった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1) EQUIFINALITY POINT SAMPLING に関する私たちの章をさらに考える機会がありましたか？私はあなたからのいくつかの提案を必要としています － 今考えているタイトルなど － 私たちについての情報を本の編集者（Juergen Straub）に送るために。

2) 私はできるだけ早く９月 11 日の訪問のための航空チケットを購入するつもりです（なるべく安い価格を探しています）。だから、私は 11 日の学会発足のためにすべてがうまくいっていると仮定しています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

TEA（複線径路等至性アプローチ）の発想が「等至点サンプリング」というアイディアに由来すること、日本質的心理学会オンライン第 1 回大会のためにスケジュールを調整していることなど、ヤーンの初来日後に多くのことが動き始めていることがわかる。

こうして、ヤーンの初来日は、日本の研究者たちに様々な果実を残し、また、将来花を咲かせるであろうたくさんの種を残して、終わったのである。

最後に、ヤーンの宴会シーンをいくつか紹介しておく。箸を器用にあやつりたこ焼きや味噌煮込みうどんを食べる姿である。











ヤーンの初来日における様々な出来事は当時つくった以下のウェブサイトを参照されたい。

Valsiner in JAPAN! 2004 (ritsumei.ac.jp)

http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/Index.html

2　始動するプロジェクト群　ＩＣＰシンポジウム・HSS 章の執筆

2－1　「Historically Structured Sampling（HSS）」に関する理論的思考と執筆

ヤーンの離日後、私たちの TEM に関する研究活動は、理論構築とデータ分析という複線径路によって始められた。前者は本の一章の執筆という形で進められ、後者は第 2・3 著者のデータを収集・分析するという作業で進められた。この二つは対立的なものではなく、相補的なものであった。理論的進展がデータ分析に反映し、データ分析のアイディアが理論に組み込まれるということがものすごいスピードで起きていたのである。まず、前者について見ていこう。

TEA に関する最初の論文は「Historically Structured Sampling（HSS）」というものであり（Valsiner and Sato, 2006）、社会科学における「ランダムサンプリング」の概念を批判することに焦点をあてていた。HSS の考え方の基本は、将来の発達事象の研究に焦点を当てるためには、過去のライフコースの証拠をサンプリングに含める必要があるというものであった。しかし、まだ知られていない未来と、過去の出来事を調整することは、大きな理論的課題であった。TEM はその答えを見つけるための最初の試みとして位置づけられていたのである。なお、前述のようにそもそもヤーンは Equifinality Sampling（等至点サンプリング）という構想で、この章を書こうとしていた。彼は無作為サンプリングという方法が、心理学をダメにしていると感じていたからである。

後に Zittoun & Valsiner（2016）は、TEM が社会科学におけるサンプリングという行為の再概念化の副産物であることを指摘している。

なお、TEA は現在ではサンプリングという語を放擲し、「Historically Structured Inviting（HSI）」という名称に変わっている。

2－2　データ分析から生み出されたアイディア

第 2 著者・安田裕子は、自身の修士論文を書くのに忙しく（〆切 2004 年 1 月 31 日）、2004 年 1 月のヤーン来日において彼と会う機会はなかった。しかし、第 1 著者から Equifinality の概念を聞かされたことで、これが自身のデータを再分析するために重要な役割を果たすと直感した。この判断もまた、何故なのか、彼女自身も明確に説明できない（しかし、この直感は正しかった）。彼女は論文を書き上げることができ、翌年に公刊され、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関する最初の論文となった（安田、2005）。また、2004 年 8 月の国際心理学会のシンポジウムで発表するために、第 3 著者・木戸も化粧行為に関する分析を行い始めた。

この時、安田・木戸がデータ分析に使用できる方法論的な概念は、分岐点、等至点、複線径路、そして非可逆的時間、といった程度であったが、実際のデータを分析する中で豊富なアイディアが生まれていくことになる。理論とデータ分析の往還によって分析方法が洗練しまた理論的に深化するというのは TEA（複線径路等至性アプローチ）の特徴の一つである。

初期に TEA（複線径路等至性アプローチ）の理念に賛同した二人の研究対象は、子どもを持つことや化粧をするという「女性特有の現象」であった。だからこそ、こうしたテーマを研究することがある種のジレンマを発生させた。それは、子どもをもつ、化粧をするという経験を等至点に設定したとき、これらの経験は女性にとって「憧れ」や「価値」のあるものとして認識されかねないということであった。

研究が社会に対して子どもの有無等についての価値を提示するようなことは可能であれば避けるべきだと考えられるから、サトウ・安田・木戸（2004）が北京の国際心理学会で行った発表では、等至点の補集合に当たるような経験を等至点として分極化するという発想が取られた。両極化した等至点（Polarized-EFP）である。このことによって研究者が対象とする現象や経験を、価値の高いものとして見なしているわけではないということを表現できるようになった。さらに重要なことに、P-EFP を設定することによって、時間の次元に対するもうひとつの次元が明確にできるようになった。EFP と P-EFP の次元が時間とは異なる次元として明示できるように

なったのである。EFP のみの図では、径路（トラジェクトリー）の幅の定義が難しかったのだが、その欠点も解消された。そして、結果として、人生径路の多様性がより可視化されるようになったのである。

なお、安田の研究自体は不妊治療のプロセスを研究しようとしていたのだが、養子縁組を考えた人を研究対象としたために、結果的に、妊娠しないまま不妊治療を止めるに至った人を対象として研究を行うことになったものである。日本では一他の文化では考えにくいことだが一、養子をとるカップルは不妊治療を止めることが条件となっているのである。そこで、不妊治療を止めるという決断を等至点として設定し、そこに至る径路を検討することになった。そして、この安田の研究によって生まれた概念としては両極化した等至点（P-EFP）の他に必須通過点（OPP）とがある。TEM では等至点に至るまでの径路の多様性を描こうする。しかし、その TEM をもってしてもある時点で多くの人が同じような経験をせざるをえないことがある。これが必須通過点（OPP）として概念化されたのである。

ほぼ同時に研究を行った木戸は化粧における必須通過点として、子どもの頃の受身的化粧の経験を尋ねる面接を行った。しかし、これはあまりうまくいかなかった。必須通過点は、全員が通る点を必ずしも意味しないのだが、女性における受身的化粧は文字通り全員が経験しており、その多様性を表すことができなかったのである。ただし、この研究によってもう一つ重要な概念として社会的力（Social Force）という概念が提唱された。本人が意識するしないにかかわらず、本人の行動に大きな影響を与えている力のことである。これは後に、等至点に向けた力である社会的助勢（Social　Guidance）と、等至点から遠ざからせる力である社会的方向づけ（Social Direction）とに分化することになる。

また、2004 年に立命館大学研究部の学術研究助成金に応募し、採択されたことも付記する。応募時点の数ヶ月前に生まれた新しいアイディアの可能性を見いだし、思い切って研究助成金を出してくれた立命館大学には本当に感謝している。この助成金のおかげで、定期的に研究会を開催することができ、中国 ICP への 3 名の旅費も賄うことができ、当初の取り組みに大きな弾みをつけることができたのであるから。

2−3　ヤーン・ネットワークへの参入　ブートキャンプ

ヤーンと一緒に初めての TEA 論文を書く過程で、第 1 著者はヤーンのネットワークに深く参加するようになっていった。この論文の草稿は、関係する学者に転送され、有益なコメントを提供してくれた。例えば、タニアやナンディッタなどがこうした仲間である。それらのコメントは論文を修正するために使われた。

2004 年 10 月にはヤーンの家に招かれ、5 日間ほど滞在したが、まさにブートキャンプのようなものであった。当時のアメリカのヤーンの家は、クラーク大学から徒歩 5 分のところにあり、アメリカ的な「風呂とトイレが個別にある部屋（キッチンとリビングが共有されている）」であったため、そこに泊めてもらえたのである。というか、ヤーンはそうした滞在者歓待システムを作り上げていたのである。私は滞在中の 5 日間、論文を書いたり、ヤーンと議論したり、論文を書き直したり、訂正されたりしていた。また、キッチンセミナーでプレゼンをして、ずさんな英語ではあったが、アイディアを披露して議論をした。多くの大学院生と知り合いになったし、時には海外からのゲストと交流もできた。

それから 4、5 年間は、年に 2 回ほどウースターを訪問し、ヤーンの家で 1 週間して短期集中的に仕事をしていた。第 1 著者が深夜 2 時か 3 時まで仕事をしてファイルを送っておくと、ヤーンが午前 4 時に起きて手直ししてくれ、第 1 著者が 8 時か 9 時に起きるとディスカッションが始まる。そんなブートキャンプ的な恵まれた状況があって、多くの知識が生産された。また、この恵まれた環境を利用するために、何人もの学生をヤーンの家に送り込んだ。第 1 著者が滞在できたのは毎回 1 週間程度だったが、学生たちは最長 2 ヶ月間滞在し、ヤーンのメンタリングを受けたり、キッチンセミナーに参加して様々な外国人ゲストやクラーク大学の大学院生とディスカッションをしたりして、知識を蓄積し、英語力を磨いていった。このような恵まれた環境があったからこそ、TEA

は発展し、大学院生たちは研究者としての実力を育むことができたのである。

2005 年 3 月にサトゼミの学生として初めてウースターを訪れた大学院生は、第 3 著者・木戸彩恵だった。当時クラーク大学に留学していた日本人・大野カヤさんの協力を得て、日本人女性がアメリカの滞在中に感じる化粧の違和感についてインタビューをすることができた。この研究は文化移行を扱う彼女の TEA を用いた論文に反映され、また、彼女の博士論文の基礎となったのである。

2−4　ネットワークのさらなる拡大

2004 年 11 月 28 日、HSS 論文を書いている最中に、第 1 著者はヤーンに以下のようなメールを送った。

″ETM を TEM に改名したいのですが...時間的には、軌跡があってそれが等至点に向かうので...そのほうがいいと思うのです。どうでしょうか？″

ヤーンは 11 月 30 日に返信した。

″ETM-->TEM は確かに良いですね″

この時点で TEM という略語が確立された。つまり、それまでは ETM（等至点・複線径路モデル）と称されていたのであるが、その後の原稿では TEM（複線径路等至性モデル）が使われることになっていった。実際、この同じメールの中でヤーンから『ケンブリッジ社会文化心理学ハンドブック』への執筆依頼があり、最終的には『Sampling Reconsidered』（Sato et al. 2007）として出版された。

TEM のその後の展開は、英語と日本語の両方でさまざまに読むことができ、このエッセイの焦点ではないのでここでは省略して、日本の研究者とヤーンのネットワークの展開について扱うことにする。

2004 年 9 月、ヤーンは日本質的心理学協会の第 1 回大会で基調講演を行うために 2 度目の来日を果たした。しかし、その後、自身の健康上の問題で来日できず、2007 年 8 月に 3 度目の来日を果たした。

この時は約 2 週間滞在し、立命館大学、奈良女子大学、神戸大学、北海学園大学で講演を行い、第 16 回日本パーソナリティ心理学会（於帯広畜産大学；大会実行委員長：渡邊芳之教授）に参加した。北海道でヤーンを案内したのは尾見康博と岡本依子およびその家族であり、後にクラーク大学で 2 年以上のサバティカルを経験することになる。渡邊芳之は東京都立大学でサトウタツヤと同級生で、尾見と岡本は後輩である。

立命館の大学院生である滑田明暢は、2007 年 7 月から 2008 年 9 月までランカスター大学（修士課程）に留学していた。第 1 著者は彼を訪ねると同時に、イギリスで開催された第 5 回対話的自己に関する国際会議に出席した（2008）。この時、第 1 著者は学会長のハーマンス教授とは初めての出会いであったが、その暖かい人間性と何より学会全体を包む Trans-national な雰囲気に感動した。オックスフォード大学の博士課程で勉学に励んでいたタニア・ジットウンとブレイディ・ワゴナーと初めての出会いがあった。この出会いもまた、後のちに至るまで私たちを幸せにしてくれることになる。

ヤーンの 4 回目の来日は 2008 年 9 月である。日本心理学会第 72 回大会（北海道大学）において「心理学の新しい地平線」という講演を行った。

ヤーンのネットワークに参加したことで、私と学生たちは様々な国の仲間と出会う機会を与えられた。第 1 著者については、2008 年 12 月にタリン大学を訪問し、カトリン・クラセップの博士論文審査（Defense）の副査（Opponent）になることさえあった。ちなみにこの時のもう一人の副査はイタリア・サレント大学のセルジオ・サルバトーレであった。タリン大学では初めてアロ・トゥメラに会った。アロは大学の PR ムービーのためにヤーンとサトウタツヤにインタビューを行った。3 人だから鼎談である。この鼎談の模様は以下で閲覧可能である。

https://vimeo.com/34343012





エストニアは北緯約 60 度と緯度が高いため、夏は白夜になるが、冬は朝 9 時でも真っ暗。12 月は、明るい時間は午前１０時から午後４時くらいまででであった（以下を参照）。

https://www.ritsumeihuman.com/essay/essay348/

引用文献

木戸彩恵　(2011)．　日米での日本人女子大学生の化粧行為の形成と変容―文化の影響の視点から― 質的心理学研究 10, 79-96.

Sato, T, Yasuda, Y., & Kido, A.（2004）． Historically structured sampling（HSS）model: A contribution from cultural psychology． the 28th International Congress of Psychology（Symposium での口頭発表）. Beijing, China. 12th August.

Sato, T , Yasuda, Y , & Kido, A., Arakawa, A., Mizoguchi, H. and Valsiner, J.（2007）. Sampling Reconsidered: Idiographic Science and the Analyses of Personal Life Trajectories. In Valsiner, J. and Rosa, A.（Eds.）Cambridge Handbook of Socio-Cultural Psychology, Chapter 4, Cambridge University Press, Pp.82-106

Sato, T., Yasuda, Y., Kanzaki, M., & Valsiner, J.（2014）From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA（Trajectory Equifinality Approach）explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B., Chaudhary, N. & Hviid, P.（Eds.）. Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key（p. 93-104）. Information Age Publishing.

Valsiner, J.（2001）Comparative study of human cultural development.　Infancia y Aprendizaje

Valsiner, J. & Sato, T.（2006）. Historically Structured Sampling（HSS）: How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, J., Kölbl, C., Weidemann, D. & Zielke, B.（Eds.）Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology（pp.215-251）. Bielefeld: Transcript Verlag.
http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~satot/TEA/valsiner_Sato_HSS_2006.pdf

安田裕子　(2005)．不妊という経験を通じた自己の問い直し過程――治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から．　質的心理学研究，4，201-226.

Zittoun, T., & Valsiner, J.（2016）. Imagining the past and remembering the future: how the unreal defines the real. In T. Sato, N. Mori & J. Valsiner（Eds.）, Making of the future: the trajectory equifinality approach in cultural psychology（pp. 3-19）. Charlotte, NC: Information Age Publishing.

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 42 話

水野　ス ウ

東京調布のレストラン、クッキングハウスへ毎春、「スウさんのピースウォーク」という通しタイトルで、お話の出前に行っています。今年はコロナのことがあって二度の延期をお願いし、この11月にやっと行くことができました。三度目の正直のせいか、たちまち満員御礼、札止めに。今回のマガジン原稿では、今年で通算16回目となるクッキングハウスでのおはなし会をリポートしたいと思います。

まずはメンバーさんたちと

クッキングハウスは、心の病気を体験した人たちが働いているレストラン。どのメンバーさんもお薬を服用し、精神科に通院しています。代表の松浦幸子さんは、メンバーさんたちと一緒にごはんをつくり、おいしい食事をともにするためにクッキングハウスをオープンし、やがてその食事を誰にでも来てもらえるレストランでお出しする、ということをはじめた精神保健福祉士さん。クッキングハウスの活動は今年で34年目にはいりました。

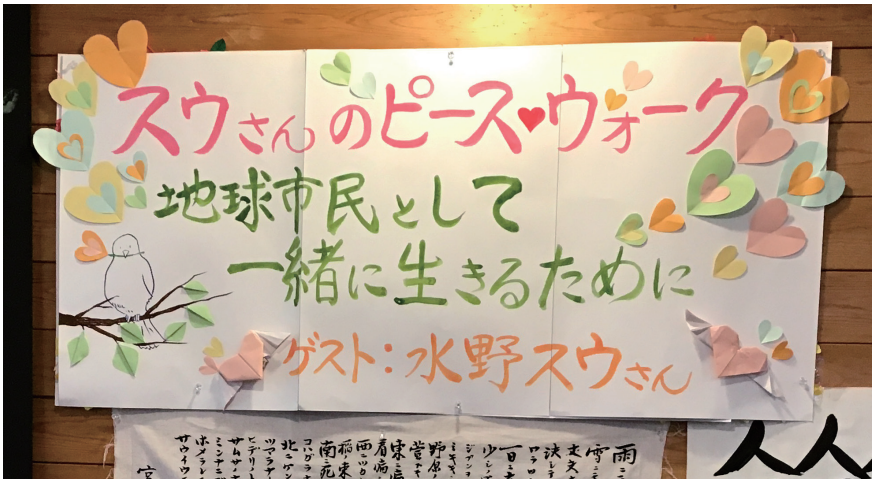
クッキングハウスは、月曜から金曜までのレストランと土曜のメンバーさんたちとの昼食会を、コロナの緊急事態宣言下の春も、休むことなくいつも通りにあけてきたそうです。そのことを、たしか5月だったか、松浦さんがさりげなく「ここは閉じられないのよ、心の居場所だからね」と言われたことで、私は知りました。それがどれほどすごいことか、あの時期、勇気の要ることだったか、どんな時もぶれない、松浦さんの凛とした姿勢にハッとしました。

コロナで何もかも一変したかのようなこの社会で、これまでと同じ笑顔とおいしいごはんが変わらずここにある、そのことが、メンバーさんにとっても、レストランに見えるお客さまにとっても、どんなに大きな安心と平和だったろう。実際、あの時期も、今も、去年よりずっとレストランのお客さまの数が多いそうです。他に行くお店がなくて、という人もいたろうし、コロナで心がぎゅっと押し込められて苦しくなった人も、このレストランに来て、クッキングハウスの場の持つ空気の中でお昼ご飯を食べ、メンバーさんと何気ない会話をかわし、ほっと深呼

吸できて、救われた気持ちになった人がどれほどいたことだろう、と思います。

おはなし会は、いつもならメンバーさんたちも一緒に聞くのがクッキングハウス流だけど、今回、あまりに混みすぎるのはよくないよね、ということで初の2部制に。外からのみなさんにお話する前の短い時間で、90分の話をギュッと20分に凝縮して、メンバーさんたちに語りました。

この日は、11月にしてはめずらしく小春日和のあたたかい日で、開け放した窓から心地よい風が吹き抜けていきます。その年のテーマにあわせて毎年手づくりしてくれるタイトル、今年もやわらかくあたたかな色合いでお迎えしてくれて、まるで、いつもの春のスウさんおはなし会かと錯覚してしまいそう。ちょっと違うのは、メンバーさんたちが皆マスクをして、私もマウスシールドをつけていることだけでした。



クッキングハウスには、メンバーさんたち作詞作曲のオリジナルソングが何十曲もあって、この日も、私を真っ先に歌で歓迎してくれました。なので、私からも歌でお返しを。この日、集まってくれたほとんどのメンバーさんと私は、毎年のおはなし会を通してすでに顔なじみです。ほんとにほんとにやっとあえたね！のきもちをこめて、音楽劇「森は生きている」の中の「一瞬の今を」を、こんな替え歌にして歌いました。

♪やっとこあなたに逢えた
クッキングハウスの贈りもの
コロナの世界の希望
一人ひとりがつながって
一瞬の今を　千秒にも生きて
このうれしさを　胸に　胸に
胸に　刻もう

歌からはじまる

続く第2部、みなさんに向けて。この日を待ちに待っていてくださった、たくさんの懐かしいお顔、初めてのお顔。みなさんマスクをしているから顔の上半分しか見えないのに、どの目元も笑っていてあったかい。とても厳しい状況の中（この日、東京での感染者数は500人超え）、足を運んでくださったみなさんの気持ち、おはなし会をひらいてくださった松浦さんの気持ち、その両方に心から感謝しつつ、せいいっぱい誠実に語ることでこたえよう、と身のひきしまる想いです。

始まりは、今しがたメンバーさんたちにも歌った「一瞬の今を」の歌から。ふつうは講演会で、その日のゲストスピーカーがいきなり歌いだすなんてまずないことだから、はじめてきた方はびっくりされたでしょう。しかもそれがなんとも心細いささやくような私の歌声だから、なおさらね。

だけども、クッキングハウスっていつも歌があふれているところなんです。仲間同士、集まってすぐ歌い出すのは自然で当たり前のこと。それもまたクッキングハウスという場所の大事な特徴なので、それをおはなし会のはじめにみなさんに感じてもらいたかった。それにもちろん、その場にいてくださるどなたとも、やっとやっと会えたね、生でほんとに会えたね、というようれしさを、この歌で表現したくもあったのです。

コロナ下の紅茶の時間

お話のはじめは、この半年余りの「紅茶の時間」のことを。ちょうどその週で満37年になる、自宅を週に一度ひらいて、誰でもどうぞ、の紅茶の時間は、コロナ下もずっとあけていました。あいていることを知らない人も多く、誰もこない週が続けて3回あったけど、その後、人が少しずつ戻ってきて、それ以後、今に到るまで毎週、紅茶はお寺のように静かにあいています。

ずっとどこにも出かけなかったという人が久しぶりに紅茶に来たら、あふれ出す洪水みたいに話が止まらなくなったり、かと思えば、あまりに長く生で人としゃべっていなかったせいか、やっと紅茶に来れたのになかなか言葉が出てこない、という人がいたり。

社会のことを知りたくていつもたくさん質問をする若いお母さんが、ひと月ぶりに来た紅茶で私を質問責めにする日もありました。対話のキャッチボールが小一時間余り続いたあと、彼女が目をキラキラさせて言ったこと。「ああ、こうして直にあえて、知りたいこと聞けるって、うれしい！」。そのうれしいは、むしろ私の方でした。彼女の言葉は、紅茶の場が人と人との平らな関係をつくれていることの証明みたいでもあり、一人ひとりを大切にしたいと思う私なりの13条の実践を認められたようでもあり、とても幸せなきもちになったからです。

その時期、今更のように強く感じたことは、紅茶の時間って、誰かしらがやってきて、言葉がそこで交わされ、きもちを受けとめたり、受けとめられたり、それではじめて紅茶という場になるのだな、そこに器だけあっても、誰も来なければ紅茶の時間にはならないのだな、ということでした。人が来てくれるおかげで、私自身、コロナの時期も人と確かにつながっている、と実感し続けることができたのです。

からだの共鳴

人と人が実際に顔をあわせて会うことの力、生とリモートの違いについては、コロナのことが起こってからずっと考えさせられてきたけど、この日のクッキングハウスでもそのことを、頭でよりもからだで、じわじわ感じていました。オンラインでは、相手の顔をパソコンやスマホの四角い枠の中だけで見て会話しているけど、こうして生で会っている時は、その人を全体で見て、まわりの人のうなずきや笑い声、たとえば今この場を吹き抜ける風も一緒に感じあいながら、クッキングハウスという場の空気感ごと、やっとこ会えたあなたとの一瞬の今を、みなで共有している、そんな感覚があります。

ゴリラの研究で知られる京大総長の山極寿一さんが「人間は進化の過程で、信頼をつくるのに言葉だけに依存しないできた。しかし今、からだの共鳴が失われて、言葉だけでつながる社会に放り出された時、人間は一体どうなるのか」と言ってらっしゃいました。

これは、怖いけれど、とても大事な視点です。山際さんは続けて、人と人とが共鳴するのにもっともいい手段は音楽だ、と。だとすれば、クッキングハウスのメンバーさんたちがいつも歌や音楽とともにあるってことは、お互いのからだで共鳴しあいながら信頼関係をつくってきた、ということでもあって、それは今の時代、誰にとってもいっそう大切なことだ、とあらためて思うのです。

リタさんとリコさん

自己紹介がてら、ここ数ヶ月の紅茶の時間のことを話した後は、いよいよこの日のおはなし会のテーマに。昨年の暮れ、松浦さんからいただいたテーマは、「地球市民として一緒に生きていくために」というなんとも壮大なものでした。松浦さんの中に、12月にアフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲さんへの想いがあることはすぐにわかったものの、それをおはなし会の中でどう活かせばいいだろう、と考え始めた矢先、新型コロナが出現したのです。

松浦さんからのお題は、まるでほんのちょっと先の未来を見越していたかのよう。コロナがまたたく間に世界中を駆け巡り、地球がひとつながりであることを思い知らされました。否が応でも、一人ひとりが、地球市民として他の人たちと一緒に生きていくためにはどうしなきゃならないのか、自分だけよ

けりゃいいや、ってわけにはもういかないんだよ、とコロナから、私たちはいま突きつけられているのです。

この日、伝えたいキーワードの一つは、リコさんとリタさん。リコさんは、「利己」、自分だけよければいいや、あとは知らない、という人のこと。リタさんは、「利他」、目の前に困っている人がいたら、どうしましたか、と声をかけて手を差し伸べる人のこと。それは自分を無にしてただ人に尽くす、ということじゃなくて、みんなの幸せが自分の幸せになって返ってくる、と思って生きる人のこと。

リタさん、って聞いて、思い浮かぶ人いますか？って訊くとすぐに、中村哲さん、という声が上がりました。そうですね、それに宮沢賢治さんも、ウルグアイの大統領だったムヒカさんも、どんな命にも順位をつけない風の谷のナウシカも、そしてクッキングハウスの松浦さんも、私にとってのリタさんたちです。

コロナがこの先、どうなっていくのか、誰にも見えません。様々な不安や恐怖がうずまくのは当たり前。こんな時、自分だけの幸せを追い求めない、リタを生きる人たちが何人か、私の心の中に住んでいてくれたなら、暗闇で心細くて迷子になりそうな気持ちにちいさな明かりが灯ります。あの人だったらどう考えるだろう、何を選んで進むだろう、と思い巡らし、その人と対話してみる。そういう人たちの存在が自分の中にあることが、コロナの時代に、一隅を照らすともしびになってくれるのではないか、と思います。

哲さん語録

先ほどお名前のあがった、中村哲さん。医師でありながら、いや、命を救うのが仕事のお医者さんだからこそ、医療だけではパキスタン、アフガニスタンの人々の命を助けられないと知って、医師を続けながら井戸を掘り、それだけではとても足りないと、独学で土木を学び、2000年からは干ばつで砂漠化したアフガンの大地にクナール川からの用水路を拓く、という途方もない一大事業にとりくんでこられました。

40キロに及ぶ用水路の完成で、砂漠に緑の大地がよみがえり、人々は農業が再びできるようになって、戦争のせいだけでなく、干ばつによっても難民化していた人々が故郷にもどれるようになりました。65万人以上もの人々がこの用水路のおかげで自ら生活していけるようになったということです。

まさにこの日のテーマの「地球市民として一緒に生きる」ということを、長年に渡って実行してきた哲さん。哲さんの言葉には、私たちの平和憲法を狭い日本の枠だけでとらえずに、世界中の人たちとお互いの命を大切にして、ともに生きていくってどういうことだろう、という視点があふれています。この日は、哲さんの言葉の中から、日本国憲法にかかわる部分をいくつかのフリップにしてみなさんに紹介しました。

平和とは

「平和憲法とは、これがなくては日本だと言えないもの。戦闘員、非戦闘員、あわせて亡くなった人、300万人のお位牌である」と、哲さんは言います。また、「正義というのは人の命を尊重すること、それが憲法です」と。

暴力で相手をやっつけないのが日本という国だと、少なくとも50年間は他国の人に思ってもらえていたことを、哲さんは実感していました。アフガニスタンで常にいのちの危険と背中合わせで活動してきた人が、具体的に感じていた9条の力。ある時期までは確かに、哲さんにとって、9条はすごい力をもった安全保障でした。

9.11のテロの後、自衛隊が米軍に協力支援するというテロ対策特措法が成立する前、国会の委員会に参考人として呼ばれた哲さんは、「自衛隊派遣は有害無益」と言い切りました。アフガンへの爆撃が始まった時は「干ばつで息もたえだえなのに、瀕死の小国に世界中の大国が束になり、果たして何を守ろうとするのか、素朴な疑問である」と著書に書いています。

2003年のイラク特措法で、人道復興支援の名目で自衛隊をイラクに送った日本。アフガンでは急速に反日感情が起きましたが、これが「国際貢献」の

一つの答えだ、と哲さん。はっきりとアメリカを支援したことで、テロの標的になるかもしれない、とこれ以来、哲さんは、活動車両から日の丸をはずしました。

それでもなお、哲さんは2013年のインタビューで、「9条はまだかろうじて力を放ち、自分を守ってくれている」と答えています。

「平和とは、戦争以上に忍耐と努力が要るもの」「平和とは、大地の上に築かれるもの」「平和とは、理念でなく、ここでは生死の問題である」 どれも簡潔で、実体験に裏打ちされた哲さんの言葉です。こういった本物の言葉がある一方で、「今のコロナ禍を短時間で解消する方法は、どこかで大きな戦争が発生することではないだろうか」と発言する人もいる。燕市の当時教育長だった人が、戦争が始まれば武器という商品で経済は回復するだろうとしたこの発言が、いかに命を粗末にした軽いものであるか、一瞬で何もかも、人々の積み上げてきた文化も日常の暮らしも根こそぎ破壊してしまう、戦争の本当をいかに何も知らないか、愕然とします。

戦なんかしてる場合かっ!

「戦なんかしてる場合かっ！テロとか戦争とか、そんな暇あったら食べ物とりもどしに行くことですよ！」

これは2015年、安保法案が国会で論じられている最中、哲さんが金沢にみえて医学生たちにお話されている時に飛び出した言葉。それまで淡々とした口調で、アフガンでの医療や用水路について語り、ひび割れた大地が用水路によって、年ごとに緑の大地に変貌していく様子をスライドで写しながら穏やかにお話しされていたのに、急に語気をつよめて、そんな場合かっ！と腹の底から言われたのです。

戦争よりもっと大事な、待った無しの状況がここにあるのに、何を考えてるんだ、何をばかなことしているんだ。

戦闘や干ばつでふるさとを去らなければならなかった人たちが、用水路が通ったことで戻ってきている、武力では決して緑の大地も平和も生まれないことを、誰より知っている哲さんの、怒りと悲しみをじかに感じた瞬間でした。

「平和の反対は、安倍さんの、積極的平和主義。言葉だけで、平和の反対と思う」哲さんの言葉は、どこまでもはっきり明瞭です。

「用水路に水が通ると、真っ先にくるのは子どもたち。牛が水を飲みにきてトンボや鳥も来る。お母さんたちが一番よろこんだ。子どもが水浴びすることで皮膚病が減り、お母さんたちの水汲みが楽になったのだ」これが武力によらず、忍耐と努力で得た、平和の光景です。

お恵みください

「人間と自然がいかに折り合って生きるか、自然を意のままに操作しようとするのは思い上がり。ほんの少しお恵みください、という姿勢なしには、クナール川の用水路はとても成功するものではなかった」

コロナウイルスの感染が広がる中、改めてウイルスという自然と私たちが共に生きていることに気づき、哲さんのこの言葉が響きます。

地球の温暖化は、すさまじい干ばつとなってアフガニスタンの大地をおそいました。去年あたりからよく耳にするようになったSDGs（国連の定めた持続可能な開発目標）ですが、その言葉が聞かれるずっと前から、哲さんは自然に対して謙虚な、お恵みください、という姿勢で、アフガンの人たちの力で維持することが可能な用水路づくりをめざし、それに取り組んできたのです。

完璧な用水路、というものはない。大河が暴れれば堰は決壊するのだから、修復は必須のこと。それを知っている哲さんは、用水路の建設にハイテクのおおがかりな機械を用いず、高価なコンクリートもできるだけ使わないようにして、用水路の距離を伸ばしてきました。

現地の人たちの持っている技術で（実は、自分たちの家を石でつくるアフガンの人たちは、誰もがすばらしい石工なのだそう）、現地にある材料で、そこに住む人々の手で壊れた堰を補修できるよう、常に考えていた哲さん。故郷福岡の山田堰で古くから用いられてきた蛇籠（じゃかご）の技術をアフガンの人々に教え、彼ら自身が鉄線を籠状に編み、その籠の中に石を詰め、川に落

として堰の補強にするという持続可能な方法でメンテナンスできるようにしたのです。

実行するもの

哲さんは、2013年の講演会で「9条は守るのでない、実行すべきものだ」と語っています。この時のインタビューで「他国に攻め入らない国の国民であることが、どれほど心強いか。単に日本人だから命拾いしたことが何度もあった。9条はリアルで大きな力で僕たちを守ってくれている」とも。

9条を体現する人、として知られる哲さんですが、私は哲さんが9条だけじゃない憲法も体現している人だと感じています。

たとえば、アフガニスタンの大地で、武器を持たず、人々と対話し、誠実に行動することで信頼をえて、用水路を切り拓いてきた哲さんは、9条の人であるのはもちろんだけど、不断の努力の12条の人でもあると思います。

用水路をつくる作業現場にいる哲さんに会いに行った人が、一体どの人がその人か、見分けがつかなかったそうです。アフガンの人たちと同じ帽子をかぶり、陽にやけ、作業着でショベルカーを運転するその人を、まさかあの有名な中村哲医師だとは思わなかったと。このエピソードからも、哲さんが相手に対して決して上から目線でなく、平らに話し、ともに汗を流して働いている姿が目に浮かびます。

その姿が、私には日本国憲法前文の中の、ある文言と重なりました。「人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって」というくだりです。この言葉を知った最初は、固い言い回しで、どう理解すればいいかよくわからなかった。けれどこの言葉を、人間と人間の関係はどうあるべきだろう、どうあったらいいのだろうか、と読みかえてみた時、人と人が互いに相手を尊重しあう、そういう関係をもしつくっていけたとしたらすばらしい、それが理想的なことだ、と思いあたりました。そして、ああ、そうか、その実現がものすごく困難なことだからこそ、崇高な理想、と憲法に書いてあるんだ。そう読み解くことができて、このくだりがやっとその時、私の腑に落ちたのでした。

たやすくないことを百も承知で、尊重しあうための努力を誠実に重ねること、それって、「わたしも、あなたも、ほかの誰ともとりかえがきかない存在。たがいの大切さは行ったり来たり」と謳う13条の、個人の尊重を実践することでもある、と思いました。日本とはまったく異なる文化を持つ国で、相手の伝統や文化、宗教に敬意をはらい、相手をリスペクトしつつ、用水路の難事業にたゆまず取り組む哲さんは、その意味でまさしく13条の人でもある、と私には思えるのです。

私にとっての哲さんは、9条の人、不断の努力の12条の人、そして違う文化を持つ人たちを尊重する13条の人、そしてリタのひと。

アフガンの長老のこの言葉の中にも、リタさんとリコさんが出てきていました。

「世界にはふた通りの人間がいる。一つは無欲に他人のことを思う人たち。もう一つは自分の利益のみをはかることで心の曇った人たちである。あなた方がどちらであるか、おわかりでしょう。決して私たちはあなた方日本人を忘れません」

2020年、哲さんは本当に星になりました。北海道のアマチュア天文家が20数年前に発見した火星と木星の間にある直径6キロの小惑星に、今年、「中村哲」と名前がついたのです。

マエソラ

おはなし会の最後は、「マエソラ」の時間。マエソラ、と聞いて、？？？顔のみなさんに、日本国憲法前文（まえぶん）を諳（そら）んじることをわたし流に、マエソラ、って呼んでいるんです、と説明しました。前文には難しい言葉が多いので、そのままそらんじると、言葉というより音の羅列に聞こえてしまう。それじゃもったいないので、マエソラをする前は、かならずミニ解説をします。

前文の中に何度も出てくる「われらは」「われらの」という言葉は、憲法が政府の持ちものではなくて、わたしたちのものだという証拠です。つまり主権在民。それに対して、先の戦争は政府の行為によ

って引き起こされたものだということが、1節目ではっきりと言われています。2節目に出てくる「人間相互の関係を支配する崇高な理想」という言葉は、先ほど話した、哲さんが実践してきたような、平らな13条的態度で尊重しあうこと、と思いながら聞いてくださいね。

同じく2節目の中に、「先制と隷従、圧迫と偏狭」という耳慣れない言葉が並んでいます。先制は、独裁。隷従は、奴隷のように従わせられること。圧迫は、上から押さえつけられること。偏狭は、不寛容、でしょうか。それらをなくしたいと願うものの、現実はまるで今のこの社会をそっくり表している言葉のようでもありますね。

一番知ってもらいたいことは、私たちの憲法が、世界中の人たちの平和を願っていること、自分の国のことだけ考えて他国を無視するのはだめだよ、という、自国ファーストでないリタさん憲法であることです。それをマエソラを通して少しでも感じていただけたらいいな。では、日本国憲法前文のマエソラをどうぞ——。一呼吸置いてから、私はゆっくりとマエソラを始めました。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」

マエソラが終わると、それまで身体中を耳にしてシーンと聞いていてくれたみなさんの空気が、ふわぁっとほどけて、それからあたたかい拍手が起きました。その拍手の中で、私もまた、ほどけていくのを感じました。

歌に始まり、詩で終わる

続くふりかえりシェア会では、コロナ下のこの状況でおはなし会が実現したこと、今日こうして集まれたこと、直に会えて生で話をわかちあえたうれしさ、よろこびを、みなさんが次々口にしました。

生とリモートについては、こんなすてきな発見をしてくれた人も。

「生の時は全体でその人を感じている。っていうことは、その人のbeを感じているということなんだろうな。do＝何かできる、というだけで人はできているのじゃなく、その土台にある、ただその人として存在している、というだけのbeが、人にとっての本質の部分なのだろうなと思う。リモートでは、doは見れてもbeを感じられなかったのが、今日ここに来てめちゃくちゃいろんな人のbeを感じられて、そのことにただただ感動しています」

「生の話を聴く機会は本当に久しぶり。言葉だけに依らないコミュニケーション、からだで共鳴するコミュニケーション、最後のマエソラでそれを感じた」という感想も。この反応は、ちょっと意外でした。マエソラそのものは言葉なんだけど、同じ空間をともにすることで呼吸が合わさっていき、私のそらんじた前文が、その人のからだの中でも響いたよ

うに感じてくれたのかもしれません。そのほかにも、マエソラがすごく心に残った、まるで詩のよう、叙事詩を聴くようだった、と何人もの方が言ってくださいました。

哲さんの「実行するもの」という言葉が一番印象的だった、という人からは、「目の前の一人を救うこと、それが政治家に最低限求められることなのに、果たしてそのことわかっているんだろうか。マエソラがとてもよかったので、国会議員にかならずマエソラを義務化して（会場から、おお〜〜！の声）、憲法を自分ごとに、憲法を守る義務は自分たち政治家の方だと、ちゃんとわかるようになってもらいたい」（拍手）と、うれしくも大胆な提案もありました。

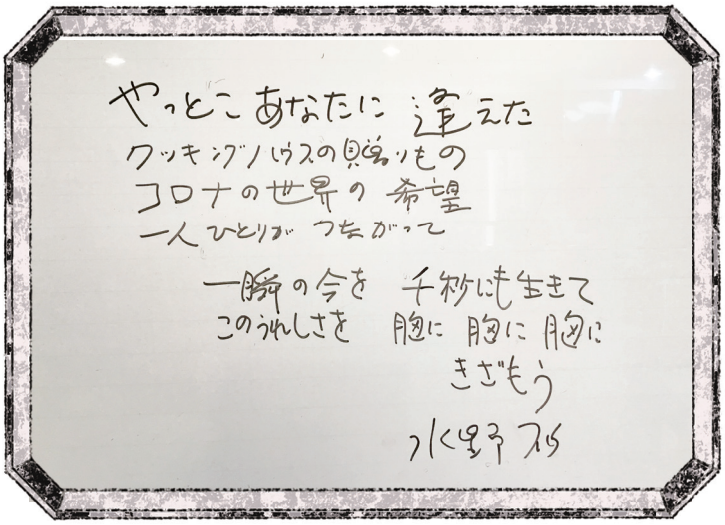
コロナの時代、リモートがますます盛んになって、言葉だけが先行する。そんなコミュニケーションが当たり前の社会になってほしくない、そう思っていただけにこの日、マエソラがはからずもある種の音楽になってみなさんと共鳴しあえたことが、意外で、とてもうれしいことでした。このおはなし会が「一瞬の今を」の歌にはじまり、日本国憲法前文のマエソラで終わったのは、その意味でも象徴的なことだったかもしれません。

「我々の役得は、復活した人々とよろこびを共にできること。何ものにもかえがたい尊いものである」「目の前で困っている人がいたら、どうしたの？と声をかけるのは当たり前でしょう」という哲さんの言葉は、そのまま松浦さんにも重なりそうです。精神の病からリカバリーした人たちの笑顔を見ること、よろこびをともにすることが、松浦さんの幸せ。リタさんを生きる人を身近に感じることは、今の混沌とした社会の中の希望です。

今、誰もが多かれ少なかれ、コロナで傷を負っています。クッキングハウスで33年間、醸造されてきた安心の空気は、そこにやって来る一人ひとりの全体を、やさしく包みこんでくれる。松浦さんが揺るぎない信念でもって、メンバーたちを守りながらレストランを今日もあけ続けていることは、目に見える、一隅を照らすあかりです。

社会が平和でなければ、メンバーさんたちはこころ穏やかに生きられない。そのことを重々知っているから、松浦さんの平和を求める気持ちは人一倍強くてぶれません。松浦さんもまた、9条を実行する人であり、12条の人、そして平らな13条の人、リタさんだと、コロナの時代を通して私はいっそう確信しています。

＊写真は、あの替え歌の歌詞、正確に知りたいから教えて、と松浦さんに言われて、クッキングハウスのホワイトボードに走り書きしたものです。



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（３４）

中村周平

「私以外のスポーツ事故に遭った

人たちの境遇や想いを知りたい」

その考えから始めた会は、多くの方々の理解と支援をいただきながら、開始から５年が経ちました。準備会を含めたその開催数は 27 回に上ります。今回は、現在同志社大学大学院での研究活動の一環で行っている「ラグビー事故勉強会」を始めるに至った経緯や、回を重ねるごとに変わっていった目的、在り方について触れていきたいと思います。

少しこれまでの内容と重複することになりますが、2008 年に調停を和解という形で終えた私の中には、事故やその後の対応について様々なわだかまりを残したままになっておりました。

その後、調停に関わってくださった弁護士の方を通じて、同志社大学政策学部教授の川井圭司先生をご紹介いただくことができました。

「スポーツ事故に対するちゃんとした知識を学び、私自身の経験を事故当事者の立場からだけではなく、沢山の人たちに納得して貰える発信の仕方を身に着けたい」

私の事故に対する思いや考えだけでなく、私の障害や身体の状況を理解したうえで、私の指導を快く受け入れてくださりました。そして、2014 年から川井先生の

下、同志社大学大学院総合政策科学研究科でスポーツ事故に関する研究活動をスタートしました。（そこに至る経緯は、これまでの対人援助学マガジンで触れさせていただきました。）

研究活動を進めていく中で、日本におけるスポーツ事故に対応した既存の補償制度の課題、裁判によって崩壊する人間関係、スポーツ先進国における独自の補償の在り方による事故後の紛争を回避する仕組みなど、様々な視点から調査・分析を行ってきました。（これらの詳細は、今後の対人援助学マガジンで触れさせて頂こうと思います）

しかし、こういったアプローチで研究を進める一方、「事故当事者の声」について十分に把握することや、意見を集約することができていないのではないかという思いが芽生え始めました。

判例に関するデータベースを活用すれば、それがどのような事故で、裁判によってどのような判断が下されたのかを把握することは可能です。また、スポーツ事故を取り上げた新聞記事を収集すれば、事故被災者や遺族の想いの一端を垣間見ることもできます。先行研究を調査・分析する中で、それらが「研究の参考資料」として意味のあるものであることも理解しています。

ただ、「この研究の目指す方向性は、そのほかの事故被災者の方々にとって望まれているものなのか。本当の意味での救済に繋がるのか」

その部分に関しては、私がこれまで経験してきたことしか裏付けるものはありませんでした。何より、この分野について深めていくことはこれからの研究で避けて通れない、避けて通ってはいけないと考えておりました。ただ、前出しました通り、判例研究や新聞調査では、事故発生の事実や判例傾向について把握することはできたとしても、事故被災者や遺族とチームや学校とが対立するに至った事故の裏側にある事実、事故被災者の事故後の生活実態や事故への想いを把握するには、実際に事故当事者の声を聴く必要があると強く感じていました。

路上生活者の個人史

竹中尚文

「セッタ」が亡くなったことを聞いたのは、2020 年２月だったと思います。今年の冬は暖冬でしたが、路上で眠るには厳しい季節です。朝になって、歩道の片隅で息絶えている「セッタ」が発見されたそうです。「セッタって、誰ですか？」「セッタって、いつも雪駄を履いていたヤツですよ。憶えてないの？」と。私は「セッタ」の本名を知りません。どんな人生であったかも知りませんでした。

路上生活者は誰にも看取られず息を引き取ることも少なくありません。その人の人生を振り返るような葬儀を営まれることも殆どありません。人生を振り返る人もいないまま、忘れ去られるのは悲しいことです。はじめから、その人がこの世にいなかったかのようです。人生が誰の記憶にも残らないのは人間としての存在を否定することに思えます。ここで、こんな人生があったという記録を少しでも残したいと思います。

第１回

中田　浩　氏

1950 年４月１日生まれ

私は、1950 年４月１日に生まれたことになっています。この日は、私を育ててくれた孤児院の院長さんが決めてくれたのです。本当の生まれた日も生まれた場所も誰から生まれたかも私は知りません。私は、この頃に孤児院の前に捨てられていたようです。だから、私には戸籍がありません。戸籍がないから、コロナで国民全員がもらった 10 万円も頂けませんでした。

本当のところ、私に記憶がないのですから、何も分かりません。物心がついた頃、私は孤児院で暮らしていました。その孤児院は、近畿地方のある県にありました。今、孤児院と分かりやすくいっているだけで、普通の家に私のような子どもが何人か暮らしていました。普通の家といっても長屋のような建物

の一軒です。出生について何も知らないのは、私が「捨て子」だったからだと思っています。それを誰も否定してくれないのは、私が「捨て子」だったということでしょう。

中学校を卒業して、集団就職で大阪に出てきて自動車工場で働きました。自動車が好きというより、憧れだったのです。中学卒業までは、ボクシングをやっていました。ボクシングが好きだったわけでもありません。何かを目指してではなくて、若いエネルギーをもてあましてのボクシングでした。だから、就職をしてからボクシングを続ける気持ちもありませんでした。

結婚？ 結婚はしようと思った事もありません。そんな機会もありませんでした。

いつの間にか、裏社会で暮らすようになっていました。２０代の頃でした。私はクラブのボーイをしていました。クラブのオーナーが大型の輸入車に乗ってお店にやって来るのです。自動車好きの私はその車を眺めているだけじゃなくて、空き時間にチョットした汚れを落とすようなことをしていました。それに気が付いたオーナーは私に小遣いをくれたりするようになりました。その人には、ずいぶんと目を掛けてもらいました。いつの間にかその人の組員のようになっていました。私は正式に組員になったのでもありませんでした。杯を交わして組員になったのではありませんでした。だから下働きのようなことをあまりしていません。そのために他の若い組員からあまりよく思われませんでした。

いつの間にか中年になっていました。その頃、「何とか戦争」だと言って、抗争事件がありました。怖くないかと言われれば、それは怖いですよ。殺し合うのですから、かなりの恐怖心です。だから、お酒やクスリでその気持ちをごまかしたりする人がいるのです。私は「呑む・打つ・買う」はしませんでした。しかし、その抗争で私は人を殺めることになりました。そのため、私は 40 歳頃から約 20 年間、刑務所で過ごすこと

になりました。刑務所から出て、すぐには生活に困るようなことはありませんでした。私がいたのは大きな組織だったので、他の人のようにいきなり路頭に迷うようなことはありませんでした。しかし、時代の変化と周囲の人たちの高齢化でしだいに暮らせなくなりました。少しずつ、屋根の下で寝られない日々が始まり、路上生活をするようになりました。

今は、河川敷の目立たない場所で柱を立ててブルーシートを張った所で暮らしています。この 10 年間でたくさんの人を送りました。路上生活者もずいぶんと減りました。先にも言いましたように、私は飲酒をしないので何とか生活ができていればいいのです。というか、生きていればいいのです。あとは安らかにこの世を去りたいのです。寝ている間に目が覚めなかったというのが望みです。この生活が快適というのではありませんよ、今でも子どもたちに花火を打ち込まれたり、おもちゃの鉄砲で撃たれたりするのです。おもちゃといいながらも、あれもかなり痛いものですよ。だけども、今の生活に不満はありません。自分の人生を考えたら、「これでエエかな」と思います。今はスッと往けたらなあと思います。それが、今の望みです。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第37回

『朝が来る』

1、黒子除去

「先生、黒子とったら？」と仲良しの先生に会食中に言われた。

俺は黒子のことは昔から気にはなっていた。俺の黒子は右の頬と顎に一つずつ。両方ともちょっと膨らんだような１センチ弱の黒子だ。

これは物心つく頃からある。おそらく小学校に入る頃にはもうあったような記憶がある。黒子が取れることは前から知っていた。うちの父方のおばさんたちはみんな美人で、美醜に気を使う人たちなので、取った経験があると聞いていた。それで、俺もとりたいという気持ちはあった。しかし、これもジェンダーに対する囚われで、男が黒子をとったりするのは男らしくないという気持ちがどこかにあった。

それに俺は学生生活が長かったせいで、黒子をとるお金もなかったのだ。

一度、行動に起こそうとしたことはあった。大学院の頃だ。20 代後半の頃、意を決して、近くの外科の病院に行った。そこの先生は、「黒子とるんだったら皮膚科のほうに行った方がいいね」と近くの皮膚科を教えてくれた。しかし、そこの窓口で問い合わせてみると出てきた看護師さんは、「黒子って、手術？」とほかの看護師さんに訊き、「手術だったらやっていないんです」と答えた。どうやら、彼女たちの様子だとホクロをとりに来る人なんて滅多にいないのだろう。何もわかっていないみたいな、キョトンとした顔だった。仕方がない。あきらめた。

それから、20 年くらい経ち、10 年ちょっと前だ。行きつけだった鍼灸の先生が「黒子、お灸でも取れるかもしれないですよ」と自分から申し出てくれた。鍼灸だったら東洋医学だから、美容整形でとるよりもはるかに心理的抵抗は少ない。その先生のことは信頼もしている。やってもらおうかと思った。ところがその数日後、「國友さん、申し訳ないんだけど、國友さんの黒子、とるとクレー

ターになって、余計に不細工になる可能性があるんですよ」と言われてしまった。

やはり、とるべきじゃないのか。自然の流れから外れるようなことをするのは不幸になるという話を聞いたこともある。俺の黒子は、黒子占いでも悪い黒子ではないみたいだ。千昌夫もトレードマークの黒子を取った途端に借金まみれになったと聞いている。取らない方がいいのかもしれない。イケメンの人が黒子を取るのは様になるけど、俺みたいな醜男が黒子とったりすると、「あの人、大してイケメンでもないのに、黒子なんて気にしていたのねー」と悪口を言われる可能性もある。

ただ、髭が濃いので黒子に剃刀があたると、血がとまらなくなることがある。黒子は血の塊なので、切りどころが悪いと何時間も止まらなかったりするのだ。それに写真を撮った時に黒子が二つあるのはやはり不細工だ。あれこれ迷いながらも、俺は優柔不断な性格なので、いつまでも取らないままだった。

そこにコロナがやってきた。仕事がオンラインになって、しばらく誰とも会わない日々が続いた。もう俺の顔を忘れているだろうなあ、どさくさに紛れて、黒子を取ろうかという気持ちになった。ところが、美容整形のクリニックに電話してみると、「実は今コロナのため、京都の治療院は閉鎖中なんです」という返事。やはり取らない運命なんだろうと思った。

その後、最初にあげた友人と会って、話の弾みに黒子の除去のことが出たので、その場で調べてまた別のクリニックに電話した。すると、「今、黒子の除去は京都院ではやっていないんです。大阪のほうに行っていただけるんだったらすぐにできるんですが」という返事。大阪まで行く気にはならない。「やはり、取らない運命なんだよ」と俺は彼に言った。

ところがその後である。彼と分かれた後、ふとした気まぐれでまた別のクリニックに電話した。３度目の正直とでもいうべきか。そこは明日にでも予約が取れるというのだ。

「でも、通院しなきゃいけないんですよね？」と訊くと、「いえ、1回だけで終わります」という返事。俺は早速予約した。もし行ってみて、カウンセリングを受けて気に食わない時は断ればいいとのことだった。

ホームページを見ると美容整形なんてやっている医者ってなんとなく胡散臭いという偏見が湧いてきて、とりあえず、当日ぼられないように、慎重に対応しなくてはと思い、クリニックへと出かけた。

黒子の除去は、１ミリあたり 5000 円くらいだと聞いていた。俺のは大きいからお金がかかるかなあ。クリニックに行ってみると、まず女性の人が黒子の大きさを測ってくれて、料金説明をしてくれた。両方とも７ミリで２つ除去すると合計金額が 7 万円だという。思い切ってやってみようか。今年は旅行もしていないし、1 回旅行したと思えば 7 万くらいは！　そう思った俺は、「じゃあ、お金下ろしてきますから、やってください」とＯＫした。

お金を払い込んだ後、出てきた先生は若い男の先生。清潔感もあるし、腹黒そうなタイプではない。看護師さんに「30 分くらいですか」と訊くと「いえ、そんなかかりません」と言われた。実際、その通りで、手術が始まるとちょっとだけ麻酔をするのだが、ほんの 5 分くらいで二つのホクロは取れてしまった。なんと、素っ気ない。50 年も俺の顔にこびりついていた黒子はその時のひらめきであっという間に俺の人生から消えていったのだ。

俺は思い切って黒子をとった顔をインスタグラムにあげた。Facebook は友達がたくさんいるので出すのが恥ずかしい。インスタはかつての教え子など若い人たちとしか繋がっていないため、いいかと思った。「黒子をとりました！」と書いた。すると意外に好評で、普段は反応してくれない子まで「いいね！」やコメントをしてくれた。

若い人たちは、黒子をとるぐらいのことはなんとも思わないのだろう。むしろ、顔がキレイになっていいとポジティブに評価してくれている。考

えてみると、最初に外科に黒子除去の相談に行ってから 30 年が流れている。あっという間の 30 年間だった。俺はその間ずっと独身で、子供もなく、学生のような生活をしてきたので、時間の流れを忘れているのだが、気づかないうちに確実に社会は進化していたのだ。今となっては男性も黒子を取りましょうみたいな広告もしばしば見かける。これはおそらく消費社会に踊らされている面もあるのだろうけど、男が外見を気にしても構わなくなったことは歓迎すべき進歩なのだった。

2. これからは綺麗になろう！

その後、心なしか心が軽くなった。あれは悪い黒子で、除去したことで運勢が良くなったのかもしれない。それから新しいことをどんどん躊躇せずに始めようと思うようになった。次は脱毛をやってみよう。俺は毛深いのが昔からコンプレックスで、でも昔は男が脱毛なんて！と言われていたから大っぴらにはできなかった。俺は長年プールに通ってきたのだが、「胸毛がええなあー」とじろじろ見られることがあるため、それが嫌だった。胸毛が気になるというよりも、そのことでいじられるのが嫌だったのだ。脱毛クリームなどをこっそり買って、自分で処理していた。

しかし、今は男だってきれいになっていいのだ。そういえば去年だったか、髭を永久脱毛したいとおおっぴらに言っている男子学生がいた。胸毛や腹毛は日本人は生えていない人が多いから、気にする人も昔から一部にはいたと思う。しかし、髭は誰でも生えているし、ツルツルにしたいという人は少なかった。

ところが最近になって、髭の脱毛をしている若い男性は多いことがだんだんとわかってきた。サイトを見ていても「モテる男は髭がない」みたいな広告がたくさん出ている。広告だから煽っているという面もあるのだろうが、確かに毎日髭を剃るのは面倒くさいし、ツルツルした肌の方が綺麗だ。

実は最近になって、ボクシングの練習も始めた。コロナ太りで体がブヨブヨなので、何か新しいことを始めたいと知り合いのジムに通い始めたのだった。1 年後には体を絞って、若いボクサーたちと並んで上半身裸の写真を撮りたいと思っている笑。そうなった時に毛があるのは不細工である。

そうだ！　男だって脱毛してもいいのだ！！！

黒子をとって、脱毛して、綺麗になって、裸が似合う男になる。それは若い頃から憧れだったけど、若い頃はそれを追及できなかった。アラ還になった今それを追求して、終わりの人生は自分の理想の体で過ごすというのはどうだろうか。

そんなことを考えているとなんとなく歳をとることも楽しくなってきた。

3. バケットリスト

Bucket List という言葉がある。死ぬまでにしたいことのリストだ。以前、ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンの主演で『最高の人生の見つけ方』という映画があったが、この映画の原題が Bucket List である。もう余命が長くない男たちが死ぬ前にしたいことをしようとする話である。

アマゾンで調べていたら、なんと「死ぬまでにしたい 100 のこと」というノートも出ている。俺も、そういうリストを作らなきゃいけない年齢に差し掛かっている。これまでにも書いてきたが、俺の人生の中で「死」が現実味を帯びてきている。徐々に親戚やお世話になった先生が亡くなっているのだ。俺はもうすぐ 57 歳だ。還暦まで 3 年。若い頃は還暦と言ったら、相当のおじいさんだと思っていた。ところが意外にそうではないのだ。自分の抱いていた 60 歳のイメージには全くそぐわないまま歳だけ取ってしまった。この頃は寿命が伸びているので、昔の 60 と今の 60 では大きく違っているが、それにしてももうシニアの年齢であり、後 3 年経てば、映画も常時シニア料金で見られるようになる。

別に永久に生きていたいわけではない。だけど、

死ぬというのは怖い。人間だったら 100%死ぬのだけど、死は誰も経験したことのない世界だ。死後の世界について書かれた本はたくさんあるが、どこまで本当なのか、眉唾である。生き返りを信じる人もいるが、転生するというのもそれはそれで怖い。今の自分が無になることに変わりはないからだ。

死んだ後には新しい世界が広がると信じたいところなのだ。無にはなりたくないのだった。しかし、現実にどういう世界に行くことになるのかは誰にもわからない。そう考えていると不安はどんどん募っていくのだった。

とりあえず、生きている間は自由にしたいことをして、自分の気持ちを紛らわすしかない。問題なのは、100 もしたいことがあるのか？　ということである。まず、ボクシングができるようになって、しまった身体になりたい。そして脱毛して、若い男性たちと並んで、上半身裸の写真を撮る、これが１つ目である。スポーツ音痴だった俺は、何よりもスポーツマン的外観に憧れるのだ。

次にしたいことは、キリスト教を学び、最終的にはクリスチャンになることだ。思えば、キリスト教を勉強し始めたのも、死への恐怖がきっかけだった。アメリカ人は天国や死後の世界を信じている人が多いので、あやかりたいと思ったのだった。また俺は故郷に遺恨を抱いているため、家族の墓には入りたくない、だけど、感情的な理由で親や兄弟とは別の墓に入るのは親不孝だ。バチが当たるかもしれない。日本人でクリスチャンの人は自分で墓地を作ることもあるらしい。ずっとアメリカが好きだった俺にはキリスト教系の墓はピッタリだし、これから先、生粋のクリスチャンとして信仰を深めることができたら、家族とは違った墓に入ることも許されるのではないか。これがリストの２つ目である。

映画に出たいという気持ちもある。最近になって映画関連の仕事をしている人と知り合ったので、小さい映画だったらそのうち出してくれるかもしれない。しかも自分のイメージを崩したいから、それこそ、おじいさんボクサー役とか男っぽい役をやってみたい。これが３つ目だ。

死ぬまでに一つくらい楽器がこなせる人間になりたい。ピアノがいい。以前ギターに挑戦したことがあったが上手くならなかった。俺は学校時代、スポーツは苦手だったけど、音楽は得意だった。意外にスムーズにできるようになるかもしれない。これが４つ目。

仕事が定年になって、時間のゆとりができたら、もう一度大学院に入って、博士号を目指したい。今は大学院まで行く人は大抵は博士号を所得する。俺たちの頃は博士課程まで行っても、博士号はもらえなかったので、単位所得満期退学ということになっていたが、今となっては、博士号がなかったら就職ができない。だから若い人は持っているのだ。俺も冥途の土産に博士号をとりたい。そして、棺の中に博士号を入れて眠りたい。俺の人生は勉強の人生だったのだから。これが５つ目。

他には特別何もない。それほど思い浮かばない。

６つ目に思うことは、とりあえず、日々をひたすら生きて、定年まで仕事をまっとうしたいということ。７つ目には、毎日、きちっと掃除をして、食べ物にも気を使い、凛とした生活を死ぬまで送りたいということ。

そして何よりも、死ぬまでにこれまでのトラウマをすべて解消し、俺を傷つけてきた人全てを許せる人間になり、最終的には死を受け入れられる人間になって、俺の人生の物語を完結させないと思うのだった。これが８つ目のそして一番大きな目標である。

100 のリストを完成させるにはあと 92 だなあー。小さなしたいことだったら日々生まれてくるだろう。あのレストランで食べたい、あの演劇を見たい、あそこに旅行に行ってみたい、あの本を読みたい。しかし、そうそう大きなことは今更生まれないに違いなかった。もうこの年になると夢も見ることができなくなってしまっている。

この頃時間すら持て余してしまうのだ。昔だったら、自転車を走らせ、市民センターで本を読ん

だり、公園を徘徊したりしていたのだが、今はそれすらもしんどくてできない。60 代くらいになると体がさらに老朽化してくるだろう。60 代くらいまでは大丈夫な人が多いが、70 になるとどんと体が落ち込むという話も聞いたことがあった。

4. 複雑な背景のお坊ちゃん

この頃、昔の日本映画がどんどんソフト化されていて、Amazon プライムなどで配信されたりもしている。で、この頃、凝っているのが石原裕次郎の映画だ。『陽の当たる坂道』『あいつと私』『乳母車』を続けてみた。いずれも石坂洋次郎の原作である。

俺は中学の頃、石坂文学が好きだった。俺が理想とする男性像が描かれているからだった。複雑な背景をもったお坊ちゃん。それが石坂文学に登場する男性像だ。ちょっとひねているけど、罪がなくて、意地悪じゃない。

中学１年の頃、石坂洋次郎の文庫本を読みながら寝床に入ったものだ。とりわけ好きだったのは『寒い朝』である。これは高校生の話なので、歳が近かったせいで興奮したのだろう。

俺と彼が違っているのは、俺はスポーツ音痴だということ。それと男の子集団の中に入れない子だったことも違っている。

俺はあの当時から人生のどん底へハマっていこうとしていた。学校では、女子たちから「気持ちが悪い」と言われ続け、接触するとティッシュで黴菌のようにふかれ、同一化する男の子も見つからず、体育の先生からの暴言、周りの無理解、学校では誰とも話さない。

『寒い朝』を何度も読んで、主人公の男の子と同一化し、夢の中に浸るのが、あの当時の俺の楽しみだった。思えば、あの時に私立の学校に行っていたら、スポーツを始めていたら、切磋琢磨しあえる友人が見つかっていたら、俺はそのまま石坂文学の主人公のような男の子になって、普通に平凡な幸せを手にすることができたのかもしれなかった。しかし、俺はあの時にそういう生き方は選べなかった。俺のせいではない。他の誰かのせいでもない。運命がそういう状況を与えてくれなかったのだ。

俺だって、複雑な背景を持ったお坊ちゃんだ。お金で困ったことは一度もない。必要なものは必ず、買ってくれる家だったのだから、石坂文学の主人公たちと近いのだ。俺はやはり自分をちょっとスライドさせたような人に憧れる。この人だったら、なりたい、そしてある面、なれそう。そういう人が理想の男性なのだ。

五十歩百歩でなれそうな人物になれなかったこと。それが俺を今でも苦しめる後悔だった。絶対になれないような人物ではなく、もうちょっとでなれそうだったのに、そうなれなかった。

そして、運命の悪戯で俺の人生は不登校へと向かい、その後それを十字架として背負わなくてはならなくなったのだった。

5.『朝が来る』（河瀬直美監督・2020）

河瀬直美の映画は海外での評価は高いものの俺はこれまであまりいいとは思わなかった。ドキュメンタリーのような作りでドラマ性が希薄なので、うんざりしてしまうことの方が多かったのだ。顔のアップを延々と撮ったり、台詞のない場面が続いたり。日本の風物がたっぷり描かれるから、外国では評価が高いけど、これが日本だと思われたら困ると思っていた。

しかし、今回はよくできている。中学生で妊娠してしまい、気がついたときにはもう中絶もできなくなってしまっていた女の子が、生まれた子供を里親に出すという話である。

もらってくれる方の夫婦は、男性の方が精子が少なくて子供ができないため、斡旋してくれる ＮＰＯ みたいなところに相談に行くのだった。この ＮＰＯ 的な団体の様子が極めて興味深い。里親になる条件として、妻が仕事をしないで家庭に入ることが挙げられる。これは何故なのか。実の子で

はないから、うまくいかない可能性もあるから、それで仕事を言い訳にしてネグレクトされるのは困るということなのだろうか。

子供を里親に出す方の女の子たちが一緒に暮らす、海の島みたいなところの様子も興味深い。実際にこういうところは存在しているのか。

里親に出す時点では彼女は優しいいい女の子なのだが、次第に荒んでいく。

中学の時に子供を出産するなんて重過ぎる十字架である。それを背負うしかなかった彼女はその後も社会の片隅を生きるしかない。俺は彼女の姿に自分を重ね合わせた。俺が普通に学校生活を送っていたら、俺は医者にだってなれたかも知れない。エリート大企業に就職できたかも知れない。しかし、運命がそれを許さなかったのだった。

人間の人生って、つくづく、そんなたくさんのことが起きるわけではない。むしろ三つ子の魂百までのことが多いはずだ。

俺の人生はまさにそうだ。

15 の時に心が壊れて、その後は壊れた心を修理するために費やすような人生だ。結局、俺の人生に神様が用意してくれていたことは、映画、文学、ジェンダー、スポーツ問題、女性との確執、故郷への憎しみ、といったところだ。

この中で映画や文学は今となっては、それを研究するのが仕事となってしまった。

スポーツは、そのコンプレックスのおかげで水泳やボクシングを始めることになった。水泳は昔は何キロも泳げたものだ。

故郷は、休み中の里帰りを別とすれば、帰るのは墓に入る時だ。

ジェンダーに関しては、全く理解してくれない人があまりにも多いので、それが辛いところだけれど、でも、それが執筆のモチベーションになっている。

やはり残された課題で最も大きいのは女性との確執だろう。

『月の輝く夜に』という映画で、夫の浮気に泣かされている妻が、別の男に次のように尋ねる。「男はなぜ、複数の女を追うの？」それに対して、彼は「さあ、死が怖いからかも」　この答えを聞いて彼女は「答えてくれてありがとう」と満足。彼女のふに落ちる答えはこれだったのだろう。

俺は女の人たちに問いかけたい。「なぜ、女は男を『気持ち悪い』と言ったりするの？」笑。誰かふに落ちる答えを与えてください！！！

役場の対人援助論

（３５）

岡崎　正明

（広島市）

混ぜるな危険。その名は･･･

カイジが大事

Ａさんは対人援助業界の先輩。私よりも経験豊富な大ベテランである。
そのＡさんと、ちょっとした連絡事項を交わしていたときのこと。

「都合があって昨日休んでね。実は息子が体調を壊して…」

聞けば自律神経が不安定となり、今は大学を休学中。最近は鬱傾向もあるというので心療内科にかかり始めたという。家族と会話はできるし、軽い外出なら何も問題ないが、進路のこととなると中々前進がない。昨日はその息子さんが頭痛を訴えたため、内科受診に付き添ったとのことだった。

Ａさんはそれを深刻でもなく、かといって無理に明るくでもなく、さらりと世間話のように語る。「以前は言わないようにしてたんだけど。もうこの際いいかなって。逆に話した方が思わぬ情報がもらえたりするしねー」と笑った。

それを聞いて私は「さすがＡさん。見事だな～」と、感心と尊敬の念を感じずにはいられなかった。

自殺が増えているという報道がある。警察庁によれば今年 10 月に全国で自殺した人は 2153 人で、去年の同じ時期より 600 人以上、率にして約 4 割も増加している。1ヵ月の数だけでアレコレいうのは気が早いかもしれないが、多くの人を驚かせた複数の有名人の自殺報道を思い出し、そんな傾向があっても不思議ではないと感じてしまう。

はた目には何の問題も無く、仕事もプライベートも充実しているように思われた人が突如亡くなる。家族はもちろん、周囲に与えるショックも大きいだけに、その原因や理由について様々な憶測が飛び交う。
「仕事？お金？恋愛？お酒？病気？」…いくら考えても答えは出ないが、ひとつだけ言えることがある。それは当人が死ぬほどに辛く感じている悩みや問題を、ほとんど誰にも開示することなく、１人抱えたままでこの世を去ってしまったという事実だ。

以前ご紹介した、岡檀著「生き心地の良い町　この自殺率の低さには理由がある」（講談社）。徳島県の南端にある小さな町が、なぜ全国的に見て突出して自殺率が低いのかをテーマに書かれた、興味深い本だ。
この本で取り上げられた地域のコミュニティ特性のひとつが、積極的な個人情報の開示だった。

その町には古くから「病（やまい）、市（いち）に出せ」という格言が伝えられており、その意味するところは「病気や家庭のトラブルなど、何か困りごとがあれば、とにかく早めにみんなに開示したほうがいい。そうすれば、誰かから適切な助言や、有用な情報がもたらされる」というもの。

私はこの話から着想を得て、個人情報は「守る」のも大事だが、それだけではダメで、むしろときには情報を積極的に開示して解決にアプローチしていく「攻め」の姿勢が必要ではないかという話をした（役場の対人援助論 21 号「個人情報。守るも、攻めるも」）。

困りごとを早めに誰かに開示し、助言やヒントをもらう。その方が 1 人で悶々と悩むより、解決につながる。たしかに「三人寄れば文殊の知恵」という言葉もある。考える頭が多い方が、打開する確率は上がりそうだ。

だが効果はそれだけではない。思えば深刻な悩みとは、簡単に解決できない厄介なものであることが多い。病気や障害、介護や借金など、周囲に相談してもすぐに解決とはいかないことも多いだろう。それでもやはり「病を市に出す」。それはとても意味がある行為のように思う。自殺者増加のニュースを見て、改めてそう確信した。

なぜならその行動は、少なくとも私たちの大敵である「孤立」という厄介者を遠ざける。そのカは充分に持っているのだから。

私たちの本性

ヒトは「群れ（＝社会）」を作る生き物だ。野生動物のような速い足も、強いカも、鋭い牙もない私たちは群れを作り、分担や助け合いをすることで生存する戦略を選んだ。ヒトは社会の中で、人と人との関係性の中に生きる。「人（ひと）」の「間（あいだ）」と書いて「人間」とは、よく言ったものだ。だから私たちには本能的に相手に「存在を認知されたい」「自分を理解されたい」という欲求がある。

子どもは注意獲得行動といって、怒られてでも他者に注目してもらえる行動をとるこ

とがある。それは無視され、存在を認められないより、叱責されてでも注目された方がずっとマシだからだ。
誰にも顧みられない、認められない、分かってもらえない。そうしたいわゆる孤立状態に置かれること。または自分が孤立していると感じること。私たちにとってそれは、ときに致命的なダメージを与える危険性をはらんでいる。

2005 年に行われた OECD 加盟国の社会的な孤立に関する調査がある。この調査で「友人や同僚・地域コミュニティなどとの交流が全く無い」または「ほとんど無い」と答えた人の割合は、オランダが 2%と最少。続いてアメリカ 3.1%、イギリス 5%、フランス 8.1%と、欧米のほとんどの国が 10%以下だったのに対し、日本は 15.3%と加盟国中で最大だった。

文化や宗教の違いがあるから簡単には比較できないが、この数字はこの国が「孤立しやすさ」というウィークポイントを抱えていることを明らかにしていると思う。
核家族化や地縁・血縁といったつながりの希薄化。数年前から叫ばれている「無縁社会」の問題。若年層（15～39 歳）の死因第一位が自殺という先進国唯一の事態など、多くの事実がそれを物語っている。
「人様に迷惑をかけてはいけない」という美徳や、個人の個性より適応や協調に重きを置く価値観なども影響しているのだろう。私たちは互いを気遣うあまり、おのれの弱みや事情をさらけ出せないというジレンマの中にいる。

だからこそ、最初に話した A さんの行動は見事だなあと思う。先輩でもある A さんが年下の私にもすんなり弱みを語る。まさしく「病、市に出す」の実践。その行動は、A さん自身の健康に寄与するだけでなく、業務の連携にもプラスとなる（日程調整などで考慮する材料となる）し、後輩の私への良き見本ともなる。たとえすぐに問題の解決にはつながらなくても、その語りは A さんと息子さんの孤立を遠ざけ、自分や周囲を助けることにつながる。

孤立の破壊力

近年様々な報道で話題となることが多い児童虐待。今の私の仕事の中心にあるテーマだが、その原因やリスク要因について、これまで多くの研究がなされてきた。主なものだけでもあげると「貧困」「親の被虐待歴」「親の疾患や障害」「子どもの育て難さ」など、いろいろな要素が複雑に絡み合うことで、虐待が起こりやすくなるといわれている。

確かに現場にいる感覚でも、その関連性は腑に落ちる。だが世間を見れば、経済的に苦しくても虐待が起きていない家庭はいくらもあるし、虐待を受けた人が必ずしも我が子を虐待してしまうわけでもない。実際自分は叩かれて育ったからこそ、我が子には絶対に手を上げたくないという人も結構あったりする。

ではその差が生じるのは何なのか。
私はその違いを生む重要な引き金のひとつが「孤立」ではないか。そう思えてならない。

例えばひとロに貧困といっても、親族や地域とのつながりをもち、ひらかれた雰囲気の家庭と、貧困なうえに地域からも孤立し、誰も訪ねることのない家庭では、どちらに支援の手が入りやすく、難局を乗り切る力があるか。それは火を見るよりも明らかだろう。

同じように「親の被虐待歴」「親の精神疾患」「子どもの障害」などがあると、それだけでも生きづらさにつながるが、支える人や共感してくれる仲間がいることで、乗り越えていける例も少なくない。

しかしそこに「孤立」がプラスされるとどうなるか。

誰にもどこにも相談がされない、つながらない。適切な知識や、有益な制度の情報も入らない。支援の手も拒絶される…。当然事態は複雑化し、問題は雪だるま式に深刻化するだろう。そんな高ストレスな家庭で、最も弱い子どもという存在にしわ寄せが顕在化する。それが虐待だ。

そういう意味で「孤立」という要素が加わることは、虐待への最後の扉を開いてしまうカギになるような気がしている。

そんな風に考えていくと、これは何も児童虐待だけに限ったことではないことに気づいた。

認知症・DV・いじめ・依存症・独居高齢者・LGBT などなど。現代社会で語られる様々な課題も、「プラス孤立」が当然のように大きなリスクを生む。

例えば独居高齢者や LGBT はそれ自体が即問題だとか不幸だということでは本来ないはずだが、そこに孤立が加わることで問題化し、孤立死や自殺といった新たな課題が生まれてしまうこともある。また、認知症や依存症などの疾患や、DV やいじめといった関係性の問題は、それ自体を抱えることに負担もある上に、孤立化することで悩みが深刻化し、問題解決を益々遠ざけてしまうだろう。

最近話題のユーチューバーで、社会派お笑い芸人のせやろがいおじさんも動画で話していたが、孤立ってやつはまさに混ぜるな危険！トイレの洗剤以上に扱いに注意が必要な代物なのだ。

そんなわけで自分や周囲の誰かが困難に出会ったときには、「ここに孤立は混ぜたらアカン！」ということだけは、ぜひ肝に銘じておきたい。別に無理に誰彼ともなく話す必要はないが、気を使い過ぎて言わないのはもっとよくない。下手をすると命の危険を伴うこともあると、覚えておいて損はないのではないだろうか。

新型コロナの流行により、外出自粛やソーシャルディスタンスなどが日常となってしまった昨今。人がつながることが難しくなっている今だからこそ、ウイルスと同じくらい、孤立への警戒もより意識していければと思う。

臨床のきれはし

浅田 英輔

Sheet12

decisiveness

ここ最近、「フラジャイル　病理医岸京一郎の所見」という漫画にハマっている。岸京一郎という病理医をめぐる、いわゆる医療漫画なのであるが、この中で一貫して語られているのは、判断や決断の責任だ。決めるということの重要さ、責任の重さ、そこまでたどり着くためにやるべきことの大切さについて、繰り返し描かれている。病理医なので、病気などを診断することがメインであり、診断を決めることがテーマになるのはもちろんだが、「自分の人生を決めること」「自分が大事にすることを決めること」など、とにかく「自分がはっきりと決断すること」について描かれる。決断とは、ここまで力を尽くしてなされるものなのだと見せつけられるのである。無駄に思えることもあるし、それをしたから必ず報われるものでもない。正しいと思える決断だからといって、誰もが賛同するものでもない。むしろ、自分の決定を通すために戦わなければならない場面も多い。岸京一郎は、そこは決して譲らないのだ。

フラジャイルについて語りたいことはたくさんあるが、今回は「決断すること」について考えてみようと思う。

この頃、業務の効率化に触れることがちらほらあり、組織としてどうすれば短時間に多くの仕事がこなせるようになるのか考えている。ひとつの職場において、仕事がうまく進まないのはなぜだろうと考える。

有能なスタッフがいないのか？上司がダメなのか？給料が低いからやる気が起きないのか？仕事が多すぎるのか？ICTの活用ができないのか？無駄を削ることができないのか？

原因はいろいろと考えられるし、どれも当てはまることだろう。近頃考えているのは、判断、決断の大切さだ。

我々は、仕事だけでなく日常の生活の中で、大小非常に多くの決断をしている。「何時に家を出ようか」「傘を持ってでかけるのかどうか」「昼ごはんは何にするか」「今日の子どもの迎えは誰がいくのか」といった毎日のことから、「洗濯機を買い換えるかどうか」「次の車検はどうするか」「引っ越すのかどうか」「子どもが熱あるがどうするか」「子どもを塾にいかせるかどうか」「習い事をやめたいと言っているのをどうするか」「妻が怒っていることをどうやってなだめるか」などなど、様々なものを決めていかなければならない。それには、「天気予報で降水確率

90%っていってるんだから、傘を持っていこう」と決めやすいものから、「妻がなぜ怒っているかわからないし、お詫びに物を買っていったら逆にもっと怒りそう」など、正解がわからないものもある。そういうものも、決断していかなければならないし、正解がないものほどエネルギーを使う。金額や責任、今後への影響が大きいものほど、考えなければならないものは多いし、それに伴って「決断すること」自体に消費するエネルギーも多い。今日の晩ご飯のメニューを決めるより、マイホームを建てるかどうかを決めるほうが、だいぶ多くのエネルギーが必要だろう。仕事の上では、何千万円もする新規案件の契約の相手を決めるのにも多くのエネルギーが必要だろう。賞賛や批判につながるかどうかというものも関係が大きい。

行政における新型コロナウイルスに関する決定は、「通常業務をどこまで縮小するか」といったものや「この人を入院とするか、ホテル療養とするか」「どの職員をホテル療養対応に回すか」「どこの病院に入院させるか」「マスコミへどこまで発表するか」といったものなど、さまざまな事のひとつひとつへの決定に気を遣う＝エネルギーをつかうものが多い。

児童相談所に来る虐待相談でたとえると、「明らかなひどい身体的虐待」であれば、一時保護するという判断は難しくないことが多い。国が示した指針に合致するし、保護する理由も明確だし、保護者が怒鳴り込んできても対応は大体決まっている（もちろん、簡単だという意味ではなく、対応や継続的な支援に対するエネルギーはとても多く必要）。保護しないという決断をしたほうが批判される可能性が高いのもわかる。「一時保護する」という決断に要するエネルギーは、まだ少ないほうだ。

微妙な心理的虐待などは難しい。目に見える明らかな傷などはないが、子どもに悪影響が出ているのはプロが見ればわかる。一時的にでも家から離した方がよさそうだ。でもそれを保護者に理解してもらうのは難しい場合も多い。今日保護しなければ、明日命にかかわる、ということでもない。でもいまこのタイミングでなければ保護は難しいかもしれない。などなど、考えることが多く、決定する人の裁量で判断しなければならないものが多い。

こういった「どっちもありだが、どちらかに決めなければならない」「しかも、それは自分以外の多くの人への影響が大きい」ものは、決めた人の責任を問われることになる。当然、なぜそう決めたのか、根拠や理由を言語化する必要はある。でもその根拠も絶対のものではない。結果にも責任が付きまとう。こういうものの決断をするのには、とてもエネルギーを使う。

また、判断をいつも1人でしなければならない場合はよりエネルギーが必要だろう。家庭であれば、パートナーがいるなら、たまには人のせいにできるのだ。もちろん、2人で話し合って決めて、2人の責任にすることがよい。そうすることで、だいぶ気持ちが楽になるのだ。組織で管理職として決定するのであれば、信頼できるNo2がいると、だいぶ楽になるだろう。ただし、最後に決めるのは長（課長やら部長やら所長）の大きな役割のひとつである。

こういった決断について、 現代の職場では非常に脆弱になっているのではないだろうか。私は公務員組織しかほとんど知らないが、決定力の弱い長は、会議の場でもはっきりしたことが言えず、「所長がOKといえば終わる会議」が延々と長引いたりする。すぐに「本庁（県庁）に確認しろ」とか「国はなんと言っているんだ」とか「他県ではどうなってるんだ」といったことを言いたがる（もちろん、キチンと県庁や国に確認しなければならないものもたくさんある）。

一般的な民間企業も似たようなものではないだろうか。検討、決裁に時間がかかることが日本的企業の問題だとされることもあるが、「上長の意見を聞かなければ決定できない人になる」という弊害はとても大きいだろう。「上司がダメダメだからだ」というニュアンスに聞こえたかもしれないが、その上司だって10年前は部下だったはずで、たぶんそのころから大して変わっていない。これは、長年かけて培ってきたことの結果であり、特定のダメ上司の問題だけでなく、システムの問題と考えられる。

我々は、もう少し「決断すること」「決断したこと」に意識を向けるべきである。日常的に起きる小さな決断について、「誰が決めたことか」「自分は決定に参画したのかどうか」「うまくいかなかった場合は、誰がどういう形で責任をとるのか」「次に決定しなければならないのは何か」ということを、もう少し明確に、具体的に、見えるようにしていくことが大事なのではないか。

先ほどは「所長がダメだ」とか「課長がなってない」みたいな言い方をしているが、そもそも、どこの組織でも「所長とは」「課長とは」といった教育・指導をしているのだろうか。管理職研修はしているようだが、「業務管理とは『計画的に仕事しなさい』とか、遅れていたら『間に合うようにしなさい』と部下に言うこと」くらいの理解しか得られていないとしか思えない。管理職がやるべきことについては、まだまだ「見て学べ」の域にあるのではないだろうか。

もっと若いときから、決定すること、判断することを明確にしていくことが大事である。「あなたがそう決断した」「自分がそう決めた」という経験は誰でもしているはずだが、あいまいなままになっているのではないか。

岸京一郎は、診断について他の意見が出た時に、病理医は自分の意見をしっかり持ち、戦うべきだとしている。「そこで戦わない病理医はクソでしょ」「病理医の価値がない」と言い切る。「診断はどうしても間違いがある」「8割正しければよいほうだ」という臨床医に対して、「ウチは10割出しますよ」と言い切る。人としての性格は置いておくとしても、そうありたいものである。

発達検査と対人援助学

② 発達検査のミクロ、メゾ、マクロ

大谷　多加志

違和感

発達検査について、時に特定の検査項目に対する反応をもとに「この反応からどのようなことが言えるか」「この反応から自閉症スペクトラムの可能性を指摘してもよいか」などのご質問を頂く場合があります。もちろん、発達検査の結果は特定の障害や疾病の診断の根拠にはなりませんし、その中の特定の項目に対する反応で断定的なことが言えるわけもありませんが、“なぜこの質問と繰り返し出会うのか”、“この質問を受けた時の、何とも言えない違和感は何なのか？”という疑問がくすぶっていました。違和感の正体は言うならば、“なんだか極端な話だな…”という感覚なのですが、この「極端さ」をどう表現してよいものなのか、つかみかねていました。先日、社会福祉に関連する資料を眺めているときに、「ミクロ・メゾ・マクロ」という項が目にとまりました。これまでに何度も目にしては、“まあ、当たり前のことが書かれているな”とそれ以上気に留めていなかったのですが、この時は“例のもやもやをこれで整理できるのでは？”と思い至りました。

ミクロ・メゾ・マクロ

まず、「ミクロ・メゾ・マクロ」について説明すると、「ミクロ」は一般に小さいとか微視的などの意味を持ち、ソーシャルワークにおいては個別援助など、「個」に焦点をあてた捉え方を指します。一方の「マクロ」はその反対で、大きいとか、巨視的などの意味を持ちます。ソーシャルワークの中では地域援助や社会への働きかけなどを指します。「メゾ」は「ミクロ」や「マクロ」に比べると聞きなじみが薄いかもしれませんが、「中間の」を意味しており、ソーシャルワークでは集団援助など、個人と地域との間である家族や「グループ」や「集団」に焦点を当てます。ちなみに、この「メゾ」は音楽で習った「メゾピアノ」とか「メゾフォルテ」とかの「メゾ」と同じだそうです。

「ミクロ・メゾ・マクロ」が指し示すものは分野によっても少しずつ違って、例えば「ミクロ経済」とか「マクロ経済」と言ったりすることがありますが、この場合の「ミクロ経済」では消費経済の最小単位である「世帯」に焦点をあてます。福祉でのミクロは「個人」ですが、経済という視点で見ると「世帯」であるということで、なるほどと思います。

発達検査のミクロ・メゾ・マクロ

これを踏まえて、発達検査における「ミクロ・メゾ・マクロ」とは何かを考えました。冒頭の例を用いて具体化すると

ミクロ：子どもの具体的反応（特定の項目での特定の反応など）
メ　ゾ：検査者による臨床的な評価（発達の見立てや解釈）
マクロ：フォーマルな検査結果としての評価（通過・不通過の判定や数値的な結果）

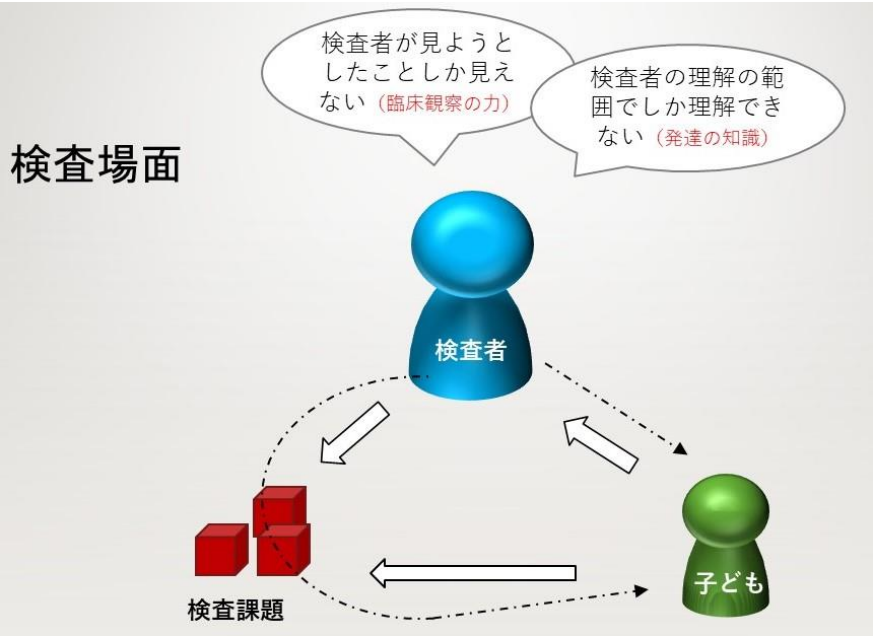
という風に整理してみました。

要するに、検査場面における子どもの具体的な反応をミクロの視点で観察し、それを数千名超の標準化資料というマクロな基準と照らし合わせることで対象者の発達状態を評価することが、発達検査が行っていることであると言い換えることができるかもしれません。

このように考えると、冒頭で述べた違和感が少し理解できたような気がします。通常、「特定の障害や疾患の診断」は医師を中心にさまざまな研究知見に基づいて定められた「診断基準」に照らして行われます。たくさんの臨床事例や臨床知見に立脚したものであり、「マクロ」の視点によるものと言えるでしょう。つまり、「特定の検査項目に対する特定の反応」という「ミクロ」な要素からいきなり「マクロ」である診断について語り始めることに、ギャップというかズレを感じていたのだと思います。

一般に、「ミクロ」と「マクロ」は優劣ではなく、それぞれの視点から見ることが重要です。例えば「診断」について言えば、客観的かつ医学的な評価である「診断」があることで社会的な理解や配慮が得られやすくなったり、社会的施策が利用できるというメリットがあります。一方で、「自閉スペクトラム症です」と言われても、具体的に、どのような時にどのような配慮や支援が必要であるかは個人によって様々で、個別性が伝わりづらくなるというデメリットもあると思います。

検査場面で検査者が行っていることを図のように整理してみました。



この中で「ミクロ」の視点は、子どもの行動や反応です。各検査課題に対する反応はもちろん、検査課題とは関係のない子どもの行動（例えば離席とか、姿勢の崩れとか）も「ミクロ」で観察すべき点でしょう。検査場面における子どもの反応は、検査者の行動観察によって確認され記録されますが、この内容は「検査者が観察しようと思っているポイント」に限定されてしまうことに注意が必要でしょう。例えば、子どもが用具を操作している最中に、その様子には気を配らず検査用紙にメモを取るのに忙しくしていたとすれば、課題の成否の判断に必要な情報は得ることができますが、“どのような過程で取り組んでいたのか”という情報は抜け落ちます。子どもが課題に取り組みながらつぶやいていることも、中身まで聞き取ってみれば何か意味が見えてくるかもしれませんが、『検査中、独語が多い』と記録してしまえばそれ以上の解釈は不可能になります。「メゾ」、「マクロ」の視点で考えるために必要な一次情報でもありますので、実はここが一番重要で、それゆえに検査者には十分な「臨床観察」の力が求められると言えます。

次に検査場面における「マクロ」について考えます。検査項目の「通過」「不通過」の判定や、発達年齢などの数値的な結果の算出は、数千名の標準化データに基づいて客観的に判断されるものであり、幅広い年齢の多人数の発達の経過という「巨視的」な視点から、当該の子どもの発達をみようとしていることになります。「発達年齢」や「発達指数」などの一定の客観的な指標が得られることが利点ですが、数値的な結果は同程度であっても臨床像には大きな違いがあるという場合も少なくありません。「診断」と同じで、大きな傾向をつかむことはできますが、個別性は見えづらくなります。

そういった意味では、臨床的な検査の利用においては、「ミクロ」の行動観察をベースとし、「マクロ」な評価をいったんは行った上で、子どもの個別的な発達像について「メゾ」の視点で考えていくことが重要かもしれません。「ミクロ」で見た具体的な事象をもう少し抽象化したレベルで整理したり、「マクロ」の視点で得られた結果をもう少し具象化して掘り下げたり、というイメージです。

ミクロからマクロ、メゾ

それぞれ、少しだけ例を挙げてみます。ある検査結果の記録の中に、このような文面がありました（実例を元に創作しています）。『積木の扱いが荒い（衝動性？）』です。どうやら、積木を提示した時に、机に打ち付けたり、放り投げたりし、検査者が期待したような反応（積む）が生じなかったようで、その原因を「衝動性」に求めています。「積木を机に打ち付けたりする」というのがミクロの事象で、その背景仮説としての「衝動性」がマクロの視点による解釈ということになります。が、やはりやや飛躍がある感は否めません。「ミクロ」からいきなり「マクロ」に飛んでいるからかもしれません。その時の検査結果を全体的に眺めてみると、どうやら認知的な発達の水準は 1 歳を超えていないようでした。ピアジェの理論で言えば「感覚運動期」にあたる時期です。自分の身体や感覚を使って周りの世界を認識していこうとするため、手にした物を口に含んだり、何かとぶつけたりして、その感触や手

ごたえなどを通して対象物を理解しようする時期で、この子どもの積木の扱いも発達段階に応じた自然な反応であるようにも思えます。要約すると、「積木の扱い」というミクロの事象を、「全体的な発達」というマクロから捉えなおすことで、『現在の認知発達の状態に応じた自然な反応である』とメゾの視点での解釈が可能になったと言えるかもしれません。

マクロからミクロ、メゾ

検査結果の指数について、認知面と言語面で見た目上の数値に差があるケースでした。言語面の方が数値は高いのですが、実際の子どもの様子を見ると特別に“言葉の方が達者”という印象でもなく、数値的な結果に検査者が戸惑っていました。

そこで具体的に各検査項目への反応を確認してみると、認知面・言語面とも一定の年齢区分の項目までは確実に通過しているのですが、認知面が頭打ちになった後、言語はやや不確かな答え方で通過したりしなかったりしていることがわかりました。認知面の方は、その辺りから検査項目の数自体が少なくなっていたので、検査構造が影響している可能性もあります。言語面の課題には、“とにかく何かは答える”という対応をしている子だったので、“合っているのか違うのか微妙”な反応や、“一応合っているけど、本当に質問の意味がわかって答えているのか…？”と思われる反応もありました。このように考えると、確かに言語の結果の方がいくぶん高いことは間違いないのでしょうが、認知面も言語面も確かさがある発達の水準はほぼ同程度で、それ以降は“とにかく反応する”という方法で部分的であれ達成することができるものが言語面の方に多かったという捉え方も可能かもしれません。この例は「検査結果の数値の差」というマクロの捉え方と、「普段の子どもの印象」というミクロの捉え方の間のギャップについて、各年齢区分における課題の達成の度合いや各検査課題での反応内容という「メゾ」の視点でとらえなおしたと言えるかと思います。

ミクロ、メゾ、マクロを行き来する

実際のところ、子どもの具体的な行動や、それに基づく検査の判定は、一定の客観的事実であるわけですが、そこから“子どもの発達についてどのようなことが言えるか？”という解釈の部分については、あくまでも仮説にとどまることになります。もちろん、仮説には有力な仮説から迷信・デマレベルものまであり得るわけですから、私たちはなるべく妥当性のある、支持根拠の十分にある仮説を提示することが必要です。そのために必要なものが、課題の成否とは関係のない子どもの一瞬の表情や発言であったり（臨床観察）、発達に関する知識であったり、得られた情報から安易な結論に飛びつかず冷静に検討する態度であったりするのだと思います。これらを行き来しながら、子どもの行動の背景にある発達の状態や認識、思考、興味・関心などに思いを巡らせることが、実体のある子ども理解につながっていくのではと考えています。

講演会＆ライブな日々㉕

古川　秀明

免許更新

◇延長申請◇

5 年に一度の免許更新の時がきた。

ところが、コロナウイルスの影響で免許更新業務が滞っている。

私は 7 月生まれだが、申請業務が滞り、７月の時点で４月～６月生まれの人の免許更新がまだできていない状態だった。

免許更新は大勢の人が集まって行列を作るので、クラスター発生の危険性は高い。

当然自粛対象になったのだろう。

免許更新の通知のはがきが来たが、いまひとつ要領を得ない内容だった。

仕方ないので、所轄の警察署に問い合わせると、本庁からの通知がまだ来ていないので、所轄の警察署もどうして良いのか分からない状態とのこと。

とりあえず、警察署に来て、３か月の延長申請をすることを薦められた。

そうすればどのような事態になっても、３か月は免許証の期限切れで失効する

ことはないとのこと。

なるほど、警察署が分からないことを私がいくら考えてもわからない。

ここはそのアドバイスを素直に聞くしかない。

警察署に行くとたくさんの人が免許更新の問い合わせや、延長申請に来ていた。

こんなに大勢の人がいたら、ここからクラスターが発生するのではないかと心配になったが、あっという間に自分の順番が回ってきた。

免許証の延長申請だと告げると、５分と経たないうちに手続きが終わった。

免許証の裏に赤字で１０月までの期限延長が記載された。

この調子では、免許更新は１０月になるのだろうか・・・。

◇必ずチェック！◇

窓口の人に、今後どうなるか見通しはあるのか聞いてみた。

すると即座に「私たちもまだわからないのですが、スマホやパソコンは使えますか？」と問われたので、使えると答えた。

それならば、とにかく毎日大阪府警のホームページをチェックしてください。そこが最新の情報源になります。

う～ん、まるで超人気バンドのチケット先行発売の情報取得ではないか。

早いもの勝ちで免許更新ができるのだろうか・・・。

スマホやパソコンを使わない高齢者はどうなるのだろうか？

聞いてみると、使える人に頼るか、警察に電話で問い合わせてもらうしかありません、とのこと。

そんな人はたくさんおられますか？と聞くと、大阪府警だけで、毎日数百件の問い合わせがあるそうだ。

そういう現状であれば、明日から毎日大阪府警のホームページをチェックする

しかなさそうだ。

やれやれ、なんでよりによって私の免許更新時期にコロナが来るかなぁ。

もう１年ずれていたらこんな手間はかからないのに。

だけど、こんな風に時の流れによる災難を嘆く人は大勢いるだろうなぁ。

ひょっとしたらそのことが幸運に結びつく人もいるかもしれない。

いずれにしても、個人がそれをコントロールできるような問題ではなさそうだ。

よし、明日から夏休みのラジオ体操のように、毎朝決まった時間にホームページをチェックしよう！

◇いきなり更新スタート◇

翌朝、大阪府警のホームページをチェックすると、いきなり最新情報が掲示されていた。

それによると、ネットにて日にちを予約し、その日のその時間帯に住んでいる地域の警察署に行けば運転免許更新ができると書いてあった。

予約はコロナ対策のために人数制限を設定し、先着順となっていた。

早速希望の日にちと時間を入力すると、定員の三分の一も埋まってなかった。

土日の午後に集中しているのかもしれないが、いずれにしろ、希望の日時に予約が取れて安心した。

しかし、これならば昨日の三か月延長更新がいらなかったなぁ。

まぁ、所轄の警察の人もどうなるのか分からなかったのだから仕方ないか。

三か月延長せずに、いきなり第二波が来て、延長手続き業務ができなくなったら、それこそ期限切れになる可能性がある。

やっと一安心と思いきや、とても大変なことを思い出した。

免許更新には視力検査がある。

普通の視力検査だけなら問題はないのだが、私は深視力検査も受けなければならない。

深視力検査は自動車運転免許のうち、大型免許、中型免許、準中型免許、けん引免許、普通二種免許、中型二種免許、大型二種免許を持つものは必ず受けなければならない。

私は大型免許を持っているので、これに該当する。

この深視力検査は、免許更新をするたびに私のこころを悩ませる。

◇深視力検査なんか大嫌いだ！◇

そもそもなんで深視力検査が必要かと言うと、物体の遠近感、立体感、奥行き、動的な遠近感を捉える目の能力を測る目的がある。

通常の視力検査で目がいい、悪いと言われている場合は、どれだけよく見えているかという（遠見視力）概念がベースにあるが、深視力検査は、これとは異なる能力である。

人は右目、左目に映った物体を別々の物として捉えず一つの像として見るが、右目と左目の位置が完全対称にないために、同じ物体を見た時に各目に映る像に微妙なズレが出てくる。

その微妙なズレを一つの像として処理する時に、遠近感、距離感が得られる。

この距離感を感じる事により物体の位置状況が把握できるため、運転時には非常に重要な眼の能力と言える。

具体的に何に必要かというと、バックミラーである。

普段あまり気に掛けることはないと思うが、今度街で大型のトラックやダンプ、バスなどのバックミラーを観察して見られるとわかる。

普通乗用車のバックミラーはミラーが平らだが、大型自動車のバックミラーは湾曲している。

広範囲が視野に入るのだが、遠近感がかなり実際の距離とずれる。

このずれを見抜く力が深視力である。

この深視力検査は、なかなか通らない。

いくら卓越した運転技術を持っていても、これに通らないと大型免許はもらえない。

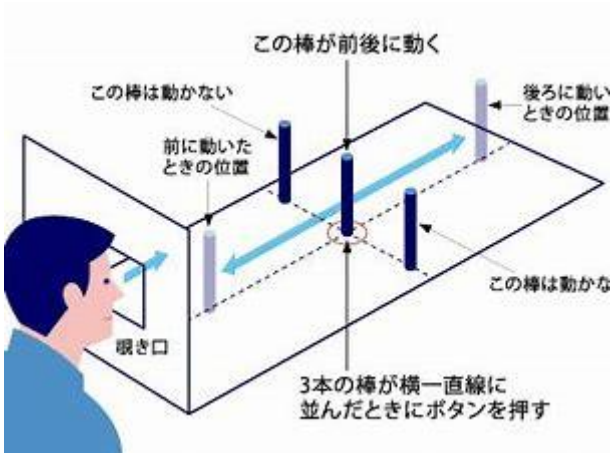
多くの大型免許ドライバーがこれに泣かされる。

◇これが深視力検査だ◇

私は２０代で大型免許を取得してから、ずっとこの深視力検査に悩まされ続けている。

なにせ、一回でパスした試しがない。

深視力検査の方法は至ってシンプルだ。



横に並んだ３本の棒のうち、真ん中の棒だけが前後に移動する。

３本の棒が一直線に並んだ時にボタンを押し、検査者に合図する。

誤差は前後で最大２センチまで。

３回連続でパスしないと合格にはならない。

なんや、簡単やんと思うなかれ。

最初は真ん中の棒が動いていることもわからない。

ここだ！とスイッチを押しても指導員に「ずいぶん手前ですね、見えてますか？」と何度も言われる。

しまいに腹が立ち、もう免許なんかいるか！とやけくそになるが、また免許を取り直す手間とお金を考えたら、ここで踏ん張るしかない。

今ここで、はっきりと、声を大にして言わせてもらうが、私はこの

深視力検査が大嫌いだ！

◇更新日当日◇

ユーチューブで検索すると、深視力検査攻略法が何本もアップされていた。

私のようにこれで苦労している人がたくさんいるのだ。

前日にその動画を何十回も観た。
しかし、これが良くなかった。

見過ぎて目が疲れ果てていた。

最後は動画の３本の棒が８本に見えた。

絶望感と後悔に苛まれながら検査会場へ。

注意書きに「受付の時間より前にお越しになられても、受付はできませんのでご注意ください」と書いてあった。

それを信じて受付時間きっかりに行くと、１５番目だった。

なんだ！嘘つき！みんな時間よりずいぶん早く来て順番取ってるやん！

しかし、文句言っても仕方ない。

私は前日に疲れ果てた目を回復すべく、疲れ目の目薬を大量にぶちこみ、なるべく遠くの緑を見るようにして目を休め、順番を待った。

１番から順番に次々と検査をパスして行った。

もっとも深視力検査をしている人はまだ一人もいない。

この調子だと、私が本日１番目の深視力検査を受ける人になりそうだ。

う～、私より前に深視力検査をする人がいて、その人が苦労している姿をみたら、自分だけではないと少しは安心できるのに・・・

◇いよいよ順番は次だ。◇

とんとん拍子に１４番目まで順番が回ってきた。

いよいよ次は私の番だ。

１４番目の人は見るからにご高齢の男性。

検査者の女性の声がなかなか聞き取れない。

検査者「○○××さんですね？」

男性「はぁ？」

検査者「ですから、○○××さんですよね」

男性「へぇ？」

検査者「免許更新の○○××さんですよね？」

男性「あんた、もうちょっと大きい声で言ってくれんと聞こえんよ」

検査者「免許更新の○○××さんですよね？」

男性「よろしい。今度からそのくらいの大きさで」

検査者「すいません、わかりました」

→これではまるで、○○さんが検査者みたいだ。

なんでもいいから、このおじいさんが早く終わって欲しいなと願いながら、私は

忍耐強く順番が回って来るのを待った。

深視力検査さえ終われば、私は優良ドライバーなので３０分の講習を受けさせすればすぐに帰れる。

このおじいさんが大型免許を持っているとは思えなかったので、視力検査のみですぐに終わるだろう・・・。

ところがそうはどっこい、問屋が卸さなかった。

◇過酷なナンバー◇

検査者「それでは最初に４桁の暗証番号を２回、合計８桁の暗証番号を決めて、打ち込んで下さい」

男性「何の番号？」

検査者「暗証番号です」

男性「銀行か？郵便局か？銀行も郵便局も忘れないようにわしの誕生日にしてあるから、１２３・・」

検査者「大声でその暗証番号を言ってはだめですよ！」

男性「あんたが暗証番号を言えと言ったから！」

検査者「だからその銀行とか郵便局ではなくて、〇〇さんが自分で決めた暗証番号ですよ」

男性「だからわしがわしの誕生日と同じ番号を暗証番号にしたんや」

検査者「いえ、違うんです。今ここで決めて欲しいんです」

男性「何を？」

検査者「ですから暗証番号です」

男性「なんで免許更新に暗証番号が？」

検査者「現在の運転免許証にはICチップが組み込まれているのですが、その中

には運転免許証の表に印刷されている内容と「本籍」が記録されています。
そのままでは、IC チップを読み取る装置を近づけるだけで、読み取れてしまいまう恐れがあり、ロックをかけて簡単に読み取れなくするために、暗証番号を 2 つ設定することになっています」

→実に見事な説明である。これで納得するだろうと思いきや・・・。

男性「わしは別に本籍がわかってもかまわんよ」

検査者「〇〇さんは良くても、個人情報なので知られたくない人もおられますから」

男性「それならその人のだけチップだかロックだかにしたらよろしい。わしにまでそれを強要するのは迷惑だ」

→私は今日中に免許更新ができるのだろうか・・・。

◇間違えてクリア◇

検査者「とりあえず４桁の暗証番号を二回その機械に打ち込んでください」

男性「わかった。これやな。別に銀行の暗証番号と一緒でもかまわんか？」

検査者「はい、〇〇さんが大丈夫ならそれで結構です」

男性「それなら１２３・・・」

検査者「だから声に出して読み上げないでください」

男性「いちいちうるさいな、あんたは。間違えてしもたやないか」

検査者「大丈夫ですよ。そこにクリアがありますよね」

男性「いやぁ、あれはずいぶん前につぶれたよ。わしも好きでよう買いに行った」

検査者「はぁ？いえ、違うんです。そこの右側にクリアがありますよね」

男性「だからあの栗屋はもうあらへん。先代が亡くなって店じまいや」

検査者「あの〇〇さん、栗屋さんではなくて、クリアというカタカナの文字がタ

ッチパネルの右側に出ていますよね」

男性「おぉ、これか、これをどうするんや？」

検査者「それを押してもらうと、間違ったところからやり直せます」

男性「なるほど、クリアを押して・・・、うわ～、全部消えてしもた！」

検査者「○○さん、長押しすると全部消えてしまいます。一字ずつ消してください」

男性「それならそうと、最初から言うてくれ。また一から打たなあかんやないか」

検査者「それはどうもすいませんでしたね」

男性「え～と、銀行と同じ番号やったな。そやし１２３・・・」

検査者「だから大声で読み上げてはだめですって」

→私は今日中に免許更新ができるのだろうか・・・。というか、今すぐに家に帰りたい。

◇過酷な視力検査◇

検査者「それでは視力検査をします。今眼鏡をかけておられますが、いつも眼鏡をかけておられますか？」

男性「いや、そうとも限らんよ」

検査者「わかりました。それではまず眼鏡を外して、上下左右どちらが開いているか教えてください。まず、これはどうですか？」

男性「右のようにも見えるが上かもしれない」

検査者「どれかひとつにしてください。見えなければ見えないと言ってください」

男性「見えないことはないが、右にも上にも見える」

検査者「それでは困ります。○○さん、眼鏡をかけていないときもおありなんですよね？」

男性「あぁ、風呂に入る時と寝る時だけ外す」

検査者「そういうのを、いつも眼鏡をかけているって言います。すいません、○○さん、眼鏡をかけてもらえますか？」

男性「今度はかけるのか？」

検査者「はい、お願いします。これはどうですか？」

男性「上」

検査者「これは？」

男性「左」

検査者「これは」

男性「下」

検査者「それでは・・・」

男性「上」

検査者「まだ何も見せていません」

→私は今日中に免許更新ができるのだろうか・・・。

◇〇〇さん、合格です。◇

検査者「はい、視力検査も OK です。〇〇さん、合格です。この書類を持って、建物の横にある試験センターで講習の手続きをしてください」

男性「ありがとう」

検査者「お疲れ様でした」

→やっと俺の番が回って来ると思いきや、〇〇さんが戻ってきた。
　いい加減にしてくれよ！

男性「お姉さん、いろいろ言ってすまなんだな。そやけどお姉さん、あんたがわしの家族やったらどんなにええやろかと思ったわ」

検査者「それはありがとうございます」

男性「今度の免許更新の時もあんたでお願いしたいんやが、指名はできるのか？」

→指名て、新地のホステスやあるまいし！

検査者「異動もありますので、指名は無理ですが、そう言って頂けるだけで嬉しいです」

男性「（私に向かって）お兄さん、待たせてしまってすいませんでしたな」

→この男性からみたら俺はまだまだお兄さんなのだ。いままでムカついていた気持ちが一気に晴れる。

しかし、確かにこの検査者の女性はまだ若いが、根気よく、優しく、丁寧に〇〇さんに対応していた。

この女性は警察の交通課より、老人福祉施設で働かれた方がいいかもしれない。

いやいや、高齢化社会を迎えるにあたって、日本人みんなが、どんな職業の人も、この女性のように、高齢者に対する優しさと思いやりを見習うべきかもしれない。

◇最終回。やっと順番が回ってきた。◇

検査者「古川さん、お待たせしましたね、それではまずこの機械で・・・」

私「はい、教えてもらわなくても大丈夫です。〇〇さんで全部覚えましたから」

→検査者の奥にいる、署員の人たちのデスクから爆笑の嵐。

私「ちなみにクリアは一回ずつしか押しませんので」

→またまた爆笑！こうなったら私の独壇場だ。

そして、ついに、いよいよ深視力検査である。

昨日からずっと私を悩ませている深視力検査、ここで決着をつけるぞ。

機械の前で、私は首をコキコキと鳴らし、両手を何度も握ったり開いたりして、ボタンを押す手の筋肉をほぐし、大きく深呼吸をして検査の機械を覗き込んだ。

検査者「めちゃめちゃ気合入ってますね」

私「はい。いつでもどうぞ！」

検査者「では一回目、はいクリア。二回目、はいクリア、三回目、はいクリア、凄いですよ、ほとんど誤差がありません」

私「おっしゃ！（思わずガッツポーズ)」

検査者「深視力はみなさん苦労なされますからね。お見事でした」

私「はい、何せ昨日、練習動画を何回も見過ぎて、最後は三本の棒が八本に見えましたから」

→またまたデスクから爆笑の声。

私「今度みなさんに栗屋で栗を買ってきて差し入れしますよ」

→やんややんやの大爆笑。

講習会場に行くと、ちょうど私の前の〇〇さんで一回目の講義が締め切られていた。
つまり、いまから３０分以上待たなければならない。

やれやれ・・・。

けど〇〇さんに笑わせてもらったし、検査者の人の優しさにも触れられたし、デスクの爆笑も誘ったし、深視力検査も一発合格したし・・・。

ま、ええか。

外は豪雨で真っ黒な空だったが、私のこころは晴れやかだった。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

家族と家族幻想４

坂口　伊都



結婚して夫婦になる時、出産の時は家族が増える、離婚、死別では家族との別れがある。その変化は、とても大きな出来事だと感じる。

実は家族が一人増えたり、別れたりすることは、精神的に大きな影響が起こることで、簡単なことではない。

暑い夏が過ぎ去り、急に肌寒くなりました。コロナ禍で、何をするにもマスクがあるからなのか、大笑いするような事が減ったような気がしています。ハレの日が息を潜めているようです。寒くなり、またコロナの感染者が急激に増えてきました。今年の年末年始はどのような装いになるのでしょうか。

10 月末に立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座で娘と養育里親家族の体験について話をする機会をいただきました。里姉の体験を聞くことは珍しく、多くの方の関心を引いたようでした。話す機会をいただくと、娘とゆっくり話す時間が生まれ、いろいろな想いが言葉になっていきます。里子と離れ暮らすうになってから、面前で話をするのは今回が初めてなので、話しをしていく中で何を感じとっていたのか確認する作業にもなりました。

娘は中学生の時、周りの親戚や教員である大人達が、里親制度を自分で調べようともせずに親ではなく、聞きやすいに娘に里子との生活はどうかを無責任に尋ねてくることで大人不審になったそうです。後になって信用していない大人が、「実子として欲しい支援は何ですか」と聞かれることがあっても、それをまず自分で考えてからこんなや

り方はどうだろうかと尋ねて欲しいと言いました。娘が周りの大人たちに里子との生活を聞かれ、しんどい思いをしていたことに気付けなかった私も娘の大人不審に一役買っていたのでしょう。娘の一言ひとことに身につまされますが、大事な視点をもらえていると感じます。

大人不審になった娘ですが、話をする場に行けば、様々な大人に可愛がってもらっています。今回も中村正先生とパソコンを覗き込みながら、楽しそうに話をしていました。その姿は、親子のようで、見ていて笑ってしまいました。本人は、どれぐらい気付いているかわかりませんが、信頼できる大人も周りにいて、その大人達からいろいろなものを吸収しているのだなぁと感じます。

この連載の前に「養育里親〜もうひとつの家族〜」を連載していました。我が家に来てくれた里子は、小学4年生の時に我が家の一員になりました。慣れない環境に入り、戸惑うことも多かったと思います。児童養護施設では、自分のモノか違うかがシンプルにわかります。それが家庭になると、自分のモノと誰のモノか決められていないモノが溢れています。里子の興味を引くモノを家の手の届く所にあり、そのモノを里子の手元に持ってきて隠すということが続きました。そのモノを自分の所に持ってきてはいけないのだろうと思っているから、隠すのでしょう。里子は、モノを持つことで自分の存在を確かめようとしているのも伝わっていました。暮らしていく中で、この家そのものが里子を刺激してしまっているように見えました。

モノにまつわるトラブルは、その後もずっとありましたが、落ち着いた時期もありました。それは、特別支援中学校1年の後半でした。担任の先生が、里子へ共通の対応をできるようにするためにケース会議をしましょうと提案し、児相、放課後等デイサービス等の地域支援機関の方、そして我が家も父母で参加しました。里子の存在を受け止めながらも社会のルールを伝えていくことを確認し、大人たちが里子に示すルールや線引きがずれないように話し合いました。里子自身も自分の事で話し合う日があること知っており、学校でも放課後等デイサービスでも「○○日に俺の話をするんやろ」と話していたそうです。大人達が自分の事を観ていてくれているという実感が持てたようで、その頃は行動化せずに落ち着いて過ごせていました。

その体制が崩れたのは、年度が変わり、担任や担当が変わった時でした。引継ぎが上手くできず、やっと落ち着いたのも束の間、築いてきたものがいとも簡単に壊れてしまいました。

学校と家庭とでの線引きが崩れ、里子にとって何が良くて、何が悪いのかわからなくなり、行動化が加速していきました。そこに自由度が高い家庭の生活の中で、嫌なことがあると逃げだしていなくなるということ等も加わり、警察に捜索の相談に行ったこともありました。次から次へと問題が拡散していくような日々となっていきました。大人達の足並みがそろわないことで、里子の問題も大きく膨らんでいき、この環境下で里子を守ることに限界を感じ、別れて暮らす決断をしました。日々を過ごすことも大変でしたが、里子と別れれば楽になれるわけではなかったです。里子のこと

を想いながら過ごすことは変わりません。残った家族で外食に出ても、ここも里子と一緒に来たね、あそこにも行ったねという話が自然と出てきますが、その後が続きません。里子に何もしてやれない非力さを思い知らされるだけでした。一緒に生活をするということは、生活の至る所にその子の面影を感じるということでした。家族を失うこと、それは言葉にできない痛みが伴いました。

娘との話の中で、里子を迎えた時も里子を手放した時も私達家族にとってとても大きな出来事だったよねと話題になりました。確かに家族が増える結婚や出産、家族と別れる離婚、死別等は大きなことだ。里子にも全く同じことが言える。簡単ではないことを改めて実感しました。

人生は、ずっと続いてその中で様々な出会いや別れがある。

もちろん、いい事ばかりがあるわけではない。どうしようもなく辛いこともある。でも、辛いだけで人生が終わるわけではない。

里子とは、講座で話す 1 週間ぐらい前に再会した。家を出てから顔を合わす程度のことは 2 回ありましたが、会って話せたのは今回が初めてでした。

里子と離れる時、担当ワーカーにこの先も里子とのつきあいを続けていきたい、この子の応援団として居続けたいと思っていることを伝えていました。里子と離れて暮らすようになり 1 年が経ちました。知的障害児施設に入所になって 5 か月経った頃、この子の誕生日だったので何かできないかと担当ワーカーに相談をしました。私達家族の存在が里子に取ってある方がいいという考えを伝えてくれましたが、慎重に進めたいと言われました。まずは手紙から始まりました。そこから 2 か月後に会う日が決まりました。ですが、前日に里子が他の子とのトラブルが発覚し、その対応をしなければならないという連絡が入ったとのことでキャンセルになりました。里子は、次の日に私達が来ることは知らされていなかったそうです。前日キャンセルを聞き、落胆しました。いつの日か会えるのだろうかと不安になりましたが、一月後に再度日程調整をしました。

いつキャンセルの連絡が入るのではないかと落ち着かない気分でしたが、施設に行く時間になりました。久しぶりに会えるので、何かお土産でも持って行きたい気持ちになりましたが、モノにまつわるトラブルが多かったので、あえて体一つで会いに行くことにしましたが里子は、私達夫婦を受け入れてくれるのでしょうか。

最初の 30 分は、里子の担当の職員の方と児相の職員の方と話をしました。里子が担当職員の方にきつく当たる時があるようで、「愛情表現だと信じたいのですけどね」と話している姿を見て、今はこの人が里子を育ててくれているのだなと感じました。里子のやんちゃぶりは健在なようですが、その方の優しい眼差しから、里子が今までいろいろな人に可愛がられてきた部分が、職員の方を優しい気持ちにさせているのでしょう。

学校帰りの里子が照れくさそうに登場しました。ジーパンのほつれた部分を触りながら話を聞いていて、照れくささを隠す仕草は私の知っている里子そのままでした。マッチングで会った日のことを思い出し、懐かしさに包まれました。慣れてくると、自分の部屋と畑を見せると里子が言ってく

れました。これは、この子なりのおもてなしです。私達が来たことを喜んでくれているのが伝わりました。ワーカーさんが、「次も来てもらう？」と里子に尋ねると大きく頷いてくれました。

里子に受け入れてもらえて良かったなと思うと同時にマッチングの頃とは違う立場であることを再確認する気持ちになりました。マッチングの時は、距離感を縮めていくために会うことを重ねていましたが、今回は細く長くつきあっていくための距離感を持ち続けることが大切なのでしょう。里母から里祖母になったような気がします。

この話を聞いて、中村先生は里子が坂口家の縁取りの中に位置づいているのがわかると話し、そして支援者は行政用語を安易に使わない方がいい。その時だけを見て成功したとか失敗したとか言うべきではないだろうと語ってくれました。その言葉を聞いて、許された気持ちになりました。この1年間ずっと重い十字架を背負っていましたが、下ろしてもいいのかも知れないと思えました。里子が里親に会って喜んでくれたことと中村先生の言葉は、止まっていた私の時間を動かしてくれました。里子との別れを経験しても仕事も家事もしていましたし、笑ったり泣いたりもできていました。でも、ある部分の時間が止まっていたようです。



いつももっと他の選択肢を選ぶことはできなかったのか、里子が落ち着いて生活できているのか、私は里子に辛い思いをさせてしまっただけなのではないかという思いが離れませんでした。里子と担当職員さんの様子や里子の表情を見て、良かったねと思えました。里子の行動問題を落ち着かせるためにできることは、この刺激が溢れている家から離れることだろう。大人として、責任を持ってこの子を守る方法だと信じ、決断をしました。それでも、他の選択肢は本当になかったのかと自問自答してしまいます。自分が前に一歩踏み出すのにも誰かの手助けがなければできません。対人援助職が存在する根幹は、ここにあるように思います。

家族とは何だろう。

血の繋がりだけでは語れない繋がりがある。

「あなたの家族は？」と尋ねられて誰を思い浮かべるだろうか。どうしているか気遣ったり、元気でいて欲しいと願ったりする誰かを家族だと思っている私がいるのなら、その相手は家族なのだろう。

里子との生活は、いろいろありました。里子は、我が家に来るまで家庭での生活を知らずに育ってきました。モノだけでなく家で当たり前のようにしている食事の時の席やその家庭内での暗黙のルールは、わかりにくいものです。その中でとう立ち振る舞えばいいのか、何をしても良くて何はダメなのか、一つひとつ確かめなければわからなかったのでしょう。家庭で育つことが子どもの最善の利益だと叫ばれていますが、家庭で暮らせればそれだけで子どもが幸せになれるわけではないことを学びました。

それは家庭の方が良いとか悪いということではないだと思います。家庭にも弱点があるのは事実です。その子にとって落ち着いて過ごせる場所は違います。家庭という枠を設けるのが難しい場所で里子が落ち着くためには、周りにいる大人が足並みを揃えられるかどうかが鍵でした。思春期の年齢に入り、足並みを揃えられてもこの先一緒に暮らせたかどうかはわかりません。里子と暮らした日々の中で私たちを家族と認識してくれたのかどうか不安でした。里子と再び出会い、何も持たない私たちを受け入れてくれました。里子にとって、私たちは家族として認めてくれたのかもしれません。

改めて「家族」とは何だろうと考えました。里子とは、お母ちゃんからおばあちゃんの距離感に変わりました。里子を他人とは思えなかったので、私の中でも家族として居続けています。日常的に共にする家族ではありませんが、離れていても自然と考えてしまう相手を家族と捉えているのだと感じます。



生きていく中で家族に変遷が起こります。私の場合、大学進学で離れて暮らしましたが就職は地元でと言われ、実家にもどりました。就職をして5年目に原家族から自立することを決め、家を出ました。いつまでも子どもの立場に置かれ続けようとすることに抵抗したのだと思います。そして、夫と出会い新たな家族を作り、息子と娘が生まれました。息子は成人を迎え、家を出ています。里子は家を出るには早過ぎましたが、いつかは自立していく存在です。これからは、その距離感を意識しながら出会っていけたらなと思います。

周辺からの記憶 29

2018 年度　宮古･福島

村本邦子（立命館大学）

春が来て、夏が来て、冬が来た。コロナ禍は続く。緊急事態宣言下、毎日、大阪の街を歩き回った。あちこちに記念碑やお地蔵さんを発見し、あらためて大阪の歴史に思いを馳せた。天神橋筋商店街は賑わっていて、シャッターをおろした店の前に出店が並んでいた。ふと見れば、向かいには、天神祭りの神輿と大きな厄病払いのお札が置かれている。大阪商人のしたたかさと逞しさに思わず笑いがこぼれた。東北に通うようになって、「土地の力」というものを感じ、考えてきたが、大阪の「土地の力」を実感する契機となった。それからいろいろ調べ始めた。

中沢新一の『大阪アースダイバー』（講談社）によれば、大阪は、上町台地の突端に建てられた難波の宮（7 世紀）から南に伸びる難波大道に沿った「アポロン軸（王の生命力）」と、上町台地から見て東の生駒山を眺める軸線「ディオニュソス軸（野生の文化）」のふたつによって、ものの見方、考え方が作られているところに特徴がある。地質学、歴史学に添ったこの視点は、かなり興味深く、納得するところが多かった。

たとえば、大阪は、疫病に対して、天神祭りや赤い人形など疫病払いの呪いによって対処してきた歴史と、緒方洪庵の適塾や除痘館など科学によって立ち向かってきた歴史がある。夏は、狙いを定めてこれらの施設を見て回った。「病の語り」という観点から考えてみても面白いに違いない。



2018 年 11 月宮古

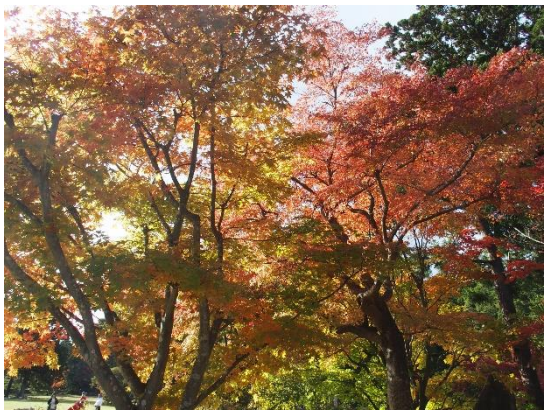
11 月 3 日(土)プログラム

プライベートに秋の岩手を楽しんだ後、プロジェクトメンバーと合流。今年は、魚菜市場とイーストピアみやこの 2 会場で漫画展を開催、11 月 3 日にプログラムを実施した。















イーストピアみやこ市民交流会館は、10月1日、JRと三陸鉄道の宮古駅の裏手にオープンしたばかりの新しい施設で、本庁舎と保健センターが一緒になっている。全館に光が入り、街を眺望できるガラス張りのつくりに、地元の木材を使ったテーブルや椅子など暖かく親しみやすい空間となっていた。漫画パネルの展示も美しく映え、多くの方の眼に触れたのではないかと嬉しい。もちろん魚菜市場には魚菜市場ならではの味わいがある。

1階にある防災プラザには「震災と津波のコーナー」があり、過去の災害の歴史展示、東日本大震災と復興についての展示とともに、映像など充実した資料が揃えてあった。

「つなみ」と題する紙芝居は、田老の女性による20年ほど前の手作りで、昭和三陸大津波の体験を描いたものである。津波石の紹介も面白かった。もともと石仏や石碑は信仰の対象で、硬い石に祈りや願いを刻み込み、永久に残そうとするものだった。明治の三陸大津波より「海嘯（津波）」を刻み込んだものが造られるようになり、死者の供養として被害規模や死者名などが記された。昭和の大津波後は、明治の大津波から30年後に甚大な被害を出したためか、後世への教訓を含むものとなった。

その教訓とは、「地震の後には津波がくる」「ここ（高い所）へ集まれ（逃げろ）」「1時間は避難（警戒）せよ」「下に家を建てるな」というものである。今またここに展示することで、これを後世に伝えようとしていると言える。



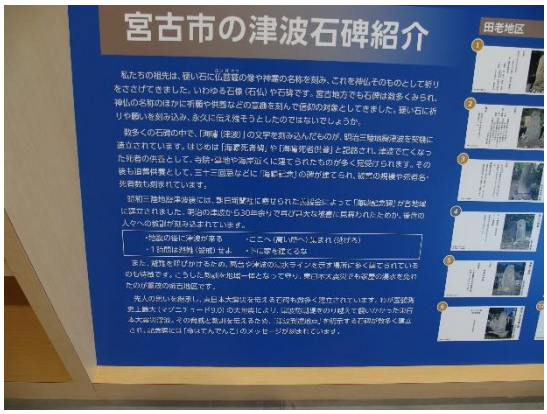














3 日は朝 9 時集合で、すきっぷのスタッフの皆さんとミーティング、10 時から団士郎「漫画トーク」を開催した。

アンケートには、「昭和 7 年洪水、戦前、戦後、平成と生きてきて、子どもの頃の苦しい生活を思い出し、感動しました」（70 代以上、男性）、「10 年、もう終わりなのですね。それ以降はないのかな？とはいえ、私も宮古を出てしまったので・・。1 年に 1 度、お話を伺えることを楽しみにしています。また来年お会いできますように」（50 代女性）、「最初に宮古にいらした時よりお話を聞かせて頂いています。いつもありがとうございます」（60 代女性）など、それぞれに喜んでいただけたようだ。









昼食と午後の打ち合わせを挟み、13 時からの「アートで遊ぼう」は、いつものように若竹会のリードで工作や塗り絵を楽しんだ。



















14 時からは「ふるさとの歌や物語を楽しもう」、NPO 法人輝きの和による絵本と紙芝居、鵜野さんによる伝承手遊び。紙芝居は、宮沢賢治の作品と、昨年も披露してもらった宮古の民話「しろこ地蔵」で、尾林星さんの手作りである。暖かく心地よい空間で、小さい子どもからお年寄りまでが一緒になって、楽しいひと時を過ごした。今年は院生に留学生もいたことから、英語や中国語バージョンも取り入れ、国際色豊かな手遊びとなった。

「人見知りの子どもたちの対応大変だったと思います。子どもたちは、『とてもうれしかった』と話しております。楽しい時間をありがとうございました」(30 代女性)などの声を頂いた。





支援者支援セミナーでは、今年も地元の支援者に事例を提供してもらい、「家族造形法」で事例検討を行ったが、登場人物が多かったので、いつもより多くの方々に身体を使って考えるという体験をしてもらえたと思う。





毎年参加してくださっているみなさんの声に、十年のプロジェクト終了後をどのようにつないでいけるのか考えさせられる。

斉藤清志さんのお話

プログラム終了後は、田老地区の出身で、現在は市役所の企画部復興推進課に務めておられる齊藤清志さんのお話をお聴きする機会を得た。

斉藤さんは、震災当時、宮古の内陸部にある給食センターに勤めており、地震後、まったく情報が得られないまま、「どうやら津波がきたらしい」との話に、眠れないまま一夜を過ごしたという。

翌日、家族は車で逃げて全員無事だったことがわかった。実は 2 日前に大きな地震があって、いざという時のことを話していた。家族は車を乗り捨てて山に駆け上ったが、車は流されてぺしゃんこになった。

震災遺構となった田老観光ホテルの近くにあった自宅にようやく行けたのは十日後だったが、防潮堤が決壊して、がれきもすべて流され、何もかもなくなり、あさりやウニがいっぱいころがっていた。一家全滅

だった方もあり、家は流されてもみんな無事でよかったと思った。

それから、グリーンピアでの避難所生活が始まったが、当初は間仕切りもなく、毛布一枚配られただけだった。避難所生活は3 か月続き、周囲が次々と仮設住宅に引っ越すなか、市の職員であることから避難所に残るよう言われた。家族は「しょうがねえんじゃないか」と言ったが、さすがに精神的にきつかった。その後、仮設住宅をキャンセルした人がいて　2011 年 6 月に仮設住宅に入ることができた。

5 年半そこで生活した。隣は壁一枚、5 人家族で大変だった。現在は、新しく造成されたエリアに家を建てて住んでいる。元住んでいた場所は災害危険地域に指定されたので、新しい場所を見つけなければならなかった。その辺りは、もともと家を建てるなと言われたところだったが、三陸鉄道のトンネルを掘った砕石で埋め立てられ、防潮堤もでき、海も直接見えず、大丈夫だろうと、昭和 50 年頃から家が建ち始めた。子どもの多い時代で、家族も核家族化し、三世代同居は減ってきていた。

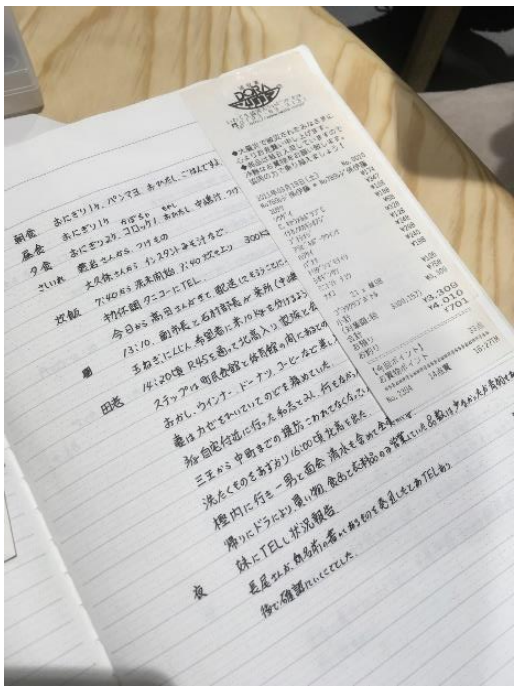
選択肢として、市から出るというのもあったが、市役所に勤めながら市から出るというのはあり得ないので、結局新たに造成された高台にした。一番低くて標高 40m、自分のところは 60m。場所決めはドラフト制だった。これも市役所勤めということで気を遣ったが、誰とも希望が重ならず良かった。

移動商店、生協の配達もあり、ようやく団地らしくなって、近所からワカメやなんかが届くようになった。戻ってきたなと感じる。公共施設を集約しているので、警察、保育所、消防署、だいたいのものがある。168 のうち 8 区画残っている。一戸建てだが、公営住宅のゾーンもあり、戸建てタイプの公営住宅もある。高齢者の夫婦でも、孫たちを招くために、また、子どもたちにとって故郷がないのはと、戸建てを選ぶ。再建支援補助金が出ているが、復興事業にもっていかれて資材は震災前の倍に跳ね上がった。

震災直後、パソコンもなく、全部手書きで記録を残したというノートを見せて頂いた。震災 2 日後に、これは覚えていられないなと記録をつけ始めた。8 日に初めて電気が戻ってレシートが出るようになったのがわかる。同僚からもらった食料とか衣料。震災の夜はおにぎりひとつだけだったが、翌日は、近所の方々が炊飯器で炊いたものを持ってきてくれた。

自分自身は、給食センターで翌日電気が通ったので、一ケ月炊き出しをして、避難所に配った。食い物だけは豊富にあり、みんなよくしてくれた。グリーンピアに入ってからは自衛隊が炊き出しをしたので、食料には困らなかった。ただ、支援物資には小物が少ない。上着や下着はくるが、靴下やハンカチがこない。全部流されているから、困った。





地域の子どもたちの状態としては、当時は中学１年生がおかしくなった。学校が被災したので小学校を借りて半年いた。そうすると、中学生が子どもに戻った。とくに中１は小学生のようになってしまった。そんな年が１～２年あった。

避難の時、保育所の子を助けてくれた中学３年生は、おにぎりや燃料が来た時には、みんなに配って歩いた。避難所に行ってからちょっと荒れたこともあったが、やんちゃ系で元気がある学年だった。

津波のことを考えないことはないが、考えなくてもいい。家族はまだ海に行きたがらないし、船に乗らない。自分も以前はよく釣りに行ったものだが、今は釣りにも行かなくなった。

防潮堤については、海が見えなくなるとか言うが、もともとあったので、つきあって生活している。いざという時に守ってくれるもの。時間を稼ぐものだと考えている。海を見たければ見えるところにいったらいいと思う。

被災者であると同時に、公僕という立場からの貴重な体験と率直な気持ちを聞かせて頂いたが、つらい体験もユーモアを交えて語る姿、日誌の几帳面な記録などから包容力のある暖かいお人柄がにじみ出ていた。人間ってすごいもんだなあと改めて思う。

11月4日(日)田老学ぶ防災

朝９時にホテルを出発､9時半から 11 時、今年も田老の「学ぶ防災」に参加した。４回目となるが、今年も佐々木純子さんに案内をして頂く。いつも大歓迎してくださるので､私たちも「また帰ってきたんだなあ」と懐かしい気持ちになる。佐々木さんの語りは毎年変化していて、ガイドとして良いお仕事をされているのだと思う。お天気もよく、波も穏やか。第一防潮堤の上に立つと、海との間に第三防潮堤の工事が進められていた。田老観光ホテルに向かう途中で、川を遡上する鮭の大群を見た。初めて見る光景に皆興奮した。

田老観光ホテルの６階で、今年も津波の映像を観る。何度観ても、恐ろしさに息を

呑み、津波に呑まれてしまった人々のことを考えてしまう。とくに、今回は、この辺りに家のあった齋藤さんの被災体験を聞かせて頂いたので、より身近なものとして感じられた。





終了後、大槌へ向かい、浪板海岸の「さんずろ家」にて昼食。太平洋を一望しながら、蒸しウニ丼定食を食べた。千円弱、驚きの値段である。



大槌町語り部ツアー

12 時半、大槌町旧庁舎遺構前で「語り部ツアー」のガイドと落ち合い、14 時過ぎまで案内して頂いた。ガイドさんは、旧庁舎の近くにあった自宅を津波で流され、近くに新しい家を建てて暮らしておられる。町内会長をしているとのことで、あちこちで出会う人と言葉を交わしていた。

旧庁舎の解体について、老朽化のため震災前から取り壊しが計画されていた建物だったこともあり、解体に賛成ということだったが、防潮堤には反対で、住宅地をかさ上げしたり、住宅を高台移転させたりして海が見える住まいにすべきだと強調されていた。漁師が多い赤浜地区の住民はそうしているそうだ。

遠野・大平悦子さんの民話語り

大槌町から釜石を経由し、紅葉の美しい仙人峠のトンネルを抜けて遠野へと向かう。遠野の古民家で大平さんご夫婦に迎えてもらうのだ。パチパチと火が燃える囲炉裏端

で、手作りの遠野名物ケイランと庭で採れた果物を頂き、民話をたくさん聞かせて頂いた。

初めて大平さんの語りを聴いたのは2014年だったが、その声に耳を傾けると、不思議なほど物語の場面がいきいきと目の前に浮かぶ。おもしろい話、怖い話、考えさせられる話に感情を動かされ、最後はとても満ち足りた気持ちになる。そして、豊かさとはこういうものなのだと思う。院生たちにも何物にも代えがたい貴重な経験をさせる。毎年、暖かく迎え入れた頂けることに感謝する。





2018年12月福島

11月29日(木)原発情報センター

朝早く新幹線に乗り、白河に隣接するアウシュビッツ平和資料館と原発災害情報センターへ行く。

アウシュヴィッツ平和博物館館長の小渕真理さんが原発災害情報センターを案内してくださった。富岡町、双葉町の写真展示をやっており、原発を誘致してきた看板、原発事故が起こった後の混乱、絶望から自死を選んだ人の言葉等々の写真、除染作業着とフレコンバッグが展示されていた。展示物はまだ少ないが、手作り風の暖かい雰囲気に、市民の思いを見るようだった。今後の発展を祈りたい。




豊かな暮らし　2014. 8. 13
原子力明るい未来の工


285851


富岡町の位置づけ
富　岡　町
原発事故前と事故後の姿
現在の富岡町沿岸部


原発災害情報センター


津波に襲われた後の富岡町






双葉町
双葉町～東日本大震災の記録～
2012年10月26日 双葉町役場
2014年3月28日 双葉町内
2014年3月28日 双葉町内




放射線量マップ
〈高い所〉
芽むら、芝生、コケの上
樹木下、側溝、下水フタ上
〈低い所〉
舗装された道路等、人や車の往来の多い場所
単位：マイクロシーベルト/時
測り：地上1メートル


避難生活
双葉町


模擬体験コーナー
実際に太陽の光で発電している事を確認してみよう！

コミュタン福島

それから三春町に足を延ばし、福島県環境創造センター交流棟（コミュタン福島）を訪れた。あまりに立派な建物で、ふたつのミュージアムのお金のかけ方の違いに絶句する。コミュタンはまるでテーマパークだ。環境創造シアターは、360 度の 3D で、あたかも自分が立体映像空間の中に入り込めるような仕組みになっている。これを体験するだけでもここに来た価値がある。

とくに福島の美しい大自然は、観光で行ったとしてもなかなか見られないだろうと思われる姿をうまく映像で切り取っており、うっとりした。こんな美しい福島をこんな状態で沢山の課題を抱える、そんな原発に反対しますと結ぶのが自然だと思われたが、実際にはそうならない。

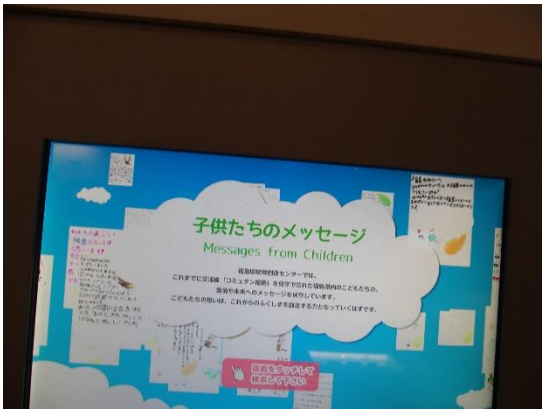
全体を通じて語られるナラティブは、放射線は宇宙創造とともにいつも私たちの身の回りにあり身近なものです、除染はこんなに効果をあげています、原発依存しない福島を目指していますという物語であり、子どもたちの感想の展示は、「楽しかった！」のオンパレードだった。

キーボードでメッセージを入れるとそのまま壁に文字が映し出される「未来へのメッセージ」と題する展示があり、驚いたことに検閲がかかっているようだった。「原発安全なの？」とメッセージすると「原発安全」と映しだされ、「怖い」も「不安」も消されてしまう。結果として、壁にはポジティブな言葉だけが並ぶ。しかもどこかでモニタリングしているのか、そうこうしているうちにスタッフ数人がざわざわと集まってきて、こちらを見ながらどこかに電話して指示を仰いでいるような様子に見えた。あまりの衝撃に度肝を抜かれ、怖くなって立ち去ってしまったのだけど、きちんと素直に「どうして書き込んだ文字が消されるんですか？」と説明を求め、回答があればそれに意見を言うという普通のことがどうしてできなかったのかと自分が情けなく落ち込んだ。ふだんからよくよく考えておかないと、人間は咄嗟の時に適切な行動ができず、自己効力感を落とすものだ。次の時にはそうしよう。



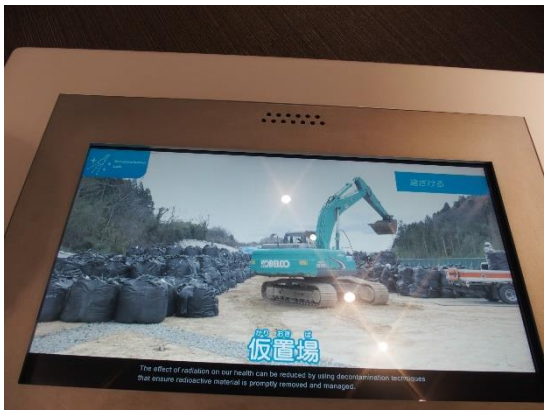














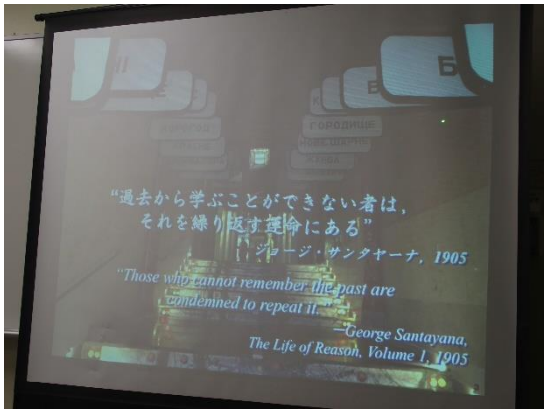
後藤忍先生レクチャー

福島市へ移動し、福島大学の後藤忍先生の「原発事故の教訓を伝える施設の役割」というレクチャーを受ける。後藤先生は、科学者として原発反対を言ってこなかった責任から放射線を学ぶテキストや博物館展示の批判的研究を続けておられ、『放射線と被ばくの問題を考えるための副読本』を作ったり、「こころのケアとしての〝減思力〟の防止」という研究論文を書いておられる。今回は、チェルノブイリミュージアムとコミュタン福島の展示を分析比較したお話で、チェルノブイリミュージアムの展示は、原発事故を二度と起こしてはならないというメッセージを強く感じさせるものであるのに対し、コミュタン福島は子ども

たちが楽しめる展示となっており、汚染の程度や被ばくによる人権侵害の状況について判断するために必要な情報が少ないということだった。

今の日本社会でこのテーマを研究し続けるのは、どれほど大変だろうと思う。それでも、「意見を言っても無視されることがほとんどだが、展示が変わったところもある」と前向きに地道な活動を続けておられた。「チェルノブイリミュージアムも時間をかけて展示を作ってきた」とのこと、是非見てみたいという気持ちが高まる。福島のことを思うと悲しくて悔しくて胸が締めつけられる。本当に残念な現実だ。過去に学ばないポジティヴィズムは次の災禍をもたらす。いったいどんな明日が待っているのか。





11月30日(金)準備

朝イチで椛久里珈琲へ行き、珈琲とともにおいしいお菓子を頂く。「これが一番癒しの時間」と言う院生の言葉に大笑い。

その後、後発隊の院生チームと合流し、こむこむで準備をして、ビーンズふくしまの「みんなの家」を訪問した。福島からの避難者や帰還者の現状とビーンズふくしまの支援についてのお話を伺った。東北地方の面積は広く、対象者が広域に散らばっているという特徴があり、人口密度が高い地域に細分化した多くのサービス事業者がある都心部とは異なり、広範囲をカバーする事業展開をされていた。

夜、私は団さんを連れて椛久里珈琲を再訪したが、その他のプロジェクトメンバーは、引き続きビーンズさんにお世話になり、「みんな de 食堂」に参加させて頂いた。たくさんのことを考え感じたことと思う。

12月1日(土)プログラム

福島市子どもの夢を育む施設こむこむにて、8 年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2018」を開催した。漫画展、漫画トーク、クリスマスカレンダーを作ろう、東京おもちゃ美術館寄贈のおもちゃを使った遊びコーナー、おもちゃコンサルタントによる遊び講習会である。











毎年人気のクリスマスカレンダーには50名の参加者があった。8 年目ともなると、震災の時にはまだ生まれていなかった子どもたちもいる。最初の頃に来てくれた子どもたちのなかには、もう成人している子どもたちもいるだろう。子どもたちの成長を見ていると、いろいろなことがあっても、時間は変わりなく前に進んでいるのだと感じる。院生たちも親子との交流を通じて、福島に思いを寄せ、今後の経過に関心を持ち続けてくれることと思う。





子どもたちが書いてくれるアンケートには、胸がキュンとなる。「楽しかったです。1日1日のおかしをたべるのが楽しみです。来年も来たいです。ハロウィーンのカレンダーもつくりたいです」(8歳女)、「すごくわかりやすくおしえてくれた」(8歳女)、「わたしはいろいろなかざりやモールがあって、すごくかわいくかんせいしました。すごく楽しかったです。くふうしたりいろいろかんがえてわからないところは、お母さんにきいたりしたけど、すごくすごく楽しかったです。ありがとうございました♡(^^)」(8歳女)、「家で休みがあれば、材料をあつめてまたやってみたいです」(8歳男) などなど。

親からもたくさんの声を頂いた。「子どもと一緒に作成できたので、とても楽しかった。家で何か作ろうとしても、こんなに大きな楽しめるものはなかなか作れないので、おもしろかった。お菓子をつけるアイディアはさすがですが、毎日楽しみです」(40代女)、「毎回、親子共々楽しく参加させて頂き、今年で3回目になります。来年は子ども皆連れて、また参加できたら嬉しく思います。来年もこのイベントがあること親子で楽しみにしています。」(30代女)、「材料などたくさん用意して頂いていたので、子どもたちも楽しく満足できるものが作れました。とてもすばらしいイベントだと思いました。ありがとうございます。」(40代女)、「ていねいに教えて頂き、子どもたちがとても楽しそうだったので良かったです。ありがとうございました」(30代女)、「大阪、京都から来て頂いたと聞いて感動しました。また親子の絆も深まり、とても楽しませて頂きました。また来年も来れますように！」(30代女)・

おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる遊びの講習会もいつもながらに勉強になり、遊びコーナーの子どもたちとも楽しく遊ぶことができた。とくに、臨床心理を学ぶ院生たちには勉強になっているようだ。



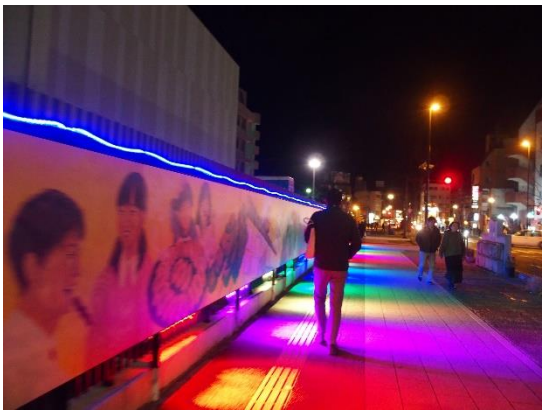


漫画トークも毎年来て下さる方、初めての方、いろいろだが、世代に関わらず楽しく聞いて頂いたようだ。「いい年なのにあまりにもわからない事が多く、先生が何を言ってもはじめて聞く話だったり、この年になってもまだまだ知らない事があり、とてもいい勉強になり、来年もまた聞きに来たいと思います」（60 代男）、「社会においては問題が必ず起きるため、問題自体を考えることよりも、問題解決を考えることが大切だということがわかった」（20 代男）、「昨年も参加させて頂きました。お話を伺うと、とても納得し、勇気が出ます。何が正解なのではない。とても大切だと思います。また来年も是非うかがいたいと思いました。遠いところありがとうございました」（40 代女）、「毎回、また考えさせられます。私のまわりも専門家の方々がどんどん増えていくけど、いつもお互いのうまくいかないことの指摘や、何してくれる？の話で終わっている気がします。今回のことを心に留めてやっていこうと思います」（50 代女）。





こむこむの漫画展の前で、お孫さんを連れた男性と立ち話をしました。「善意であれ、甲状腺が多いなど言われるのは迷惑。福島人はもう原発事故を忘れたのか、忘れるなと言うが、忘れられるはずがないではないか。忘れられるものなら忘れさせて欲しい。自分たちも孫とともにここに残ると決めて暮らしているのだ」と語られた。選択したものの、お孫さんのことを心配されていることが痛いほど伝わってきた。問題は、福島から遠く離れれば離れるほど、簡単に忘れてしまえるという現実である。政府も多くのマスコミも、原発事故を終わった話にしようとしている。そうでなければ、原発輸出や再稼働はあり得ない。



12月2日(日)フィールドワーク

今年は、コミュニティバスをお借りし、NPO 法人福島地球市民発伝所（福伝）の竹内俊之さんと藤岡恵美子さんの案内で、飯館村から南相馬、そして浪江を回った。

紅葉した美しい山の景色のなかに、黒いフレコンバッグの山があった。線量計を借り、首にぶら下げて車に乗っていると、場所によっては線量が上がったり下がったりすることがよくわかる。街中でも、ちょっと山の方に寄ると急激に線量が上がるという体験を経て、たしかに除染され開けた場所は線量が減っていても、美しい光景に我を忘れてちょっと林や森に近づいてしまうと、もう危ないという日常を実感する。



飯館村の案内をしてくれることになっている伊藤延由さんと道の駅で合流し、まずは役場へ向かう。役場の前には頭を撫でると村歌が流れるお地蔵さんがあり、その横に歌碑があった。伊藤さんは、歌碑の一節「土　よく肥えて　人　情ある　その名も飯館　わがふるさとよ　実りの稲田に陽は照りはえて・・・」と大きな声で読み上げ、「飯館村には、豊かな自然という宝物があった」とおっしゃった。

学校や道の駅など、除染が進んだ所もあるが、フレコンバッグが積まれている付近や山中は放射線量が高く、完全に除染することは不可能である。それでも、飯舘村では帰還者や移住者を増やそうと、子どもの教育費を無料にしたり家を建てる費用を補助したりしているそうだ。

多額の復興予算で建てられた道の駅やサッカーグラウンドなどもあるが、果たして村が維持していけるのか懸念されていた。山のすぐ近くにあるグランドでは、子どもたちがサッカーをしていた。









飯館村を見て回った後、きこりという村の施設で研修を受けた。最初に、福伝の竹内俊之さんが「福島の教訓と日本のジレンマ～原発災害から７年目の現実」のレクチャーをしてくださり、次に藤岡恵美子さんが聴き手となって、村民である伊藤延由さんのお話を伺った。

ほんの少しだけ語られた伊藤さんのライフストーリーは興味深く、そうやってたどり着いた飯舘村への思いが、飯館に住んで放射線を測り、飯舘に住むというのはどういうことか情報発信するという現在の活動に結びついていることがよく理解できた。

その後、ワークショップ「飯舘村帰還ロールプレイ」を経験した。与えられた村民の役で、自分ならどうするか、その根拠とともにグループで話し合い、発表し合うというというものだ。

良いワークショップだった。放射能被害を受けた人々がさまざまな価値観と条件のもと、いずれにしても不本意な選択を強いられている現状に対し、自分自身の価値観を表現することは憚られるが、自分ならこう考える、自分ならこうするという形でなら、気兼ねなく表現することができる。

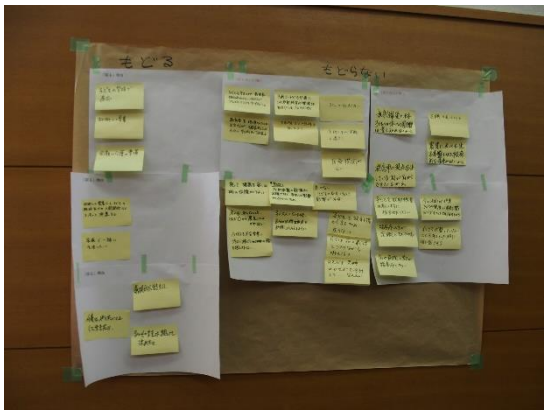
しかし、迷いのプロセスは同じでも、最終的な選択と決断は人によって違うものだと実感することが、辛い現実を突きつけた。ロールプレイとは言え、チームとして共に学び行動してきたメンバーがここから別の道を歩いて行くのだと思えたからだ。福島の人々は実際にそういった経験をしているのだ。











飯館村を後にして、南相馬の道の駅で昼食をとった。噂の浪江焼そばを初めて食べる。たしかにB級グルメというだけある。早く食べ終わったので、前の広場に出ると、かわいい子犬がいた。

飼い主らしき車椅子のおばあさんとおじさんに「かわいいですね～」と話しかけると、「どこからきたの？」と尋ねられる。「関西の大学から勉強に来ました。飯館に行ってたんです」と答えると、「ああ、じゃあ、ごはん食べてる人たちもそれね」と言う。首からぶら下げている線量計が目立ったのかもしれない。いわきの浜の方から毎週 2 時間かけてドライブしてくるのだそうだ。

子犬は 3 日前に買ってきた豆柴の赤ちゃん。名前は「大樹（ダイキ）」というそうで、ふと、津波でお孫を失くしたのだろうかなどと思ったりした。「それでは気をつけて」と互いに手を振って別れた。


















安全第一



バスにて移動中、たくさんのフレコンバック、南相馬の防潮堤や、避難指示が解除されていない地域を見た。浪江町の請戸漁港に近づくと、津波の被害を受けてそのままになっている空っぽの家屋が数軒あった。請戸漁港は大きな防潮堤を建築中であり、だんだんと海がふさがれていくようだった。去年はそのままに海が見えていた。避難解除されてから、他の沿岸部と同じ道を追いかけているのだろう。

防潮堤の上に上がって海の空気を吸った。避難解除された途端、あっという間に見える景色が変わっていくのだと思った。漁港からは原発が見えた。

つづく

病児保育奮闘記

（最終回）

子どもサポート H&K
大石　仁美

コロナ禍の中で

コロナ禍で半年余り開店休業状態が続きましたが、10 月に入ってからも利用者は少なく、手持ち無沙汰の日々。週の初めに兄弟二人利用したと思ったら、翌日からはゼロの日が続き、次の週は一人。その次の週は同じ子が二日続けて利用して後はゼロ。ニーズがないというよりも、たぶん不安感が強いのではないか、コロナの子がいたらどうしょうという不安、または漠然とした不安、それと経済的な理由も大きいのではないかと思われます。

どこの職場も不況の影響は深刻で、家族関係に微妙な変化が起きているところもあると聞いています。一方で福利厚生部のしっかりしている職場では、病児保育室の利用にも補助金が出ていて、安心して子どもを預けて働けるという、ポツポツ来ている子はそうした恩恵を受けている子たちです。

まあ、そんなこんなで一ヶ月に 4 日しか稼働していないという笑えないような状況が続いています。

11 月に入って退屈していたある日、思いがけない子がやって来ました。小学 5 年生のK君です。赤ちゃんの時から利用している子なので、懐かしいやら嬉しいやら。久しぶりに孫が来たようで、萎えた頭も活性化したようで、ハッスルするバアバです。

視たところ、病気らしき症状もなく、どうもお疲れの様子。小学生も高学年になるとお勉強疲れでストレスがたまるようです。
コロナの影響もあるかもしれません。

床に寝転んでゴロゴロしながら本ばかり読んでいるこの小さな博士君に、何かおいしいものでも食べてもらって元気づけようとあれこれ考えて、さて昼食の時間。「お代わり!!」の元気な声にさすが男の子。その食べっぷりの良さにほれぼれ。よく食べる子を見るのは本当に気持ちがいいものです。

さて、本ばかりじゃなくて、何か遊ぼうよと声掛けすると「バアバ、将棋できる？」
やったことない。「じゃあ囲碁は？」などといわれるとバアバはお手上げ。うーん、困った。外で走り回るには体力がなく、かといって今さらむつかしいゲームを覚える気もなく、絵でも描こうかと紙と絵の具を与えたり、この本面白いよと薦めてみたり、学校の様子を聞いたり、仲の良いお友達の話を聞いてみたりが関の山。

大きくなった男の子のお相手は若い男性（息子）に任せるよりほかありません。

10 数年前､今思えば腰が痛いと泣きべそをかきながらも､20 人分の弁当を作ったなぁ～。春の一時保育は、みんなで手をつないで加茂川べりをハイキングして、あの頃が一番楽しかった！次々とカードを切るように流れてくる想い出に浸りながら、自らの老いと、時代の流れをかみしめています。

K君から、嬉しい刺激をもらった一日も終わり、また何もない日が過ぎていきます。
コロナ禍の中で“子どもが来ない”という日々。病児保育奮闘記も、奮闘しょうにも出来ない日々が続いています。

そこで、今年最後の、そしてこの 25 回という節目の回で、ひとまず病児保育奮闘記の幕を閉じたいと思います。新たな展開があり、活力にみなぎるような時を迎えることがあれば、またよろしくお願いいたします。今まで読んでくださり、励ましてくださった皆さま、ありがとうございました。お声をかけてこのような機会をくださった団先生にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

対人支援点描（24）

「新コロナウイルスと偏見差別」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

前号に続き、今回も新コロナウイルス関連の話題をすることになった。社会の新コロナウイルスについての話題は、今年になって、それこそいろいろなところで話題とされ、多くの専門家が論じ、紹介している。感染症の専門家でなくても、インターネットやSNSなどで話題とされている。

この号の対人援助学マガジンが発刊される頃には北海道の状況も変化していることだと思うが、現在(2020 年 11 月 9 日時点)、北海道の新コロナウイルスの感染が今年一番の勢いで拡がっている。冬季に入り、空気が乾燥するこの時期にウイルス性の風邪が流行することは予想されていたことでもある。実際に新コロナウイルス感染の拡大のニュースが拡がると、北海道内の人々の動揺も大きなものとなる。

この動きと並行して、この小論でも取り上げるに至った理由は、私が働く教会と幼稚園があるえりも町内でも感染者がでたことにある。この出来事から町内で起こった身近な話題として、ここで取り上げたいと考えたからである。

１．小さな田舎町で感染者が出るということ

もともと北海道では、全国でも早い段階で「非常事態宣言」が出された。その警戒と対応もあり、その宣言による拡散防止効果の実よりも、北海道民にある種の危機感を持たせることに成功したといえる。しかし、夏以降から政府の GoTo キャンペーンや全国の拡大の縮小傾向のニュースに人々の警戒の気持ちも薄らいできていた。北海道随一の繁華街であるすすきのでも警戒の解除が進み、人々の出入りも少しずつ戻りつつあった。１０月までの間に、どこか気持ちのゆるみが生じてきていたといえる。幼稚園の関係者からは、えりも町内のスーパーでマスクをせずに買い物に来たり、入店時に手の消毒をしないお客が目立ってきているという話もあった。

このような話題が身近な話として語られて程なくして、えりも町内で感染者が出たという話が伝わってきたのであった。

状況としては、えりも町内に務める会

社員が新コロナウイルスに感染したということであった。その会社員の方の子どもが、たまたま私の勤める幼稚園の卒園生であったため、私にとっても身近な話題となったのである。

結果、その会社員の方だけではなく家族、同僚、その子ども、子どもの同級生たちが濃厚接触者としてPCR検査を受けることになった。同時に、会社のその部署や学校のクラスが学級閉鎖となっていった。また、それに止まらず、幼稚園の関係者の子どもも同じクラスであったことから、幼稚園の関係者らも自宅待機となった。幼稚園の関係者らは濃厚接触者でもないし、学校のクラスの子どもたちの誰も陽性者ではなかったのだが、子どもたちが自宅にいる以上、親である立場の人も子どもだけにしておけないため自宅待機となったわけである。

改めて、一人の感染の出来事が、濃厚接触者だけでなく、もっと広い範囲にまで関係し、その生活に影響を与え、さらに周りにある関係者（この場合、職場、小学校、幼稚園、役場、保健所など）にまで影響を与えることを実感することになった。

このことにより、社会のニュースとして遠い話であったものが、一挙に身近な話題、身近な実感として当事者感覚にまで近づいたわけである。

２．新コロナウイルス感染の心ないうわさや偏見

小さな田舎町に感染者が出たことにより、表にある新コロナウイルスの症状が患者に与える問題よりも、小さな社会が与える問題の方が裏側でじわりじわりと影響が現れるようになっていった。実際、新コロナウイルスの感染は、適切な治療により大事にならず、濃厚接触者の検査結果も心配が必要なものではなかったのであるが、人々の心に与えるものは大きかったのである。

つまり、実際には、どこで感染したかもわからない感染経路であるのに、感染した会社員が札幌の繁華街に飲みに行っていたという事実とは異なるうわさや、その会社員家族への保菌者の疑いや偏見、学級閉鎖になったことによる子どもの感染不安、仕事を休み子どもにつきそう親の不安、高齢者施設の活動自粛が暗に子どもに与える雰囲気の変化（(注)町は共働き世帯が多く、３世代同居家族も多いことがある。）が精神的に不穏にさせたわけである。しかも、この精神的な不穏は、時間の経過とともに影響が増して尾を引いている印象がある。

こうしてみると、新コロナウイルスというウイルスそのものや症状の問題よりも、そのことによる社会からの精神的な影響の方が広く悪影響を生じさせていると指摘できる。

まとめ.

2020年5月29日(金)の北海道新聞に、北海道臨床心理士会の前田　潤会長の「新コロナ　ストレス、不安とどう向き合う」という記事が掲載された。

その記事には、「本来の敵はウイルスなのに感染者を責めたり排除したりしてしまう。」「...感染者とするのは自己責任ではないかということになると、自分や周囲への不安や不信感につながり、感染対策や自粛を相手に求める気持ちが過敏になったりします」「新型コロナは感染の不安

を呼び、それが差別を生み、周囲への不信と孤独感を深めます」などの指摘がなされている。

まさに、この記事で指摘されている事柄が生じてしまったのである。

このことは、実はもう他の地域で当たり前のように起こっていたのかもしれない。けれども、今回、私の生活する町、勤める幼稚園を介して、改めて身近な問題として考えさせられた。

普段から「小さな田舎町は、すぐうわさになる」とステレオ・タイプの話があるが、人のつながりが濃く、わかりやすいからこそ、人伝えにうわさが届きやすいのだろう。だからこそ、不信感を生みだすようなうわさではなく、人のつながりの濃さを活かした支え合いやいたわりが活きるような働きかけが必要に思う。

精神科医の思うこと⑲

「アイコンタクト」

松村　奈奈子

まだまだ、そしてこれからもコロナな日々。

マスク生活では、以前なら口元を中心に顔を見ていたのが、マスクに隠れて見えなくなったので、よりじっと目を見つめて話すことが多くなりました。つい最近、同僚と話していると、目元のお化粧が気になって「あれ、アイシャドウ濃くした？」と思わず言ったら「いえいえ、前からですよー」なんて怒られたりして。すいません、今まで目元をよくみていませんでした。もちろん診察でも、以前より視線を合わす時間が増えているような気がします。

そこで、視線を合わせる事には思う事があるので、今回のテーマは「アイコンタクト」

視線が合うという意味の「アイコンタクト」、精神科ではとっても大切。診察でのアイコンタクトの反応、私はカルテによく記載します。

医療業界は SOAP(Ⓢ:subjective 主観的情報Ⓞ:objective 客観的情報 Ⓐ:assessment 評価Ⓟ:plan 治療プラン)なーんて記号を使って、カルテを書いていき、それは共通の記

録方式でした。その客観的情報のところに、「アイコンタクト不良」や「アイコンタクト良好」と記入します。精神疾患や発達障害の特徴のひとつとして、所見として記載する時が多いですが、そうでない事ももちろんあります。初回の診察、視線が合わなかった緊張の強い患者さんが、話をしているうちに視線が合い出すとこちらもほっとします。その時は「始めは視線が合いにくかったが、途中より視線も合い、感情の表出もあった」なーんて、カルテに書きます。他のスタッフが読んでも、初めは緊張しやすい患者さんの特徴がアイコンタクトの記載で、伝わります。

　でも、初めてアイコンタクトを強く意識したのは、先輩の診察に付いて勉強していた研修医の頃の事です。ある日、外科手術後に入院中の患者さんが「眠れない日が続く」と診察を希望され、病棟に先輩と一緒に行きました。部屋に入ると、患者さんは起き上がれないようで、寝たまま挨拶をします。すると先輩は自然に患者さんのベッドサイドに行き、腰を落として話しかけます。動けない患者さんと目線の高さを揃えるためです。先輩と視線を合わせた患者さんは穏やかに話し始め、先輩はじっと聞いていました。その時、私はあわててマネして、腰を落として先輩の横に付いていました。視線の高さを揃えて聞くのは、大切な事なんだと意識した瞬間でした。

　ベッドサイドで立ったまま上から見下ろしている医師に、視線を上げて自分の思いをゆっくり話すことは難しいです。それはたとえ一瞬、視線が合っても、そらしたくなる状況だと思います。アイコンタクトを取りやすくして話しやすくする、診察では必要だと思いました。

以来、私も出来るだけ視線を合わせて、お話を聞くようにしています。

子どもの診察では、視線を低くするために、屈んだ姿勢で椅子から落ちそうになりながら話を聞きます。もちろん、中にはずっと目を伏せたまま視線を合わせない子どももいます。初めて会った大人に、視線を合わせるのを怖がるのも、気持ちを話せないのもある事です。そんな時は、ちょっぴりこちらも視線をそらしたりしてみたりします。ただ、それでも子どもの視線と同じ高さから、話しかけるのは大切だと思っています。

視線を合わせるアイコンタクト。

それは合わせるのは視線だけでなく、いろんな思いを合わせるという事が含まれている様に思います。もちろん、物理的に視線の位置を合わせるのも大事ですが、相手の観点に目を向け、合わせるのがアイコンタクトなんじゃないかと。

それは、なかなか思いが伝わりにくい目だけしか見えないマスク生活だからこそ、余計に大切なように思います。

で、そんな先日。とある学会の幹事をする後輩から「ZOOM での学会開催にしたら参加者が激減して困ってます。助けて下さい!」とメールがきました。コロナ以降、自分が所属する学会さえ ZOOM 学会になってからは気持ちが向かなくて不参加でした。しかし、後輩のたっての頼みとあって参加し、とうとう初めての ZOOM 学会を体験しました。

そこは誰ともアイコンタクトが無い世界。うーん,ZOOM 学会の人気の無さがよくわかる気がしました。

馬渡の眼　4
当事者運動の力

馬渡　徳子

今から遡ること 41 年の 1979 年春。私は、両親(父は長く諸外国にいた)の大反対を押し切って、祖父の後押しにて、当時名古屋市内にあった日本福祉大学に入学した。きっかけは、高校社会科教員の影響が大きく、担任でないにも関わらず、反対する親と懇談するために、自宅訪問をして下さったことを、今も記憶に鮮明に残っている。

その先生は、生徒会顧問もされていて、家永三郎氏のゼミ出身で、日本史・政治経済・倫理社会の授業にて、『検定不合格日本史』という教科者裁判の本を紹介下さり、「受験勉強の為に丸暗記する為政者の歴史だけではなく、歴史の主人公は私たち国民一人一人であること、基本的人権は、先達が不断の努力により、克ちとってきたものだということに、しっかりと目を向けなさい」と、歴史を遡って、当時の民衆の日常の暮らしぶりを、度々話題にして下さった。先生のテストは、時々ユニークで、まるで大学学部生の試験のように、藁半紙にたった一問の設問で、「日本国憲法前文を、全て記入しなさい」とか、二問で、「日本国憲法の中から、複数の条文を取り上げて、その穴埋め問題」と「第 97 条の私たち国民の不断の努力義務について、あなたの考えを述べなさい」といったものだった。一度だけ、設問が三問のテストの内、一問がどうしても何一つ書くことが出来なくて、仕方なくて「雪だるま」の絵を書き、「手も足も出ない!」との吹き出しをつけたことがある。すると、「ナイスジョーク!! 追試レポート書けば満点」と書かれた横に、追試の選択課題図書が書かれていた。その本が住井すゑ氏の『橋のない川』と松本清張氏の『砂の器』だった。人間裁判と言われた「朝日訴訟」のことも、高校の授業で学んだ。大学進学後、その裁判で、日本で初めて医療ソーシャルワーカーとして原告側証人として証言台に立たれた児島美都子先生のゼミに、私は所属することとなり、先生にお礼のお手紙を書いたことを覚えている。

私にとっては、ちょっとタバコ臭くて、ぼさぼさ頭の男性ばかりの、そして時々左腕に教職員組合の腕章をつけたりする、おもろい先生方のおられる社会科教官室が、「最も自分らしくあれる貴重な居場所」の一つだった。

先生方と生徒会の有志で、キリスト教会の日曜礼拝後の炊き出しボランティアや、児童養護施設への慰問活動、部落問題研究会へも参加することで、

社会のしくみの理不尽さに対する問題意識を高めていくこととなる。

さて、本題に戻ろう。

歴史を紐解くと、日本の「社会福祉元年」といわれた年が 1973 年。国際的な「障害者の権利宣言」が 1975 年。

名古屋に進学し、まず、一番驚いたのは、音声式信号やバスや地下鉄の改札口や、トイレ・車内アナウンス、そして点字ブロックだった。視覚に障がいのある方が、白杖で自由に外出されている姿に驚いた。そして、障がいのある方や高齢者への公共交通機関の無料パス券だった。

私の故郷にも、被爆者、障がい者、高齢者に公共バスの無料パス券は発行されていたが、それを利用して自由に外出できている障がいのある方は、まだまだ見かけられない時代だった。

翌年の 1980 年に、公営住宅への単身での障がい者、高齢者の入居が法律として認められたが、身元保証人問題、在宅ケア供給体制の不備など課題は多かった。翌年 1981 年に、国連が「国際障害者年-完全参加と平等-」を宣言し、以降 10 年を各国が行動目標達成に向けて尽力するとした。日本は、施設ケアから在宅ケアへの移行推進策として、進んだ制度面もあったが、ずっと後の 1989 年の消費税 3%が導入された年に、ようやく国として JR,私鉄、航空運賃の減額制度に、内部障がい者が加わっている。

1983 年春に、私は、大阪府北部地域にある総合病院の精神科ソーシャルワーカーとして就職した。大阪に移住してびっくりしたのは、地下鉄、私鉄、JR 職員による、車椅子で移動する障がいのある方への、なんともスマートな介助方法であった。事前予約も必要なかったように記憶している。

また、大阪府下の多くの自治体には、当時から、精神障がいのある方で地域国民健康保険の方には、国による公費負担医療の他に、自治体単独の医療費助成制度があった。全国展開のスーパーやデパート、庁舎には、今でいうところの多目的トイレが設置され、オムツ交換台も既に設置がされていた。

なので、翌 1984 年に結婚のために石川県に移住し、障がいのある方や、高齢者が公共交通機関の乗車時に料金を支払っておられたり、就学前の乳幼児の医療費に自己負担があることを知り、本当にがっかりした。社会福祉を学びながら、何と福祉の遅れたところに移住してきちゃったのだろうかと後悔した。

当時は、音声式信号機と時間経過表示式信号機も、県庁舎・各自治体庁舎周辺等の設置で、駅のエレベーター設置も業務用しかなかった。様々な公共施設における身体障害者用トイレも、非常に少なかったし、介助スペースが狭小で、個別性のある多様な障がいには、不適応だった。雪国で、車が移動手段の大半である石川県において、乳幼児を連れて公共交通機関を利用しての移動は、つまり少数派で、バスや電車に乗っていても、いつも気兼ねで、電車での長距離移動の際には、子どもが泣くと指定席を離れて車両連結場傍の乗降口や手洗い場であやすこととなり、目的地に着く前に既にへとへとで、腰が痛くなった。

2020 年観光都市石川県は、未だに、乗車前に介助予約が必要な公共交通機関があり、時間変更やキャンセルに、依頼人である当事者が気を遣う場面に度々出逢う。

それでも 1982 年に東京で『ひまわり号を走らせる会』が発足し、数年後に石川県も多様な年代の、多様な組織の方々と実行委員会が組織化され、私も患者さんに誘われて参加してきた。「障がいのある人が自由に旅行できる社会を目指そう!」と「ひまわり号列車」が実現した。列車は、後に飛行機にもなり、ハワイにも行った。記念の年には、東京ディズニーランドに日本中から集合した。この企画にて露呈した、車椅子で通れない改札口、業務用エレベーターにてのプラットホームへの移動、狭い電車の乗降口、車椅子のまま乗車できない座席、利用しにくいトイレ等の課題は、その後に航空業界に向けても、少しずつ改善されていくこととなる。

その後の公共建築物の建設や、JR 駅の改修工事、新幹線誘致に向けては、県リハビリテーションセンターと共に、多様な障がいの当事者代表参画の下に事業計画が進められていくこととなった。



注 1:EMPOWER Project で検索下さい。
プロジェクトの背景や活動報告が紹介されています。
写真は、「マゼンダ・スター」です。

現在では、石川県においても、様々な場所に、多目的室・多目的トイレが設置されて、表示も工夫が凝らしてあり、チャーミングである。宗教上の祈りの部屋を見かけることもできるようになった。



皆さんは、ご存じだろうか。

東京大学の学生さんが呼びかけ、国連でも発表をされ、全国に普及しつつある『ENPOWER Projzect 注 1』という多彩な活動もある。「何かお手伝いを要望されることがありましたら、気軽に、私に声をかけて下さい。」「公共交通機関等で、子どもや障がいのある方が、その特性として、不適応な状況となるのは、あたり前、どうか気兼ねなく。気にしていませんよ。」等のメッセージを、『マゼンダ・スター』をつけて、主体的に意思表示をする等の多様な活動をされている。

この活動は、東京都で始まった『ヘルプマーク注 2』とともに、全国に普及が進行している。

注 2:**ヘルプマーク**で検索下さい。
障がいや疾患があること、外見から分かりにくい、生きづらさのある人が、支援や配慮を必要としていることを周囲に知らせることで、支援を得やすくするように、東京都福祉保健局が作成。著作権は東京都にあります。全国の自治体に普及しています。
写真は、そのマークです。

石川県では、サプライズがあった。昨年 12 月の県議会にて、他府県と比較し格差が生じている、永年「請願行動を重ねてきた2つの課題」について、風穴が開いたのである。

①精神保健福祉手帳1級取得者への医療費助成制度の新設、②65 歳以上の心身障害者医療費助成制度が、還付請求から現物給付(窓口にて 1-3 割分を立て替え払いして、後に自治体に請求して返還を求める方法から、窓口無料に)への変更が実現したのである。

この県議会決定を受けて、各自治体での実施は、予期せぬ新型コロナのこともあり、10 月施行と遅延はしたものの、永年この運動に参加してきた者の一人として、本当に喜ばしいニュースだった。患者会のメンバーさんと、歓喜の声を挙げて喜び合った。

36 年前に、石川県に移住した当時に感じた福祉制度の遅れに対する残念な気持ちが、いっぺんにふっとんだ。

大丈夫。大丈夫。
やはり、当事者と伴に。できることをできることから。
「継続は力なり」である。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

ミルクの香り

小学生時代の記憶で鮮明なのは牛乳（ミルク）の思い出。
牛乳は贅沢な飲みものだった。



（昭和の給食、コッペパン＆マーガリン・シチュー・脱脂ミルク）

毎朝、牛乳配達員が牛乳瓶でガチャガチャ鳴る大きな布袋を自転車の両サイドに括り付け、家の門口に取り付けられた木製の牛乳箱に配達していく。飲み終わった空瓶を回収し代わりに新鮮な牛乳瓶を入れて行ってくれる。
当時、僕はミルクの香りにすごく敏感だった。我が長屋と背中合わせに難波から生駒方面につながる国道 308 号線が走っており、車道の向こうにペコちゃん人形が首を振るソフトクリームスタンドが開店した。国道を挟んで立つと彼方の店からホワンとした独特のミルクの芳香が風に乗って漂ってきて、「ああ〜ええ匂いやなぁ」としばし心奪われた。小学生になる少し前のことだ。

夏、初めてその店のソフトクリームを味わう機会があった。そこはかとない本物のミルクの香りが脳天にとどくというか、ちょっと言い表せない懐かしいような満ち足りた気持ちに浸った記憶がある。

小学生になって数年後、親にねだってわが家でも一時期毎朝の牛乳配達をしてもらえるようになった。ただし毎日 180CC の牛乳瓶を 1 本ずつ、それを姉と半分ずつ分けて大切に飲んだ。

当時、小学校では給食が支給されていて、メニューはコッペパンと一切れのマーガリン・肉ジャガなど日替わりの煮物・サラダ、そして脱脂ミルク、このミルクは牛乳瓶の牛乳とは別物だった。

やや茶色みがかった白色の脱脂ミルクのお椀をかたむけて液体を飲み乾すと、食器の底にこげ茶色の粉の残留物が残った。ミルク独特の芳香というものがなく、生温かい液体が喉を通るたびにかすかな臭みがあって敏感な子は全部飲み干すことができなかったようだ。

のちに知ったが、バターを作ったあとの残存物（絞りかす）で栄養価は高い、戦後の栄養不足の、すなわち団塊の世代（まさに私がそう）の子供たちの栄養補助食品としてアメリカから大量に提供され子供たちの健康作りに貢献してくれた。

そこで思い出すのは、姉と毎朝半分ずつ分けて飲んだ牛乳瓶のミルクこそ僕にとってホンモノの“ミルクの味と香り”で、さらにその数年前に味わったペコちゃんのソフトクリームのミルクの香りが続く。

香りの記憶は歳を経てもあまり衰えないようで、濃厚なミルクの味と香りにふれると今もなんとも言えない懐かしくくつろいだ気持ちが湧いてきます。

やぶにらみ日記 (404)

東成区の昭和

（１）給食









やぶにらみ日記 (405)

東成区の昭和

（２）給食









やぶにらみ日記 (406)

東成区の昭和

（３）給食









やぶにらみ日記 (407)

東成区の昭和

（４）給食









やぶにらみ日記 (408)

東成区の昭和



（ 5 ）給食









やぶにらみ日記 (409)

東成区の昭和



（ 6 ）給食









やぶにらみ日記 (410)

東成区の昭和

（ 7 ）給食



やぶにらみ日記 (411)

東成区の昭和

（ 8 ）給食



やぶにらみ日記 (412)

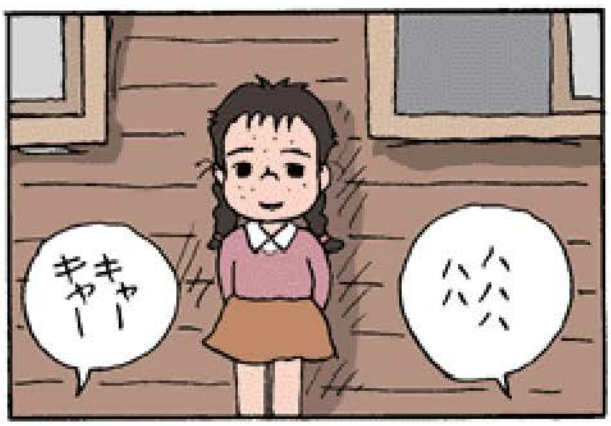
東成区の昭和

（ 9 ）給食









やぶにらみ日記 (413)

東成区の昭和

（ 10 ）給食









やぶにらみ日記 (414)

東成区の昭和

（11）給食









やぶにらみ日記 (415)

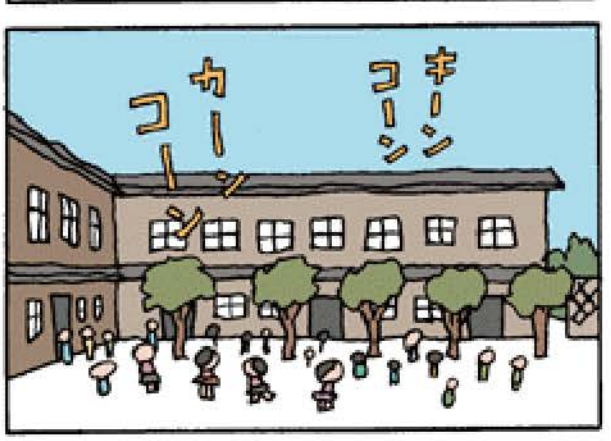
東成区の昭和

（12）給食









やぶにらみ日記 (416)

東成区の昭和



（13）給食









やぶにらみ日記 (417)

東成区の昭和



（14）給食









心理コーディネーターになるために Vol.1

山下桂永子



☆あるシンポジウムのお誘い

ひょんなことから2019年の９月、日本心理学会のシンポジウムに話題提供者として参加することになった。「ひょんなこと」と言ったら何らかの意図を持ってお声をかけてくださった先生に失礼にあたるかもしれない。訂正。ひょんなことではなく「思いがけず」、である。それまでの私にとって、学会のシンポジウムなんていうものは、見る聴くものであって、話す伝えるものではなかったし、何か目を引く論文を書いているとか、大学に籍をおいて研究を続けているとかでもない私には、あの演壇側に立つご縁はまずないだろう。そう思っていたので、オファーが来たときにはかなり驚いてしまった。

シンポジウムのテーマは「公認心理師になる～現場からの将来像～」というもの。オファーの内容は「医療、教育、産業、司法、福祉など5つの分野で仕事をしている人（現場で仕事をしている実務者）に １ 人ずつ話してもらうというものですが、教育領域からの話題提供者として何か話していただくことはできませんか？あまり難しい話ではなく、公認心理師になってから現場で考えていること、現場で起こっていることをざっくばらんに喋っていただければ」というものであった。

☆やってはみたいが自信はない



思いがけないお誘いに少々パニックになったものの、オファーを受けるか受けないかでいえば、最初からやってみたい気持ちはあった。私が、教育現場の公認心理師の実務者であるという風に誰かの目からみたら映るのだ、その話を聞きたい人がいるかもしれないのだ、ということは嬉しく光栄なことであったし、昔から目の前にぶら下げられた人参は食べてみてからおいしいか腐っているのか判断するタイプである（たいていはおいしくいただく）。受けるまでに少し時間を要したのは、ただただ自信がなく、恥をかきたくなかっただけである。

自信がない、というのは、教育現場でやっていることに自信がないということではない。「私って自分のこと、心理士（心理師）って言っていいのかしら？」ということである。いやまあ臨床心理士も公認心理師も資格は持っているから、心理士（心理師）じゃないかと言われれば心理士（心理師）ではある。それでもなかなか堂々と「（面倒なのでひらがなで統一します）しんりしです」と言えないままでいたこの 10 数年。それはなぜかと言えば、私自身が持つしんりしのイメージと、私が仕事でやっている、あるいはやっていきたいことがあまりマッチしていないような気がしていたからである。



☆食べるからには美味しくいただく

教育現場のしんりしと言って思い出される一般的なイメージはスクールカウンセラーが相談室で児童生徒と面談をしている姿ではないだろうか。しかし私はスクールカウンセラーとしての勤務は週に 4 時間ほどしかなく、あとの週 4.5 日は某市の教育委員会で教育相談というものを仕事にしている。そこの教育相談では、面談もするが、面談以外の仕事がかなり多い。その面談以外の仕事は私にとってはやりがいのある、必要な仕事ではあるが、それを教育現場のしんりしの仕事だとか勝手に言っていいのだろうか？今の職場で私と同じような働き方（詳しくは追々お伝えするとして）をしている人はいないし、他でもあまり聞いたことがないからである。

そんな教育現場のしんりしとして活動しているという自負もない人間が公認心理師の将来像なんぞ語って大丈夫か？やりたいようにやって「これが私の思う公認心理師です！」とか個人的に言っている分にはいいかもしれないが、結構歴史ある学会のシンポジウムだぞ？そのマッチしていないイメージの違和感にある程度折り合いをつけておかなければ、きっとざっくばらんを通り越してしっちゃかめっちゃかなことをしゃべってしまい（緊張や不安が高いと無駄に多弁になるタイプ）、偉い先生に罵られるか一笑に付されて大恥をかくに違いないぞ？そんな 2 時間地獄やぞ？

しかし。それでもこの人参は甘くておいしいのかもしれない。なんだったら人参に見えて人参じゃないのかもしれない。確かめたい。美味しくなければ次から食べない。そう思って食べることにした。

☆美味しかったシンポジウム



結果的にはとてもおいしく頂いた。このような機会を頂いたことは感謝しかない。シンポジウムの準備から発表に至るまでにいろいろな気づきや学びがあったし、他の話題提供者の方々のお話はとても刺激的で、2 時間はあっという間に過ぎ去った。違う分野でありながら根底

に流れる思いは 5 人に共通していることにも感激した。もっともっと話題提供の方々のお話や指定討論者の先生や司会の先生のコメントを聞きたかったし、フロアーからの質疑には時間が足りず、議論する時間もなかったため、残念に思うほどであった。真偽のほどはわからないが、記憶の限りでは大恥をかくこともなかったように思う。

何よりの収穫は、教育現場の公認心理師について、あれこれとこねくり回しているうちに、それまでうすぼんやりとしていた自分の仕事の方向性の輪郭が見えてきたことである。シンポジウムの話題提供者としての肩書を英語で表記するとき、当初、私の肩書は「School Counselor」であった。それについて、前述の通り、自分の今やっていることとの違和感があることを司会の先生にお伝えしたところ、司会の先生から「Psychological Cordinator がいいかもしれない」というご意見を頂いた。それがとてもじんわりしっくりきた。学校のカウンセラーではなく、福祉分野のワーカーでもない立場で、子どもに関わる様々な事象や課題について、心理学的知見をもってコーディネートする。今の仕事の内容やこれから目指すべきことを言い当てているように感じた。



☆心理コーディネーターになるために

私が今目指しているものは、教育分野における地域密着型の心理コーディネーターである。それがどういったものなのか、どうやって目指していくものなのかについては今後、お伝えしていきたい。今の職場に来て(たぶん)18 年目。美味しかったシンポジウムの持ち時間 15 分では伝えきれなかった数々の失敗談を交えて記そうと思う。大恥かかないといいけれど。



事例紹介３（多頭飼育崩壊ケース）

対人援助学マガジン 32 号、35 号、41 号の「そうだ猫に聞いてみよう」にて、多頭飼育崩壊ケースへの介入事例を紹介しました。その時も書きましたが、多頭飼育崩壊に至ってしまった経緯や要因はケースによって様々です。今回紹介するケースもあくまで１ケースの事例紹介であり、すべての多頭飼育問題に通用する解決策を記述しているものではありません。多頭飼育問題の「問題」も「介入方法」も多様です。それでも、取り組みの積み重ねが何かのヒントになればといいと思い紹介することにします。

人もねこも一緒に支援プロジェクトが係わるに至った経緯

人もねこも一緒に支援プロジェクトの活動が、ABC 朝日放送のニュース番組「キャスト」で放送されました（映像が見たい方は YouTube で「キャスト　多頭飼育崩壊」と検索すると出てきます。20 分の特集です）。その１回目の放送が終わるかどうかという時に、人もねこも一緒に支援プロジェクトのＨＰから相談が入りました。

> 突然すみません。キャストの特集を見まして連絡しました。我が家も猫の多頭飼育崩壊になっていまして、役場や動物愛護センターに相談はしているのですが中々解決できなくて相談したいと思いまして連絡しました。

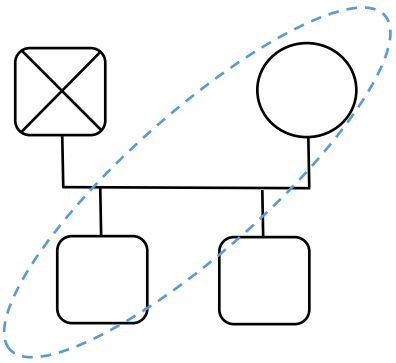
翌日、電話にて詳細をお伺いしたところ、相談者さんのご実家が多頭飼育崩壊状態になっており、近隣住民からの苦情を受け、愛護センターの指導が入ったそうです。その指導により、外中自由飼育の猫をなるべく室内に閉じ込めるようにしたものの、このままでいいのか不安である。という内容でした。

相談者さんの不安はもっともです。多頭飼育状態の猫を室内に閉じ込めたとこで、室内でさらに繁殖を繰り返し、事態は悪化の一途をたどるはずです。一時しのぎの指導にもほ

どがあります・・・。
経済的には余裕があるわけではないが、生活保護の需給はしておらず、不妊手術にかかる費用を負担する意思もあるとのことでした。ひとまず家庭訪問をすることにしました。

家庭訪問。お家と猫の状況。

７年前にお父さんが他界され、相談者さんの実家を出たそうです。実家ではお母さんと障害をもっているお兄さんとの２人暮らし。保護猫のメス２匹をもらい飼い始めたそうです。そして、地域のノラ猫と繁殖を繰り返し、気がつけば３０匹ほどに増えてしまっていたそうです。ここまで増えてしまった背景には、田舎ならではの外中自由飼育とお母さんが認知症を患ってしまったことも大きな要因としてあるようでした。







家庭訪問をすると、広い玄関で１０匹ほどの猫さんが居ました。一度は室内にいれたものの、出入りの際や家に空いている中から出入りしてしまっているようでした。







広い室内は、ゴミで埋まってしまっている部屋と、人が今も使っている部屋が分かれていました。寝室はケアマネージャーさんの支援により、ある程度片付けられていました。とはいえ糞尿の臭いがきつく、不衛生な環境になってしまっていました。また、猫がみんなガリガリでした。支援フードを開けると、沢山の猫が集まってくる状態でした。




この状態では不妊手術に耐える体力が心配なので、後日追加でフードを届けとにかく食べさせてもらうようお願いをしました。

特有の課題

●ノラ猫と飼い猫の区別がつかず、個体把握不可。

猫たちが外中を自由に行き来しており、どの子が飼い猫でどの子がノラ猫なのかの識別が誰にもできない状況でした。頭数も多く、人馴れもあまりしていない為、個体把握も困難な状況でした。

●近隣の放し飼いの猫問題。

緑豊かな田園地域なため、飼い猫を外中自由飼育することが当たり前のようでした。周辺を歩いてみたところ、100m 圏内でもお家の玄関先でのんびりお昼寝をしている猫さんも複数匹見かけました。その飼い猫たちが未避妊であれば、そこで生まれた子猫が相談者さんの家に流れてくる可能性が十分に考えられます。

相談者さん宅の「飼い猫」、近所の「ノラ猫」、近所の「飼い猫」この 3 カテゴリーの猫たちに不妊手術を実施する必要があると考えました。

人ねこケアの介入計画

- **まずは飼い猫とノラ猫の一斉不妊手術を実施**
  - 避妊去勢手術をすることでこれ以上の増加を防ぎます。また、不妊手術によりおしっこの臭い、発情期の鳴き声や喧嘩の声の軽減を図り、近隣住民の方の困りごとを少しでも軽減します。飼い猫とノラ猫の境が曖昧なため、敷地内を出入りしている猫は片っ端から不妊手術を実施します。
- **近隣住民の方への理解を求め、周辺の飼い猫の不妊手術につなげる**
  - 相談者さん宅の猫とノラ猫の一斉不妊手術を実施した後で、それを報告書にまとめ近隣住民の方へ説明に回ります。口だけでなく実際に動いていることを見ても

らったうえで、近隣の方が外中自由飼育している飼い猫の不妊手術をサポートをしたい旨を伝え、不妊手術希望者を募ることにしました。

不妊手術費、１匹あたり 3500 円は飼い主さんに実費負担していただき、それ以外にかかる送迎交通費などの一切の費用は、人もねこも一緒に支援プロジェクトで負担することとしました。

不妊手術

●第１回一斉不妊手術

大阪ねこの会の一斉不妊手術会に多くて 40 匹で予約をしまいた。手術日の前日の夕方から、捕獲作戦を実施し初日は 22 匹が捕まりました。翌朝に追加で３匹が捕まり、第一回目の一斉不妊手術は 25 匹の猫に手術を実施することができました。25 匹の猫たちが不在の間に、捕獲漏れの猫が何匹いるのか確認するために、お庭に餌をカメラを設置しました。その結果あと３匹ほど捕獲漏れの猫がいることが分かりました。



今回は初回の家庭訪問からキャストの記者さんが密着してくだいました。キャストの YouTube でみることができます。

●第２回一斉不妊手術

第１回一斉不妊手術の実施報告書を近隣の方に手渡しながら報告をし、第２回目の一斉不妊手術を来月に予定している旨を伝え、近隣の方が外飼いしている猫の不妊手術もその時に一緒に捕獲と病院の送迎をサポートしますと言って回りました。その結果、３件のお家が手をあげてくださり、計４匹不妊手術を実施することができました。飼い猫は不妊手術費実費は飼い主さんに負担していただき、送迎はこちらで無料で実施することとしました。**２回の一斉手術で、飼い猫、ノラ猫、近所の方の飼い猫、合わせ、３０匹の不妊手術を実施しました。あと、２匹ほど捕獲漏れのノラ猫さんがいる見込みです。**

また、室内から生後１か月半ほどの子猫が２匹出てきたので、その子たちは保護し里親さんを探し譲渡しました。

実施報告書を近隣住民の方へ個別配布

第１回目の不妊手術の実施報告書↓。相談者さんと一緒になんてリアクションがかえってくるのかドキドキしながら回りました。思ったより、好意的な方が多かったです。

ねこ対策実施報告

人もねこも一緒に支援プロジェクト（NPO 法人）では、[redacted]さんご家族から相談を受け、飼い猫および周辺のノラ猫の一斉不妊手術を実施いたしました。毎年繁殖と死亡を繰り返し、糞尿問題など近隣の皆様にはこれまで大変なご迷惑をおかしてしまい申し訳ございません。現在の法律では安易に猫を殺処分することはできません。そこで、猫問題の対策として現状できる精いっぱいの取り組みとして不妊手術を実施しいたしました。不妊手術により、これ以上の繁殖、発情期の特有の鳴き声、おしっこの臭いが軽減される見込みです。また、近親交配を繰り返して増えてしまった猫の寿命は２～５年程度と通常の猫に比べとても短いです。すぐに問題の解消ができず申し訳ありませんが、NPO も継続的にご家族に関わり、猫が増えることがなく、緩やかに減っていくようサポートをしていきますので、ご理解いただけますと幸いです。

さくら耳が手術済みの目印です

手術を実施した猫には、その印に耳先に V 字の切れ込みが入っています。このしるしが無いと、手術済みと分からずに、再捕獲されてしまうことが多くあるため、再捕獲防止のために実施しています。



今回不妊手術をした猫たち

2020 年 7 月 19 日不妊手術を実施した猫たち。手術費用は[redacted]さんご家族が負担されました。



ご協力のお願い

現在、確認されている猫で３～５匹手術できていない猫がいます。全頭に不妊手術を実施するため、第２回の捕獲と手術を８月９日と、９月 19 日に予定しています。もし、皆様のお家に、耳カットの無い猫が来ているようでしたら、一緒に捕獲し、病院の送迎を NPO で実施させていただきます。飼い猫さんの場合は、不妊手術費用１匹あたり 3,500 円の実費をご負担いただける場合は、一緒に病院の送迎をさせていただくことも可能です。お急ぎで手術をご希望の猫さんがいる場合は、別途ご相談ください。※[redacted]さん宅周辺の方に限らせていただきます。

情報提供、猫の手術のご相談はこちら　070-2291-0780（担当：小池）

※「[redacted]の猫の件で」とお伝えください。

スケジュール

今回紹介した内容がどのくらいのペース配分で進んだのか、下記にスケジュールをまとめました。

日程	実施内容
6月12日	**HPお問い合わせから相談** 飼い主さんの次男さんから相談が入った。
6月23日	**初回家庭訪問** 家庭訪問を実施
6月24日	**メス１匹不妊手術** 妊娠が疑われるメス１頭を不妊手術
6月25日	**キャットフード追加支援** 不妊手術に耐えられるように猫たちを太らせる。
7月18日	**一斉捕獲** 翌日の一斉不妊手術に合わせ、前日の夕方から捕獲を実施。 初日は２２匹の捕獲が完了
7月19日	**一斉手術と捕獲漏れの猫の送迎** 前日の夜から室内に捕獲器を設置してもらい、３匹が追加で捕獲器に入ってくれた。手術会場に運び、前日に捕獲された子たちと一緒に不妊手術を受けた。
7月20日	**リターン** 不妊手術を終え、病院で一泊した猫さんたちを飼い主さん宅に戻す。
8月1日	**近隣住民の方への実施報告回り** 不妊手術の実施報告書を作成し、近隣住民の方へ説明回り。合わせて、飼い猫の不妊手術サポートを提案。
8月8日	**第２回一斉不妊手術** 飼い主さん宅で１匹、近隣住民の方の飼い猫３匹の不妊手術を実施。
8月9日	**不妊手術（大阪ねこの会手術会場にて）**
8月10日	**リターン**
9月6日	**子猫２匹保護** お家の中から出てきた子猫２匹を保護。

手術、その後

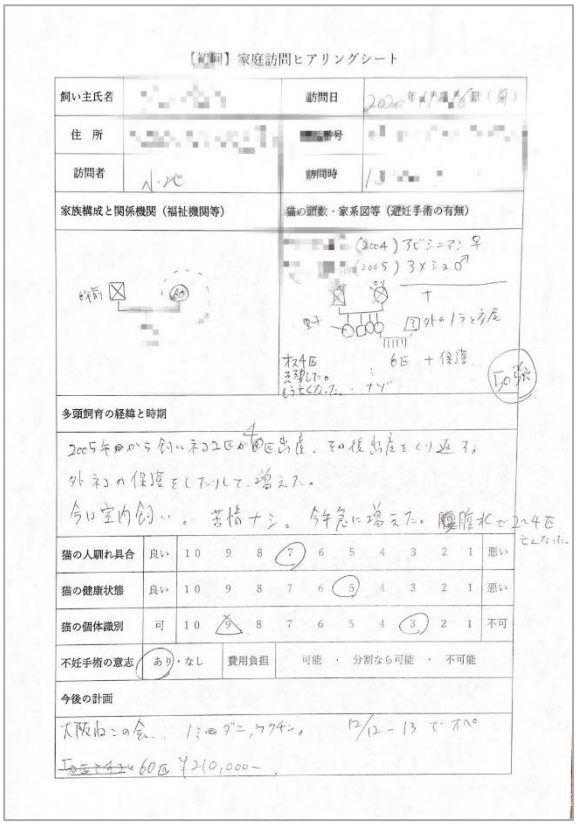
一旦猫の問題には一区切りがついたので、室内の環境改善は、相談者である次男さんと、ケアマネージャーさんたちとで相談がなされるそうです。ただ、認知症のお母さんと障害のあるお兄さんの２人暮らしには限界が見え始めていました。飼い主さん親子が施設に入所することになった場合、残された猫たちをどう保護していくのか、あるいは不妊手術が終わ

っているので地域でなんとか受け入れてもらうのか。頭の痛い課題が残っています。

人もねこも一緒に支援プロジェクトの「飼い続ける支援」では太刀打ちできない壁が「飼い続けられない飼い主さん」の問題です。とはいえ、ここでどうやってそういうお家から猫を引き取れるようになるか、という方向を検討するのではなく、私はどうやったら多頭飼育崩壊を未然に防ぐことができるのか。の予防的な方向を一生懸命考えていきたいと思います。

資料を公開

記録や情報の保管は問題を考えるうえで、とても大切なことです。家庭訪問時に、聞き漏れ等がないように、家庭訪問時のヒアリングシートを作成し、使うようになりました。結構使いやすいので、人もねこも一緒に支援プロジェクトのＨＰにテンプレートをＵＰしました。多頭飼育問題と関わっておられる方々やこれから関わる方々の役に立てれば幸いです。



【初回】家庭訪問ヒアリングシート

飼い主氏名		訪問日	2021年4月5日（月）
住　所		番号	
訪問者	A・K	訪問時	13
家族構成と関係機関（福祉機関等）		猫の頭数・家系図等（避妊手術の有無）	
多頭飼育の経緯と時期			
猫の人馴れ具合	良い 10 9 8 (7) 6 5 4 3 2 1 悪い		
猫の健康状態	良い 10 9 8 7 6 (5) 4 3 2 1 悪い		
猫の個体識別	可 10 (9) 8 7 6 5 4 (3) 2 1 不可		
不妊手術の意志	(あり)・なし	費用負担	可能 ・ 分割なら可能 ・ 不可能
今後の計画			

おわり



小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。

先人の知恵から
30

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

30 回目。相当スピードアップしないと、この調子だと後 60 回かかる？？それは大変！同じような内容のものも出てくるので、今まで出したものと被らないよう気をつけよう。今回は次の７つ。

・三人虎を成す
・三年経てば三つになる
・鹿を逐(お)う者は山を見ず
・地蔵は言わぬがわれ言うな
・親しき仲に礼儀あり
・習慣は第二の天性なり
・十七、八は藪力

＜三人虎を成す＞

事実でなくても、多くの人が言えば、いつか事実と思われるようになることたとえ。一人が「虎が出た」と言っても信じられないが、三人が次々にそういうと、本当に虎が出たかのように信じられてくることから。「三人よれば金をも溶かす」「衆口金を爍かす」も同義。

出典：戦国策

子どもたちのＬＩＮＥやＳＮＳでの噂話や悪口、思いつきや知ったかぶりなどで様々なトラブルが起こっている。そこで、子どもたちだけではなく保護者達も同様に、誰かの噂話にのらない事、悪口に同調しないことを伝えている。一度出してしまった言葉は引っ込められない。それがＬＩＮＥやＳＮＳだと尚更に引っ込みがつかなくなる。いくら削除しても、既に人から人へ伝わって、当の本人とは全く何の関係もないところまで広がってしまう。人の言葉と言うのは怖いものである。

この諺の様に、世の中ではこうしたことが沢山みられる。ＳＮＳで流されていることは、嘘も真実もないまぜになっている。また、広告も一緒である。詐欺まがいの広告やＳＮＳでの上手い話も、〇〇博士とか

医師、或いは先生などと呼ばれる人が三人真実のごとく語れば、それはどんないい加減な、嘘八百であっても真実と思われてしまう。〇〇博士とか医師が嘘であっても、それをいちいち調べる人も少ない。情報とは便利でありながら、利用するものが余程注意し、賢くいないととんでもないことになるという戒めとして、この諺を使う。

以前に紹介した「一人虚を伝うれば万人実を伝う」も同様の意味。

＜三年経てば三つになる＞

どんな人でも物でも、全く変わらないということはない。時が経てばそれに応じて成長し、変化するということ。生まれた子も、三年経てば三歳になるの意から。

発達障がいの相談が、学校でも私設事務所でも多い。障がいと言われると、もうずっと変わらないと思う人や、反対に、障がいは病気だから治ると思う人など色々いるが、どちらも違う。知的に高い発達障がいであれば、知的な部分でカバーしたり工夫したりすることで、日常生活であまり困らないようにしていくことが出来る場合がある。しかし障がいが治るわけではない。知的にそれほど高くなくても、物事のパターン化や本人にやりやすいやり方を見つけることが出来れば変わっていける。衝動性や多動性については投薬で多少コントロールできるケースもある。発達に凸凹がある子ども達や大人であっても、全く変化しないわけではない。少しずつ、ちょっとずつ、緩やかでも変化は必ずある。我が子が発達障がいであるということを受け入れることはとても難しい。しかし、この諺でほんの少しでも気持ちが楽になれればと伝えている。

＜鹿を逐う者は山を見ず＞

一つのことに熱中すると、他のことを顧みる余裕がなくなることのたとえ。また、目先の利益を追っている者は、それ以外の者が見えず、道理を忘れるというたとえ。鹿を捉えようと追い回している者は、獲物に気をとられて山全体のことが目に入らないという意から。「鹿を逐う猟師は山を見ず」ともいう。

出典：淮南子

視野が狭くなるということはだれしも経験があると思う。何かに夢中になっている時もそうだが、1 つのことを気にしだすとずっとそのことが気になってしまって他のことが考えられなくなる。そんなことが子育て中の親にも時々見られる。小さなことに拘って、全体を見失ってしまうと、子どもにとっても親にとっても良い結果は招かない。

以前とても想像力豊かな子がいた。彼女は時々ボーっとしているが、そういう時はいつも色々な想像の中でとても楽しい時間を過ごしていた。物語を考え、その物語は想像の中でどんどん進み広がって行った。話を聴いてみたらそれはそれは面白くて可愛い話であった。ただ、その子は授業中もちょっと時間が余ると想像の世界に入り込んでしまうのである。「窓際のトットちゃん」を思い浮かべる人もいるような子なのである。しかし、注意力が散漫と思われた為、

教師から叱られることが増えた。母親は教師に子どもの様子を伝えられ、家でも母親が叱るようになり、その挙句に子どもは、想像することを禁止されてしまったのである。それでもそう簡単に想像を止めることなどできない。困った母親が相談に来た。

想像することの素晴らしさ、楽しさ。それが無ければ、芸術も科学も成り立たないのではないか？授業に集中できないのは、もしかしたら授業が楽しくないからかもしれない。そんなことを考えながら、この諺を母親に伝え、その子の持つ素晴らしい能力を認め、お話を書いてみる事や、録音することなどを勧めた。母親にしてみれば、どうやって想像するのを止めたらよいのかと聞きたかったのだろうが、全く異なる助言にびっくりしたようだったが、なるほどと納得しやってみると言って帰って行った。その後特に母親が相談に来ることは無かった。

以前に挙げた「一葉目を蔽(おお)えば泰山(たいざん)を見ず」や「一悪を以てその善を忘れず」にも重なる意味合いの諺である。

＜地蔵は言わぬがわれ言うな＞

うっかり秘密を漏らすことが多いから口には気をつけよという戒め。秘密を打ち明けたりするとき、相手に「人に言うな」と口止めするが、むしろ、自分があちこちに漏らすことが多いことから。「俺は言わぬがわれ言うな」ともいう。

大体秘密というものは漏れるものである。「誰にも言わないでね」と言って誰かに話したら、その人がまた誰かに「誰にも言わないでね」と伝えてしまうものである。秘密を守りたかったら、絶対に誰にも言わない事だ。秘密を誰かに伝える時は漏れることを覚悟すべきである。もちろん我々心理士/師は守秘義務があるので、きちんと守るが、一般的には守られないと思った方が良い。

最近ではSNS、LINEやInstagramでも秘密の漏洩が目立つ。プライバシーの侵害も見られる。そんな時代に加えて、どれだけの人が地蔵の様に黙っていられるだろう？自分がそもそも秘密を漏らすことが多いというこの諺は今も使いやすい。

＜親しき仲に礼儀あり＞

どんなに親しい間柄でも、礼儀は守らなければならないということ。親しみが過ぎて礼を失するようなことがあれば、かえって不和となりやすいということ。

友人関係について、子どもたちはいつも悩んでいる。生のコミュニケーションが全体的に減っている昨今では、友達との心理的距離をつかみづらくなっている。ついつい馴れ馴れしくしてしまって避けられたり、或いは距離を取り過ぎて関係が切れてしまったり。程々というのが難しくなっている。

子どもたちにその距離感を伝えるのも中々難しい。ただ昔からこんな諺があると紹介し、どんなに親しくなっても、お礼を言ったり挨拶をしたりすることは忘れてはいけないこと、それが関係を維持することになると伝えている。

＜習慣は第二の天性なり＞

身についた習慣は、いつしかその人に深くしみ込んで、まるで生まれつきの性質のようになるということ。古代ギリシャの哲学者ディオゲネスのことば。「習慣は自然の如し」も同義。

何事も習慣づけるのは中々大変である。大学で授業を持っているが、教職課程なので、先生になることを考えている学生もいる。そこで先生になるとしたら、子どもたちにどのように学習を習慣づけるかという課題を出すことがある。

一般的に学校では宿題を出す。家庭学習も課すところもある。そうすることで学習を習慣づけようとしている。小学 1 年生では、親がつきっきりでやらせる家もあるだろう。

宿題が必ずしも学習する習慣をつけることに繋がるかどうかは疑問である。宿題をしなければ叱られる、表に×がつく、やって行けばシールを貰える、褒められるなどで子どもたちは仕方なくやっている。楽しくてやっている子はいるだろうか？家庭学習も、親が決めた内容を仕方なくやっている子も多い。それでは習慣づくこととは程遠い。

習慣づけるには、毎日少しずつ、簡単なことを続けることではないだろうか？例えば、歯磨きは毎日やっているうちに習慣になっていくだろう。

歯を磨かないと気持ちが悪いくらいになればしっかりとした習慣になっている。夜寝る時はパジャマに着替えるなども同じ理屈だし、服のまま寝るよりは身体が楽だというのもある。勉強を習慣づけるなら、毎日ほんの少し、興味があることからやらせてみる。1 年生であれば、字を書くことでも、絵を描くことでも、何かを調べることでも身体を動かすことでも、何でも良い。そして、楽しいとか、面白いとか、やって気持ちが良いとか、自分にとって心地よいものがあればそれは続くだろう。そして続けているうちに習慣となっていく。習慣になれば自然に、特に強く意識しなくても出来るようになる。

勉強に限らず、なんにしても、習慣になってしまえば、自分の一部となり何の苦もなく続けて行くことが出来る。そこに至るまでは、先ずは面白い、楽しいと思うことが一番だろう。

保護者から「片付けが出来ない」とか「勉強しない」という相談を度々受ける。そういう時こんな諺を伝え、楽しみながら出来るようにさせてはどうかと助言している。

英語では・・・

Custom is a second nature.（習慣は第二の天性なり）

＜十七、八は藪カ＞

十七、八の年頃は、根のしっかり張った竹をも引き抜くくらいのとてつもない力が出るということ。

十七、八歳の頃と言うのは、多くの人が若々しくて、エネルギッシュである。知識欲も吸収力も素晴らしい時期である。歳をとって思い返してみると、筆者自身も含め、もっとあの頃にしっかり勉強しておけばと思う人は多いだろう。しかしついつい、楽

しいことにかまけてしまい、勉強を怠ってしまう。スポーツでもなんでもこの時期は自分の能力を発揮できる一番の時期かもしれない。最近は人生が長くなった分、能力のピークが少し後ろにずれこんでいるかもしれないが、兎に角、人には最高の時期と言うのがある。そういう意味で、この諺を伝え、その子がもしその時期の前なら、これからその時期が来ることを、そして今その時期であるなら、今頑張れば結果が出るであろうことを伝えている。

出典説明：

戦国策　全三十三編。

中国の雑史。前漢の劉向の編。戦国時代に諸国を遊説した縦横家が諸侯に説いた戦略を、国別に集めて三十三編にまとめた書。いくつかの書にのっているものを校訂・編集したもので、当時の政治・外交・軍事などを知るための貴重な資料。現在伝わるものは、北宋の曾鞏が欠けた部分を補って編纂したものに姚宏が注を加えた三十三巻本と、鮑彪の十巻本の二系統がある。

淮南子　内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の孫である淮南王劉安。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

偶成

西郷隆盛が大久保利通に寄せた詩。

うたとかたりの対人援助学

第 16 回　「屁ひり嫁」の３つの結末

鵜野　祐介

オンライン授業の効用

コロナ禍の影響で、今年度秋学期（後期）の授業は対面方式、ライブ型オンライン方式、オンデマンド型オンライン方式の３つを併用している。オンデマンド型とは学生が自分の都合のいい時間にオンライン上で授業を受けられるというもので、じっくり考える時間がとれるためかコメントの分量が多い。

従来は授業時間の最後５分程でコメントを執筆してもらっていたが、オンデマンド型の場合、一応の字数制限は 400 字と設定しているものの、これはあくまでも基準にすぎないため、熱心な学生は制限をはるかに上回る分量で、しかも深い内容の感想や質問を寄せてくれる。このことはオンライン授業がもたらした効用の一つだと思う。

今回は最近おこなった授業（「文化の人間学」―文学部２回生以上対象で受講者は約 170 名）の「屁ひり嫁」に関する回（11 月 16 日）を取り上げ、学生たちのコメントを紹介しながら、若い世代に昔話を伝承することの意味を考えてみたい。

昔話「屁ひり嫁」とは？

昔話「屁ひり嫁」は、『日本昔話通観 28　昔話タイプインデックス』では「笑い話―誇張」の話型群に分類されており、東北から九州・沖縄まで全国的に分布している。最初に、稲田浩二編『日本の昔話』下巻（ちくま学芸文庫 1999）に収載された群馬県中之条町の類話を紹介しておこう。

むかし、ある家で嫁さんもらったけど、しばらくすると青い顔になっちゃったんで、姑さんが、「どうしたんだ」って聞いたらね、「屁が出てえんだ」って言う。「そいじゃ、屁ひればいい」って言ったの。

そうしたら、「おれが屁ひりゃ、たいへんだから」って。「いいから屁ひれ」って言ったら、尻（けつ）まくって、ブーッてひったんだって。そうしたら、旦那さんもお婆さんも、前の大根畑へ吹っとんじゃったんだって。そんで、「これほど屁ひるんじゃあ、はあうちに置くわけにはいかねえから、出ていってもらいてえ」って。ほしたら、出ていくって。

そで、旦那さんが荷物背負って、お嫁さんを送っていたんだって。そしたら途中で、村のもんが柿とりにやってきて、いくらはたいても落ちんで困ってるんだって。そしたら嫁さんが、「ようし、おれが屁で落としてやる」って言うと、「そんな、屁でなんて落としたら、この馬くれてやる」って。ほいで尻（けつ）まくって、ブーッとひったら、柿がみんな、一つ残らず落ちちゃったんだって。しょうがない、村のもんは約束の馬をくれたんだって。

そで、その馬引いていったら、今度は米三俵積んだ荷車が、坂を上がれなくて困ってるんだって。また嫁さんが、「わけはねえ、おれが向うの家まで屁で送ってくれる」って言うと、「そんなことはとってもできねえ。もしできたら、この米みんなくれてやる」って言うから、それでまたうんとでかい屁をしたら、米三俵にその人まで、家のそばまで吹き飛んだんだって。

それで米三俵もらって馬に乗したら、旦那さんがすっかりたまげちゃって、「こんないい嫁御を返されねえ」

って、馬に米三俵つけて、家まで引き返してきたって。そしたら姑さんも大喜びして、それからその家は、嫁さんのおかげで大尽(だいじん)になったって。

（329-330 頁、改行を一部改変）

テツ子さんの語りと共振する聞き手たち

拙著『昔話の人間学　いのちとたましいの伝え方』（ナカニシヤ出版 2015 年）にも紹介したが、筆者はこの「屁ひり嫁」を 2014 年 8 月下旬、宮城県丸森町で行われた「第9回みやぎ民話の学校」の中で福島県飯舘村出身のテツ子さんから聞いた。会場の和室には百名ほどがいて、そのほとんどが中高年の女性だった。

テツ子さんは、東日本大震災による原発事故の後、避難生活を余儀なくされ、2014 年 8 月当時は福島市の仮設住宅に暮らしておられた。80 歳を過ぎて足も不自由になり、家の中に閉じこもりがちだった彼女は、当初この「民話の学校」に参加して昔語りをすることをためらっておられたというが、聞き手の女性たちの笑い声に後押しされるように、語り口もどんどんなめらかで力強くなり、次の爆笑へと誘った。「ここに来て、皆さんの前で民話を語れてよかった。元気をもらえた」と、テツ子さんは後で話されたという。

「屁ひり嫁」の語りの場

伝統的な昔話の語りの場面として多くの人がまず思い浮かべるのは、夕食後の、炭火からチロチロと炎が立ち上る囲炉裏端で、語り手はお爺さんやお婆さん、聞き手は幼い子どもたちといった情景ではなかろうか。子どもの寝床で語る親や祖父母の姿が思い浮かぶという人もいるかもしれない。

ところが、『昔話の人間学』にも記したように、この「屁ひり嫁」の場合、このような家庭内での祖父母や親から幼な子への語り以外に、さらに２つの「語りの場」があった可能性が想定される。

２つ目の語りの場は、「座頭や屁ひり芸能をもって巡国する輩」（田中文雅の説）や「世間師」と呼ばれる金物行商人たち（稲田浩二の説）が、村や町の外部からやってきて、その村や町の人たちを集めて面白おかしくこうした話を語ったというもので、それによって彼らは人びとの警戒心を解き、身銭を稼ごうとしたとされる。

また、３つ目の語りの場とは、「娘宿」や「子安講」などの、女性たちが寄り集まって食事をしたり、祝詞や念仏を唱えたり、年長者の話を聞いたりする場であり、そこで語り上手な年配の女性が好んで語ったのが、本話をはじめとする嫁と姑の葛藤譚であったと考えられる。前述した「みやぎ民話の学校」で筆者が目撃したのも、このような「女性による女性のための語りの場」であった気がする。テツ子さんの語りにおいても、大きな屁をひる娘の行く末を案じる母親の心情や、嫁に対する姑の態度が嫁の放屁の前後で豹変する様が生き生きと表現されており、聞き手の大半が女性であることが語り手に強く意識されていると感じられた。

復縁しない結末の類話

上に紹介した群馬県の類話の結末は、いったん離縁を言い渡された嫁が、実家に戻る途中に再び披露した「屁の力」によって富を獲得し、改心した夫や姑によって復縁できたというものであるが、別の形の結末を取る類話もある。

・・・じさまとばさまは、腰をさすりながらやっとこさ起きてきて、「こんな嫁こは、いっときも家さおかれねえ。おん出してやる」と、おこったんだと。そこで嫁こは、すぐ荷物をまとめ、泣き泣き、馬こをみつけてきて、背中さ荷物を乗せたと。若だんなも来て、馬こ引っぱり、先になって歩いたと。嫁こは後から、ショボショボとついていったと。

二人が村ざかいの峠まで来たとき、やはり峠を越すらしい十人ばかりのさむらいさ出会ったと。道べりには大きい山なしの木があって、見あげると、なしがすずな

りなんだと。さむらいが「あれ、取るべ」と、てんでに石を拾ってはぶつけるけど、なかなか当たらねえ。嫁こは、おかしくて「あははは」と、笑ってしまったと。さむらいはおこって、「無礼者(ぶれいもの)」と、刀に手をかけたと。そしたら、殿さまが、「待て、なして(なぜ)わらうか。わけを話してみろ」と、ひざをのりだしてきた。

「これぐれえのなし落とすのは、おれのへ一発でできる」「そんだら、落としてみろ」「おさむらいさん、ちょっと山のかげさ行ってけろ」

嫁こは、男たちを追っぱらうと、なしの木の下さ行って、大砲みてえに大きいおならを、ぶっとばしたと。太い大きななしの木は、ゆさゆさ、ゆっさ、ゆっさ、ゆれて、実も葉もみんな落ちてしまったと。さむらいがもどってみたら、木の下は地面も見えねえほどの、なしの山だったと。殿さまは、手をたたいて、よろこんで、「みごと、みごと、ほうびに、ほしいものをやるべ」といわれたから、嫁こは思いきって、こういったと。

「おれ、家こ追い出されて行くところがねえから、家がほしい。ほかにほしいものはねえ」「そのくれえは、造作(ぞうさ)もねえ」と、殿さまはいって、嫁こが、さっき出てきた家の隣さ、りっぱな家を建ててやったと。おまけに、家のそばに、「へや」というて、へをふってもええ、小さい離れまで、こしれえてやったと。それがへやのはじまりだと。どんとはれ(岩手県、稲田和子他編『かもとりごんべえ』岩波少年文庫2000、24-29頁)。

嫁ぎ先の隣に家を建ててもらったのは何故か

この話では、嫁は離縁されたまま、嫁ぎ先には戻らない。その代わり、殿様に頼んで、その家の隣に「へや」と呼ばれる放屁専用の小さな離れまで付いた立派な家を建ててもらう。このような結末で「めでたしめでたし」としていいのだろうか？　現実問題として、隣の家に住む元夫や元姑と顔を合わさずに生活できるはずがなく、顔を見れば互いに気まずくなるはずで、わざわざすぐ隣に家を建ててもらった理由はなんだろう？

そんな疑問や感想を、授業の中で解説として付け加え、学生たちの意見を求めたところ、ある女子学生から次のようなコメントが寄せられた。

> 並外れた特殊な能力を持つ女性が、結婚相手の家族から離縁されても、一人で生きている中で、その能力の価値を殿様 or 商人から認められるという、結婚をしてハッピーエンドで終わるようなおとぎ話とは対照的な話(離縁型の場合に限りますが)を興味深く思いました。当時は分かりませんが、現代の視点でこれらの話を見ると、ジェンダーバイアスに負けず、個人の能力を活かしながら労働を頑張る女性への応援にも個人的には捉えられました。

結婚を女性にとっての幸福の最終形とせず、個人の能力を活かして活躍しようとする女性への応援物語として、彼女はこの話を読み取っている。

そう考えると、わざわざ嫁ぎ先の隣に新しい生活の拠点を置いたのは、自分の活躍ぶりを元夫や元姑に見せつけ、彼らを見返してやるためだったとも解釈できるだろう。「あなたたちの言いなりになって一生を終えるのではなく、自分自身の力で生きてみせます」という意思表示とも言える。その背後には、姑がそう簡単に改心して嫁と仲良く暮らすなどということはあり得ないはずだという、語り手の現実感覚が働いているのではあるまいか。

頼りない夫へのツッコミ

また、やはり女子学生による以下のようなコメントもあった。

> 「屁ひり嫁」というお話を子どもの頃に読んだときは「へっこきよめさ」という題名でした。幼い当時の頃は、姑という存在がいまいち、はっきりとしていませんでした。ただ嫁が屁をこいて面白い話だとしか考えていなかったと思います。しかしこの年になると、「嫁と姑問題」はいやでも目に耳に入ってきます。これらの問題を把握したうえで改めて「屁ひり嫁」を読

むと、夫の存在が気になりました。「嫁姑問題」といえば夫の頼りなさが話によく出るからです。この昔話の夫も、姑に言われるがままに一度は嫁を追い出しますが、屁のおかげでものが手に入るというくだりで思い直して連れて帰ります。しかしその理由が、宝嫁だから、なので笑い話と割り切ればいいのですが少しツッコミたくなってしまいました。

夫や父親の不在もしくは影の薄さ、存在感のなさは本話に限らず、日本の昔話の特徴の一つと言えるが、この学生が指摘するように、それは現実の夫婦関係や親子関係を反映するものかもしれない。

いずれにしても、学生たちが本話の主人公に自身を重ね合わせて、物語に込められた意味を読み取ろうとしており、それは先ほど述べた３つ目の語りの場、「女性たちの集いの場における語り」において体験されるものと合致すると思われる。そこでは、本話は単なる笑い話ではない。シビアな現実を「ワッハッハ」と笑い飛ばす話なのだ。

第３の結末ー豹変しない姑ー

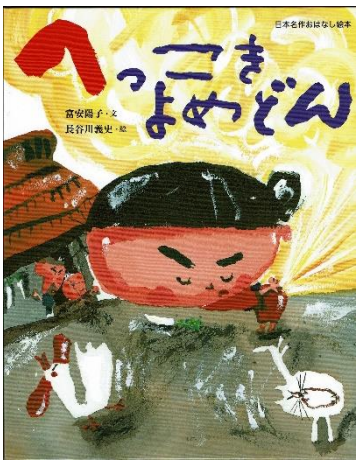
こうして見てくると、並外れた放屁をした嫁に激怒して離縁を迫った姑が、嫁を呼び戻し復縁させた理由も「金」目当てであり、真の意味での改心ではなく、「復縁型」もやはりシビアな現実を踏まえた話であることがわかる。

それではこの「復縁型」と、婚家の隣に家を建てる「離縁型」のどちらがいいかと考えると、聞き手が若い女性たちであるとすれば「離縁型」の方がストレス発散できていいだろうし、一方、現役の姑や姑候補生が聞き手であれば、自身への戒めを促すという意味において「復縁型」の方が望ましいと言えるかもしれない。

ところで、このどちらでもない結末を取る類話を絵本の中に見つけた。富安陽子・文、長谷川義史・絵の『へっこきよめどん』（小学館 2009）である。

この話では、嫁の屁の威力で向うの山まで飛ばされたばばさまが、今度は引きっ屁（吸い込む屁）によって家まで引っ張り戻されるのを３回繰り返し、最初は大根、次にはタケノコ、最後はイノシシを抱えて家に戻ってくる。屁の収まった嫁が「おら、もう、このいえにはおられやせん」と言うと、ばばさまはにっこり笑って、「なあんの、おまえはたいしたよめっこだ。おかげでこんなにでっかいだいこんとたけのこと　いのししまでとれたぞ。こんやは、とびきりおいしい　いのししなべにしようや」と言う。

嫁の並外れた放屁に、この姑は態度を豹変させるどころか「たいしたよめっこだ」とほめたたえ、離縁もしない。この類話の出典は書かれていないので、もしかしたら再話者・富安陽子の創意によるのかもしれないが、伝承話の可能性ももちろんある。



絵本の最後には、「人に笑われるような欠点が、みごとに幸せを勝ち取る、へっこきよめどんの話は、私たちに、生きる勇気をあたえてくれるように思うのです」という松谷みよ子の解説があり、これが本話のテーマであるならば、姑の豹変は必要不可欠のモチーフとは言えず、幼い読者や聞き手にとってはむしろ有害であり、削除すべきなのかもしれない。

だが、このような「けなげな嫁」と「優しい姑」が仲良く暮らす結末の類話だけが生き残り、第 1、第２の結末は忘れ去られてしまうとすれば、とても勿体ない気がする。せめて学生たちには、シビアな現実を踏まえた類話も合わせて紹介し、そこに込められた人びとの願いを一緒に考えていきたいものだ。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第16回

黒田長宏

＜8月7日＞

42号の原稿を投稿した。時は新型コロナウイルスの流行中で先がまだ見えてこない。

＜8月19日＞

まだ42回の原稿締め切り前だが、私は既に提出してしまったのだが、平凡な連続の中で、昨日から多少変なことが出てきた。職場のGさんが新人のMさんと、私がしている作業のチェックに来たのだが、Gさんが私が作業しているというのに、Mさんに「このチェック作業は必要なのか」と言い出したのだ。これでは、例えば必死にカンナで板を作っている大工さんを前にして、この家建てる必要があるかしらと言われたことに近い仕打ちを受けたような気がした。上司2人には報告したが、今日もまだそれが脳裏から離れないのでここに書く。むしろ、42号で書いておいたほうが過去となってしまう事柄かも知れないが、この連載のメインである結婚難問題にせよ、男女雇用機会均等法などが進むにつれ、企業にどういられるかどうかは大事で、おそらく自ら命を絶ってしまうような人達も職場がらみ、すでに学生時代がらみという例も多く聞くが、新型コロナウイルスに限らず、ゲゼルシャフト上の付き合いからも動揺は起きる。

◆今朝は今朝で某マッチングアプリから、メッセージが久しぶりに来ていたので、またろくな返信ではないだろうと思って開けてみるとその通りで、ブロック機能に数的制限があるので私のほうからブロックしてくれないか。兄が外科医だし、私と交際になったらその人のご両親が驚いてしまうだろうとのことだった。謙虚なようで資本主義社会特有の身辺有利からの格差を私に振りかざしたようにも思える。女性側からの発信が私を傷つけるという時期もあるだろう。だが、私自身の考え方、捉え方で出てくる反応の型でもあるだろう。Mさんとはまだほとんど交流がないが、Gさんとはけっこういろいろ喋ってきたと思う。

＜8月29日＞

前回は職場の事で字数を稼いでしまった。しかしあまりに婚活日記なのに職場の心配を書くなんて関係ないだろうと思う人がほとんどだろうが、天才というのは時間と空間に関係があると考えた昔の舌出して写っているような人のように、関係ないと思われるところから関係性を見つけられる人である。そういう人は滅多にいない。

今日は、茨城出会いサポートセンターからのアンケート依頼をずっと置いておいたので、書いてポストに入れてきた。そこはほとんど応じる人がいないからという理由もあり、年齢差制限をもうけているのだが、私はその年齢差制限があるので退会したまま復帰するつもりなしと書いた。思えばこのセンターのおかげで三日間だけ実質的に結婚できて、三年近く裁判をされて離婚してしまったわけだが、効果はかなりある組織であるようだ。しかし15歳差で結婚している人もいる。そこでは当時8歳差以上は申し込みできないということだった。これでは男性は生涯生殖能力は一応あるらしいのに、女性のほうが比較的早期に生殖能力は無くなるらしいのなら、年の差婚は少子化対策である。ここが天才でないとわからないところだ。何を書いているんだと読んでも思う人ばかりだと推定する。そして某マッチングアプリの応募を終えたところである。これから婚難救助隊としてのユーチューブを撮影してアップする。その後は考えて過ごす。

＜9 月 3 日＞

昨日今日と連休だったので、一昨日だったか、朝の着替え中に一本の赤い糸が出てきた。なんの赤い糸かは不明である。赤い糸といえば、誰かと誰かのご縁の繋がりを赤い糸であらわす伝承がある。なにか期待したいなと思った。今日はかなり久しぶりに某マッチングアプリに自分の写真や周囲の物などの写真を変えたり、余計だったと思われる文を消したりした。新型コロナや暑さや風雨など落ち着かない時期だが、『私の家政夫ナギサさん』というドラマでは20歳以上の年の差婚が達成された。テレビ局もこうした例を挙げてくれると助かる。年の差婚は別に悪い事じゃない。

＜10月11日＞

53歳と4か月になってしまったなと思いながらマッチングアプリを起動するとかなり久しぶりにメッセージが入っていて期待したが、私は実子が諦められず、メッセージの相手は50歳だったため、残念ながら理由を言って断った。あと15年でもはやければ。残念。しかしマッチングアプリはまるで機能しないわけではないのがわかった。婚難救助隊としての唯一といっていいほどの活動であるユーチューブ活動だが、見聞録シリーズがはやくも100回を超えた。登録者は7人に戻って過去最高だが、このところ批判が過激になってきたと自分自身は思っているので、減らなければいいが。目指すはピコ太郎レベルのユーチューバーだ。継続は力なり。

＜11月 6 日＞

今回の締め切り通知がすでに来ていて、すぐ提出するタイプだったが今回はまだ提出していない。

1 週間前くらいか、某マッチングアプリで４０歳の人が私の応募に応じてくれたのだが、応募するとき一瞬、ルックス的に少しどうかと思ったがクリックしたものが、他の人達が応募しても何百人しても応答がないのに、その人に対しては相当なお礼を感じなければいけないのに、相手が東京都の住人で多少遠いのを理由にしてぐずらせてしまい終えてしまった。応募も誠実にしなければいけないのに私の悪いところが起きてしまった。ちょっと発疹が出来たり、ちょっとトラブルが起きたり、ここを抜けて頑張らねば。婚難救助隊を紹介するユーチューブはライフワークと思い、継続している。それしかないと思う。

＜１１月２２日＞

２５日の締め切り日も勤務休日だが、今日これを書いたら提出しようと思う。今回は珍しく締め切り直前まで粘ったが、某マッチングアプリでは１人反応があったものの、懸命になれず、しかし女性のほうが圧倒的に男性を選んでいるような気もするし、私自身の年齢と実子を諦められないというところがマッチングを難しくしているような気もするし、しかし現場では告白もできず、若いころのように突っ走るエネルギーもなくなったのか。『婚難救助隊』としてのユーチューブのほうは、登録者数が増えたといえば増え、２桁に乗った。現在ユーチューブ登録者１１名。この数字が大事だ。本気で人気ユーチューバーを目指して生活できるようになって、結婚難問題を改善できる権力と金力を握りたい。

〔PBLの風と土　第15回〕

所属の獲得と相互承認による学びと成長

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：AAUの実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきています。

1. 現在と過去の対話で未来を構想する

前回も記したとおり、コロナ禍により、2020年8月16日から21日にかけて、デンマークのオールボー大学で開催される予定であった「AALBORG PBL WEEK」は1年間の延期となった。「AALBORG PBL WEEK」の前半はUNESCOのユニツイン（UNITWIN：University Twinning）／ユネスコチェア（UNESCO Chairs）プログラムに基づく「International Research Symposium on PBL（IRSPBL）」PBL国際研究シンポジウム）であり、後半はPBLに関する国際学会の1つPAN-PBL（Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies）の学術大会（基本的には隔年開催）をオールボー大学が誘致したものである。1年間の延期にあたり、後者のテーマは当初と同じく「Transforming PBL: Through Hybrid Learning Models」であるが、副題として「Timely Challenges and Answers in a (Post-)Pandemic Perspective and Beyond」と付された。[1]一方で前者のシンポジウムには特段の副題は付されてはいないものの、2021年8月に向けて「Moving towards a Virtual PBL Community」と掲げた「Flipped IRSPBL 2020/2021」というウェビナーシリーズが展開されることが、前回紹介した2020年8月18日の「AALBORG PBL WEEK」キックオフセミナーで発表された。

11月25日、その1回目のウェビナー「Moving Towards a Virtual PBL Community」が開催され、筆者も参加した。1時間ずつ2つのセッション（合計4つ）が設けられ、筆者は「Democracy, Social Progress and PBL」と「Varity and Understanding of Problems and Projects」に参加した。前半はスウェーデン王立工科大学の事例、後半ではオールボー大学とKLE工科大学（インド）とドレスデン工科大学（ドイツ）の事例が発表された。3大学なお、前半のセッションは6名、後半のものは17名と、国際会議のプレイベントとして捉えると決して大人数ではない。しかし、チャットや発話の随意の方法で参加者どうしが積極的に意見交換して各地の実践を紐解く場に浸ることで、オールボーで過ごした2017年の1年間のいくつかの場面を想い起こした。

「歴史は現在と過去の対話である」（Carr, 1961=1962訳, p.iii）という言葉のとおり、筆者がデンマークで過ごした時間があってこそ、こうしてPBLの意義を問い、また現在の職務であるサービス・ラーニング手法を用いた学びと成長を促していく上での未来を構想することができている。[2]その一方で、コロナ禍は「する／しない」という行為の選択ではなく「できる／できない」という状況の判断が各々に求められるため、他者の判断によって自らの行為に制限がもたらされる場合には不満感が、また自らの判断によって他者の行為に制限をもたらす場合には不全感が、それぞれに生じる。結果として、徒労感や無力感、さらには物事や出来事に対して無気力になっていくという悪循環さえ導きかねない。ただ、冒頭で紹介したウェビナーのように、規模の大小にかかわらず現状に即して新たな挑戦を重ねた経験を共有し、非日常が日常化しつつある中で

コロナ禍の収束・終息後の世界を愚直に探索している場も無数に存在する。

そこで今回は、前回の結語でも記したとおり、コロナ禍以前に地域参加型学習のプログラムで足を運んだ地に移り住んだ人々が、いかにして未来を拓く新しい当事者になっているか、その学びと成長の径路を辿ってみたい。具体的には、立命館大学教養C群「シチズンシップ・スタディーズI」の「減災×学びプロジェクト」の過年度の受講生が、福島県楢葉町を主なフィールドにどのような仕事と暮らしを送っているかについて取り上げていく。前回の連載でも簡単に紹介したところであるが、福島県楢葉町は、東京電力福島第一原子力発電所から20km圏のほぼ南限にあたり、放射線という目には見えないものがもたらす被害との奮闘を余儀なくされてきた。新型コロナウイルスもまた、目には見えない存在である、という共通点から現象学的に人々の振る舞いを比較することも、筆者が専門とする社会心理学の一分野であるグループ・ダイナミックスの観点からは大いに興味があるところであるが、本連載の主旨のもと、問題解決型の参加型学習のインパクトに主要な関心を置くこととする。

2. 4様ながら共に時と場を過ごした4者

質的研究における研究倫理という観点のみならず、人の仕事や暮らしを紹介するにあたっては細心の注意が必要である。その点、前回の連載から取り上げている「減災×学びプロジェクト」及び「そよ風届け隊」に関わってきた学生は、既に公刊されている媒体が多数あるため、それらを積極的に活用し、地域参加型学習を通じた各々の学びと成長について検討していく。通常、こうした学びと成長については、例えば山口・河井（2016）でのまとめのとおり、履修中のアンケート調査や成績評価に際して提出されたレポートなどをもとに、学習内容や活動内容を形成的・総括的が評価される。しかし、今回取り上げる4人は、2020年度が東日本大震災発災から10年を迎えることもあって、9月1日から東京新聞において10回の連載（紙面・インターネット双方、インターネットは無償で全文公開）で紹介され、さらに連載記事の公刊後には立命館災害復興支援室による「チャレンジ、ふくしま塾」で行われた対話が立命館大学のOB・OG組織「校友会」の年次大会のオンデマンド（動画）配信企画として公開されたため、それらを中心に用いて、4人の学びと成長の軌跡を整理していく。[3]

2020年9月1日から10回連続で掲載された東京新聞の連載の概要を表1にまとめた。表中の第10回に筆者の名前もあることからもわかるように、何より前回の連載でも筆者の減災×学びプロジェクトや「そよ風届け隊」の関わりについて述べてきたように、筆者は今回取り上げる4人（以下は実名で紹介、文中敬称略）と在学中から一定の関わり合いを重ねてきている。ちなみにこの連載に際し、筆者は連載第1回の冒頭で登場する鈴木みなみから連載を担当する坂本充孝編集委員に紹介され、電話取材にて対応したものが収められた。また、筆者以外の4名は坂本編集委員が現地に足を運び、取材したものがまとめられている。

そこで、東京新聞の連載と、オール立命館校友大会2020の映像をもとに、4人のプロフィールを以下のとおりに作成した。順番は上掲の映像の紹介ページで示されているゲスト紹介の順とした。

表1：東京新聞連載「ふくしまの10年」（https://www.tokyo-np.co.jp/tags/fukushima10/）
シリーズ「新天地にそよぐ風」（2020年9月1日～9月12日に掲載）の展開内容

回	掲載	タイトル	概要	文中での紹介
1	9/1	学生ボランティアが原点	卒業後福島に住み復興に力を注ぎ続け	鈴木みなみ・森亮太・西崎芽衣
2	9/2	高齢者ばかり残されて	被災された方と次第に打ち解け	鈴木みなみ
3	9/3	被災者と市民 語り合う場	語り合える場「未来会議」に関わって	森亮太・鈴木みなみ・西崎芽衣
4	9/4	溝埋まり 温かい暮らし	「ならはみらい」で働いた後に結婚	西崎芽衣
5	9/5	復興の一助に 充実の日々	地元の銀行に就職後「ならはみらい」に	森雄一朗
6	9/8	町の空気が動き始めた	「とみおかプラス」で富岡町のPRを	鈴木みなみ
7	9/9	「芸術家村」を作れたら	デザイナーで地域おこし協力隊に登録	森亮太
8	9/10	帰還町民が集う夢の城	「みんなの交流館 ならはCANvas」が拠点	西崎芽衣・森雄一朗
9	9/11	自分で生み出す達成感	双葉郡6町2村の連携で縦断ツアーを	森雄一朗
10	9/12	現地に根付く若者たち	減災からの学びが「そよ風届け隊」に	山口洋典

また、一部の情報はインターネットで公開されている情報も盛り込んだことを付記しておく。以下の内容から、まず、各自の現場への姿勢について大まかに捉え、その上で、相互の交流や、現場の方々との関係構築について想像力を巡らせていただければ幸甚である。[4]

森亮太（もり・りょうた）

1992年、岐阜県岐阜市出身。2009年、立命館大学理工学部機械工学科入学。東日本大震災発災時は京都で迎える。在学中はバックパッカーとして東南アジアやインドなど世界を旅する。2012年2月から3月にインドに滞在した際、「日本は大丈夫なのか」と尋ねられても答えられない無知さに気づき、4回生の時に全学教養科目の1つ「減災×学びプロジェクト」を受講。5月に新潟県中越地震で大きな被害を受けた小千谷市塩谷集落での田植え交流、6月に宮城県仙台市の視察の後に岩手県宮古市で海岸清掃や仮設住宅の集会所での交流などのボランティア活動後、7月にNPO法人京都災害ボランティアネットによる「第三次にっしん隊」（会津藩校として白虎隊の学び舎となった「日新館」に由来）に参加。福島市・郡山市に避難していた富岡町の皆さんの福島県天栄村での保養の際に足湯を通じて、被災3県と言われるものの、岩手・宮城に対し福島の深刻さを実感。9月にその体験を仲間たちと共有し、大学の枠を越えて関西と福島をつなぐサークルの設立を構想、10月に具体化。2012年12月19日にメンバーの顔合わせをし「福島の方々に、そよ風のようにあたたかく心地よい時間を届けたい」想いから「そよ風届け隊」と命名、初代代表となる。2017年3月の卒業後、楢葉町の宿泊温泉施設の職員に。契約期間満了後、2018年4月にフリーのグラフィックデザイナーとして独立起業し、NPO法人TATAKIAGE Japanでインターンの受入やヘキレキ舎で交流イベントを担当。作品の1つにならはみらいの拠点「みんなの交流館　ならはCANvas」のロゴ。2019年には楢葉町起業型地域おこし協力隊員に。

鈴木 みなみ（すずき・みなみ）

1990年、山形県真室川町出身。2011年、立命館大学産業社会学部現代社会学科人間福祉専攻入学。入学の直前、山形県立米沢女子短期大学の卒業を控えた際に東日本大震災が発生。家の近所にあった体育館に隣接する宮城県や避難した方々の支援のため足を運ぶものの、自分の無知で相手を傷つけてしまうことにならないか、悩みを抱える。入学後、立命館大学震災支援活動情報ネットワーク(311+Rnet)に事務局メンバーとして参画した後、2011年末から立命館災害復興支援室が展開した後方支援プログラムに参加して岩手県宮古市に複数回訪れ、現地の方々と交流を重ねる。その後、宮古市での活動を共にした仲間の呼びかけに応え、「そよ風届け隊」の設立から参加。2013年2月の初回の活動に参加した際に住民と避難者とのあいだでの軋轢に触れる。その後、2013年9月から大学を1年間休学し、フクシマ環境未来基地でのインターンで仮設住宅等での傾聴活動や、いわきで設立された多様な価値観を尊重した対話の場づくりに取り組む未来会議の活動に参加。復学の後、2016年3月卒業。卒業後はいわきに移住し、双葉郡未来会議の事務局スタッフとなった後、2017年設立の一般社団法人とみおかプラスの事務局スタッフに。平行して2018年、いわき・双葉の子育て応援コミュニティcotohanaを立ち上げ、共同代表となる。

西﨑 芽衣（にしざき・めい）

1992年、東京都八王子市出身。2012年、立命館大学産業社会学部現代社会学科メディア社会専攻入学。東日本大震災の当時は高校3年生で、第一志望校の受験前日に発災。結果として「国公立の大学に進学し、大きな会社に入れば幸せになれる」という教えに反して、京都の私立大学に。1回生で受講した大規模講義「地域参加学習入門」で追加募集が呼びかけられた全学教養科目「減災×学びプロジェクト」に参加し、神戸市・新潟県小千谷市・岩手県宮古市でサービス・ラーニングを行う。夏休みを前に、当初の授業計画にはなかった福島県での活動が紹介され、興味を抱くものの、不参加。その後、現地に行った3名の受講生からの報告に改めて関心を向け、「そよ風届け隊」の設立に参加。NPO法人京都災害ボランティアネットによる「第三次にっしん隊」の活動に参加していた福

島大学・いわき明星大学の聞き取りをもとに、2013年2月には、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター（NPO法人ザ・ピープル）の協力のもとで足湯活動を、いわき明星大学の学生と楢葉町から避難されてきた学童ボランティアや傾聴活動に取り組む。その後も現地を訪れ、楢葉町の方々と交流し、京都に帰ってからも文通を重ねる中、町長による「帰町の判断」（2014年5月29）に対し「楢葉町に戻るのではなくいわき市に住むことを決めた」と綴られた文面にショックを受ける。ふるさとへの思いがあっても戻ることができない人の「想いに寄り添いたい」と、大学を休学。2015年4月から1年の任期で一般社団法人ならはみらいの嘱託職員に。在任中には2015年9月5日の避難指示解除に関わる各種企画運営業務への従事の他、東京2020エンブレム委員会の委員に就任する。復学後は神戸市長田区真野地区のまちづくりをテーマに卒業研究を行い、東京に本社のある企業から就職内定を得るものの、後にならはみらいへの入社を選択。2017年3月の卒業後、「みんなの交流館 ならはCANvas」の運営に携わりながら、まちの変化を見つめる。

森 雄一朗（もり・ゆういちろう）

1995年、群馬県大泉町出身。2014年、立命館大学法学部法学科国際法務特修入学。2015年、2回生で「減災×学びプロジェクト」を受講し、8月31日から9月6日にかけて、ならはみらいが受入機関となって行われた楢葉町の避難指示解除に際して町民31人の語りを文字に綴りポスターにまとめる活動「ならは31人の“生”の物語」に参加。プロジェクト終了後には受講生らに呼びかけて、議員インターンシップを通じて得たネットワークを活かし、関西電力の発電所見学を企画コーディネートする。また、神戸・新潟・東北と各地を訪問した中でも楢葉町の「豊かな自然やそこで暮らす人の魅力に引き込まれ」、そよ風届け隊に参加、2016年4月には代表に就く。その後、平成28年度楢葉町心の復興事業の採択を受け、そよ風届け隊が呼びかけて結成した「楢葉町かわら版制作委員会」設立メンバーとなり、「人を結び、地域を結び、想いを結ぶ」をスローガンに楢葉町民、楢葉出身の学生、町外の学生と様々な視点から楢葉町を見つめ、ひと・もの・ことを伝えるフリーペーパーの発行に携わる。平行して、2016年8月には「遊びや勉強を通して、楢葉町で思い出を作ってもらいたい」と、楢葉町と楢葉町教育委員会の後援のもと、立命館大学生らによる中学生を対象にした学習支援団体Apolonとの連携で「めちゃめちゃよくばりキャンプ」を運営。2018年3月の卒業後、地元の銀行に就職するも、7月30日に開館の「みんなの交流館ならはCANvas」を契機にコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」の展開が本格化することに関心を向け、半年で辞職し、ならはみらいに転職。町内外のネットワークの構築・推進に従事する。

3. 所属を有することで高まる相互承認

こうしてまとめたプロフィールをもとに、4人および筆者の現場への関わりを整理すると、表2のとおりになる。まず、4人は「減災×学びプロジェクト」の受講生（2012年度：西崎芽衣・森亮太、2015年度：森雄一朗）か否か、「そよ風届け隊」の創設メンバー（鈴木みなみ・西崎芽衣・森亮太）か否か、に分けることができるものの、4人とも「そよ風届け隊」のメンバーであったという共通点がある。[5]さらに言えば、「そよ風届け隊」の設立に参画していった3人は、立命館災害復興支援室による後方支援スタッフ派遣プログラムで宮古市を活動先とする便（鈴木みなみ：4・5・10・18、森亮太：9・19・20・33、西崎芽衣：9）に参加している。[6]また、前回の連載でも示したとおり、減災Pでは復興プロセスの違いを比較するために過去の大規模災害で被害を受けた地域でのボランティア活動を組み込んでいることから、2004年10月23日の新潟県小千谷市塩谷集落への継続的な関わりの有無にも自ずと違いが出ている。

そして、現地へと軸足が置かれていく中でのパターンを見出すことができよう。具体的には、まずは自力で現地に行くのではなく、何らかのプログラムで参加すること、である。そして、そうしたプログラムへの参加が、単にパッケージツアーへの参加と異なり、フィードバックがなされる場、あるいはフィードバックをする場があるということである。具体的には、現地に駆けつける上で、森亮太・西崎芽衣・森雄一朗は減災×学びプロジェ

表2：「新天地にそよぐ風」登場人物の年別関係変化

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
減災P	山口 森(亮) 鈴木 西﨑	山口 鈴木 西﨑	山口	山口 森(雄)	山口 森(雄)		山口	山口	山口
小千谷 塩谷集落	山口 森(亮) 西﨑	山口 森(亮) 西﨑	山口 森(亮) 西﨑	山口 森(亮) 西﨑 森(雄)	山口 森(亮) 西﨑	山口 森(亮) 西﨑	山口 森(亮) 西﨑	山口	山口
宮古	森(亮) 鈴木 西﨑 山口	森(亮) 山口	山口	森(亮) 山口					
そよ風 届け隊	森(亮) 鈴木 西﨑 山口	森(亮) 鈴木 西﨑 山口	森(亮) 鈴木 西﨑 山口	森(亮) 山口	森(雄) 森(亮) 西﨑 山口	森(雄)			
ならは みらい				西﨑		西﨑	西﨑 森(雄)	西﨑 森(雄)	西﨑 森(雄)
未来 会議 (いわき)		森(亮) 鈴木 西﨑	森(亮) 鈴木 西﨑	森(亮) 鈴木 西﨑	森(亮) 鈴木 西﨑	森(亮) 鈴木 西﨑	森(亮) 鈴木 西﨑 森(雄)	森(亮) 鈴木 西﨑 森(雄)	森(亮) 鈴木 西﨑 森(雄)
未来 会議 (双葉郡)				鈴木 西﨑	鈴木 西﨑	鈴木 西﨑	鈴木 西﨑 森(雄)	鈴木 西﨑 森(雄)	鈴木 西﨑 森(雄)

クト（正課科目）で、鈴木みなみは311+Rnet（正課外・正課併行型活動）という所属を持ち、その経験をメンバーどうしで共有すると共に、同じ現場（例えば、岩手県宮古市）で出会った際に、所属の違いを超えて原所属（立命館大学）というつながりが新たな活動への発露となっている。加えて、それらのつながりは、ゼミ活動と異なり、同じ学部の同じ学年という同質性をもとにした連帯感や一体感ではなく、むしろ遠隔地から共に駆けつけていく上で、通常は縦割りされ分断をもたらしかねない異質性が無問題化されたものと捉えられるだろう。

復興支援活動のみならず、サービス・ラーニングなど、地域参加型学習の現場に継続的に関わることによる学びと成長の結実が現地に居住することによってのみ見出されるものではない。一方で、何らかのプログラムを通じて現地に関わった後、サークルに加入するかしないかにかかわらず、予め手配されていた日程以外で自らチケット等を手配して現地に赴くことは、その後の現地に行き続けていく選択肢を生むことになる。それは現地の方々にとっては引率者不在での現地訪問のために直接的な関係構築の機会になると共に、同行者がいればその道中での対話等を通じた共通の記憶により、互いの存在や役割が承認される機会となるためである。その結果、現場で匿名性のある1大学生の関わりではなく、名前で呼び合う関係への醸成がもたらされる。

加えて、今回の4名は全員が内容・期間等が予めパッケージ化されたプログラムに参加した後にサークルに加入し、現地に頻繁に通っていったが、それに加えて在学中からメディア等の取材を受け、自らの体験を積極的に言語化する機会を有していたという共通点がある。筆者の実体験を重ねてみれば、取材を受ける中では、自らの思いに言葉が追いつかない、またメディア等が伝えたい思いが先行もしくは取材者の意図に沿って換言されるなど、当人にとって不本意な経験を重ねた機会も何度かあっただろう。それでも現地への思いと行動が駆り立てられたのは、連載第10回で紹介したミネソタ大学のアンドリュー・フルコ（Andrew Furco）先生による「地域貢献・市民参画の水準」の整理に基づけば「for」あるいは「with」の前置詞の水準、つまり現場にて他者との関係性が重視・発展されていったからではなかろうか。

4. 関係性の進化と深化をもたらす触媒

今回は前回に続き東日本大震災の復興支援活動に従事した大学生の学びと成長について取り上げ、具体的には卒業後に福島県の沿岸部に住んでいる4人の人生径路を整理した。これらを本連載の第13回で紹介したTEA（複線径路・等至性アプローチ）の理論（安田・サトウ，2012・2017）に基づき図解（TEM：Trajectory Equifinality Modeling）したものが図1である。そして、現地に行きたいと思った学生がプログラムを展開するプロジェクトに所属した後に実際にプログラムに参加した後の流れとして、仲間と出会い、感想や疑問を共有し合った仲間と新たな団体の結成もしくは既存の団体への参加をするか否か、そして大学生であれば自ずと通過しなければならない卒業というライフイベントを前にどこで仕事を見つけるか、といった流れを整理したところ、大きく4つの類型を見出すことができた。それらに対して、学生時代に集団で活動し卒業後に現地に居住する者をパートナー（協力者）、集団で活動した後に卒業後は他地域に居住しつつも現地を訪れる者をファン（支持者）、特に集団には属さないものの卒業後に現地に居住する者をハビタント（居住者）、特に集団には属さないものの現地を訪れる者をサポーター（支援者）として位置づけた。

TEM図の作成は、実際に採った径路（図では実線）に対し、採らなかったものの論理上採り得た径路（図では点線）を明らかにする。また、実際に採り得た径路への阻害要因（Social Direction）や促進要因（Social Guidance）を検討する契機ともなる。今回、4人のプロフィールを作成し、そこからTEM図を検討していくにあたり、

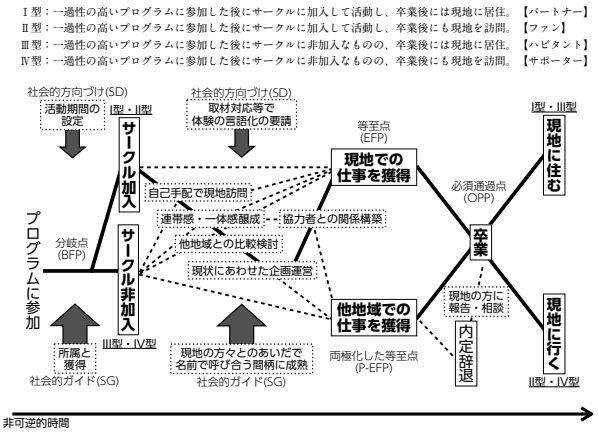


図1：プログラム参加学生が卒業後も現地に関わるプロセス

各々が現地の方々と関係性を醸成する上で、意図的あるいは結果的に用いたツールの存在に着目してみた。別の言い方をすれば、関係構築の触媒は何か、ということである。

今回取り上げた4人が必ずしも同じ水準や意図で活用していないとしても、各々が比較的共通して用いてきたものが手紙である。実際、そよ風届け隊の活動において定期的に仮設住宅を訪れて足湯を提供した後「今度はいつ来てくれるの？」という手紙が福島から届いたことが、立命館大学が作成した広報物にて紹介されている。[7]また、西崎芽衣のプロフィール中で紹介した「楢葉町に戻るのではなくいわき市に住むことを決めた」ことへのショックは、現地の方との文通を重ねる中でもたらされたものである。[8]夜行バスに乗れば朝には現地に着くといっても、現地の大学生が訪問する頻度とは大きく異なる条件の中で、むしろ一定の距離があることを前提に会える日を互いに心待ちにすることができたのは、手紙というツールが奏功したことによると捉えられるだろう。

無論、手紙以外にも各種のツールが関係性の醸成には寄与している。足湯という活動メニューも被災経験や年齢の違いを超えて交流する場づくりには効果的なツールであるし、何より筆者もまた出会いと再会の軌跡を記録として写真を撮りかつプリントして手紙や次回の訪問時などに渡すこと、また京都からのおみやげを一緒に味わいながら語り合うなどを重ねてきた。もっとも、こうしたツールへの関心を手がかりに、距離を超えて心を寄せていった実践において、どのような規範や役割分担の工夫が見いだせるか、筆者が専門とする社会心理学の一分野であるグループ・ダイナミックスのいくつかの理論がさらなる分析視角をもたらしうる。そこで次回は、東日本大震災の発災から10年を迎えつつある中、これまでの取り組みがコロナ禍における三密確保の中での濃密なコミュニケーションを重ねる上での知恵を見出すことができるのではないか、との観点から、改めてプロジェクト型での問題解決学習のこれまでとこれからのあり方について検討を重ねることとしたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Carr, E. H. 1961. What Is history?. Curtis Brown. (清水幾太郎訳.(1962). 歴史とは何か. 岩波書店).
山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究 22, 43-54.
山口洋典. 2017. 支援で問われる受援力―学園による支援. 大学時報 372, 62-69.
安田裕子・サトウタツヤ. 2012. TEMでわかる人生の径路―質的研究の新展開. 誠信書房.
安田裕子・サトウタツヤ. 2017. TEM でひろがる社会実装―ライフの充実を支援する. 誠信書房.

【注】

1 この副題は2021年度向けの案内で確認できる。日本語訳を付すとすれば「感染爆発（後）の視点とその彼方にある好期の挑戦とその解決策」などとなろうか。

2 このE.H.カーの著作が「歴史にifはない」の慣用句の原典とする論考がいくつか見当たるものの、本稿では立ち入らない。

3 配信は特設ページでの案内もの、YouTubeの「立命館大学校友会」のチャンネルにおいて提供された。

4 言うまでも無いかもれしれないが、ここに示したプロフィールは各人に確認済であることを、ここに明記しておきたい。

5 減災Pについて、西崎芽衣と森雄一朗は次年度に立命館大学による「教育サポーター[ES：Educational Supporer]」制度により授業運営アシスタントとして継続参画した。なお、森亮太については、最低修了年限を越えたことによりESへの起用基準から外れたものの、卒業年次である2017年まで現場にて受講生と交わることになった。

6 後方支援スタッフ派遣プログラムについては、山口（2017）に詳しい。

7 立命館大学校友会報「りつめい」267号の「+Rな人」での森雄一朗のインタビュー記事より。

8 このエピソードは、立命災害復興支援室のホームページで紹介されている2016年3月6日公開の特集記事「町民一人ひとりの想いにふれた、楢葉町での聞き取り活動。」で紹介されている。



百万回検証した仮説

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。
当院では、心理学で学んだブラックボックスという考え方、仮説と検証といった科学的手続きを、日々の施術に活用しています。
そんな話を４０号で書きました。

今回から、具体的にどんな仮説をもって施術にあたっているのかを書いていきたいと思います。
仮説はいくつかあるのですが、今回はその中でまずベースとなる仮説についてお話します。

柔道整復の仕事に就いたころの話です。まだ、整形外科の理学療法科に勤めていました。

「肩こりや腰痛といった、体の痛みなどの症状は、筋肉が過度に緊張して縮んでいるせいで発生している」という仮説を立てて、それならストレッチやマッサージをすれば良くなるだろうと考え、そういう施術をしていました。

確かに半分くらいの人は良くなるのですが、何割かの人は良くならないし、中にはかえって悪くなる人も少なからずいました。
悪くなる人がいると、自信をなくし、気持ちが萎縮してしまい、施術をするのが怖くなります。
誰が悪くなる人かわからないので、おっかなびっくりな施術になり、無難なことしかできなくなります。
悪くなる人が出たという経験を重ねるうちに、自らの仮説を疑うようになり、この仮説は間違っていると考えるようになりました。

次に「肩こりや腰痛などは、筋肉が伸びすぎているせいで発生している」という仮説を立てて、それならテーピングをすれば良くなるだろうと考え、さまざまなテーピングをしてみました。
ちょうどスパイラルテーピングという方法が流行した時期で、スパイラルテーピングをずいぶん使わせていただきました。
しかし、テーピングは何割かの人には顕著な効果がありますが、良くならない人、悪くなる人、かぶれる人が多く現れます。
悪くなる人が何人か現れると、テーピングするのも怖くなります。
二つ目の仮説も、私は間違っているのだと考えました。

手詰まりになると、何か良い方法はないかと、本を読んだり、人に教わったりしました。
AKA（アルスロキネマティックアプローチ）、関節モビリゼーションテクニック、AK（アプライドキネシオロジー）、MET（マッスルエネルギーテクニック）、PNF（神経筋促通手技）、バイデジタル O－リングテスト、オステオパシー、ストレイン・カウンターストレイン、SOT（仙骨後頭骨療法）、操体法、経絡マッサージ、自彊術、整膚、温熱療法、クライオセラピー・・・

２０年以上前なのですべては思い浮かびませんが、さまざまな方法を習いました。

良くならない患者さんには、「それがだめならこれはどう？」、「これがだめならあれはどう？」と、次々といろんな方法を提供していました。
でも、これといって決定打となる方法は見つかりませんでした。
たまに誰かに効果があっても、他の人には有効でないことがほとんどなのです。
効果が限定的だったと言えます。
むしろマッサージやストレッチ、テーピングなどにもどったほうが、改善することが多いように感じられました。

同じところが痛むのに、同じ施術をしても、人によって結果がまったく違うことがよくあります。
どうして、人によって効果が違うのだろうと悩んでいるうちに、次のような考えが思い浮かんでのです。
「体の痛みには、伸びすぎた痛みと縮みすぎた痛みがあるのではないだろうか」
当たり前のことのようですが、そんなことは、学校でも習いませんし、誰も教えてはくれませんでした。

「伸びすぎたところは縮めるようにして、縮みすぎたところは伸ばすようにすればいいのではないか」
そのような仮説にもとづいて施術をすると、施術をしたあとで具合が悪くなる人がそれまでよりもずっと少なくなったのです。

「ここを縮めよう」とか、「ここを伸ばそう」とか、明確な意図をもち、やり方を工夫することで、テーピングやマッサージもブラッシュアップできました。

いったんは間違いと考えた二つの仮説を組み合わせることで、症状をうまく説明できる仮説ができたのです。

仮説が間違っていたと思ったときは、成果があったと思ったケースまで、ほんとうはうまくいってなかったのではないだろうかと心配になりました。
しかし、症状をうまく説明できる仮説ができてから振り返ると、あのときやっていたことはあながち間違いではなかったんだとわかり、胸をなでおろしたこともあります。

もちろん、伸びすぎや縮みすぎ以外にも原因がある場合があります。私は仮説を次のように修正しました。
「体の痛みなどの症状の多くは、組織の伸びすぎや縮みすぎによって発生する。伸びすぎた組織は縮め、縮みすぎた組織は伸ばすと症状が改善することが多い。縮めても伸ばしても改善しない場合は、伸びすぎや縮みすぎ以外の原因によって症状が発生しており、その原因を取り除くようにすると症状が改善することが多い」

この仮説は、いまでも私の基本のスタンスです。
日々の仕事の中で、何度も何度も検証し、それでも変わらない、ゆるぎないものです。
当たり前と言えば当たり前の話ですが、縮めたり伸ばしたりすると楽になるということは、案外みなさんご存知ないことです。
触って痛いところがあれば、そこを伸ばしたり縮めたりすると、痛みが増えたり減ったりすることがよくありますから、ぜひ試してみてください。

また、私と同じようなスタンスをとっている先生に会ったことがありません。

施術する人がどういう仮説をもっているかによって、施術はまったく違ったものになります。

血流を良くすればよいという先生、炎症をひかせればよいという先生、関節の動きを良くすればよいという先生、背骨をまっすぐにすればよいという先生、心の持ち方だ（趣味や生きがいを持て）という先生、痛みを止めればよいという先生、冷やせばよいという先生、運動すればよいという先生、気の流れを良くすればよいという先生、筋膜の癒着をとったりしわをのばしたりすればよいという先生・・いろんな考えの先生がいらっしゃいます。

いろんな考えがある中で、私は先ほど述べた仮説にもとづいて施術するのが、もっとも患者さんの問題を改善できると考えています。

さらに具体的に、痛みなどの症状はなぜ発生するのか、伸びているとか縮んでいるとかをどうやって鑑別するのかについて、私がどんな仮説をもっているのかは、次回以降に書いてみたいと思います。

ではまた。

仮説が正しければ、症状があるところを伸ばすか縮めるかすれば症状が改善するはずです。
私は毎日「こうすれば楽ですか？」「こうすれば楽ですか？」と患者さんの体を伸ばしたり縮めたりして、症状が改善する方を確認しています。
痛みのあるところは、ほとんど、伸ばすか縮めるかすると痛みが少なくなるか消えるかします。
伸ばしたり縮めたりして症状の改善が確認できたのなら、先ほど述べた仮説が検証できたと言っていいでしょう。
このような検証なら、概算してみると、開業して２４年間で、軽く百万回以上しているようです。

最近読んだ漫画「ドクターストーン」で主人公・千空が言った言葉ーー

『科学ではわからないこともある』じゃねえ。
わからねえことにルールを探す
そのクッソ地道な努力を科学って呼んでいるだけだ！



『Dr.STONE』（ドクターストーン）
原作：稲垣理一郎、作画：Boichi

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑭　「開く」ことと「閉じる」こと

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

私は更生保護官署職員として 25 年以上奉職しつつ，様々な御縁に恵まれ，薬物依存症からの回復を目指すボランティア団体を皮切りに，社会的養護，災害からの復興支援，少女や若年女性をはじめ生きづらさを抱えた方々の孤立を防ぐ活動の端に加えていただいています。また，大学で学んだ福祉の知識だけでは制度改変の多い福祉制度に対応できないということを痛感したことで，卒業時に受験資格のみ取得していた社会福祉士の国家試験を奉職後に受験し，その後に更に短期養成施設（通信）で学ぶ機会を得て精神保健福祉士の資格を取得したことをきっかけに，職能団体の活動等の中で隣接多領域の方との学びを深める機会もいただきました。

20 年以上にわたる家族介護の経験もまた，家族が様々な介護保険サービスを受ける立場を実際に体験しこうしたサービスの在り方を受け手の側の視点から考えたり，同じ介護を経験した御家族との交流の中で本当に大きな支えをいただいていることに感謝しています。

こちらへの執筆も大学時代から学んできた家族療法によっていただいた御縁によるものです。業務としては行政説明に関することや教科書的なもの，実務に関する報告や考察といったことを書かせていただくことが多いのですが，こちらでは更生保護行政に関わらず，業務やボランティア活動，家族介護などを通じて感じたことや考えたことを幅広く書かせていただく貴重な体験であると感じています。

今回は「開く」ことと「閉じる」ことというテーマに私論を述べさせていただきたいと考えています。

1「開く」とは

「開く」ということには多様な意味があると考えます。例えば，

- 自分の抱えている課題等を「開く」する
- 自分の専門知や得意な分野を周囲と共有するために「開く」
- 自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」
- 自分の所有している時間や経験を社会のために「開く」
- 自分が管理しているスペースを公共活動，居場所づくりのために「開く」

など，少し考えただけでも，多様な考え方や方法があると思われます。ただ「心を開く」という言葉からもわかるように，「開く」ために

は,「開く」相手（関係者，自分の属している組織，地域社会など）に対する信頼感がベースにあると私は考えています。

今回は，最初に挙げた例をベースに「開く」ことについて考えていきます。

①自分の抱えている課題等を「開く」

書いてしまえば簡単ですが，実は難しいことだと思われます。課題を抱え込み自分だけで対処しようとした挙句にそれが「問題」となり，家族「だけ」など限られたメンバーだけで解決しようとしているうちに状況がどんどん悪化していく例は，例えば我々刑事政策の現場でも，介護殺人などの事例において見受けられます。

事件が起きてから「なぜこうなる前に助けを求めなかったのだ。」ということは簡単でしょう。しかしその言葉には，助けを求めなかった者に対する非難（発言者の意図に関わらず）が含まれているようで，私は当事者にとっては厳しい言葉だと思います。私も含めてですが，日本では「他人様に迷惑をかけてはいけない」と言い聞かされて育った方がある程度の年代までは少なからず存在します。「三つ子の魂百まで」ともいわれますが，幼少期に言い聞かされた言葉というのは，実は思いのほかその人の生き方に影響を及ぼす部分が多いのではないでしょうか。

2019 年 6 月に都内で発生した 76 歳の実父による 44 歳の長男の殺害事件は，実父が政府の元高官でもあったこと，長男が長年ひきこもり状態にあり家族への暴力もあったことなどから，いわゆる 8050 問題と関連して語られるなど，様々な議論を起こしました。私が注目したのは，この家族が（医療機関の受診はあったようですが）この実父が自分自身は長年暴力を受けながらも耐えておられながらも，直近に発生した他県での小学生への襲撃行為に類することを長男が実行するのではないかということで危機感を募らせ犯行に及んだことでした。おそらく様々な関係機関に関する「知識」はあったかもしれませんが，実際に「助けて欲しい」と声や手をあげるだけの力（援助希求力）を発揮するだけの力や気力，気運がこの実父から犯行時には既になかったのかもしれないということでした。この実父の年代から察すると「他人に迷惑をかけない」ことをおそらく厳しく躾けられてこられたのかもしれないと考えると，父子双方，そして残された家族にとっても痛ましい事件であったと思いますし，現在「ひきこもっている」当事者の方やその家族が被られた痛みもまた大きなものであったと思われます。

「自分の抱えている課題等を開く」ことは，相手方への信頼感はむろんのこと，

大変な勇気がいることです。

私事になって恐縮ですが，私も奉職後実母の度重なる病気，特に入院が長期間に及んだクモ膜下出血等については，職場に切り出す際は申し訳なさで一杯でした。手術が重なった時期に勤務を同僚に交代していただく事態となったこともあり，「働き続けることが迷惑ではないのか」まで思いつめました。当時は人事交流職員として更生保護官署を離れていたこともそうした思いを強めていました。

そうしたなかで，病院に駆け付け，持参したお弁当を差し入れてくださり「今仕事をやめたらあかんで。なんとか続ける方法を考えよう」と言ってくださった先輩，勤務の交代できつい思いをしながらも日々の業務を支えてくださった同僚や配慮してくださった上司など，「自分の抱えている課題等を開く」ことによって，多くの方に支えていただきました。そしてただ支えていただくだけではなく，「更生保護官署に帰ってこの現場で体験したことを活かしてくれることがなによりだから」といっ

た言葉かけをいただいて，一方的に助けていただくことの申し訳なさが少し軽減しました。制約のある中であってもただ助けられるだけの存在ではなく，自分が役に立つことができる存在でありたいという気持ちも痛感しました。

以後私は家族介護従事者として勤務を続けることになりました。介護する相手方やその状態はその時々で変化しましたが，基本的には自分の介護の状況についてはオープンにしてきました。突発的に休まなければならないこともありましたが，前倒しで仕事を進めていくこと，情報の共有化を工夫することで，周囲への影響を最小限にすることもキャリアを重ねるに従ってスムーズにできるようになっていったと思います。

また，在宅介護が長くなると，同僚や上司から介護に関する相談を受けたり，情報交換をすることも増えてきました。介護保険制度下のサービスは自治体独自のものがあることも踏まえて相談などに応じる経験が，後の「司法と福祉との連携」等の場面でも役立ったと思われます。

ただ，自分の抱えている課題を他者に「開く」ことは，自分の「弱さ」を明らかにするという側面もあるので，できれば避けたいという考え方もあると思います。ただ，どんなに頑健な人であっても，病気やケガは避けられませんし，過剰に「強くあること」を求めていくこともまた，生きづらい人々を増やすだけではないかと危惧しています。また，家庭を営む上では様々なアクシデントがつきものです。

私自身も同僚や上司等から個人的に相談を受ける相手方は「これまで相談できなかった」「誰に相談していいのか分からなかった」という男性の方が多かったように感じており，男性に「強さ」を過剰に求めることもまた危うい面があると感じています。

②自分の専門知や得意な分野を周囲と共有するために「開く」

まさにこの「対人援助学マガジン」がそうですが，対人援助の現場には「その道のプロ」とも呼ばれる突出した技能をお持ちの方がいらっしゃいます。私は保護観察官になった頃には既にダルクや依存症治療に対応する病院等との連携をボランティアとして始めていましたので，「社会資源に強い人」と呼ばれたこともあります。ただ私自身としてはこの当時から「地域にある様々な関係機関とのつながりが個人的なもので完結していては，その人が異動（転勤）すれば，関係が切れてしまう。新年度異動で着任してきた職員であっても地域の関係機関の把握が容易にできるようにしておく方が望ましい」と考えていました。そこで様々な関係機関についての情報をファイリングし，実際に連携する際の留意事項などを異動で新しい官署に着任する都度作るように心がけてきました。最初に始めたのが 20 代半ばの頃ですから，こうした若手の提案を支持してくださった当時の先輩方には感謝に堪えません。

基本的には全国画一の制度で運用されている刑事政策とは異なり，福祉関係は都道府県の独自性があります。介護保険制度 1 つにとってもいわゆる「横出しサービス」「上乗せサービス」などと称される自治体独自のサービスがあります。そうした情報を整理しておくことがスムーズな業務に繋がると考えています。今は紙媒体からデジタルによるものが主流になりましたが，こうした情報の共有化については一層強く意識して業務を進めているところでもあります。

また，私がボランティアとして活動する際には，オリジナルの名刺をパソコンで作成して使用しています。所持している国家資格などを明記し，裏面に主たる活動やそれに関連

する事項（例えば薬物依存症者の家族に対する相談電話の電話番号など），直近の著作や論文などを記載しておくことで，当該分野に関する知識が必要な時にはメールその他で気軽にお尋ねいただけるような工夫でもあります。

ただ，この「開く」に関しては，「開く以上は自分自身も常にスキルアップや情報収集が必要」であるので，その点については一定の覚悟や備えが必要であろうと考えています。ただ，どのような組織も，単に役職だけではなく，個々のメンバーの得意なこと（パソコン関係，運転関係，物品の修繕関係等，応急措置のスキル等）を持ち寄って回っている部分があると思われ，それを考えれば「お互い様」という面も多分にあると思われます。私自身は，パソコン関係にはついては非常に疎く，オンラインでの学会参加等は戸惑うことばかりでした。しかし詳しい職員や職能団体の仲間に助けてもらい，本当にありがたいと思っています。ベストセラーになっているオンライン研修等のマニュアルには掲載されていないような些細な疑問や失敗についても，敢えてそれを共有することで，コロナ禍以降新たにオンライン研修やオンライン学会に参加する方の参考になるように，これも「開く」ようにしています。成功体験だけではなく失敗体験や「こうしておけばよかった」という体験を「開く」ことについては，相手方や社会に対する一層の信頼感がなくてはできないことだと感じています。

③自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」

日本は欧米に比べて寄附文化の定着が遅れているのではないかという説もありますが，実際には様々な方法によって，自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」環境が整っています。私が関わっている法人でも，「遺贈」という形で提供された民家を子どもたちの社会的養護のために使わせていただいていたり，活動の趣旨に賛同された建物の所有者の方から活動場所を提供していただいているといった例もあります。

そこまで大きなものでなくても，ある活動をしている団体の趣旨に共感しているのであれば，実際にその活動に常時参加できなくても，会員（サポーター）になったり，寄附をしたりといった形でその活動を支えることができます。会員には会報等が送られてくることが殆どで，今回のコロナ禍の時には緊急支援の呼びかけが行われ，関わっているサポーターが様々な形で知恵を絞って対応しました。

ケン・ローチ監督の『私はダニエル・ブレイク』でも登場する「フードバンク」も，近年は公共機関に窓口が設置される例もあるなど，身近な存在になってきています。必要な食品を必要な方に届け，食品ロスを防ぐという意味で非常に意義のある活動です。

私自身もいくつかの「フードバンク」の活動に参加させていただいていますが，そこで感じたことは，寄附された食品を適切に管理し，仕訳を行い，必要としている方に届けるといった様々な段階において，多くの人手を必要とし，実際に多くの方々が活躍されているということです。「フードバンク」活動への協力は，この点に思いを致しておく必要があるということです。

私は，ある程度関係が深まっている団体さんとは連携を密にして，現段階で必要なものは何か確認し，保管庫などの空き状況などのタイミングを伺ってから寄附をするとようにしていました。特にコロナ禍の状況下では，平時と異なるニーズも多く発生しましたし，フードバンクの活動も感染リスクを抑えるようかなり神経を使っておられましたので，フードバンクに物品を託す側にも配慮が必要だと感じています。

また，私は東北地域からの単身赴任者ですが，仙台等では「みやぎ生協」さんのフードバンク活動が幅広く行われています。私が関わっている団体もお世話になっています。しかし実際に仕訳作業などに参加することは難しいため，介護帰省等をした際に生協さんの店舗を利用し，その際にレジに設置されている各種寄附に対する意思表示カード（フードバンクのほかにもユニセフなどもあります）を提示して，御恩返しのつもりで少しだけ寄附をさせていただくことにしています。こうしたシステムは志のある市民にとって寄附へのハードルを下げる仕掛けでもあると考えています。

現在は様々なポイントが付くカードなどを導入している店舗やショッピングサイトもあります。私も重量のある物や専門書を購入したり，買い物難民となりつつある義実家に頼まれて日用品等を届ける際にはそうしたインターネットのショッピングサイトを利用しています。意外と早くたまるこうしたポイントをきちんとためておいて，一定程度溜まった時点でボランティアとして関わっている団体に声をかけ，スタッフさんやメンバーさんのニーズを確認した上で，必要なものを購入して送ることをこつこつ続けています。

団体の会員やサポーター，寄附などを行う際には，自分が継続してできるかどうかということの見極めも必要かと感じています。例えば，社会的養護を行う施設等には，決して高価ではありませんが，スタッフさんからニーズもうかがいながら「同じ時期に毎年送る」ことを続けるようにしています。社会的養護の枠組みのなかで処遇されている子どもたちは，安定した人間関係を経験する機会をあまり得られない過酷な状況で生活してきた例も少なくありません。もちろん子どもたちの入れ替わりはあるとしても，当該団体やそこに関わるスタッフさんや子どもたちを変わらない姿勢で応援しているという大人がいるということで．子どもたちの社会への信頼を取り戻す一助になればという思いがあります。ちなみに私は，毎年夏には東北尾花沢のスイカ６Ｌを送ることに決めています（さすがに今年は手続きの前に，個別に食べられるスイーツにするかどうかスタッフさんと相談しましたが，結局スイカに・・・）。その結果，「スイカの三浦さん」と呼ばれています。通りすがりの大人ではなく，こうした呼称でよんでいただけることはうれしいことだと思っています。

④自分の所有している時間や経験を社会のために「開く」

民生委員や保護司などの地域ボランティアの定員割れが続いています。特に私が働く更生保護の世界では，保護観察対象者の処遇を保護観察官と保護司との協働態勢で行っていますし，更生保護や再犯防止について地域の方々に理解を深めていただく広報啓発活動については，地域住民としてのネットワークや活動力をお持ちの保護司等の方の御尽力なしでは前に進みません。私自身，奉職後保護司を始めとする更生保護関係者の方々の活動に，「これこそ地域社会のプロ」だと感銘を受けたり，その志の尊さに学ぶ機会が数えきれないほどありました。保護司を定年まで続けられ退任される保護司の方から「保護司活動を続けてきてよかった」というお言葉をいただくと，更生保護官署で働くものとして頭が下がる思いがすることも多々あります。

しかしこうした地域社会の変容とともに，こうした地域社会での核となるような方を見い出すことが年々難しくなっていることもまた現実です。

私自身のボランティア経験も保護司等更生保護関係者の方々のお姿に触発されてスター

トした部分が多いのですが，その活動の多くが夜間あるいは週末といった勤務時間外だったからこそ続けてこられた部分が多いと思います。

専門職がその知識やスキルを活かして実施するボランティア活動である「プロボノ活動」についても，所属する組織で一定期間の活動が認められていたり，夜間・休日を使って行われることにより，時間的な制約という点では活動しやすくなっているのかとも感じています。

地域性を重視されるボランティア活動においては，平素から地域社会に根を下ろしそこで生じる課題について向き合い，地域内ネットワークで対応してこられた経験が活かされることが多いものでもあります。自戒を込めて述べるのですが，自分の住む地域を良くする活動に真剣に取り組もうと，自治会（これは余談ですが，関東では自治会については町会と称されることが多いようであり，関西人の私は最初「懲戒？こわっ」と思ってしまいました）や社会福祉協議会福祉委員や苦情解決第三者委員の活動をしていた時期もあります。これらの活動に真摯で向き合って見ると本当に地道で細かなことが多くあると実感しました。幸い会合が夜間・休日でしたのでなんとか活動を続けることができましたが，仕事や介護帰省とのやりくりが難しいと感じた場面もあり，長年続けておられる方に頭が下がる思いがしました。

ただ，実際に体験してみると，③で述べた「自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」」ことが，地域を特に選ばないことに対し，こちらはまさに地域密着であるがゆえに，様々な地域課題が見えてくることも少なくなく，例えば子育て中の方などの発言からは（昼間は地域にいない）私が見落としがちな貴重な指摘もあり，もし私自身が転勤（転居）の多い職種でなければ，もっと深く関わりたいと感じたこともあります。

また，クラウドファウンディングなどでの社会貢献が志を同じくするもの同士のゆるやかなつながりであること，非対面型であることに対し，地域ボランティアは対面型かつ組織としての活動が重視される側面があると考えます。支援の最前線に立つ活動は本当にやりがいを感じられるものですが，それを成り立たせるためには，会計等の運営に関わるスタッフの尽力が不可欠です。組織運営への協力や組織間のコミュニケーションといったことが必須となってくる地域活動ボランティアについては，希望者を募集する際も参加を検討する際もこの点に留意すべきであろうかと思います。

ただ，特にそうした地域活動ボランティアの組織に所属していなくても，自分の暮らす地域社会に対してちょっとした目配りをすることはできると思われますしそれこそ今の社会には求められているのではないでしょうか。その際に重要なことは，地域社会で起きている物事を「問題」としてとらえるか「課題」としてとらえるかということだと考えます。「問題」としてとらえてしまえば，その時点で自分とその出来事を切り離してしまい，「責任者出てこい！」という姿勢に傾きがちで，「問題を除去する」排除の姿勢につながりかねません。

地域社会に目を凝らしてみれば，実は多くの「地域課題」が明らかになってきます。コロナ禍でメディアの露出が増えた「ステイホームが不可能な子どもや若年者」「生活に困窮している方」などは，コロナ禍以前から存在していました。コロナ禍はそうしたことを顕在化して我々の前に提示しているのです。これに対して我々はどう応えるのか。まさに生活の在り方の根本が問われていると考えています。

⑤自分が管理しているスペースを公共活動，居場所づくりのために「開く」

私が関わっている団体の多くが，こうやって「開く」ことを決意していただいた方々の思いによって支えられています。私の経験の範囲内ですが，薬物依存症者の回復施設である「ダルク」を開設・移転する際の物件探しのハードルは非常に高いものがあります。加えてそこに「ダルク」があるということに対して地域社会の方が不安に思われる場面にも遭遇しました。基本的には話し合いで理解を求めていくしかないと考えていますが，実際の回復を目指す当事者の姿を知らない方にとっては「依存症当事者」のイメージが現実とは異なるものであることも痛感しています。これは障害者施設等の開設・移設等でも往々に発生する地域コンフリクトであり，ニンビズムでもあると考えます。そうした中で自分が管理しているスペースを「開く」決断をしてくださった方は，様々に地域との関係性なども熟慮の結果と考えられ，感謝に堪えません。

ただ，実際に「開く」ことによって，「開く」ことを決断してくださった方はもちろんのこと，その地域社会全体が，その居場所を利用する人を知り，活動を応援してくだるようになったという例もあります。コロナ禍の現状下ではありますが，

「まちの保健室」と呼ばれる，困りごとを抱えている人が気軽に立ち寄れる場所を開設し，単に健康相談やカウンセリングを行うだけではなく，様々なアクティビティを提供することで，そこに暮らす人々の生活の活性化に大きく貢献している取組もあります。「かつては隣近所との交流も頻繁で，味噌や醤油も貸し借りしあった」「お互いの子どもを預け合った」という言葉を聞くこともありますが，今はそうした交流や居場所については，何らかの仕掛けが必要であるとも考えます。

２「閉じる」

「閉じる」にも明確な定義はありませんが，私は以下のように感じています。

・自分だけ、家族だけで完結しようとすること。
・自分だけ、家族だけが安全安心であれば良しとし，地域社会に対して「目を閉じる」

①自分だけ・家族だけで完結しようとすること

様々なインフラが発達し，その気になれば家を出ることがなくても生活を営むことができます。しかしそれを享受できるのは，インターネットなどを使うスキルと経済的な余裕がある層に限られますし，基本的には家族メンバーが健康であることという条件付きのものだと私は考えます。平素から外界との境界が必要以上に固い家族は，いざ自分たちだけで解決できない課題が発生した時に，現実社会の支援窓口に対して「助けて欲しい」と手を上げることができるのでしょうか。私は奉職後阪神・淡路大震災と東日本大震災を経験しましたが，その後の防災対策を検討する際に何度も耳にしたのが「平時できないことは非常時にはまずできない」ということでした。外界（現実の支援機関）とのつながりについても同様のことがいえると私は考えます。私は 20 年近く，薬物依存症者の家族のためのミーティングに関わり，平成半ばからは刑事政策に特化したグループを立ち上げました（現在は専用回線による電話相談に移行）。その際に実感したのは，こうした支援の場を何らかの形で知りえたとしても，実際にその場に足を運んで参加するのは相当の覚悟がいるのだということでした。グループが紹介された記事を財布に入れ，何か月も迷った末に相談にやってきたという御家族を多く見てきました。「恥ずかしい」「世間に知られたら」という思いが先に立つことは無理のないことだと思われま

す。今の日本社会は，多様性をうたいながらも同調圧力が強いという一見矛盾した部分があるので，例えばひきこもりや依存症など「普通の家庭で起こりえない」（そんなことはとは珍しいことではありません。また，支援機関での最初のつながり方がうまくいかず，不信感や傷つきを抱えている家族も少なくありませんでした。私は前回の連載で家庭を営むことについて触れましたが，現代社会において家族だけ・家庭内だけで対応可能な課題はさほど多くはありません。そうした意味では，家族・家族内で「閉じてしまい」そこで完結しようというのはむしろ幻想であり，これから求められるのは，困った時には適切な相手に相談するという援助希求能力を高め，平素から実践していくことではないでしょうか。

②自分だけ・家族だけが安全安心であれば良しとし，地域社会に対して「目を閉じる」

コロナ禍のなか．ステイホームという言葉を「家庭回帰」という解釈をする向きもあったように思います。ただ，極端な例では「自分だけ・家族だけが安全安心であれば良い」という考え方で，マスク等の買い占めが発生し，医療従事者等のエッセンシャルワーカー等が差別されるという非常に悲しむべき事態が発生しました。

これこそ地域社会に対して「目を閉じる」典型例だと思います。「私だけ」「私さえ」という概念が先行すると，いつしか「私たち」という連帯を示す概念が弱体化し，こうした災害時に人々の生活を支えてきた地域社会の弱体化につながるということを私は危惧しています。

コロナ禍の中でも，より厳しい状況の中に置かれている方のことを思いやり，感染拡大防止に配慮しながらマスクづくりや子ども支援に心を砕いている方の姿を私は数多く見ていますし，その姿に触発されて活動を共にさせていただいたこともあります。一方で，マスクの買い占めや果ては転売までに奔走する人々の姿も見受けられました。不安を煽られた結果の行動と思われますが，果たしてどちらが自分自身にとっても社会にとっても建設的なコロナ禍への向き合い方だったのかということを考えさせられます。

「私だけ」「私さえ」という考え方の人にとっては，先述１①～⑤で述べたような「開く」ことは理解しがたい考え方のように思われますが，私は両者が分断される社会もまた不幸な社会であるとも感じています。

様々な考え方があることを前提とした上で，自分とは違う考え方や行動様式があることを認め合い，お互いを知ることから，「新しい生活様式」をベースにした地域社会が構築されていくのではないでしょうか。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑫『赤ちゃん本部長』

迫　共
（浜松学院大学）

竹内佐千子さんの『赤ちゃん本部長』は、株式会社モアイの営業本部長、武田清政氏（47）が主人公。武田本部長が「朝起きたら、赤ん坊になっていた」という設定です。カフカの『変身』は、主人公が虫になってしまう不条理かつ恐ろしい寓話ですが、『赤ちゃん本部長』はシュールなコメディです。

株式会社モアイはそこそこの規模を誇る企業です。赤ちゃん本部長、武田氏が率いる営業部は一課、二課があり、数十人の部下を束ねています。営業部以外に庶務部、経理部、広報部、さらには海外支社もある設定となっています。

赤ちゃん本部長は、意識は大人の男性ですが、身体的には生後８か月くらいの状態。歩行器がないと歩けず、おむつが必要です。新人研修で訓示をしている最中に、盛大にうんこをもらしてしまいます。手が小さすぎてパソコンのキーボードを５本指で操作できないため、音声入力用ヘッドセットでメールを作成し、社外取引に行く際は、部下に抱っこしてもらいます。

社内での日常的な身体介助は、営業一課の男性社員たちが分担してあたります。子どもがいる西浦は、おむつ交換や外出介助にかいがいしく働きます。独身主義の天野課長は本部長の衣装担当。本部長ともと妻の娘であるミイコは、出産も育児も経験していませんが、愛車にチャイルドシートをつけて送迎をします。昼休みに離乳食を食べながら「みんなありがとう。悲観することなく仕事ができているのはお前たちのおかげだぞ」と話す赤ちゃん本部長。

しかし、バリバリ働く男性中心の企業風土はいまだに残っています。本部長は取引先の高齢男性から、「だいたい赤ん坊っていうのは母親のものだろう」「誰かいい女性を見つけて育つまでゆっくり休んだらどうかね」と、心ない言葉を投げかけられます。

「お言葉ですが、赤ん坊を母親のものと思うのは感心しませんね。赤ん坊でも一人の人間です。誰のものでもない！」本部長は毅然と席を立ちます。部下の西浦に抱えられて。

武田氏の事情を聞いた社長が、赤ちゃん本部長を呼び出します。本部長を抱え上げて「まさか本当だとは」と驚く社長。武田氏は「しかし社長、私は中身は変わっておりません。身体に多少無理をしてでも仕事をするつもりです」と返します。

社長は腕に抱えた本部長にいいます。「身体を酷使して良い結果など出ん。だからといってクビにするほどつき合いが浅いわけでもないだろう、武田くん！」「そもそも会社というものは…」熱を帯びた社長の腕の中で、いつの間にか本部長は寝てしまいます。

「24 時間戦えますか～そんな時代はもう終わったんだよ。なあ武田くん」。社長は微笑みながら、スヤスヤと寝入る本部長につぶやきます（「24 時間戦えますか」は平成元年にリリースされた、健康ドリンクの CM キャッチコピーです）。

私達は現実には、突然赤ちゃんになることはあり得ませんが、例えば突然に大病を患ったり、身体障害を負うことはあり得ます。その状況を「突然の赤ちゃん化」に置きかえると、武田氏の苦労は理解できそうです。本人はこれまでと同じように働きたいし、周りから変わったと思われたくもないものです。しかし、皮肉なことですが、周りは「むしろ今の方が安心できる」ということもあります。

ミイコが父の忘れ物のおむつを会社に届け、その帰りに社員食堂で営業一課の面々と昼食をとる場面ではこんなことを言われています。「もともと手のかかるワガママな父なので、ある意味赤ちゃんの方がラクというか」「パパって元々背も高くて体格も声も大きくて、運動もしてたからすごく力があって」「パパを怒らせたら私じゃ到底かなわないって恐怖がどこかにあって素直に話せなかったんです」「でも今は赤ちゃんだから怖くないというか、ちゃんと話してみたらやさしいお父さんでした」。

社内報担当の岸谷が取材にやってきます。「赤ちゃんの本部長を認めて理解しよう」というテーマです。本部長は気乗りしません。「簡単に理解しようとか言うな。余計に誤解されるだろうがー」。

西浦は同性愛者であることを公言しており、パートナーと子どもを育てています。岸谷は西浦にも聞き取りをします。「ぼくも当たり前に存在して生きていることは知ってほしいですが、『理解しろ』というのは少し違うんですよ」。岸谷は「しかし皆の理解を促し、平等な世の中に生きられるようにがんばりませんと！」なんとも噛み合いません。

社内報の作成をひと段落させた岸谷は、健康診断の結果通知を開きます。再検査が求められた岸谷は、病院で医師から突然、重大な結果を告げられます。帰り道に「なんで？　普通に生きてきただけなのに…」と涙を流す岸谷は、本部長が「世の中は不公平で理不尽なもんだぞ」と言っていたのを思い出すのです。

ある日の営業一課は朝から大忙し。赤ちゃん本部長は居場所がなく、緑化されている会社の屋上に上がります。すると木陰のベンチに座る男性の姿が。メンタル不調で休職していた二課の渡辺です。突然赤ちゃんに「おい」と声をかけられて驚く渡辺。「うちの会社、託児所できたのかな？　そこの子かな？」とうろたえる渡辺。本部長は様子を見ることにします。

渡辺は赤ちゃん本部長に「怖くないよ」と声をかけて抱っこをします。「こんなに小さい君も会社に来てるのに、ぼくはどうしても来れなくてね」「なんでなのかたくさん理由を聞かれたけど…朝会社に行く電車に乗ろうとしても乗れなかっただけなんだ」「みんなに迷惑ばかりかけて、勝手に逃げてるんだ…」。渡辺の目から涙がこぼれ、本部長のほっぺたにこぼれ落ちます。ハンカチで拭こうとしたとき、膝に抱いた赤ちゃんがはっきりとしゃべります。「渡辺、泣きたいときは泣いた方がいいぞ」。

びっくりした渡辺はそのまま卒倒し、本部長は渡辺のスマホで部下に助けを求めます。その後、事情を把握した渡辺に、赤ちゃん本部長が言います。「渡辺、みんな失敗はたくさんする。迷惑はかけていいんだ。お前の繊細さは弱さである以上に強さでもある。いいか、何かあったら必ず誰かに助けを求めろ」

営業二課の女性社員、佐々木が、赤ちゃん本部長をじっと見ています。声をかけても目をそらすので「抱っこか？　なぜかみんな抱っこしたがるんだよな。オレはかまわんぞ」と本部長。抱え上げた佐々木は、なぜか声をあげて泣き出します。しばらくして落ち着いた佐々木は、膝の上の本部長に身の上を話しはじめます。

「わたし、赤ちゃんが憎いというか…」「昔、大親友に赤ちゃんができて、今まで通りに遊べなくなって、会えなくなって、それがすごくつらくて、赤ちゃんが嫌いになっちゃったんです」。

「でもその悩みは、そのお友達の方にもあったのでは…」と西浦が聞くと、佐々木は「そうなんですよ。私、彼女の気持ちも考えずひどいことをしてしまった。親友なら理解して、今まで通りにするべきだったんです」でも、と言葉を継ぐ佐々木。

「そんなマニュアル通りに、気持ちが動くと思いますか？」「頭ではわかってても、さみしくて悲しくなって、自分の心のせまさに落ち込んで…」とまた涙をこぼしてしまいます。

どうやら「赤ちゃん」という無力な存在を前にすると、大人たちは心の鎧を外しやすくなるようです。赤ちゃん本部長の周りでは、「責任感をもって、理性的でしっかりしていること」ばかりを求められる大人たちの本音を拾うことができます。

営業二課の橘部長（**55**）が本部長のもとにやってきます。西浦が男同士で子どもを育てて

いると聞いて、気がかりになったようです。「いったいそんなことを誰が許したんだね？そんなわがままを許しても、本人たちも子どもも苦労して不幸になるだけだぞ」。

本部長は「もしその子たちの家庭が幸せになれないとしたら、橘さんのような考え方の人がいるせいでしょうね」と反論します。

その後、橘部長は息子から「僕はゲイなんだ。だからもうお見合いの話はやめてほしい」と告げられてしまい、涙を流します。その後で部長は「考え方をアップデートしたいから変な発言をしたら教えてくれ」と部下に頼み、「困った時に見てください」と書かれたメモを渡されます。

メモに書かれたのはとても基本的な四か条です。

1.知らない世界を否定しない

2.自分が正しいとは限らない

3.無理に理解しようとしなくていい

4.よくないことを言ってしまった後は謝る

メモの内容はとても簡単ですが、これができるには柔軟で謙虚な心が必要です。橘部長は問題発言を繰り返してしまうので、その度にスタンプカードにスタンプをためてもらい、5つたまるとトイレ掃除をすることになります。そんな橘部長もメンタルを病んでいた渡辺に、避難訓練で「ぜったいに守ってやるからな。大丈夫だぞ」と励まします。

株式会社モアイの人々は、みんなそれぞれに大なり小なり課題を抱えながら助け合っています。「不公平で理不尽」な世の中を生きていくために、そして多様な仲間を認め、守るために必要なことが『赤ちゃん本部長』にはたくさん描かれています。私たちに必要なのは、24 時間戦うことではなく、弱さを認め合うことではないでしょうか。

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 12～

＜つながっているという感覚＞

杉江　太朗

～とある施設からの連絡～

どの施設にも、関係性の深い、長い付き合いの職員がいる。同じ子どもを担当し続けているわけではないが、電話で話すたびに、当時担当した子どもの近況を分かち合い、そして、プライベートの話に派生する・・・。それは、とある子どもを巡って、お互い協力し合い、チームとしてアプローチしてきたことによる結果だと思っている。そんな職員から、もう 20 歳をゆうに超えた元子ども（仮に A とする）のことで、急に連絡が入った。A は高校卒業と同時に、で就職をしたが、特に頼れるような親族もおらず、1 人暮らしを続けていた。私は、年に 2 回ハガキを送る程度の関わりは継続していたが、特に A から連絡が届くこともなく、毎回、同じ場所にハガキが届いていることを理由に、勝手に「生きていること」と「同じ家に住み続けていること」くらいしか把握していなかった。便りがないのが元気な証拠と勝手に思っていた。

そんな状況で、当時担当していた職員からの連絡である。A に何かあったのか、仕事を辞めたのか、アパートを追い出されたのかなど心配事が頭をよぎる中、その職員が言ったことは「A が交際しているパートナーと同棲することになった」という拍子抜けするような話であった。

しかし、ただの報告のためだけの連絡ではなかった。A はパートナーと、高校時代からの付き合いである。施設で生活している間にも一度交際していた期間があったが、卒業の頃には別れており、そして社会人になって、再度交際を開始したということであった。A は、パートナーと同棲するに当たって、事前に相手の家に挨拶に行ったそうである。なんとも律儀な話である。パートナーの親は、A の境遇に理解を示し、同棲を認めた。付き合い自体は長く、お互い結婚を意識した同棲のようである。しかし、パートナーの親が、ふと、A の戸籍はどうなっているのかということを口にしたらしい。そこにどのような意図があったのかはわからない。跡継ぎのことなのか、出自にまつわる疑問なのか、婚姻後の姓に関することなのか。A はそれを聞いて、自身の戸籍がどうなっているのかはっきりと知らないことに気付き、当時担当の職員

に相談をしてきたとのことであった。

実は、私と A は施設を退所するに当たって、一緒に過去の振り返りを行った経緯があった。その中で、A の親の状況についても触れていた。職員はそのことを覚えており、私にもう一度 A と出会ってもらえないかと相談を持ち掛けてくれたのである。

～生活歴の共有～

「ライフストーリーワーク」という言葉がある。施設で生活する子どもが前向きに生きていく為に、子ども自身の生い立ちを整理するという実践である。私は、方法論にとらわれることが嫌いなので、「ライフストーリーワーク」という言葉を用いて、子どもと面接をすることはないが、子どもの生い立ちを整理して、共有し直す作業については、この仕事を行う上での責務だと考えているので、特に 18 歳（退所）が近づいた子どもについては、なぜ家から離れて暮らすことになったのか、今現在、親が何をしているのか、今後の生活をどのように構築していくのか等、職場が持っている情報を元に、振り返りを行うことが多い。

また生い立ちだけではなく、例えば、親の名前、生年月日、祖父母のこと、きょうだいのことなど、家族から離れている期間が長くなると、そのことを知らないまま、施設を退所していく子どももいる。そうではなく、通常の 18 歳が知っている事柄については、当然、知っておくべきだと考え、そのことは大人が責任を持って伝えておくべきことである。

A ともそういった振り返りは行ってきたが、18 歳を区切りしたこちらの都合と、A 自身の疑問に思うタイミングがずれていたこともあったのだろう。改めて、A に出会いに行き、今度は、A の自然発生的な疑問に対して、一つずつ答えることにした。A に対して、全てを伝えきれていなかったことについて反省をしつつ、一方で、A が施設職員を頼り、その施設職員が私に連絡をくれたことに対して、この関係性が築けていて良かったと思う出来事であった。

～公的から私的な関係への移行～

児童相談所としての関わりを終え、その後、成人になった元子どもと、個として連絡を取っている元子どもが、私自身尾歳を重ねるごとに増えてきた。とは言っても、高校卒業、大学入学、進級、就職活動、大学卒業、就職など大きなライフイベントなどを中心に、連絡をして、近況を確認する程度の細々とした関係である。直接何かが出来るわけでもなく、遠方にいると会うことも出来ない。しかし、細々と繋がっておくことは、私自身がこの仕事を続ける上でのモチベーションであると同時に、A のように、突発的な事象があったときに繋がるきっかけになるのではないかとも思っている。

また、子どもだけでなく、当時一緒に担当した職員との関係もそのまま継続されている。それは、1 人の子どもをきっかけに出会い、その子どもの生活の質の向上を共に目指した者同士が、子どもを媒介として繋がり続ける。そうした出会いは、決して多くはないが、長期間継続することで生まれる確率も増える。中には、2 年、3 年という短いスパンで巡り合うこともあるかも知れないが、その可能性は限りなく低いのではないだろうか。長く続けていることで、１つの出会いが醸成され、その繋がりが強くなっていくのではないだろうか。

～醸成されていく関係性～

今、私の職場では、２年から３年ごとに担当地域が替わることが多い。短ければ、１年で替わってしまうということもある。それは、人事異動に伴う場合もあれば、離職に伴う場合もある。担当地域が替わることは、担当する子どもが替わることに繋がる。子どもの立場で言えば、今まで会いに来ていた大人が３月末でいなくなり、４月に知らない大人がやってくるという体験となる。

そんな現状から、地域や施設から、担当者が替わりすぎているとのお叱りや不満を受けることは、この業界では良くあることではなかろうか。

そのような短いスパンでは、先ほど書いたような「公的な関係から私的な関係への移行」に巡り合えるはずがない。私の場合は、幸運なことに、同じ地域を６年担当することができ、その後も同じ職場にいたので、長い子どもではもう１０年以上の付き合いともなる。出会った当時、小学生だった子どもは、もう大学生になっている。立場上、生活を共にすることはないが、連続性を担保にしながら出会い続け、生活場面を間接的に共有し続けることが、１８歳以降も連絡を取りあう関係性に繋がっている。

対人援助職と言いながら、短いサイクルでの仕事が続くと、当人も連続性を持ちにくく、関係性は深まらない。それは子どもとの関係もそうだが、援助職者同士の関係も同様であろう。そんなことでは質の高い仕事は期待できない。そしてそのことが離職にも繋がっているのかもしれない。先日、私の職場でも２年もたたずに職員が退職してしまった。少なくとも、私が感じている、関係性の深まりを感じる間もなく辞めているはずである。

この職場は、確かにストレスフルである。そして社会情勢の煽りを受けやすく、その中で求められるものも多く、勤務先としての人気は高くはないようである。しかし、私自身は、長く続けることで、様々な繋がりが生まれ、関係性も深まっていくように感じている。そして関係性が醸成されていくことが、仕事を続ける上でモチベーションになっている。

長く続けるためには、関係性の深まり

（=醸成）が必要である一方で、関係性が築かれないと長く続けられにくい。その出会いを巡っては、「運」が左右されるのかもしれないが、少なくともそのような関係性を深められたときには、『子どもに対して個人として興味を持つこと』『選択肢を多く持ち、その中で、子どもの将来の為に、少しでも良い選択をすること』『子どもの過去や境遇を子どもの責任にしないこと』『子どもの社会による不遇な体験を代弁すること』などの姿勢が共通しているように思う。このことについては、いずれ別の機会に、詳しく書いてきたいと思う。

～限られた力量～

個人の力量としては限られている。しかし、実践を踏む中で、多くの子どもとの出会いがあり、その一人一人が、それぞれの人生を歩んでおり、それぞれの困難さを抱えていた。その一つ一つに共に立ち向かう子どもと仲間がいたからこそ、この仕事を続けることが出来ている。

この業界は、公務員集団であり、３月末の人事異動を想定しながら仕事をしている職員もいる。専門職と言われながらも、実際は人事異動で他の役所から異動してきたという、福祉に一切携わってこなかった職員がいるのも事実である。しかし、専門的な知識や技能を抜きにしても、まずは、目の前の子どもの将来を第一に考え、単なる仕事の１つとして片づけるのではなく、一人の子どもの人生に関わっているという事実を受け止めて、仕事を続けていかなければならないだろう。そうした姿勢を持ち続けたときに、『醸成された関係性』との巡り合いがある。そしてその巡り合いが一度でもあれば、この仕事の虜になるはずである。だからこそ、私はこの仕事を続けたいと思い、続けられているのであろう。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編　②～

―12 歳のゆりの日記―

♪♪♪

松岡園子

今回は番外編 その②です。

日記や詩を書き始めたのは、小学校へ行くのが嫌で行かなくなった小学５年生の頃です。仲の良かった友達とケンカをして、何となく顔を合わせたくないと思っているうちに、学校へ行こうという気持ちがなくなってしまいました。学校へ行かない日が続くにつれて、毎日決まった時間に起きて登校の準備をする元気もなくなってきます。

それでも、夕方や休日に外へ出かけて友達と遊ぶことや手紙のやり取りは頻繁にしていました。でも、皆が学校へ行っている間は退屈で仕方がありません。昼間に外へ出るのも勇気のいることで、気が進みません。

周りの人たちからは顔を合わせるたびに学校へ行くよう言われます。

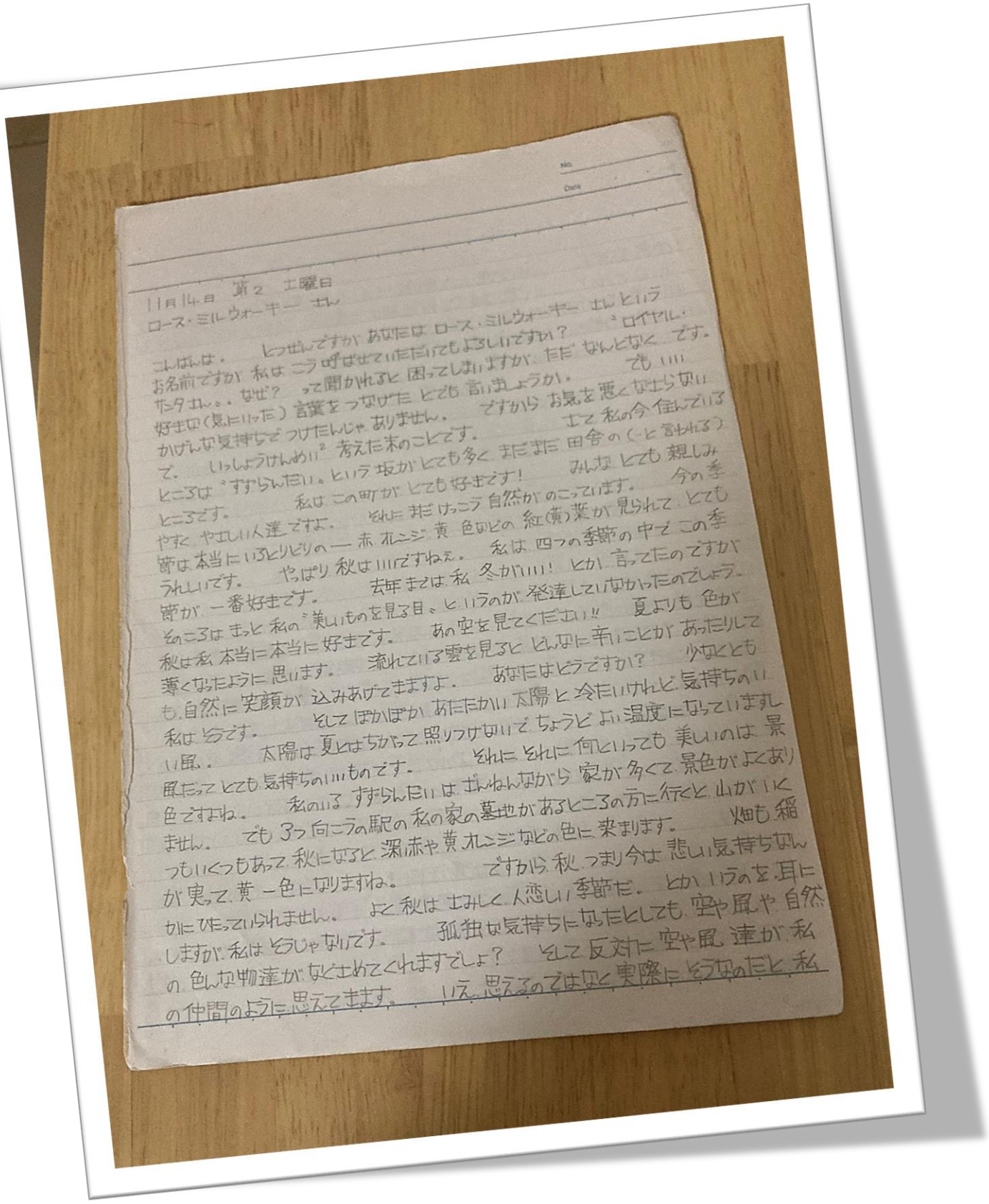
私は皆と同じように学校へ行っていないことを責められているように感じ、自分の気持ちを理解してもらえないことに孤独感を感じていました。

そんな時、日記を書くことは私の心のよりどころとなっていました。

「思ったことをはっきり言えるともだちがほしい」という書き出しでこの日記は始まっています。書いていくうちに自分の気持ちが整理され、やりたいことがはっきりとしてくる様子がわかります。

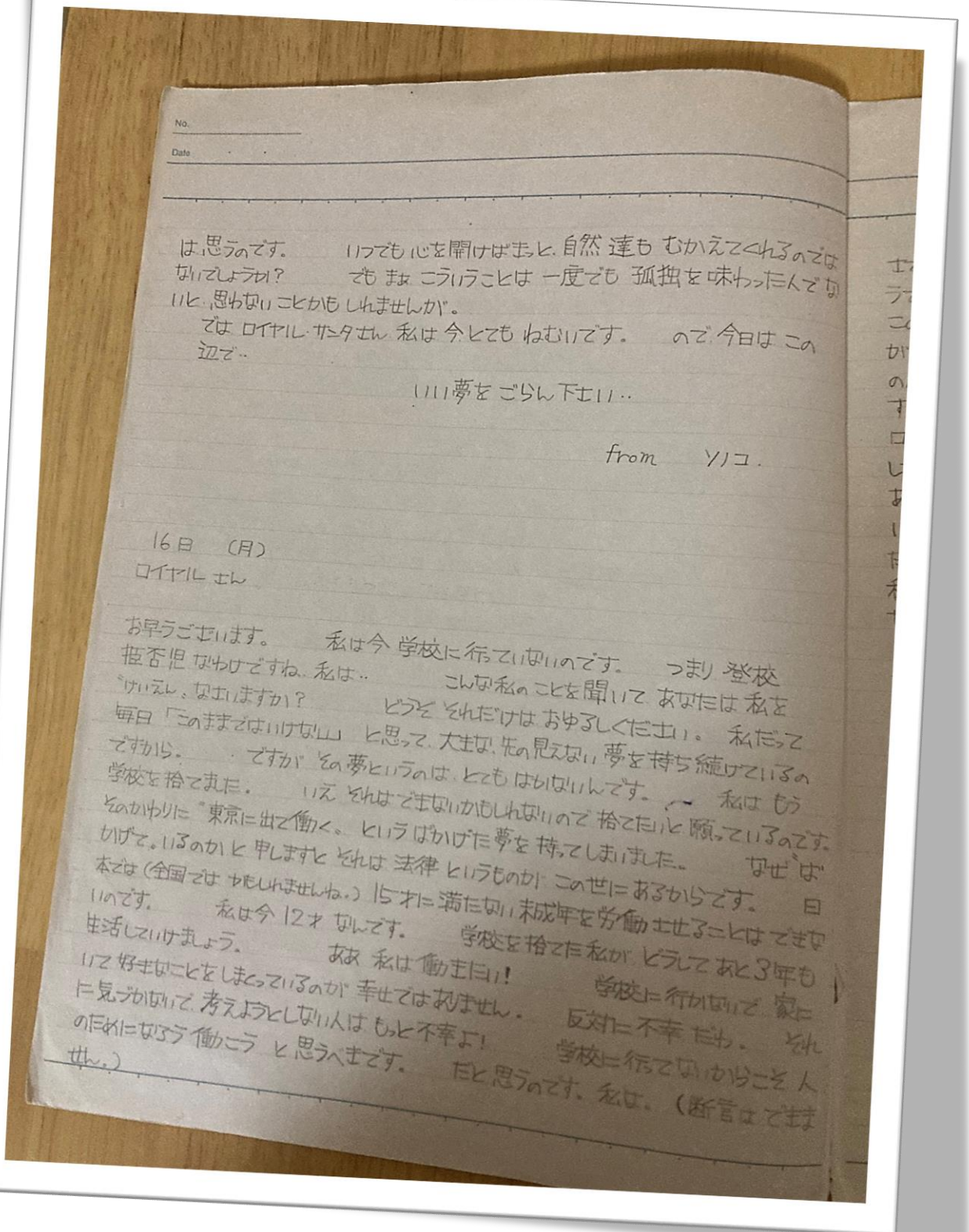
その中に、自分が想像した架空の人物に向けての手紙形式で綴られた日記がありました。今回はその中の一部をご紹介します。「赤毛のアン」の物語が好きだったため、自分もその世界観の中に身を置いて書いてみようと思ったようです。誤字もありますが、お許しください。

※　日記に出てくる個人名は、♡マークで伏せています。



11月14日 第2 土曜日
ロース・ミルウォーキー はれ

こんばんは。 ヒつせんですが あなたは ロース・ミルウォーキー はれ ヒいラ
お名前ですが 私は こう呼ばせていただいてもよろしいですか？ "ロイヤル・
ナンタはれ。。なぜ？ って聞かれると 困ってしまいますが、ただ なんとなく です。
好まは(気にいった) 言葉を つなげた ヒとも 言い出しょうか。 でも いい
かげんな気持ちで つけたんじゃ ありません。 ですから お気を悪く なさらない
で。 いっしょうけんめい" 考えた末のことです。
ヒころは "すずらんたい。ヒいラ 坂が ヒても 多く まだまだ 田舎の(-と言われる)
ヒころです。 私は この町が ヒても 好まです！ みんな ヒても 親しみ
やすく やさしい人達 ですよ。 それに まだ けっこう 自然が のこっています。 今の季
節は 本当に いろとりどりの — 赤 オレンジ 黄 色などの 紅(黄)葉が 見られて ヒても
うれしいです。 やっぱり 秋は いいですねえ。 私は 四つの季節の 中で この季
節が 一番好まです。 去年までは 私 冬が いい！ ヒか 言ってたのですが
そのころは まっヒ 私の "美しいものを見る目。ヒいラのが 発達していなかったのでしょう。
秋は 私 本当に本当に 好まです。 あの空を見てください!! 夏よりも 色が
薄くなったように 思います。 流れている雲を見ると ヒんなに 辛いことが あったりして
も 自然に 笑顔が 込みあげてきますよ。 あなたは ヒうですか？ 少なとも
私は ヒうです。 そして ぽかぽか あたたかい 太陽と 冷たいけれど 気持ちの い
い風。 太陽は 夏とは ちがって 照りつけないで ちょうど よい温度に なっています し
風たって ヒても 気持ちの いいものです。 それに それに 何といっても 美しいのは 景
色ですよね。 私のいる すずらんたいは ごんねんながら 家が 多くて 景色が よくあり
ません。 でも 3つ 向こうの駅の 私の家の墓地が あるヒころの方に 行くと 山が いく
つも いくつも あって 秋になると 深赤や 黄 オレンジなどの色に 染まります。 畑も 稲
が 実って 黄 一色に なりますね。 ですから 秋 つまり今は 悲しい気持ちなん
かに ひたっていられません。 よく 秋は さみしく 人恋しい季節だ。 とかいうのを 耳に
しますが 私は どうじゃないです。 孤独な気持ちに なったとしても 空や風や 自然
の 色んな物達が なぐさめてくれますでしょ？ そして 反対に 空や風 達が 私
の仲間のように 思えてきます。 いえ、思えるのでは なく 実際に そうなのだと 私



No.
Date

は思うのです。　いつでも心を開けばまた自然達もむかえてくれるのではないでしょうか？　でもまぁこういうことは一度でも孤独を味わったんでないと思わないことかもしれませんが。

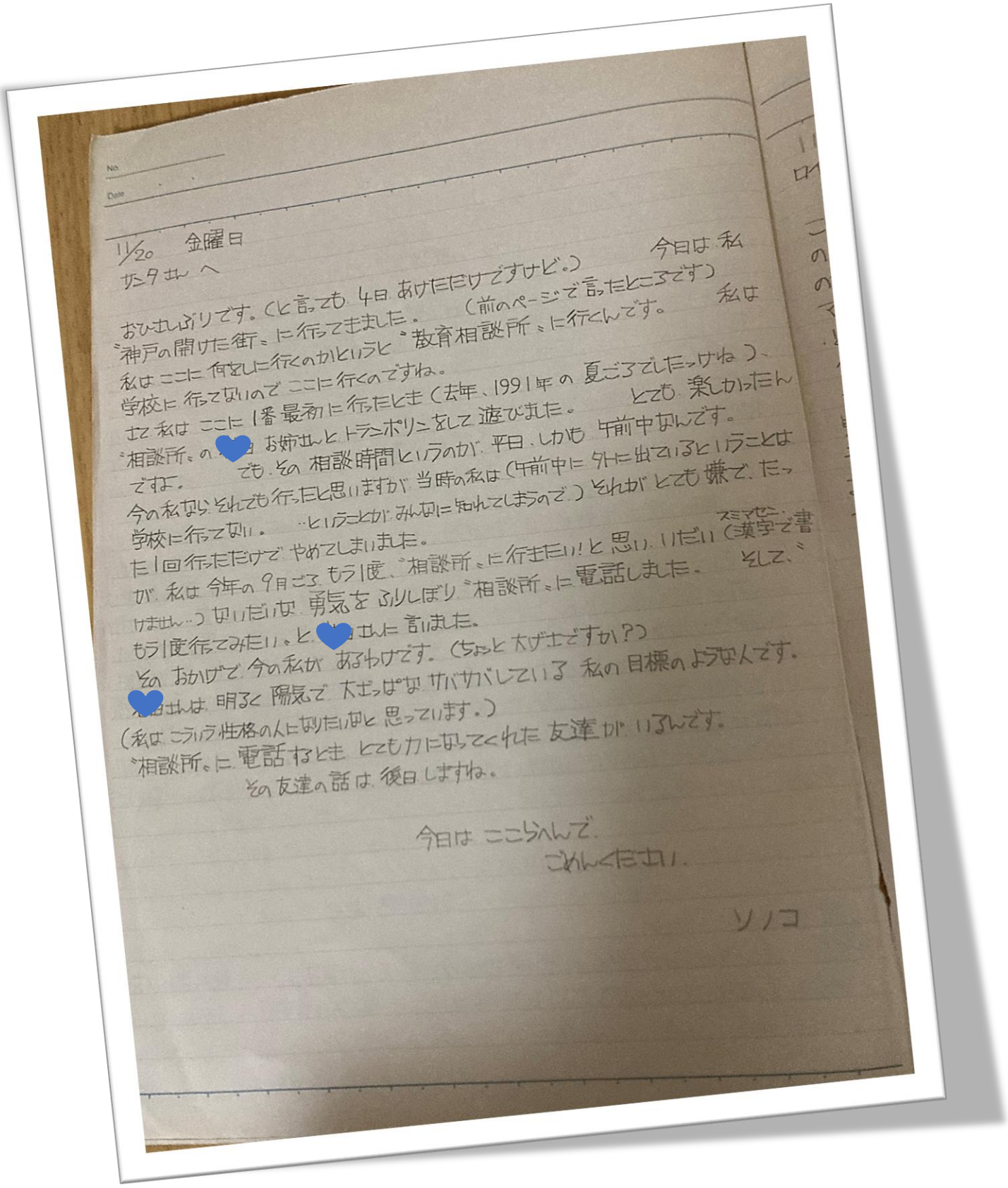
では ロイヤルサンタさん 私は今とてもねむいです。　ので今日はこの辺で..

いい夢をごらん下さい..

from　ソノコ.

16日　(月)
ロイヤルさん

お早うございます。　私は今学校に行っていないのです。　つまり登校拒否児なわけですね。私は..　こんな私のことを聞いてあなたは私を"けいえん"なさいますか？　どうぞそれだけはおゆるしください。私だって毎日「このままではいけない」と思って大きな先の見えない夢を持ち続けているのですから。　ですがその夢というのは、とてもはかないんです。　私はもう学校を捨てました。　いえそれはできないかもしれないので捨てたいと願っているのです。そのかわりに"東京に出て働く。"という夢を持ってしまいました。　なぜかけて。いるのかと申しますとそれは法律というものがこの世にあるからです。日本では(全国ではわかりませんね。)15才に満たない未成年を労働させることはできないのです。　私は今12才なんです。　学校を捨てた私がどうしてあと3年も生活していけましょう。　ああ私は働きたい!　学校に行かないで家にいて好きなことをしまっているのが幸せではありません。反対に不幸だわ。それに気づかないで考えようとしない人はもっと不幸よ!　学校に行てないからこそ人のためになろう働こう と思うべきです。　だと思うのです。私は。(断言はできません。)



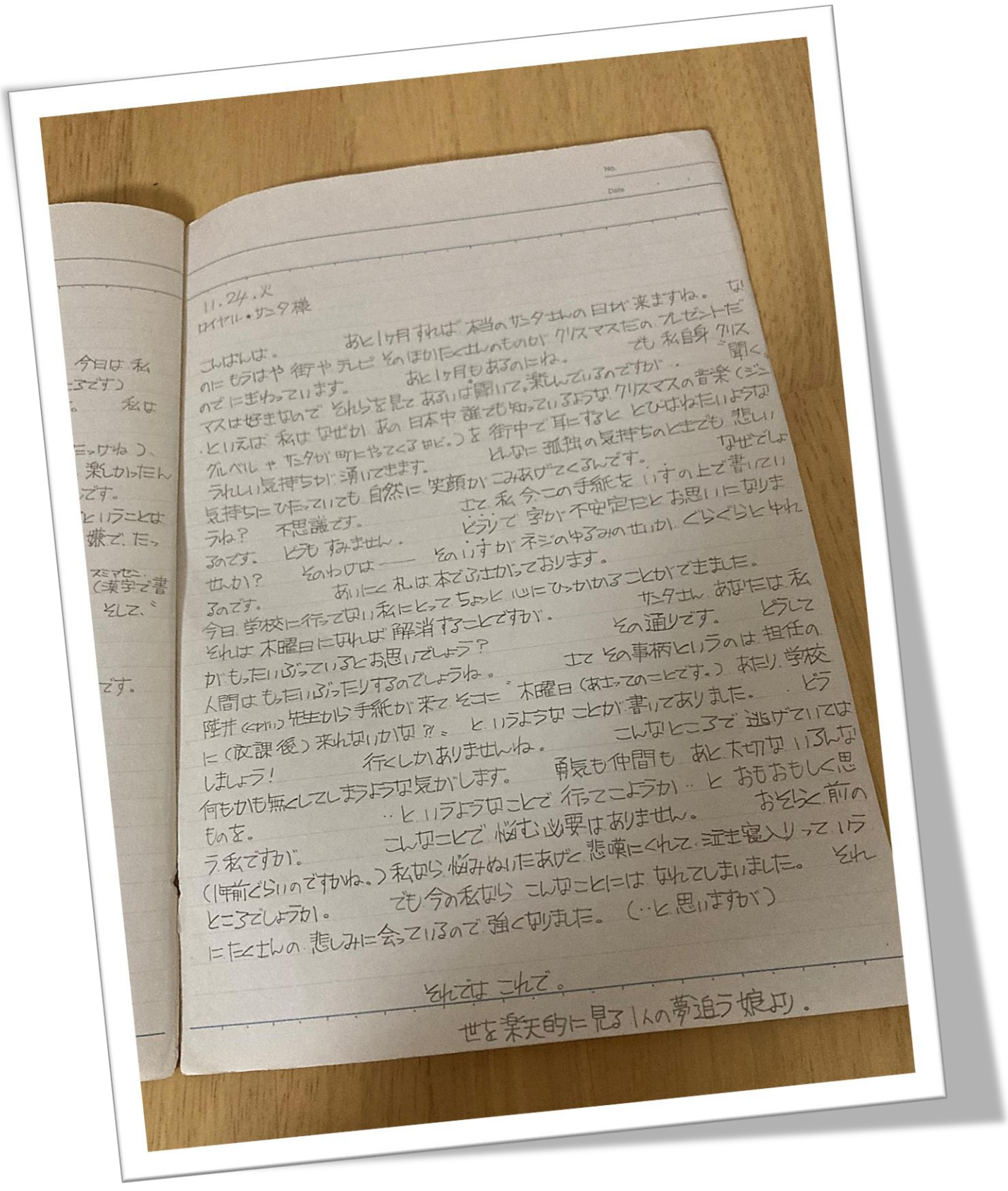
11/20 金曜日

サヨせんへ

おひさしぶりです。(と言っても 4日あけただけですけど。)
今日は私
〝神戸の開けた街〟に行ってました。(前のページで言ったところです)
私はここに何をしに行くのかというと〝教育相談所〟に行くんです。
学校に行ってないのでここに行くのですね。
私は
さて私はここに1番最初に行ったとき(去年、1991年の夏ごろでしたっけね)、
〝相談所〟の[redacted]お姉さんとトランポリンをして遊びました。
とても楽しかったんですよ。
でも、その相談時間というのが、平日、しかも午前中なんです。
今の私ならそれでも行ったと思いますが当時の私は(午前中に外に出ているということは
学校に行ってない。…ということがみんなに知れてしまうので)それがとても嫌で、たった
1回行っただけでやめてしまいました。
が、私は今年の9月ごろもう1度、〝相談所〟に行きたい!と思い、いだい(漢字で書けません…)ないだい(スミマセン)勇気をふりしぼり〝相談所〟に電話しました。
そして、
もう1度行ってみたい。と[redacted]さんに言いました。
そのおかげで今の私があるわけです。(ちょっと大げさですか?)
[redacted]さんは明るく陽気で大ざっぱなサバサバしている私の目標のような人です。
(私はこういう性格の人にあこがれるなと思っています。)
〝相談所〟に電話するとき、とても力になってくれた友達がいるんです。
その友達の話は後日しますね。

今日はここらへんで。
ごめんください。

ソノコ



11.24.火
ロイヤル・サンタ様

こんばんは。　あと1ヶ月すれば本当のサンタ主の日が来ますね。なのにもうはや街やテレビそのほかたくさんのものがクリスマスだのプレゼントだのにぎわっています。あと1ヶ月もあるのにね。
マスは好まないのでそれらを見てあるいは聞いて楽しんでいるのですが..
.というか私はなぜかあの日本中誰でも知っているようなクリスマスの音楽(ジングルベルやサンタが町にやってくるetc.)を街中で耳にするとどうはねたいような
うれしい気持ちが湧いてきます。　とはいえ私は孤独の気持ちの人でも悲しい
気持ちにひたっていても自然に笑顔がこみあげてくるんです。　なぜでしょ
うね？　不思議です。
るのです。　どうもすみません。　そのわけは——　そのペンがネジのゆるみのせいかぐらぐらとゆれ
せんか？　立て私今この手紙をいすの上で書いてい
るのです。　あいにく私は本でぶ土がっております。
今日学校に行ってない私にとってちょっと心にひっかかることがでました。
それは木曜日になれば解消することですが。　サンタ主あなたは私
人間はもったいぶったりするのでしょうね。　その通りです。　どうして
陛井(へかい)先生から手紙が来てそこに「木曜日(あ主てのニヒです。)あたり学校
に(放課後)来れないかな?!」というようなことが書いてありました。　どう
しましょう!　行くしかありませんね。　こんなところで逃げていてな
何もかも無くしてしまうような気がします。　勇気も仲間もあと大切なものを。
..というようなことで行ってこようか..とおもおもしく思
ラ私ですが。　こんなニヒで悩む必要はありません。　おそらく前の
(1年前ぐらいのですかね。)私なら悩みぬいたあげく悲嘆にくれて泣き寝入りっていう
ところでしょうか。　でも今の私なら　こんなニヒには　なれてしまいました。　それ
にたく主んの悲しみに会っているので強くなりました。(..と思いますが)

それではこれで。
世を楽天的に見る1人の夢追う娘より。

第１１回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

―― 地元病院と移植施設のみごとな連携体制 ――

一宮茂子

はじめに

本稿では、臓器を提供する人をドナー、臓器をもらう人をレシピエントと表記しています。生体肝移植治療は、後述の「ファクター」「アクター」「タイム」が、同時進行で複雑に絡み合って相互作用を及ぼします（対人援助マガジン第 34 号 337-341 頁の「分析モデル」の図とその解説を参照）［一宮 2018.9］。それは、(1)ドナー決定にいたるプロセスや、医療的、心理的、経済的、人的などのさまざまな支援、術後の回復状態、退院後の医療的フォローなどの 22 のファクター、(2)医師、看護師などの専門職と、患者、家族、親族などの非専門職などの 17 のアクター、(3)移植前、移植後、移植後 1 年以上から終末期までの時間軸といった 3 つのタイム、そして、その結果は移植にかかわった人たちにポジティブにもネガティブにも影響を及ぼすことになります。

以下、3 つの時間軸にわけて見ていきます。移植前の時間軸のファクターでは「ドナーの決定過程」、移植後の時間軸のファクターでは「回復状態」、移植後 1 年以上から終末期の時間軸のファクターでは「医療的フォロー体制」について、とくに詳細な語りをえましたので紹介いたします。

肝不全となった患者さんは移植をすれば終わりではありません。移植後からこそ本格的な治療が始まると言っても過言ではないと思います。移植後のレシピエントは原則として生涯にわたって免疫抑制剤を服用する必要があります。その服薬量は術後経過年数とともに少なくなりますが、自分で勝手に量を変更したり、中止したりすることは命にかかわりますので絶対に行ってはなりません。そのため定期的な外来通院により、血液検査で免疫抑制剤の血中濃度を測定し、その時の体調にあわせて免疫抑制剤の微調整を行います。一見たやすく思われるかも知れませんが、このようなことが原則として生涯つづくのです。今回は以上のことをふまえて夫婦間移植の事例を紹介します。

1　事例紹介

夫である淳さん（仮名：40 歳代）は、妻（40 歳代）と未成年の子ども 2 人の 4 人家族です。妻は原発性胆汁性肝硬変という難病で肝移植を勧められていました。あるとき妻は重篤な状態となって急遽、遠方から Y 病院へ救急搬送されたのです。この事例もまた他の事例と同様に移植前の時間軸では、「誰がドナーになるのか」という重要な問題に直面していました。最終的に淳さんがドナーになりましたが、その時の詳細は 3 章で紹介しま

す。移植後のレシピエントは何度も生命危機状態になりながらも奇跡的に助かった事例です。退院後は地元病院とＹ病院の連携で治療を受けて、徐々に回復していったのですが、その間はレシピエントの世話をする人手が必要でした。一方、ドナーは、術後トラブルはみられず、6ヶ月間の休暇取得と給与保障という恵まれた職場環境でした。以下、ドナーの語りを分析モデルにそって分析、考察して見ていきます。

2　生体肝移植治療の特徴

生体肝移植治療の特徴は、対人援助マガジンで何度も転記してきましたが、重要な内容ですので本稿でも提示します。対人援助マガジン第 33 号 352 頁で紹介しましたように、生体肝移植治療には 8 つの特徴があります。それは、(1)代替療法がない、(2)移植をしなければ患者は死亡する、(3)生体ドナーが必須、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となる［安藤 2002］、(5)他者には依頼しにくい、(6)ドナーの負担や犠牲は金銭や時間で分配できない、(7)ドナーは誰かひとりが全面的に担うしかない、(8)時間的制約がある、ということです［一宮 2018.6］。

このような生体ドナーを必須とする生体移植は、患者を助けるために、生きている人に本来は必要でない肝臓の一部を摘出するというドナー手術によって犠牲と負担を強いることから残酷な治療だとも言えます。かといって何もしなければ患者が亡くなるのは確実です。家族によっては、移植治療があることを知りながら何もしないで弱っていく患者をただ見まもるだけ、という場合もあるかもしれません。しかし淳さん家族は、生体肝移植で妻を救える可能性を知り得たからには、何もしないで見まもるだけという選択肢は考えていなかったのです。たとえ移植の成功率が低くても、夫である淳さんはドナーになる決断をしたのです。

3　ドナーはどのように決まっていったのか？

淳さんの妻は地元病院に入院中に肝臓の難病を患っていることがわかりました。その時、地元医師から「治療法は移植しかない」と説明を受けていたのです。淳さん家族は、未成年の息子 2 人と夫婦の 4 人家族です。淳さんが最初に移植治療を選択したときは、ドナーに年齢制限があるとは知らず、未成年の次男をドナーにするつもりだったそうです。Ｙ病院は 1990 年から生体肝移植が始まりましたが、淳さんが移植術を受けたのは 1990 年代後半です。そのころのＹ病院のドナーの倫理的条件は次節のようになっていました。

3.1　ドナーの倫理的条件

日本の生体肝移植は 1989 年に始まりました［永末 1990］。Ｙ病院は翌年の 1990 年から始まりました。当時は親から胆道閉鎖症の子へ血族 1 親等間の移植がほとんどでした。その後、成功事例数の増加とともにドナーの範囲は拡大していきました。成人事例が増加すると成人の子から親への血族 1 親等間、きょうだい間の血族 2 親等間、さらに父親、母親、子ども、きょうだい、おじ、おば、甥、姪の血族 3 親等間および配偶者間へと拡大しました

が、ここには姻族（配偶者方の親族）は含まれていません。

さらにドナー年齢は 20 歳以上 60 歳未満を原則としていました。しかし、当時は移植施設によってドナーの年齢の範囲や親等の規定範囲は異なっていたのです。

日本移植学会倫理指針は 1994 年より施行されていましたが［日本移植学会 web］、その後必要に応じて改正されています。以下は生体臓器移植のドナーについて、その内容を一部抜粋したものです。

ドナー対象者は、「親族に限定する」とし(注1)、「親族とは 6 親等内の血族、配偶者と 3 親等内の姻族である。親族に該当しない場合においては（他人でもドナーになれるという意味)、当該医療機関の倫理委員会において、症例ごとに個別に承認を受けるものとする。その際に留意すべき点としては、有償提供の回避策、任意性の担保などである。さらに、事前に日本移植学会倫理委員会に意見を求めなければならない」となっています。そして、提供は本人の自発的意思であり、報酬を目的としないこと。提供意思が他者からの強制ではないことを精神科医などの第三者が確認すること。また確認したことを診療録に記録し公的証明書の写しを添付することになりました。

淳さんが移植治療を選択したときのドナー候補者は次男だったのですが、子ども 2 人は未成年という倫理的条件によって Y 病院ではドナー適応外となります。そうなると家族員は淳さん以外にドナー候補者がいないことになります。

妻には仲の良いきょうだいがいましたが、淳さんは妻方親族にドナー依頼をした語りは見あたりませんでした。事情を知った数人の甥たちからドナーの申し出があったそうですが、淳さんは自ら断っています。その理由は 3.3 節のジェンダー規範や 3.4 節の家族規範が影響を及ぼしていたためと推察されます。淳さんは当初からドナー問題は家族内で解決するつもりだったように思われました。

3.2　ドナーの医学的条件

医学的条件とは、ドナーとしての適応可否にかんする医学的視点から見た条件です。それは、健康状態、年齢、血液型、体格、感染症の有無、組織適合性などです。淳さんは健康体であり、年齢も 40 歳代で問題はありませんでした。唯一の問題は血液型でした。血液型はレシピエントと一致しているか、適合とよばれる問題の少ない組み合わせが望ましいのですが(注2)、淳さんと妻は血液型が全く異なる不適合移植となります。しかし、Y 病院では特別な処置や薬剤を使用して血液型不適合移植も行っていました(注3)。この場合、移植後の超急性の拒絶反応が起こる可能性があります。その拒絶反応を抑えるために大量の免疫抑制剤を使用することから感染症を合併しやすいといわれています［江川・上本 2007］。

(注1)　親族とは民法第 725 条に準じている。

(注2)　具体的にはドナーの血液型が O 型→レシピエントの血液型が A/B/AB 型、A/B/O 型→AB 型の移植です。

(注3)　血液型不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーからレシピエントへの血液型が A/B/AB 型→O 型、A 型→B 型、B 型→A 型、AB 型→A/B/O 型の移植です。近年の血液型不適合移植は、その後の進歩により経験をつんだ施設での成人症例の成功率が 80%にたっしているので禁忌にはならないとされています［江川・上本 2007］。

ドナーの肝臓は、画像診断（CT 検査）によりその大きさが予め把握できるとされており、成人間移植の場合は、患者と同じくらいの体格の人が提供すると、移植肝臓の大きさとしては適しているとされています［田中監修，2004: 9］。

このような医学的条件を淳さんの事例に反映すると次のようになります。(1) ドナー年齢は 40 歳代なので問題はありません。(2)淳さんは体格差による肝臓の大きさにも問題はありません。しかし(3)血液型が異なっていました。淳さんは A 型、妻は O 型です。A 型から O 型への移植は前述の血液型不適合移植となります。この場合は特別な処置や薬剤が必要となります。また移植後は超急性の拒絶反応が起こりやすいのです。しかし、Y 病院では血液型不適合移植もすでに行われていました。しかし、当時はまだ成功率が低かったのです。淳さんは移植外科の医師から成功率は「ほんの一握り」と聞いていました。しかし、たとえ成功率が低くても「妻を助ける」ためには移植に賭けること以外に選択肢がなかったのです。

3.3　ジェンダー規範

ドナーには倫理的条件や医学的条件以外にも規範があります。それは対人援助マガジン第 37 号 235 頁で紹介しましたジェンダー規範と 3.4 節の家族規範です［一宮 2019.6］。

ジェンダー規範とは、江原由美子［2001］の「ジェンダー秩序」の論考を参考にして定義しました。「ジェンダー秩序」には、「状況」や「社会的場面」のいかんを問わず、「性別カテゴリー」と一定の「行動」「活動」を結びつけるパターンがあります。その秩序の成立は「性別分業」と「異性愛」からなります。「性別分業」とは「男は活動の主体」、「女は他者の活動を手助けする存在」という位置づけです。「異性愛」とは「男は性的欲望の主体」、「女は性的欲望の対象」として両性間の非対照的な力が重要な構造特性をもつと述べています。この説明を参考に、ジェンダー規範とは、女性は他者のサポート役、男性は活動主体であり、女性を性的対象とするような権力があることを指しています。具体的には 3.5 節の夫である淳さんの心情に現れていますのでごらんください。

3.4　家族規範

家族規範とは、家族としての責任を意味しており、家庭内の地位、就労の有無、収入の有無、ライフステージ、続柄などがかかわっています。さらに家族規範には優先順位があり、出生の順位、親等関係上の近さ、傍系より直系家族が優先するという順位があります。

肝臓の一部を提供するドナー手術は大手術であるうえに、ドナーには何のメリットもありません。万が一の事態で死亡する可能性もゼロではありません。だからこそ、誰しも親族には依頼しにくい心情であったと推察されます。このようなリスクを承知でドナーになるということは、ドナーの自発的意思によって引き受けることがとても重要です。さらに淳さんは、家族内の問題は家族内で解決したいと考えていたように見えました。

3.5　夫である淳さんの心情

淳さんの妻は肝臓の難病で意識不明の重態となる前から、救命するには「移植しかない」

と医師から説明を受けていました。Y 病院で移植するには、3.1 節の倫理的条件として未成年の子どもはドナーになれないため、家族内でのドナー候補者は夫の淳さんしかいなかったのです。ドナーは妻のきょうだいでも可能だったのですが、淳さんは妻のきょうだいにドナー依頼をした語りはありません。これらのことから淳さんは、家長としての立ち位置から家族内でドナー問題を解決しようとしていた姿勢がうかがえます。

淳さんは「そのころの新聞に…夫婦は他人なので（血液型不適合）移植で…亡くなった…記事がよく載っておった」と現実を認識し、また成功率が低いことを承知のうえで、「いずれにしても妻は助かってもらわんとアカン」という強い思いから、夫として、子ども達のための父親として「それだけしか頭にない」状態で移植に賭ける心情を語っていたのです。ここでは夫として、父親としてのジェンダー規範が作用している語りだと言えます。

その後、甥たちからドナーの申し出があったことを語っています。

> 淳さん：「甥が次から次、自分のやる（肝臓の一部を提供すると）ゆうのは、ようけ（沢山）いました…妻の家族はみな仲がいい…妻は 4 人きょうだいですけど、みな（歳）上（なので）…なんかあったら弱る…自分やったらなんも言わへん。」

この語りから見えてくる淳さんの心情は、ドナーの申し出はありがたいが、万が一のときの責任を考えると、命がけのドナー手術を親族に依頼することはできなかったのだと思われます。これは家族の責任という家族規範に依拠した語りと言えます。家長である淳さんがドナーになって、何かトラブルがあったとしても「自分やったらなんも言わへん」との語りから、家族内の問題として閉じることができると思ったのではないでしょうか。これとは対照的に、脳死ドナーの問題は広く社会に開かれていますが、生体ドナーの問題は家族内に埋没して顕在化しにくい状況になっていると言えます。

「ドナーはどのように決まっていったのか？」の問いの答は、まず移植施設の倫理的条件にみあう範囲からドナーを選びます。次に健康状態、年齢、血液型、体格、感染症の有無、組織適合性など医学的条件からさらにドナー候補者を絞っていきます。淳さんのようにドナー候補者が一人しかいない場合は血液型不適合でも移植施設によっては対応可能です。そしてドナーの決断をするときには、夫として父としてのジェンダー規範や、親族に万が一のことがあれば責任がとれないため家族内で問題解決をしようという家族規範によって、ドナーが決まっていったと推察されます。

4　インフォームド・コンセント

インフォームド・コンセントの概要は対人援助マガジン第 36 号 294 頁を参照してください［一宮 2019.3］。さらに具体的な内容は対人援助マガジン第 37 号 254-255 頁を参照してください［一宮 2019.6］。

本稿の事例では、淳さんは「移植をしなければ」妻は助からないこと、それは「Y 病院で（行う）しかない」という医師の説明を受けていましたが、「Y 病院に来て助からなんだら…どうしようもない」とも語っています。そのような切迫した緊張状態で、移植治療という

高度で、複雑で、難解な説明は、淳さんの記憶にはあまり残らなかったようです。

「説明の内容うんぬんより…妻を助ける」という思いで頭がいっぱいだった淳さんは、インフォームド・コンセントを受けた記憶はありましたが、その内容の詳細までは覚えていないようでした。しかし、A 型から O 型への血液型不適合移植の成功率は「ほんの一握り」であり、「手術しなかったら死んでしまう…一握りでも助かったらええと思った」と語っています。さらに移植後に何かあれば再手術もあり得るという説明も覚えていました。それからレシピエントは「移植前よりも移植後の治療が大変…免疫抑制剤の調整が難しい…」ことも記憶していました。淳さんのような血液型不適合移植は、当時はまだ事例数も少なく、行なっていた移植施設も限られていたため、実験的治療という意味合いも含まれていました。淳さんは「それでも、しゃあない」と受け止めていたのです。結果として、移植は成功したため、この「インフォームド・コンセント」のファクターでは淳さんのネガティブな語りは見あたりませんでした。

5　移植後の回復状態

手術後のドナーは、一般病棟へ収容されます。一方、レシピエントは手術室から直接 ICU（集中治療室）へ数日間収容され、全身状態の管理、処置、ケアを受け、病状が落ち着けば一般病棟の個室に収容されて経過観察を行い、その後、多床室に転室します。

現代では成人間のドナーの肝臓提供は、ドナーの負担を考えて右葉より小さい左葉の肝臓を提供するようになっているようです。しかし、淳さんの場合は当時、成人間で行われていた移植と同様に（対人援助マガジン第 33 号 348 頁の図 1 参照）、ドナーの肝臓切除は肝臓全体の 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植が行われていました［一宮 2018.6］。ただしレシピエントが小児の場合の肝臓移植は肝臓全体の 3 分の 1 にあたる左葉を切除して移植が行われることを附記しておきます。ドナーの負担は、小児事例の左葉肝提供よりも、成人事例の右葉肝提供のほうか身体的にも精神的にも社会的にも圧倒的に負担が大きいと言えます。

5.1　順調に経過したドナーの術後

通常ドナーは、手術前日に入院して、翌日にドナー手術を受け、術後 2 週間で退院となります。しかし、淳さんの入院期間は 12 日間と短かったのです。淳さんはその当時の心情を次のように語っています。

> 淳さん：「あのころ（1990 年代末の医療者）は、ドナーは患者みたいに思うてくれてなかった感じやった…ほんま（は）しんどうて…元気にしてもろうたんやから、こんなこと言うたらアカンけど…もうちょっと入院させて欲しかった…退院するとき…調子悪かったら他の病院を世話しますと言われたけれど（妻の）姉の家に行って世話になった。」

確かに Y 病院の移植外科は 1990 年に始まり、小児外科、消化器外科、肝胆膵外科の病棟の一部を移植外科用ベッドとして使用していました。症例数が少ない最初のころはベッド

不足の状態にはなりませんでした。しかし、成人間の事例数が増えてくると移植外科が使用可能なベッド確保がむつかしくなりました。そのため淳さんのように短期間で退院してもらうことはありました。当時の私は、消化器外科と整形外科と移植外科の混合病棟で、病棟運営の責任者として働いていました。ですから淳さんのような患者さんにはとても迷惑だったと思います。しかし、2000 年ごろに移植外科専用の病棟ができたことでこのような患者さんへのしわ寄せが緩和されたように思います。

それと淳さんの夫婦間移植は「元気にしてもろうた」という語りから、先述のような不満は妻が生きながらえたことが優位に働いて、このカテゴリーではネガティブな語りは見られませんでした。

5.2　何度も生命危機状態を乗りこえたレシピエントの術後

レシピエントの妻は、A 型の夫から O 型の妻へ血液型不適合移植を受けました。翌日には術後合併症のひとつである腹腔内出血が判明し、再度、開腹して止血術を受けました。さらにその後、出血性脳梗塞となり、保存的治療を受けました。さらに移植術後の約 1 ヶ月後に肺炎をおこして急遽 ICU へ転科し、人工呼吸器を装着しています。その間に膵炎や麻痺性イレウスを併発しています。そして、約 3 週間後に ICU から一般病棟へ転科しました。

重症度が高かったレシピエントは生命の危機状態をなんとか切り抜けました。その時のレシピエントの体重は小学生なみの「28kg」まで低下し、黄疸のため、目の結膜が黄色くなり、全身の皮膚がまっ黒になりました。淳さんはこのような妻の姿を見て「まるで猿が寝とるようじゃった」と語っています。

その後のレシピエントは移植後から長期間ベッド臥床状態であったため、手足の筋肉が著しく衰えて、歩くことができないほどでした。しかしリハビリを受けて徐々に体力が回復していったのです。

6　さまざまな支援――人的支援／心理的支援／社会的支援

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者や家族に大きな負担や不安をもたらします。そのため移植前から移植後、移植後 1 年以上から終末期の時間軸において様々な支援が必要となります。その支援内容は、対人援助マガジン第 34 号で紹介しましたように、医療的支援、心理的支援、人的支援、経済的支援、社会的支援、代替療法（宗教など）があります［一宮 2018.9］。淳さんの語りから得られた支援は、人的支援、心理的支援、社会的支援でしたので以下に紹介します。

6.1　親族による人的支援――安心感

人的支援とはもちろん文字どおり人力による支援ですが、もうひとつ大事なことが含意されています。具体的には誰かが患者に付添うということは、精神的な安寧をもたらす効果が大きいため、人的支援という行為のなかに心理的支援が含まれているということです。

退院後の淳さんは妻の姉宅に 1 週間ほど滞在して、姉の夫とその息子 2 人の男性 3 人から世話を受けています。具体的には「ごはんを作ってくれて、洗濯、風呂」などの身の周りの世話をしてもらったと語っています。淳さんは体力も徐々に回復したことと、妻の姉家族の男性 3 人に世話をしてもらうこと自体に「居づらくなって家に帰った」と語っています。

一方、妻の姉は、何度も生命危機状態に陥ったレシピエントに付添っていました。淳さん家族はこのときの姉家族の支援がなければ、入院中の生活や退院後の生活が成り立たなかったと語っています。

妻の姉がレシピエントに付添って見守るということは、患者と同じ時間と空間をともにするということであり、このこと自体が患者の心理的支援につながります。また付添っている本人も患者の状態を自ら確認することができることと、患者の心理的安寧になること、異常な徴候がみられた場合には医療者に速やかな連絡が可能というメリットもあります。しかし付添うデメリットとして身体的負担感、病室という狭い空間に居続けるという閉塞感、日常生活が制約される不自由感があります。

そのため淳さんは姉家族の人的支援に心から感謝していることを何度も語っていました。

6.2　周囲の人たちから心理的支援――賞賛

淳さんは「人づきあいが好きじゃない」性格で、ドナーになったことを自ら話すことはなかったようです。しかし、淳さんがドナーになったことを周囲の人たちは知っていました。そのため淳さんは彼らから賞賛されています。「エライなぁー。自分が悪うなったら妻は（ドナーになって）くれるんだろうか…」と。

このような周囲の人たちの賞賛や労いは、わが身を犠牲にして妻を助けた行為として淳さんを讃えていることになり、ひいては淳さんの心理的な支援になっていると思います。

6.3　事業主としての社会的支援――長期間の休暇／給与保障

淳さんは会社員でした。しかし社長が亡くなったあと会社を引き継ぐ人がいなかったため、淳さんは従業員仲間 3 人で有限会社を設立しました。その当時はまだ従業員が沢山いたそうです。会社には就業規則があります。それは常時 10 人以上の従業員を使用する使用者は、労働基準法（昭和二十二年法律第四十九号）第八十九条の規定により、就業規則を作成し、所轄の労働基準監督署長に届け出なければならないとされています。就業規則を変更する場合も同様です［厚生労働省 web］。

本節の事業主としての社会的支援とは、術後のドナーが、(1)ある一定期間の休養期間として休暇を取得できること、(2)もとの職場に復職できること、(3)その間の給与保障を受けられることを意味しています。そのため淳さんは 6 ヶ月間という長期にわたる休暇を取得できました。またその期間の給与も保障されていたのです。

レシピエントの病状が不安定であったことから、淳さんにとっては願ってもない社会的支援であったといえます。

7　理想的な連携による医療的フォロー体制――信頼感／安心感

退院後のフォロー体制として、淳さんは移植外科医の指示で 1 ヶ月後に外来受診をしています。その後もドナーは年 1 回の定期健診が必要です。Y 病院にはドナー外来がありますので受診をお勧めしています。遠方に居住している場合は、地元病院や職場で年 1 回は健康診断を受けることをお勧めします。

退院後のレシピエントは、原則として免疫抑制剤を生涯にわたって内服する必要があるため定期的な外来通院が必要です。淳さんの妻は Y 病院と連携して地元の病院や診療所で外来通院をしています。外来では血液検査や超音波（エコー）検査などをおこなって、その結果をもとに免疫抑制剤を微調整します。その後の免疫抑制剤は肝機能に異常がなければ術後経過年数とともに徐々に減量されていきます。

7.1　退院後に何度も生命危機状態となったレシピエント

淳さんの妻は、移植後、Y 病院で 3 ヶ月以上の入院をしていました。完全に回復したわけではなかったのですが、病棟運営の都合上、他病院へ転院して、Y 病院の外来で医療的フォローを受けていました。移植後 3 年過ぎたころに拒絶反応の疑いがあり、ステロイド療法を受けました。さらに移植後 6 年過ぎには胆管炎の疑いで入院治療。翌年は肝機能値が上昇し、拒絶反応の疑いで再度入院して約 2 ヶ月間の治療を受けています。その後も検査値の悪化や発熱のため入退院を繰り返しています。

当時としては、血液型不適合移植術は実験的治療でした。レシピエントは何度も重篤な状態になりながらも、奇跡的に生き延びることができました。移植コーディネーターは Y 病院の移植外科医と地元病院や地元の診療所の医師たちの仲介役を担っています。その連携の具体的なイメージを図に示しましたのでごらんください。

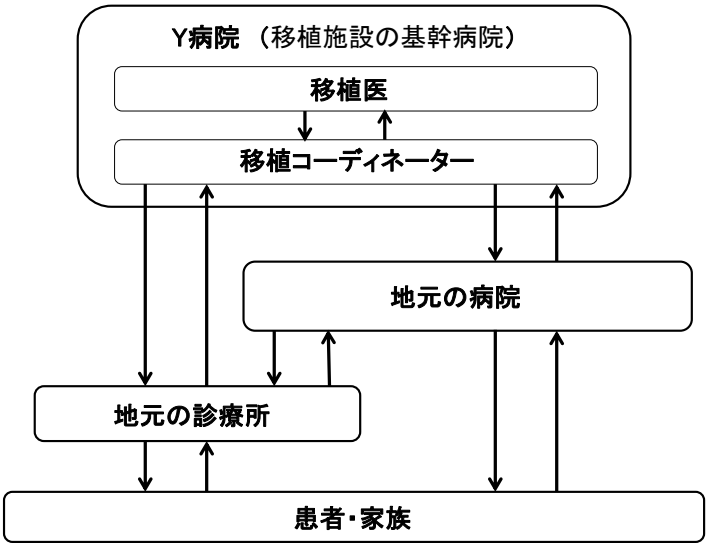


図　地元の医療機関と Y 病院の連携体制

医師には専門分野があって、どの医師でも移植治療に詳しいとはかぎりません。そのため移植施設の基幹病院である Y 病院では、移植外科医と移植コーディネーターが緻密な連絡をとりながら、移植コーディネーターが仲介役となって、地元病院や地元の診療所の医師達と移植外科医の連携体制によって、スムーズな治療を行うことが可能です。この連携体制がレシピエントの生死を左右する要素のひとつとも言えます。

7.2　地元の診療所と Y 病院の連携体制

レシピエントである妻の地元の主治医は S 医師です。S 医師は地元の中核病院に在職中に淳さんの妻の担当医だったのです。その後の S 医師は、人工透析と消化器内科の診療所を開業しました。淳さん夫妻は、インタビュー当時すでに移植後 10 年以上経過しており、淳さんの妻は地元の医療機関と Y 病院で医療的フォローを受けていたのです。

以下は地元の診療所と地元病院の医師、Y 病院の移植外科医との連携体制にかんする淳さんの語りです。またインタビュー終了後、淳さんの妻から地元の医療機関と Y 病院でフォローを受けている経験の語りをえたため、その語りも紹介します。

> 淳さん：「（地元で）開業してる S 先生、その先生がもぅ大抵よくしてくれる…それも 1 週間に 1 回くらい行きます…すぐ Y 病院の（移植外科の）先生にデータ送って、すぐ指示を受けてくれるんですわ…Y 病院の（移植外科の）先生、（移植）コーディネーターの人も、まめにデータ送ってくれてる…。」

淳さんの語り全体から掬いとれた医療的フォロー体制とは、ドナーである淳さんのフォロー体制というよりも、退院後 10 年以上の期間に何度も入退院をくりかえしたレシピエントである妻のフォロー体制に主眼がおかれていました。ドナーである淳さんは術後経過が順調で合併症もなく、6 ヶ月間の休養期間をえられたことで健康状態が回復したのです。

淳さんが語る S 医師というのは、妻の原発性胆汁性肝硬変という病気を「最初にみつけてくれた」医師であり、内服療法では「いつ発病するのかわからん…移植しか助からない」と説明した医師であり、妻が肝性脳症で意識不明になったとき「救急車に乗って Y 病院まで一緒にきてくれた」医師でした。このような経緯から淳さんと S 医師は移植前から強い信頼関係のもとにポジティブな関係性が築かれていたと思います。

そして移植後 10 年以上経過したインタビュー時点でも「1 週間に 1 回」の割合で S 医師の診療を受けるということは、移植後何度も拒絶反応や胆管炎を経験し、さらに出血性脳梗塞、胆管結石、十二指腸潰瘍、肺炎などの既往歴がある淳さんの妻の立ち位置から見ると、異常の早期発見と早期治療が可能となることから、夫から提供された肝臓をこれからも大切に護っていきたいという思いが読みとれます。さらに地元の S 医師と Y 病院の移植外科医、移植コーディネーターとの連携体制によって、双方の情報提供がスムーズにおこなわれている結果が淳さん夫妻に反映されて、安心感、安堵感につながっているといえます。「1 週間に 1 回」の通院はこのような意味づけをもたらし、そのことが淳さん夫妻の心理的な支

えになっていることがわかりました。

7.3　地元の診療所と地元の病院間の連携

淳さんの妻は生涯にわたる通院が必要なことから、定期的な通院という地理的な条件を考えると、地元の病院や地元の診療所でなければ継続通院することが困難であると思います。そのため、S 医師は淳さん夫妻にとってきわめて重要な存在だといえます。そのことについて淳さんの妻は自ら体調不良時に経験したことを、S 医師と地元病院の対応について次のように語っています。

> 淳さんの妻：「夜遅く電話しても心強い…年末ちょっと体調悪くして、その時も頭が痛くてゲーゲーゆうし、私…術後…脳内出血…してるでしょ。プログラフ（免疫抑制剤）のんでるから…（そしたら S 医師が）怖いから一回、地元病院のほうへいって CT 撮ってくださいって、もう全部手配してくれてた。病院着いたらスーと全部そろっていけた。」

このように淳さんの妻は、時間も時期も問わず気軽に連絡相談できる S 医師というかかりつけ医がいました。そして年末なら通常、休業している診療所が多いなかで、淳さんの妻は夜中の電話連絡も可能な S 医師との人間関係が構築されていたのです。また S 医師は「1 週間に 1 回」通院中の淳さんの妻の状態を十分把握していることから、免疫抑制剤の副作用を考慮して他元病院への検査依頼と、そこへいたる一連の手続きまで手配してくれたのです。このことは常日頃から淳さん夫妻と S 医師の信頼関係、および S 医師と地元病院との連携がスムーズにおこなわれている証拠だといえるでしょう。

この事例とは別のドナーである母親が、興味深いエピソードを語ってくれました。その母親は息子のドナーでした。あるとき息子に風邪症状がみられたため近くの診療所に連れて行くと、「移植を受けた」というだけで「もっと大きな病院へ行くように…ここでは薬は出せません」と診療を拒否されたそうです。このような事態から明らかになったことは、医師であっても移植医療の経験知や免疫療法などについて十分な専門知がないと手が出せない実態が表出されたエピソードといえるでしょう。

7.4　地元の病院と Y 病院の連携体制

淳さんの妻は移植術数年後に十二指腸潰瘍になりました。その当時は Y 病院ではなく地元病院に入院して治療を受けています。淳さんの妻はそのときの経験を次のように語っています。

> 淳さんの妻：「そのとき県立病院に入っていたんですけど、Y 病院の先生と連絡とってくださって（移植外科医が）『絶食して点滴でいったほうが（回復が）早いから』というアドバイスをもらって…。」

移植外科医のこのような経験知にもとづいた具体的な指示は、地元病院の医師にとっても心強いはずであり、なによりも患者にとって的確な治療がなされることで病状回復が早くなったはずです。淳さんの妻の語りからみえてくる連携体制は、この場面では Y 病院の移植外科医からコンタクトをとった語りはみられないものの、診療所の S 医師も、地元病院の医師も、Y 病院の移植外科医にたいして積極的に連絡や相談をおこなっている姿勢が読みとれます。移植後何度も重篤な状態となった淳さんの妻の移植後管理は、地元病院の医師たちにとって難しい事例だったといえると思います。

一方、移植後の経過は移植治療の効果を把握するための情報として移植外科医は関心をもっていると思われるため、地元病院の医師たちからのアクセスは移植外科医との連携体制を強化する相乗作用になっていたと推察できます。

こうして淳さん夫妻は、図のように、患者・家族と地元の診療所あるいは地元の病院、地元の診療所と地元の病院間、地元の診療所と地元の病院と Y 病院間の理想的な連携体制のもとに術後の医療的フォローを受けていたことが明らかとなりました。

しかし、誰もが淳さんの事例にみられるようなスムーズな連携体制を経験しているのかというとそうではない事例もあります。それは後日、この連載期間中に紹介いたします。

8　関係性の変容

はじめにで紹介しましたように生体肝移植治療は 22 のファクター、17 のアクター、3 つのタイムが、同時進行で複雑に絡み合って相互作用を及ぼします。その結果、今回の事例はサクセスストーリーとして帰結していますが、最も大きなファクターは、娘であるレシピエントと実母の関係性、患者と医療者との関係性、家族と親族との関係性、Y 病院の移植関係者と地元病院や診療所の医師の関係性、といえます。それらの関係性の変容を以下に紹介します。

8.1　レシピエントと実母の関係性――家族役割の逆行

淳さんの妻は何度も重篤な状態となったため、体力や筋力の回復には時間が必要でした。退院時はひとりで歩けない状態であったため転院となりました。しかし、病室の環境が良くなかったため早期に退院して実家で実母の世話になりました。そのころの実母は健在で、妻の身の回りの世話をすることができたそうです。

その後の妻は主婦業として社会復帰しました。移植後 10 年以上経過したころ、今度は妻が老いた実母の世話をするという家族役割の逆行がみられました。このことは移植治療による効果がなければみられなかった家族変容だといえます。

8.2　家族と親族間の関係性の変容――感謝

レシピエントである妻が入院中は、妻の姉が付添って世話をしています。またドナーである淳さんは、退院後 1 週間ほど姉家族の夫と 2 人の息子の世話になっています。その後も姉は何かあったらすぐ来てくれるという親密な関係がつづいています。姉家族からこのよ

うな行き届いた支援がえられたことについて、淳さんは「誰がしてくれるんや、常日頃ちゃんとしてないと」と当時の心情を吐露しています。この語りから淳さん家族は、これまでの生活過程において親族関係に気配りしており、親族が困難な状況に直面したときは相互支援がなされていたことが推察されます。このような親族の相互扶助の内的世界から親族間の絆がみてとれます。

8.3　患者と移植外科医との関係性――困惑／感謝

淳さんは、妻が特定疾患の難病で医療費助成制度の手続きが、ある部署で適時性になされていなかったため一部の期間の入院費用が自費扱いとなりました。そのことは「弱りました」、「確認しなかったこちらも悪い」と一部ネガティブな語りでした。また、ドナーもレシピエントも「退院の時は辛かった…（元気になるまで）おいてほしかった」のですが、淳さん夫婦の希望は叶わず、ベッド数不足のための退院や転院となったことについて一部ネガティブな語りでした。

一方、レシピエントである妻が移植後に何度も重篤な状態に陥って生命危機状態になりましたが、奇跡的に回復したことから「病院に感謝」、「先生に感謝」、さらに退院後の地元の病院や診療所と Y 病院の連携体制による医療的フォローについて「すぐ連絡してくれることに感謝」と何度も「感謝」の語りが聴かれました。

移植外科医との関係性は最初のころは一部ネガティブな関係性でしたが、その後、時間が経過するとポジティブな関係性に変容していったのです。

8.4　ドナーと周囲の人たちの関係性――賞賛

6.2 節でも述べましたが、淳さんが妻のドナーとなったことを知っている周囲の人たちからは、わが身を犠牲にして妻を助けたことで「エライなぁー」と賞賛されています。しかし、淳さん自身は周囲に騒ぎ立てられることは望まないという心情です。一見シャイに見える淳さんの本心は、それほど悪くはなかったように思われます。

私はドナーになった意味づけをポジティブにする要素のひとつは，ドナーの行為は意味ある重要な行為として、周囲から「賞賛」や「労い」や「感謝」の言葉かけが重要であると考えています。事実、多くのドナー体験者がそのように語っています。反対にレシピエントや家族から「感謝」や「労い」の言葉がひと言もなかったドナーもいました。そのドナーは術後、長期間にわたってうつ状態となったのです［一宮 2016］。このような事例から、言葉がもつ力を再認識させられた次第です。

おわりに

本稿は血液型不適合の生体肝移植の成功事例のひとつです。ドナーは順調な経過をたどり長期間の休養期間とその間の給与支給も得られて社会復帰に成功しています。医学、薬学の発展、進歩、医療技術の向上などによって昔なら助からない命が助かった成功事例だと言えます。ドナーの意味づけは当初一部ネガティブでしたが、最終的にはレシピエントは生き

ながらえたためポジティブに受け止めています。

妻の命を助けるために、夫は命がけのドナー手術を受けました。その後、レシピエントの妻は何度も危篤状態になりながらも、医療者の濃厚治療によって奇跡的に生還して生きながらえている事例です。淳さん夫婦の治療に当たった移植関係者たちもまた、忘れられない事例として記憶されているのです。

9　文　献

安藤泰至，2002，「臓器提供とはいかなる行為か？――その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167.

江川裕人・上本伸二，2007，「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.

一宮茂子，2016，『移植と家族――生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.

江原由美子，2001，『ジェンダー秩序』勁草書房.

永末直文，1990，「執刀記――日本初の生体肝移植――今初めて明かされる難手術までの一部始終！」『文藝春秋』68(1): 228-238.

田中紘一監修，江川裕人・高田泰次ほか，2004，『いのちの贈りもの 肝臓移植のためのガイドブック』，京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部.

10　オンライン文献

一宮茂子，2018.6,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――生体肝移植の概観」『対人援助学マガジン33号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/55.pdf，2020.11.25確認）

一宮茂子，2018.9,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――先行研究／分析モデル」『対人援助学マガジン34号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol34/51.pdf，2020.11.25確認）

一宮茂子，2019.3,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――患者・家族・親族が一丸となって救った命」『対人援助学マガジン36号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol36/48.pdf，2020.11.25確認）

一宮茂子，2019.6,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――借金がもたらした人間模様」『対人援助学マガジン37号』（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol37/45.pdf，2020.11.25確認）

厚生労働省，2020，「モデル就業規則について」（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/zigyonushi/model/index.html，2020.11.23確認）.

日本移植学会，2014,「日本移植学会倫理指針」（http://www.asas.or.jp/jst/news/doc/info_20151030_1.pdf，2020.11.23確認）



こころ日記「ぼちぼち」その②

8

脇野　千恵

なぜ、性教育なのか

現在、学校現場から離れて３年になります。小学校、中学校と３２年間の臨時講師としての教員生活は、多忙さと公教育の様々な縛りとの葛藤、子どもや親のトラブルなどの対応と苦悩の連続でした。

ですが、どうして続けられたのかと問われると、月並みかもしれませんが「子どもの変化を見る喜び」と言うのが答えでしょうか。周りには学歴や研究実践など、すばらしい先生がたくさんいました。そんな教員達の中にいると、無い物ねだりではありませんが、教諭であることを羨ましく思った時期がありました。逆にそのことがバネになり、より楽しい分かる授業づくりへの努力に繋がっていったことも確かですが。

そんなときに性教育と出会ったことは、大げさですが、自身の教育への視点を大きく転換させてくれるものでした。

今まで「性を人権として捉える」という考えには及びませんでした。性教育は「命の誕生」の学習だけではありません。ジェンダーや性の暴力、恋愛など、人との関係性など、人が生まれてから死までその時々のテーマがあるのです。これらのことを、学習の中でどのように組み立て伝えていくのか？おもしろいと思いました。

色々な人権学習があるけれど、性教育は「包括的な人権学習である」ということが、ようやく理解できるようになってきました。

教育への切り口として、性教育をやろう。この学習なら私にもできる、誰もやりたがらないことをやってみようと決めました。

本当の理由…

女の子あるいは女性は、だれしも人生に一度は性被害に遭ったことがあるのではないだろうかと思っていました。

実は私自身、過去に男性から性のいたずらやセクハラに遭ったことがあります。女

の子だから、そういう目に遭うのは仕方がないとも思っていました。被害の重大さに関係なく、自分にも落ち度があったのだからと、そんな目に遭ったことは決して言ってはならない。いつしか心の奥深く沈め、親にも言えずに過ごしてきました。「性」について学ぶうちに、「あーそうだったんだ」と当時の被害について理解することができました。カミングアウトという言葉がありますが、時代は経ても、なお性被害をオープンにできない状況は、あまり変わっていないような気がします。

幼い時、周りの大人が結婚すると子どもが生まれるのが不思議でした。「どうして結婚したら子どもができるの？」そのままを父親に尋ねると、「大きくなればわかる」という答えが返ってきました。そうかこれは大人に聞いてはいけなかった事なんだと。小さいながら、父親の表情を察し理解したのを覚えています。

今のように絵本もネット環境もありません。自分のからだの情報などを知る手立ては、医学の本以外にはなかったように思います。あるいは、子ども同士でささやかれる卑猥なこととして知るといったことだったような…。

親や周りの大人から、性についてとちゃんと教えてもらえなかった。性をポジティブに捉えられずに大人になった私自身の経験が、せめて身近な子どもたちには、「自分のからだ」の正しい知識を伝えたいという思いにさせたのです。

「性教育事始め」

「性教育元年」の波に乗り、私は友人と性教育を研究し活動する場として、１９９３年にサークルを立ち上げました。

「一般社団法人“人間と性”教育研究協議会」（性教協）という長い名前の、全国組織である民間の研究団体に属し、滋賀支部として活動していくことになりました。当初は友人と２人。何から始めていいか分かりませんでした。組織運営や資金など、考えることが山ほどでしたが、「性教育やりたい人この指とまれ！」と、色々な人たちに声をかけました。

そのころ、教育界では色々な教育のサークル活動が盛んでした。私も性教育だけではなく、教科の実践に役立つサークルのセミナーに出かけては、授業づくりに夢中になっていたものです。その勢いでのサークル発足。活動は今でも継続中。２７年目となります。

名前は「滋賀ＨＡＬサークル」

今でも、よく名前の由来を尋ねられることがあります。「ＨＡＬ」は「ハル」と読みます。私たちのサークルが志したことは、「マイノリティーの性を大切にしよう！」でした。今でいう「多様な性」でしょうか。

「Ｈ」は、ホモセクシュアリティーのＨ。「Ａ」は、当時ＡＩＤＳが社会問題になっていたから。「Ｌ」はレズビアンのＬです。このような理由でつけたネーミングですが、今なら色々なところから、クレームがつきそうですね。現在、多様な性は「ＬＧＢＴＱ」などと表現していますが、性はグラデーションです。一人一人の性のあり方は自由で多様であることが、少しずつですが認識されつつあります。

私たちのサークルの目的は、

- 学校での性教育の理論と実践を積むための教材研究
- 性教育を推進・実践できる若い教員の育成
- 地域活動として、色々な市民活動の団体とも繋がり、より多くの人たちに性教育の必要性を伝えること　　です。

私たちが本を出す？

サークル発足後、少しずつですが仲間も増えていきました。とりあえず母体の研究会のセミナーにできるだけ参加し、模擬授業を発表していくことから始めました。仲間のそれぞれの得意分野を生かしながら、教材作りにも励みました。

全国レベルのセミナーでの発表では、良い評価をもらったこともありますが、ほとんどは厳しい評価でした。参加者の多くは教員でしたが、医療や福祉施設の業界の人たちは、現場での状況から、よりリアリティーな実践を求めます。私たちは、マイノリティーを大事にと言いながら、障がい児・者や養護施設の児童などの実態を知らないでいました。性教育を狭義に捉えていたことに反省ばかりでした。

ある時、こんな話が舞い込んできました。友人が発表した「男の子の性」がメディアの目に留まり、性教育の本を出さないかという誘いでした。その頃、本部研究会の勢いは最高潮。本部会員の人たちは、次々に実践本を出版していました。私たちにもそんなチャンスがきたなら、仲間とともに著してみたいと思っていました。



つづく

「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～⑥」

自分の感情と向き合う～C さんとの関わりを振り返って～

高名　祐美

クライエントと関係をつくるとき、クライエントの言動にマイナスの感情をもつことがある。攻撃的な発言があったり、激しく感情をぶつけてこられると、その後の援助に影響したりする。自分にはそんな傾向があると自覚している。

今回、マイナス感情を抱いたクライエントとのかかわりを振り返り、「統制された情緒関与の原則」「意図的な感情表現の原則」について考えてみたい。

C さん。74 歳、女性。５年前に夫を亡くして以来、独居生活。脊髄小脳変性症・痙性対麻痺があり、歩行が困難な状況だった。３年前に虫垂癌の手術を受け、その後化学療法を続けてきたが、１年前に再発。今年になって腹痛と食欲不振の症状が増強していた。６月下旬、腹痛・嘔吐・喉の閉そく感を訴え、救急車で来院。当院へ入院となり、SW は C さんと出会った。

最初の依頼は、入院中の洗濯物への対応だった。自分の下着を洗濯できなくなったので援助してほしいとのこと。当院では病衣以外の下着などの洗濯は、家族に依頼していた。C さんの長男は隣県在住、長女は県内在住、次男は東京在住。子供たちにはできるだけ頼りたくないという。家族で対応できない場合は、実費で業者に依頼するシステムがあることを説明すると、C さんは何度も料金を確認して、「入院の時に着てきた洋服を洗濯にだしてほしい」と希望された。

C さんは、小柄で表情が乏しい方だった。少しベッドを起こして横になった姿勢で、目だけを SW に向けて言葉を口にされた。C さんは洗濯物を業者に依頼し、請求書が届いたので再び病室を訪れた。

SW：C さん。高名です。お洗濯だされたのですね、請求書をお持ちしました。
C　：お金？今、払うわ。カバンをとってください、黒いカバン。
SW：はい、どこにありますか？
C　：そのロッカーに入っているわ。鍵のかかったところ。

ロッカーに鍵のかかるところはないけれど・・・まずロッカーを見てみよう。

黒いカバン？それらしいものは見当たらない。白地に黒の模様のついた小さなカバンがあったので、それを持ち出して C さんに尋ねた。

SW：このカバンですか？
C　：（大きな声で）違うわ！黒いカバンって言ってるでしょ！それは黒じゃないでしょ！

えっ？こんなに大きな声がでるんだ。でもロッカーにはほかにカバンは見当たらない・・・

C　：鍵のかかるところよ。鍵はかけていないから。ちゃんとみて！

鍵がかかるのは床頭台。では引き出しをあけてみよう・・・　引き出しの中には濃紺で花の刺繍が施された布製のバックがあった。これだろうか？

SW：C さん、このカバンですか？
C　：そう！それよ。黒いカバンでしょ。その中に財布が入っているの、自分でだすからカバンを私によこしてちょうだい。

C さんは私からバックを受け取ると、財布を取り出し、お金を渡してくれた。その行動はスムーズではなく、手助けが必要だった。しかし、C さんは自分でなんとかしようと一生懸命だった。表情は険しく、言葉もきつい。感情をまっすぐぶつけてくる。C さんの攻撃的な態度に私は驚いた。カバンを間違ったことで、声を荒げるなんてどういうことなのだろう・・・この方、対応むずかしい？C さんにマイナス感情が沸いたやりとりだった。

入院して１か月が過ぎる頃、主治医から C さんに病状説明があった。長男が来院し、SW はその場に同席した。

Dr：のどの違和感が苦痛だということで、耳鼻科で診てもらいましたが特に異常はありませんでした。おなかの痛みは点滴と内服薬でよくなられましたね。病状には波があるので、ちょっと悪い時に点滴ができたらいいと思います。食事も食べられるようになりましたし、退院でよいと思います。ご本人さんは「家に帰りたい」と口にされますが、一人で暮らすことは難しいと思います。病気は癌ですから。いいときも悪い時もあるので、長期的に対応してもらえる病院にうつられるのがよいと思います。
長男：そのような病院というと、この近辺ではどんなところがあるのでしょうか。紹介していただけるのでしょうか。
Dr：SW と相談をしてください。
SW：この近辺に限定すると２か所しかありません。〇〇病院と□□病院です。病院から紹介はいたします。これから相談させていただきますね。
C：それは（転院すること）しません。したくないです。〇〇病院には行きたくありません。あそこは、最後の人がいくようなところです。私は家に帰ります。ヘルパーさんに来てもらって、家で暮らせるように、ケアマネさんと相談します。それから先生、この点滴をやめてください。私、痛くありません。（きっぱりと）
点滴をしていたら家に帰れませんから。

Ｄｒ：わかりました。点滴は終わりにします。今後のことをよく相談なさってください。退院はいつでも可能です。

長男：わかりました。ケアマネさんとも相談してみます。

Cさんは主治医の提案を一蹴し、「私は家に帰ります」と言いきった。今の体の状態で、家で生活できるとは思えなかった。何から取り組むか。Ns・リハビリ、ケアマネと相談しなければならない。Ns からは食事摂取以外にはすべて介助が必要な状態だとの情報。リハビリスタッフからは、対応に当惑しているとの情報。訓練場面でも感情的で攻撃的な態度で、指示した訓練を拒否することが多い。「病院でできなくても、家ならできる。家は自分が動きやすいようにしてあるから。」が C さんの口癖だった。作業療法士から、「今できないのに練習もしないで家でどうやってやるの？」と質問されれば「あなたの支え方が悪いからできない。家ならつかまるところがいっぱいあるからできるのよ」と反論する。現状の身体状況では独居生活は無理だというのが医療スタッフの意見だった。

ケアプランを立ててもらおうとケアマネともやりとりするが、自宅退院には否定的である。状況を伝えると「私は責任もてません」と。私は C さんの言葉や態度を振り返りながら、C さんの強みを活かすにはどうしたらいいか考えた。

C さんと向き合う際には、自分の感情をコントロールすることを意識した。C さんの感情を受け止めるよう面接を繰り返し、転院・施設などの提案は一度もしなかった。C さんが描く在宅療養生活を、C さんの言葉で表出し、他スタッフと共有、ケアマネにも伝え続けた。

長男は多忙で、相談面接の時間がなかなかとれないままだった。そこで、一度家で C さんの動きをみながら、関係者が一堂にあつまる場を持とうと退院前訪問を提案した。C さんは「そんなことは必要ない。家に帰るときは退院の時よ！」と激怒されたが、長男が C さんを説得し、退院前訪問が実現した。

その日は暑い日になった。C さんは家に入ることすらできない。車いすごとみんなに抱えられて C さんは家に入った。「布団から這って台所へ行きます。食事は冷蔵庫から出して、レンジでチンして食べます。トイレにも這っていけます。」と病院で主張していたが、現実は私たちが予測したとおりだった。家の中を少し這ってみたが、思うように動けない。汗だくになり 2 メートルほど這ったところで中止を余儀なくした。長男は「これでは家にいるのは無理ですね。弟や妹とも相談します。」と言われ、私との面接を約束してくれた。しかし、当の C さんは「できない」という言葉を口にすることはなかった。強い人だと思った。

約束した日時にやってきた長男は、こう語った。

長男：本人とも話をしました。妹・弟とも相談しました。本人の希望を最優先したいと思います。家に帰る準備をお願いします。並行して、私の家の近くに病院か施設を探したいとは思います。

結論は自宅への退院だった。

ケアマネと何度も何度もやりとりをした。電話の向こうからケアマネの困惑ぶりが毎回伝わってきた。その都度、C さんの言葉を伝え、希望を実現しようと在宅療養生活への準備をすすめてきた。一方で C さんは食事の量が減り、攻撃的な言葉は少なくなっていった。元気もない。しかし、家に帰るという思いはゆるがない。様々な課題と向き合いつつ、退院日が決定した。

退院日になった。C さんは息子さんの車に乗り、そこに看護師が同乗した。私はそのあとを公用車でついていった。自宅までは約 30 分の道のり。途中、C さんの状態が心配だったが、無事に自宅に到着できた。計画通り、ケアマネ、訪問看護師、そして巡回で入るヘルパーが待機していた。

ケアマネの S さんは、私と Ns を見つけると、「病院からも来てくれたんですね！」と驚きの声をあげた。車から C さんを車椅子に移し、段差のある玄関は、みんなで車椅子ごとかかえて家の中に入った。そして準備されていたベッドにみんなで抱えて寝かせた。

入院前は、布団で臥床していて、そこから這って移動しながら生活をしていた C さん。ベッドなんて必要ないと主張してきた。私は長男に、C さんが自宅で療養するためにと、いくつか提案をした。そのひとつが電動療養ベッドの利用だった。長男さんは「難渋しましたが、なんとか説き伏せました」と。電動療養ベッドが、C さんの過ごしていた居間の真ん中に配置されていた。C さんは何も言わずに横になった。

SW:C さん。おうちに帰ってきましたね。
　　気分はいかがですか、大丈夫ですか。
C　：・・・（目を閉じたまま、うなづく）
SW：今日は息子さんが泊まって、そばにいてくれるから安心ですね。私も安心できます。
C　：・・・（黙ってうなづく）

そして、帰り際。

SW：C さん、私たち病院に帰りますね。
　　今日は息子さんとゆっくり過ごしてくださいね。

すると、それまで目を閉じていた C さんが目を開いて、私たちを見て穏やかな声でこういった。

C　：ありがとう。本当にありがとう。病院のみなさんにお世話になりました。

胸がいっぱいになった。周囲の心配を跳ね返し、向き合う人に感情をストレートにぶつけてきた C さん。「家に帰ったらできるのよ」そう言い続けてきた C さん。できないことを絶対に認めようとしなかった C さん。いろんな場面が浮かんだ。家にかえることができてよかったと心から思った。C さんの言葉がうれしかった。

そして玄関で靴を履いていると、後ろから嗚咽が聞こえてきた。振りむくと、ケアマネの S さんが玄関にへたりこんで泣いていた。「私嬉しくて・・・病院の人が今日、来てくれるなんて思わなかった。心細かっ

た。でもCさん、うちに帰ってこれてよかった・・・」声をつまらせながらそう語ってくれた。私はケアマネさんと一緒に涙した。

バイステックは「統制された情緒的関与の原則：自分の感情を自覚して吟味するとは、まずはクライエントの感情に対する感受性をもち、クライエントの感情を理解することである。そしてケースワーカーが援助という目的を意識しながら、クライエントの感情に、適切なかたちで反応することである。」と述べている。C さんの独居生活の再開を援助する過程で、私はCさんの感情に適切なかたちで反応してきたのだろうか。苦手意識を抱いたことで、「受容」「非審判的態度」をより意識できたようには思う。

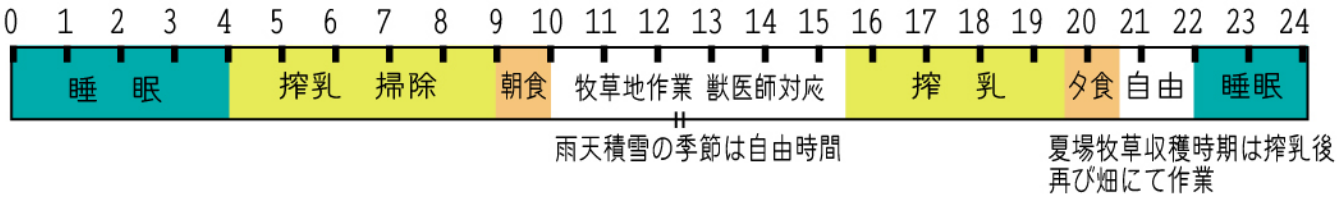
退院して12日目。ほとんど発語もない状態となったとケアマネより報告があった。連絡を受けてどうしても気になり、私はCさん宅を訪問した。やせが目立ち、固く目を閉じたままだった。

SW：Cさん。病院から来ました。
C　：（ゆっくり目を開けてしばらく時間をおいて）お世話になりました、病院の皆さんには本当にお世話になりました。

か細い声だった。「それは黒じゃないでしょ！」と最初に怒鳴られたCさんとは別人のようだった。

そして在宅生活14日目の早朝。Cさんは自宅で静かに息を引き取った。





酪農家のタイムスケジュールです。夫に出会うまで、1日２回も搾乳をしているとは知りませんでした。しかも休みがないとは！（土日休みと思っていた）。さらに２食制！（牛の給餌が２回だから合わせてる？）。結婚前は「３食昼寝つきだよ」と聞いていましたが、食事と時間を己で作りだせれば、でした（話おわりやん…）。心の中で突っ込みながらも、このスケジュールで生活して15年、えらいもんで体は慣れます。牧場の両親とは敷地内別居。朝食だけ母家で一緒に食べています。業務連絡、体調確認、牧場運営のお金の話から、ご近所の噂話まで、大事な話を共有する時間。ホッケフライ、牛乳豆腐、三平汁、いもだんご、鮭のいずし、イクラの塩漬け、ざんぎ、自家製ヨーグルト　などなど。早朝から体を動かして働き、おなかぺこぺこで帰ってきて、夕食並みのごちそう。最高に美味しい朝食を食べているのは間違いなく我々、と密かに思っています。ちなみに、自宅の牛乳は意外と飲んでいない酪農家。牛乳＝収入源、頭数が少なかった時代のなごりかもしれません。

牧場にはホルスタインのメス、乳用牛しかいません。時々、オスもいるんですか？と聞かれます、オスも牛乳が出ると思っていたそう。私も嫁ぐ前は無知でしたから笑わずまじめにお答えしています。まだまだ知られざる酪農ですね。

ホルスタインのオスが産まれた場合は１週間ほどミルクをやりメスと同じように愛情をかけて育て市場へ。肥育農家で肉牛になります。和牛に比べて肥育期間が短く大きく育つので、お手ごろ価格の牛肉に。スーパーでは国産牛と表記されています。また初任牛には分娩を軽くするためにホルスタインより小柄な和牛の種を人工授精することがあります。体格が良いうえ和牛に近い肉質、交雑牛と表記されます。そして、搾乳牛としての役割を終えた牛も市場へ。こちらも表記は国産牛。一般的に脂肪が少ない安価な肉ですが、最近は熟成肉として付加価値をつけて販売される場合もあるようです。昔はホルスタイン独特の香りがしましたが、餌や肥育方法が向上してそれもなくなりました。ホルスタインの個性を生かした美味しいお肉、皆さんも知らず知らずに召し上がっているかもしれません。

さて、乳牛の話をしましょう。乳を出してもらうには、分娩をしないといけません。
子牛は分娩できるようになるまで２年の育成期間が必要です。２年は無収入の状態で費用をかけて体を大きく、足腰を強く育てます。分娩してからは、朝夕毎日搾乳をします。泌乳にたくさんのエネルギーを使うので、元気そうに見えていても体調の変化に要注意です。
1キロの牛乳を生産するのに500リットルの血液循環が必要で、1日に50キロも乳を出すのだから、フルマラソンをずっと走り続けているようなエネルギー消費状態なんだよ、と獣医師に教わりました。がんばるのは牛、そのがんばりを最大限に引き出せるお世話を、どこまでできるかが酪農家の仕事です。牛は経済動物で、結局は人のため自分のための世話では、と思うこともありますが、一日の単位でみると100％牛のための作業です。今日もみんな元気だった、事故なく無事だった、餌はおいしかったかな、よく寝られたかな。いじめられて心配な牛は夢に出てきますし、張るから早く搾って～とせかされて夢で搾乳もしちゃいます。目覚めて終わってない搾乳にガッカリ。

分娩後、２ヶ月たつと子宮が回復。健康な牛は発情がきて、また人工授精をしていきます。私もびっくりしたのですが、乳牛の空胎期間は最短２ヶ月。以降は妊娠状態で搾乳を8ヶ月間続けたのち、次の分娩に備えて搾乳を休む乾乳期を２ヶ月取り、１年１産のサイクルで働いています。牛にとっては乾乳期の２ヶ月間は夢の休日です。このサイクルを守ることは経営に一番重要で、繁殖担当の私の責任たるや…毎日牛の観察に余念がありません。女性特有の、なんかいつもとちがう、なんか気になるセンサーをピンピンに立てて、牛とも会話しながら発情を発見していきます。もともと人間観察は得意だったのですが、さらに表情がわかりにくい牛で実践していたら、達人の域に入ってきたかもしれません。（夫は嘘はつかない人ですが、言わないでいることがあるのはすぐわかります）

牛は大きい体をしていながら、気が小さい動物です。搾乳しようとすると、ほぼ蹴ります。のんびり搾乳なんてできません。乳頭は４本ありミルカーを吸い付かせるのに４アタック。どこがスイッチになっていて蹴ってくるかはわかりません。牛の個性に応じて、なだめつつ、怒りつつ、私の声に慣れさせて信頼関係を構築しつつで怪我なく搾れます。人間側が怖がったり、動揺したり、上の空だったりするのも、牛はすぐさま察知。体をぴくぴくさせたり、フェイントするかのように足を上げ下げしたり、もっと集中せいっといわんばかりに一撃くらわせたりします。この原稿のネタを考えながら搾っているのも、牛にはバレバレ。油断禁物です。だいじょうぶ、すぐ終わるよ、今日もかわいいね、と話しかけながら搾ると牛も穏やかになっていきます。言葉は通じずとも「気」は伝わっています。リラックスさせて気持ちよく搾ると牛乳の味も格段に美味しくなっているはず。人の思うとおりにはならない生き物商売の難しさをかかえながら、一瞬通じ合った喜びが日々の糧です。

酪農家の生活と牛との関係について、さらっと書きましたが、自由にならない苦しい部分もたくさんあります。

・家族全員で休めない＝旅行には行けない　・病気になっても付き添いはいない
・誰かが仕事が出来なくなると負担が増えてすぐ窮地に追い込まれる＝慢性的な人手不足
・後継者不足　・家族経営にしては大きすぎる投資（借金）
・寒さ、暑さ、ばい菌（感染症）、怪我との戦い　・酪農はひとりではできない（協力必須）

政府がすすめる農業の大型化、効率化、環境問題にどう向き合うか、先の問題も含めれば頭が重くなることも多々あります。が、焦点を「最高に美味しい朝食を食べているのは間違いなく我々」に合わせるとどうでしょう。心地いい暮らし、心地いい気分になってくる。それが現在の私の生き方です。牛に関してもそう。いい牛もいれば悪い牛もいる。でも個々の長所に焦点を合わせたらどうでしょう。その瞬間に、うちにいる牛はみんないい子。特別な愛情がわいてくるのです。

おさまらないコロナ渦、不自由が増えた世の中で同じような考え方で暮らしている人が増えたように思います。苦しいながらも、考え方の工夫、心の持ちようでなんとか皆で乗り切れますよう祈ります。

最後に夫に聞いてみました。生まれた時からこの環境で、不自由だな、つらい、と思ったことはないですか？　生まれた時からの生活だから、物心ついた頃には、あきらめがついていて、同時に腹をくくっていたんだと思う。起きたら目の前にすぐやるべきことがあって、大自然を相手に、土作り、牧草作り、良質な餌作りに奔走し、牛のおなかをいっぱいにしてやりたいと思う日々で、自分のつらさを考える間もなかったそう。先祖が開拓した地で生きていく覚悟を、幼い頃から持っていたんですね。どんな環境にも負けない北の酪農家、ここにあり。夫が勇者に見えました。



筆者
原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に
　　北海道標茶町へ移住
　　自身も酪農家に
2017年　北海道農業士に認定

北海道指導農業士の夫とともに
新規就農者の支援や、
女性の農業者向けの勉強会、
道外からのお嫁さんの会の
お世話係を担当



みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

(3)　「三密」回避のグループダイナミクス

工藤芳幸

自粛か？活動継続か？

児童デイ・放課後等デイの非常勤 ST という身分で現場での臨床実践にも片足を突っ込み続けている。たまたま研修会で知り合いになった保育士さんの職場に遊びに行ったら、そのまま働くことになったのだが、日頃は大学で仕事をしているので、細く長くという関係で継続している。

新型コロナウィルスで子どもたちの暮らしも変わった。

年明けから新型コロナウィルスの影響が出始め、しばらくの間は非常勤先の児童デイ・放課後等デイでの個別指導やグループ活動も中止となっていた。5 月に緊急事態宣言が出された際、児童デイや放課後等デイは自粛対象にはならず、開けておくことを前提とした対応で私も出勤を要請された。普段来所している全員が一度に来るとかなり密集してしまうため、自宅にいることができる家庭には協力を仰いで、少人数での実施を試みた。私も出勤の日には車にアルコール消毒液を積んで万全の準備を整えた。窓を開け放って十分な換気を行い、必要と考えられる感染対策をしながら、おそるおそるの再開であった。

遊びを広げるグループ活動に関わる

非常勤先で学齢児のグループ活動に参加し始めたのは、比較的最近のことである。それまでは主に幼児期の子どもに個別指導の枠で関わってきた。就学後のことが気になっていたが、なかなか機会を設けることができずにいた。ある時、幼児期に関わった子どもたちが通う学童保育の様子を見学した。驚くほど大人数の子どもたちが通っていた。じっくり遊び込むことが難しい子がいたり、友達同士でのコミュニケーションが上手くいかなかったり、集団の遊びに入りきれないでいる子がいた。同じ空間にいても、室内を浮遊しているように手持ち無沙汰な子もいた。遊びのアイデアに乏しく、十分に参加もできていないので経験値の少なさが感じられる子どももいた。

こうした背景や現場のスタッフからの提案があって、少人数で共有できる遊びを広げていく目的で月 2 回程度、ことばやコミュニケーションに関係するゲームや手先や身体を使う遊びを少人数で試みることになった。事前準備の参加は難しいので、アイデアは出しつつ、製作物などの準備は保育士さんたちにお願いし、私は当日参加のスタッフというようなかたちで関わることになった（保育のスタッフからいろいろな活動

のアイデアを出てくるで、むしろ私の遊びの幅が広がって楽しんでいる)。

グループに参加しているのは発達障害の特性（ASD、ADHD、LD）がある子どもたちで、幼児期から関わっていた子どもたちも多い。巷では SST（ソーシャルスキルトレーニング）や学習支援などを売りにしている施設があちこちに立ち上げられているが、ここではそういう看板は上げず、幼児期からの活動の延長で、遊びの幅を広げ、子ども同士のコミュニケーションを促す場を作ることが大きな目的である。そのため「相手の話に注目すること」、「話している内容に耳を傾けること」、「相手の様子を見て順番や役割を意識すること」などが促されるような活動内容を準備してきた。遊びのアイデアを増やすことや未経験の遊びにもチャレンジすることを大事にするとともに、よく知られているゲームや遊びをじっくり遊ぶことも大事にした。グループを開始したばかりの頃は、極めて有名な「すごろく」を数人で遊ぶということだけでも、最後まで辿り着くのにかなりの時間とエネルギーを費やした。さいころをふる順番を待てない、順番を忘れる、他の子どものコマの進み方は見ていない、負けそうになると途端にかんしゃくを起こす・・・など、いろいろな事態が起こるのだ。「他の子どものやっていることに関心を向ける」「協調する」ということが、なかなか難しいのである。

思いがけない展開

さて、話を現在に戻そう。緊急事態宣言下での、久しぶりのグループ活動再開。休校中なので自宅から 1 人ずつ、時間差でやってくる。長らく顔を合わせていないので、「どうしてた？」「家で何しているの」と私からの質問は尽きない。長期の自宅待機で子どもたちがしんどくなっていないだろうか、意欲が低下したり、イライラが募って暴発したりすることがないだろうかと心配もしていた。普段とは異なる見通しがない状況で不安を増大させていないだろうかなど、登園してくる子ども表情やしぐさに注意を払っていた。いつも「今日は何をしたの？」系の質問をすると、その時の子どもの関心とは合わないことが多く、目の前にある何かで（サッカーゲームやら何やら）遊ぶ方向に注意が向かうことがままある。しかし、この日は違った。自宅での過ごしについて、詳しい話をしてくれた。コロナのことも驚くほどよく知っているし、そのことを語ることができた（日頃は経験を語るということがなかなか難しい子どもたちのグループなのである)。

そうこうしているうちに、次々と子どもたちが登園してくる。せっかくウィルス感染予防について滾々と説明しておいたのに、そんな話はどこかに吹き飛んで、駆け寄って抱き合い喜ぶ小学生たち。「おおおー、○○！久しぶりー」。抱きつかれた方は少々困ったような、でもまんざらではない表情。普段は「相手の名前を呼ぶ」というシーンを見たことがない子どもが他の子どもたちの名前を呼び、声をかける。めいめいバラバラに動いている子たちが「これやろう」「いいね」と誘い合う。その輪に積極的に入りたがる。

取り敢えず、私の役目は「密を減らす」ことであり「はい、離れて離れて」と声をかけてまわったり、敢えてイスを置いて距離を取ったりと、とにかく物理的距離を空けることに集中した。この日の活動内容も接触せず、輪にならず、対面にならず、子ども同

士のコミュニケーションがなくてもできる製作活動を主体にした（果たして楽しめるものなのだろうか？という思いもあったが、持ち帰りができるものは楽しいことのようだ)。私は机を置いて空間を区切って…せっせと物理的距離を空けることにいそしむ。ところが子どもたちは距離を空けても心の距離を詰めて、自ずからコミュニケーションを始めていた。普段とは違い相手がやってることに関心を持ち、自分が描いているものを伝え合っていた。絵を描きながら趣味の話で盛り上がってもいた。いつもは一方的に話すシーンが多いのだが、この日は相手の話を聞き、それを引き取って返す姿があった。思いがけない展開である。スタッフの一人が「やっぱり人を求めているのよ」とつぶやいた。少人数で短時間でも活動を継続して良かった、と。こうなってくると、普段の「他者に関心が向かない」、「一方的に話す」という状況は何なのだろうか。

「同じ」と「つながり」の圧力

感染対策のために人数を減らしたことで空間的にも余裕が生まれ、子ども同士のやりとりが促されたこともあるだろう。それよりも密を減らすこと、人と話さないように促すことで、「人の話を聞きましょう」「みんなでやりましょう」という社会的な圧力の減少が大きな理由に思えた。逆説的にコミュニケーションを意図しない製作活動がコミュニケーションを「媒介」してくれたのだ。こうしたことはたびたび経験してきたが、今回は劇的な気がした。スタッフの間でも「発達障害の子どものグループ活動はこうあるべき」という発想が無意識に蔓延していたような気がしてならない。

発達心理学者の赤木和重はアメリカのシラキュース大学で客員教員として研究生活をし、地域の学校教育に触れた体験から、日本とアメリカの教育や保育、療育について「同じ―違い」と「つながり―個人」の２つの軸で考察している（赤木, 2017)。赤木によると、日本の教育を象徴するのが「同じ・つながり」というキーワードである。「皆と同じように学び、かつ、友達同士のつながりを求める」ことに価値をおいたインクルーシブ教育は、とりわけ自閉スペクトラム症などの発達障害特性がある子どもたちにとってハードルが高い。一方で、シラキュースでは「違いを重視・尊重し、個々の活動を重視」した関わりが行われていたという。どちらが良いということではない。日本の教育や保育、療育の現場では「違いを認める」ということよりも「皆一緒に一定の同じことができる」方により価値が置かれていて、その状況の中で起こる社会的な課題があるということだ。

私が参加しているグループ活動にも、そうした「同じとつながり」の価値観が内包されてのだと思う。発達的な凸凹がある子たちへの療育的な意味合いがあるグループ活動であり、子ども同士の相互性を促す場をつくるという方向性は間違っていないとは思う。しかし、無意識に「みんな一緒」を軸とした関わりが主体になり過ぎると、そのときの子どもの自身の中にある動機が見過ごされてしまうかもしれない。結果的に「みんな一緒」の価値観に適応的であることが優先され、生き生きとしたコミュニケーションの相互性が失われてしまうという、目的とは逆の作用をもたらす可能性があるのだ。

多様性の軸から子どもを見る

また別のある日のこと。色画用紙でロケットを製作して飛ばして遊ぶ活動をしたことがある。出来上がったロケットを少し高い場所から飛ばそうと、小学生男子たちはわれ先に背の低い机やイスに乗って飛ばしては大騒ぎ。三密回避でそこでも「離れて離れて」と声かけしていたが、小学生らしいカオスぶりで微笑ましくもあった。そのときに別室で、周囲の状況とは独立して一人でロケットを飛ばして楽しんでいる男の子がいた。「この行動は心配だ、気になる」とスタッフには評価された。その場の雰囲気は「みんなで盛り上がる」だったからであろう。一方で、それはそれで良いのではないかと思えた。製作したロケットをじっくり飛ばすには、むしろ一人で広い場所でやる方が合理的であるし、遊び方は多様であって良いはずである。その男の子は「なぜわざわざみんなで同じような場所から飛ばすの？」と思っていたかも知れない。活動終了後に記録を書きながらスタッフ間での振り返りの場では両方の意見が出された。

療育の場というのは、実のところ目に見えない規律の場でもある。保育や教育、医療とのゆるやかな連続性を持った場であり、逸脱性や揺らぎに対して不寛容な眼差しが向けられることは少なくないのではないだろうか。とりわけ、「発達」という側面が関わってくると、どうしても平均的な発達像からの乖離と能力を伸ばす方向性が入り込んでくる。就学や就労などの制度的な枠組みから自由ではいられない。しかし、子どもの能力やスキルを伸ばす、何か将来に向けた有用な力を身につけられるといったことを主軸にして物事を考え出すと、子どもも大人もしんどくなっていくような気がする。

取り敢えず、それぞれの「今、ここ」を認めたところから始めてみる。「平均的で適応的なグループとしての活動」に合わせていくのではなく、それぞれの子どもが「何に向かって」「何に心が動き」「どのように過ごすか」ということに目を向けることである。平均的なコミュニケーションスタイルの確立が「目的」ではなく、何かを実現していく「プロセス」として捉え、多様性があるコミュニケーションスタイルを認める場として機能すると、このグループ活動の目的である相互性がより引き出されるのではないかと考えている。

今回は書かれなかったこと

今回は三密回避の構造で起こったグループダイナミクスの一端から、療育活動について考察した。現在は学校が再開し、「新たな日常」が叫ばれるようになって、どうしてもコロナ疲れが出てきている。心理的・社会的・経済的余裕が減少している家庭もある。生活リズムの変化や学校の授業進度が早くなり、疲弊している子どもがいるし、そもそも不登校傾向になった子がいよいよ疲れてしまって行けなくなることもあるようだ。不安を抱えている親もいる。こうした中での現場の状況についてはまた改めて書きたい。また、普段の「他者に関心が向かない」、「一方的に話す」という状況は何なのだろうか？という問いついてはまだ十分に答えられてない。そこはまた次の課題である。

〈引用・参考文献〉

赤木和重（2017）『アメリカの教室に入ってみた―新しいインクルーシブ教育のかたち』ひとなる書房

かけだ詩③

そだちと臨床研究会　川畑（かわばた）　隆（たかし）

お口よごし

（よろしければ声に出してお読みください）

すいきんチカモク
どてんカイメイ

ヤブラこうじの
ブラこうじ

かんかんガクガク
けんけんゴウゴウ

タケダのしんげん
ウエスギけんしん

にそくサンモン
さんぞくセンエン

クロマニヨンじん
クルマにおんねん

いまそのとき

どこの親もそんなに
立派には生きていない
そのとおり
立派になんか生きなくていい
ふつうでいい

子どものことで心配があっても
ふつうのままで
波風が立ったとしても
どうにか幸せにやれたら
それでいい

でもそのままでは
うまくいきそうにないとき
子どもの幸せを潰しそうなとき
いやそんなときでも
親は立派に生きなくていい
ただ一生に一度でいい
眠った力を奮い立たせたら
それでいい

親が立派じゃないから
子どもに心配事が起きるんじゃない
親がどんなふうでも

一大事は起きない
あるいは起きる

起きたなら
いまそのとき
そんな人生のポイントってある

心のケア

震災後の航空機到着ロビーからの中継
来られた目的は何ですかとインタビュアー
心理士なんですけど
被災者の心のケアをしに来ました！
と答えるとても元気な若者の声

何の迷いもないような
聴いた言葉の座りが悪くて心がざわつく
意味はわかるけど
医師から治療にきたと聴いた時には
感じないもの

その前の大震災のときに
それこそ「心のケア隊」を組んで
避難所にお邪魔した時のこと

「あんたらなあ　心のケアなんて要らんねん
　風呂を沸かしてよ　風呂に入られへんねん」
風呂を沸かすことはできなかった
でも風呂を沸かせたらよかったと強く思った

心理士のなかには
看護師や保健師さんを羨む声
聴診器や血圧計を使って話し込めるから
心理士もマッサージができる人は
それを活かす人もいる
それに比べて
「お話しを聴きに来ました」とは
それこそ手持無沙汰で
「心のケアをしに来ました」
としか言いようがない人がいるかもしれない

でも若者よ　もうちょっと恥じらいをもとう
医師による治療は
まずしなければならないことだけれど
やること　やったことが心のケアだと言えるのは
そのやったことが
少しでも役に立った後なんじゃないだろうか
役に立ったかどうかわからない時には
心のケアだったかどうかは保留するセンスがあっていい

たしかに　最近　心のケアはカウンセリング
手段が心のケアと命名されているふしがある
そこにもう少し敏感になっていい
心のケアは目的

手段としては
上手な風呂の沸かし方もメニューにあっていい

ことば狩り

おまえは
御前(おんまえ)だからなあって
語源を持ち出して弁護しても
おまえは有罪だって

有罪だから言うなと言われて
言わなければ忖度　黙従
わざわざ言えば挑戦　挑発
言った後から気づけば後悔　緊縮

おまえと言うなの伝言ゲームは
その言い出しっぺよりも
何番目かの伝言役に
左右されたんじゃないだろうか

言葉は時代によって変化してゆく
文化とはそういうものだとしても
誰かの気まぐれと追従も
その仲間に入れてもらえるのだろうか

ささまは
貴様(きさま)だと踏ん張って主張しなくても
取り沙汰されていないし
そもそもあまり使わない

おまえの受難のとき

同志

僕が思ったけど言わなかったことを
まさにその時
君が言った

僕が言いかけてやめたら
それを引き取るように
君が続けた

やっぱり君は
僕と同じことを考えている
そのことに
また新しく気づいた

同じ空気がずっと二人をとりもってきた

日常に貼り付く経験と思い出

でもいつまでたっても
同じでないことへのいらだち
違うことへの反発

同じでないのに同じ
それは　同じでないから同じ
同じが優しいのは
同じでないのを踏まえているから

同じなのに違う
それは　同じだから違う
違いが尖っているのは
同じを知っているから

この同じと違いを繰り返し
互いの中に納めてゆく同志の営み

三度（みたび）たじろぐ

ねえ　何してるの？
コトコトとやってきて
扉の向こうからそっと探る声

何してる？って問われても…

ねえねえ　何してるの？
…あのお　ウンチしてるの
そう　ウンチ　がんばってね
…うん　おとうさん　がんばる

扉から遠ざかる小さな足音
トコトコと

円環

医師にだけあるのか
診断の責任

診断とは
根拠をもとに決めること
それを行うのは医師の義務
診断がないと治療はない

しかし
決められなくても
決めなければならない
医師の役割と悩み

愛着障害
その子の母の精神的不調
それが決め手の診断
医師は心ならずも迷いに蓋をした

ところが
医師が下した診断名
権威あるものとして独りで歩く
その日から地元で
母はすっかり養育不適格者になった

不適格であることが決まれば
その証拠はいくつでも見つかる
まるで
適格である証拠には頬被りをするように

子どもの問題状況が続けば
母が精神的に不調になることぐらい
許してもらえないか
そんな母でも
ふつうの母親の一員に入れてもらえないか

人を理解することに忠実になるほど
決められないことは増える
「わからない」ということ
「そうじゃないかもしれない」という表明を
医師にも許そう
診断名を聴く側の責任として

的さがし

大切な人の顔が曇っていたら
どうしたんだろうととても気がかり
その人のところから離れられない…

大切な人の顔が晴れていたら
もう放っといても大丈夫
さて私は何をするところだったっけ…

だから家族全体を見渡す
援助が必要なのは
目の前の子どもじゃないかもしれない

母が自殺しないか見張っていた中学生
大家族のなかで
母の不調を見抜いていたのはその子だけ

登校していないその子に
登校刺激を控えて見守ってあげようって
いったい何をしていることになるんだろう

登校刺激…子どもを登校するように仕向けようとする言動

③了　二〇二〇年六月三〇日

ブルーグレーの肖像

当事者から見たHSPの日常

天川　浩

第三回　めんどくさい性格

突然、回数を打ってみました。三回目なのです。過去二回については、得体の知れないHSPという生物について少し触れてきました。繊細、間隔過敏、過度の配慮など、世間一般では「よくないイメージ」がつきまとう感じですが、みんな一生懸命、生きていることを、お伝えしたつもりです。

HSPじゃなかったらよかった…それが私の正直な気持ちです。

よかったことなど、あまりありません。どちらかと言えば嫌なことばかりです。ようやく少し、認知度が上がってきた今でも、さほど良いことはありません

最近は、ちらほら、芸能人が「私もHSPだ」とカミングアウトしています。正直いって、複雑な気持ちです。何かのトレンドになって終わってしまうのではないか？そんな不安に包まれます。その芸能人のイメージがHSPそのもののイメージになってしまうことは、とても危険なことだと思います。

そのためにも、当事者の生々しい経験をお伝えしていく必要があると感じています。トレンドや一時的なムーブメントなどではなく、過去においても、現在においても、その性格を持ちながら生きている人々が存在すること、それをできるだけ現実的な視点から、お伝えしていくことが、HSPを理解していただく確かなきっかけになるのだと信じています。

HSPの日常といっても、普通の人間と基本的には変わりません。あたりまえです。人間なのですから。ただ、前回までにも少し触れたように、一つ一つの動作に、人よりも感性が働いたり、予期することが付加されたりしてしまうだけなのです。

具体的にはどういったものが付加されていくのでしょうか？

次ページから少し具体例を挙げていけたらと思います。

①外出前の出来事が、その日一日を大きく左右する。

朝目覚め、起床し、学校や職場に行く前の時間は、おだやかに過ごしたい。こんなことをいうと「誰でもそうだ」と反論されてしまうだろうが、ここは本当に重要である。

HSPの人間は、ある出来事に対して、非HSP(HSP気質ではない人間を総称して、こう呼びたいと思います)の人よりも、敏感に反応してしまいます。特に、怒りや、悲しみ、悩み、その他の「負の感情」に対して敏感な反応をしてしまい、その時の場面が、何回も脳内で繰り返され、リフレインのような状態になることが多いのです。そして、それらの周辺体験と共に、体験記憶として蓄積されます。次回からは、同じ状況下では、記憶は出来事プラス周辺体験として、呼び起され、初回よりも緊張感を持って対応すべきことになっていきます。

たとえば、起きてすぐに、リビングに行くと、母親と妹が喧嘩をしていた、喧嘩自体はたいしたことではない。しかし、二人ともに、瞬間的に怒気を帯び、しばらく互いに罵りあい、口をきかない状態になってしまった。この時、HSPは、怒りにより荒げられた大声に、まず動揺してしまいます。五感が敏感な状態にあることが多いので、大きな声に圧倒されてしまいます。そして、その声の主の感情が、空気を伝うように自分に届きます。高い感情移入能力によって、怒っている主と同じような感覚に陥ります。

何よりも、その場の緊張感に耐えられなくなってきます。怒っていた人間本人の怒りがすぐに鎮まってもHSPの緊張が解けるわけではなく、しばらく余韻が残り空気中に漂う怒りを感じながら、その空間で過ごさなくてはいけなくなります。

この時、空気を伝って感じ取った怒りをHSPの人間は体内に蓄積するように固体状の物のように体内に残留させてしまいます。そしてその残留物は何時間も体の中を駆け巡って、長時間とどまることになります。

それがなくなるまで1日を要することもあります。例えば、事故の現場などを見た時などは、事故現場の様々な感情を受け取ってしまい、それらを「形あるものとして」として体内に留めてしまうために、それらが完全に消え去るまでに何日間もかかることもあります。

②満員電車に心が折れてしまう

出がけの嫌な出来事も精神的にきますが、通勤中も色々な感情をキャッチしてしまうため、苦しくなってきたりすることもあります。

満員電車などは特に苦痛を感じることがあります。すし詰めになった通勤電車の中には、様々な感情が渦巻いています。また様々な刺激に満ち溢れています。

仕事に行くのが楽しくない、行きたくない、休みたい、立っているのが辛い、足を踏まれている、イヤホンから漏れる音楽の音が気になる、電車の揺れ自体が気になる、車内の独特の匂いが気になる…その場にいるすべての人の感情が一気に脳内に流れ込み、頭の中がいっぱいになります。激しい緊張感の中、何十分も電車内に、身動きが取れない状態でいるのは本当にストレス以外の何物でもありません。

～必要か？不必要か？～

HSPは非HSPの何倍も刺激を感じると記述しましたが、非HSPの人間でも、苦痛に感じることはHSPには耐えがたい苦痛になります。苦痛は尾を引き、会社に到着しても不安や焦燥に襲われてしまうことになります。

電車内では、イヤフォンで音楽を聴くことや耳栓をすることが非常に有効です。聴覚を遮断することによって隔絶された安心感を得ることができます。しかし、常に音楽が聴ける状態にする必要や、耳栓を持ち歩く必要があり、ある種の手間でもあります。満員電車で困ることがない人には、必要のない品物ですし、それらを購入するための出費は本来ならば必要のない出費であります。

これをどう取るかは個人差がありますが、私は、通常なら必要のないものを使用している感覚に陥る時があります。おそらく、皆さん、コロナウィルスの影響でマスクを着用しなければならなくなっていると思います。もし「コロナがなければマスクなどつけなくていいのに…」と思っている方がいらっしゃると思いますが、感情の流入や話し声を防ぐための耳栓・イヤフォン、光の刺激を和らげる色付き眼鏡・サングラス、肌が敏感なために着用する上質の綿生地の肌着、等、「しなければならない感」にとても苛まれます。

HSPでなければ、これらの用具は必要ありませんし、ファッション感覚で身に着けている訳ではないので、半ば強制されている感覚になってしまいます。補装具のように使わなければならないとすると、障がいを持った方も感じられる、ある種のストレスを感じてしまうところに行きついてしまいます。こういったことを割り切れる方と、割り切れない方では、ストレスの度合いも著しく変わってきます。

しかし、前にも述べたように、HSPは、疾病でも、障がいでもありません。あくまで性格として、片づけられているのが現状です。はたして、それは妥当なことなのでしょうか？

今の私には全くわかりません。疾病と判断されたいとも思いませんが、明らかにHSPに起因する状態に毎日、苦しめられています。「HSPを前向きな性格と取ろう」と言った趣旨の啓発本を何冊も見かけますが参考程度か、参考にすらならない、と私は思っています。何故なら、「性格」である以上は、千人いたら、千通りの状態が存在するから、ただ

共通項を拾っているだけの啓発本では、不完全なのです。多くの本は、著者本人がHSPであるか、HSPを研究している著者の本であることが多いです。それは、彼らの「主観」であり、「普遍的で客観的なもの」とは程遠いように思えます。例えば、「寝る前に今日の出来事を振り返り、自分を褒めよう」などと書いてあるものもあります。その方法が合っていてHSPである悩みを克服できる人も、少なからずいるでしょう。しかし、私は、それが万能の処方箋であるとは到底、現在思えません。ましてや、HSPと騒ぎ立てて、おもしろおかしく捉えられる風潮に言い知れぬ不安感を覚えています。

～名前のない怪物～

かつて、古代では統合失調症を、「魂が連れ去られた」などと解釈していた時もありました。しかし、精神医学は、山頂に降り積もった万年雪が、一滴一滴、雪解け水となって、一筋の川の流れをなすように、ゆっくりと発展し、様々な症状をカテゴライズして、一定の共通症状に、疾患の名前を与えられるようになりました。

もしかしたら、100年、200年後には、HSPにも、有効な投薬治療や、認知行動療法が、適用されるかもしれない。しかし、少なくとも今、私がこの原稿を書いている、この時代では、まだまだ未知の領域であることは間違いない。

逆に考えると、私がHSPについてまとめることにも、ある種の意味があるのかもしれない。

ゴリラやパンダは、ほんの最近まで、ユニコーンやフェニックスのように、想像上の幻獣だと信じられていた。しかし、今では、確固として存在する生物だということが常識となっている。HSPも思いこみや、妄想と言われず、何らかの苦悩や苦痛として、適切なケアを受けられるようになる日まで、私はこの執筆をやめることはできない。

応援、母ちゃん！

～子育てしながらはたらく母親たちの日常～

3

－　NOT　I N　MY BACKYARD　－

たまむら　ふみ

玉村　文



2019 年度に出産し、産休・育休を経て 2020 年度に職場復帰を経験したわたしは、妊娠出産、子育てと仕事との両立の当事者になりました。

1．短時間勤務は迷惑？

職場復帰をする前後で、同僚や友人たちとの会話で、気にかかっている言葉がありました。「職場に迷惑をかけないように」。短時間勤務で復帰する母親たちが、合言葉

のように言うのです。そういうわたしも感じるところがあって、急な保育園の呼び出しが来たら、仕事を誰かにお願いしてでもわたしが行かねばならない、次の日も仕事を休まなければならないかもしれない。そうなると「職場に迷惑がかかる」と。わたしにできる対処としては、早め早めに仕事の段取りをしておいて、急にわたしが対応できなくなったときの迷惑を最小限に抑えることくらいです。

わたしの母の世代（60 歳前後）は短時間勤務制度なんてなかったと言います。専業主婦率も高かったなか、仕事を続けるという選択をした母親たちのエピソードは、フルタイムの仕事と子育てと家事等のダブルワーク・トリプルワークで、とてもわたしには真似できないと思わされるほどの迫力があります。その世代と比べると、いまは子育て支援制度も整ってきているといえます。

短時間勤務は、2009 年の育児・介護休業法の改正によって定められた制度です。育児や介護など、主に家庭の事情によって本来働くべき時間よりも短い時間で働く方法と説明されています。2012 年には、100 人以下の事業主にも育児短時間勤務制度を設けることが義務付けられました。会社は従業員からの申し出があった場合、短時間勤務、つまり時短勤務の措置を行うこととなっています。

制度では認められているからといって、必ずしも歓迎された働き方ではないこともあります。試しに、「時短勤務、迷惑」と検索してみると、いろんなエピソードを含んだ投稿に批判や擁護のコメントがついている記事を見ることができます。「時短勤務は職場に迷惑がかかるので菓子折りを持ってコミュニケーションを円滑に」「時短勤務ママのフォローに疲れる」など、もちろん社風にもよるのでしょうが、「職場に迷惑をかけないように」という言葉は時短勤務で復帰する人の共通に持っている思いなのではないでしょうか。

２．妊娠・出産も迷惑？

子育てで短時間勤務を選んでいる状況だとしたら、そもそも妊娠・出産についても迷惑なのでしょうか。公立学校の教員として働いている友人は、新年度に合わせて仕事復帰ができるように出産時期の調整をすると言います。保活激戦の街に住んでいる知り合いは、年度の早い時期に生んで 0 才児から保育園に入れるようにする、職場で一番忙しい時期に産休で休むことにならないように調整した、という話も聞いたことがあります。少し前にニュースになりましたが、ある幼稚園の先生は、毎年誰が妊娠するのか順番制だったとか。

わたし自身の体験でも、2018 年に他団体への出向が決まったときに、出向中に妊娠出産で休むことがないようにと上司から言われたことがあります。「なんて時代錯誤な」と驚いて、私的領域へのコントロールのようで怒りも感じたのですが、わたしの母親からは「そりゃそうよ」と言われました。子どもを 3 人産み育てながらフルタイムで養護教諭をしてきた母親。校長になるとかそういう出世は望まず、でも定年まで働き続けた彼女の仕事観と、子育てとバランス

をとってきた 30 年以上の歴史を感じた言葉でした。母親の経験知として、女性が働き続けるためには、組織の考えにも共感しながら家族計画を立てることが必要ということでした。

こうして、できるだけスムーズに産育休に入れるように、またスムーズに仕事に復帰できるような家族計画を立てているのかと、わたしが当事者になって初めて妊娠・出産も社会化されたものであることに気づきました。でもこういう忖度は少子化の一因になってしまう気がするのです。だって、時期を待っている間に妊娠・出産、子育てを逃してしまうこともあるでしょう。

３．個人的なことは社会的なこと

どうして、子どもができること、育てることで職場に迷惑がかかってしまうのでしょう。少子化対策や女性活躍推進が掲げられているのに、実際職場では子どもがいることによって迷惑をかけてしまうことになるなんて、違和感がありました。そんなときに、この言葉と出会って、わたしが置かれている状況を理解できるようになりました。＜NOT IN MY BACKYARD＞、直訳すると「うちの裏庭ではやめてね」という意味になります。これは、原発やゴミ処理場など、社会的に必要だと思われていても、わたしの住んでいる地域に建設することには反対する、そのようなときに使う言葉らしいです。そうか、少子化で子どもを生んでほしいけれど、うちの職場ではやめてね、ということだったんだと気付かされました。

そういうことだったのか、と思ったときに、こういうことはいろんな場所でいろんなことを対象に行われていることだなと思い至りました。不登校、ひきこもりは社会的に支援が必要、でもうちではやめてね、など。わたしごととなったときに、受け入れ難くなってしまう。

こう考えると、わたしが感じた「違和感」は、友人や同僚といったわたしの身の回りだけの話ではなく、もっと大きな社会につながっている問題なんだということがわかります。

４．子どものいる女性が職場に必要とされることもある

相談支援の現場では、女性だからという理由で選ばれることもあります。「男性が苦手」や「子育ての苦労に共感してほしい」という相談者のニーズで、とりわけ「子どものいる女性」を選ばれることがあると聞いていますし、実感としてもあります。DV 等の女性相談であれば、相談員も同性であることが必須と聞きました。わたしの属性や、経験を支援に使うことができる援助職として、この短時間勤務での経験や得た知恵を活用できる日が来るのでしょうか。少なくてもわたしが対策される存在である、マイノリティである、配慮が必要な存在として扱われる経験は、今後も続けていくつもりの援助職で活用できるようなものにしたい、転んでもただでは起きない精神で、こうしたことを書き留めるわたしがいます。

HITOKOMART No.3

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

アジアの片隅で…



洪水と雨傘

『北風と太陽』の話は、両者が旅人の外套を脱がせる事を競うイソップ寓話で、力づくではかえって上手くいかないものだということを諭していた。
しかし、今の世の中は全てを力ずくで押し進める流れが主流になっている。
平和的な行動としての民衆のデモもどんどん過激になっている。
力で相手を押さえ込むことで、押さえ込んだ側の正義が正当化されるのである。
この1年の香港の状況はそれが一層はっきりと見てとれた。
中国では各地で長雨と大洪水が起こっていたがそれを制することもないまま自分たちは他方で小さな雨傘の人たちをあっという間に押し流してしまった。



手のひらに太陽を

私の手相は小さい頃から強運の手相と言われてきた。
いわゆる『マスカケ』である。
秀吉も家康もそうだった事からそう言われてきたらしい。
これが両手ともそうなので僕はいずれ天下を取るのだと密かに思っていたのだが、古希を過ぎた今もその実感はない。

友人に言わせると、大学の名誉教授になったところがそれで、そこが頂点ではないかと言うのだが自分の中ではまだまだ道のりなかばのような気がしている。
あらためて自分の手のひらを眺めてみるとそこに人生が詰まっているような気分になる。

若い頃、自分の生命線を見てこれは長生きしないなあと思っていたが、僕より長かった家内の方が早く逝った。反対に今は不思議なことに僕の生命線は手首のあたりまで伸びているように思う。

イエスキリストの掌には十字架に貼り付けられた際に釘で打ち抜かれた釘穴がある。
われわれが普通にするような手のひらで水をすくう行為は彼には出来ないことになるが、この穴を通してたくさんの人々を救ってきた事は確かである。



A-1

育て！

野良猫が魚をくわえて逃げるという姿は、サザエさんの主題歌でしか見なくなった。
我が家にいた猫たちは全員、キャットフードで育った。
だからネズミも知らないし魚も食べたことがない

しかしマタタビの木片にはよだれを出してゴロゴロするし、魚の臭いにも敏感だ。
『本能』はきっちりと体内に受け継がれているようだがその本能を活かせる環境が人も動物も少なくなってしまった



F-8

親指姫

ＳＮＳでは『いいね』の数が人気のバロメーターとなる。
親指を立てるサインは昔からあるものだが、ネット社会で最も多用されるピクトグラムとして全世界で認知されている。
毎日、スマホ画面を眺めながら、見知らぬ人たちからの反応に一喜一憂している人たちも多い。
しかしスマホ画面タッチする親指の動きが事件につながる場面も多い。
ネット上での誹謗中傷から死に至る『指殺人』と称される事件は記憶にも新しい。
現代社会の親指姫はスマホ片手に、小さな指で何を語っているのだろう。



F-30号

COOL!



F-30

密談

『情報公開』と『個人情報の秘密』は微妙な絡み方で錦の御旗にされる。街の至る所に防犯カメラは設置されているし、ドライブレコーダーの普及率も高い。

自分の生活とは全く関係の無い他人のプライバシーに正義の味方感覚で所構わず踏み込んで行くマスコミに不快感を感じながらも自分自身の野次馬根性は捨てられない。人の不幸は蜜の味と有名人や売れっ子タレントのスキャンダルは目を皿のようにしてネットニュースに食らいつく。

何が真実で何がフェイクなのかも関係なく他人の秘密は毎日のオヤツとなる。そんな中で本当に知らなければならないことが表に出ることなく進行しているような気がする。

異教徒

コロナの流行とともにマスク着用は、そんな文化の全くなかった国々にも広がった。

いまだに反発してマスクを拒否している人たちもいるが、マスクの効果は誰の目にも明らかな結果が出ているように思う。

しかし唯一マスクを必要としていないのはこういう衣装の人たちだけだろうと思うけど、これも感染症を見越した神の御加護なのかもしれない。



F-30

アダルトグッズＯＬ日記 02

楊 梓(ヨウ シ)

2020 年の９月ごろに台北のバスと繁華街ビルの外壁の大きなデジタル看板にアダルトグッズとその通販サイトの広告が出されていた。



台北のバス



アダルトグッズの広告動画、男性用グッズを表示しているシーン

この光景を見て、非常に驚いた。具体的には以下の３つである。

①法律や規定について

中国大陸では広告法により、「猥褻、エロチック」なコンテンツを広告に載せてはいけない。日本の場合、エロコンテンツは合法だが、バスやビルの外壁看板では全くみたことがない。東京都交通局の広告掲出審査ガイドラインによると、アダルトグッズの広告は掲出不可

となっている。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

広告掲出審査ガイドライン

（中略）

43 通信販売の広告

(3)危険物、ペット、医薬品、アダルトグッズ等の商品の広告は掲出不可とする。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

②社会文化について

台湾出身の同僚は同じくこの件について驚き、台湾は友達と普通にアダルトグッズを討論するような文化的環境ではないと言った。台湾も儒家文化に影響され、性やアダルトグッズがタブー視される部分もある環境だと考えている。しかし、このような環境でアダルトグッズの広告が公共の場で掲載できた。現地の方がこれに対し、どのように考えているかについて非常に興味を持っている。

③子どもへの配慮について

もちろん、「性を表通りに」、性のタブー視をなくすということはとても賛成しており、これを実現するために日々努力している。アダルトグッズを日用品のようにタブー視なく、取り扱いして欲しいと考えている。一方、18 歳以下の子どもが触れ合ってはいけないとも考えており、自身が矛盾した 2 つの考えを持っていることに気づいた。

広告を掲載した通販サイト（https://www.drqq.toys）にも「本サイトはアダルトグッズが含まれているため、閲覧、購入できるのは 18 歳から」と書かれている。では、なぜ 18 歳以下の子どもがアダルトグッズを見てはいけないあるいは使ってはいけない、どこまで触れ合いして貰えば大丈夫などの問題については続いて考える。

参考資料：

広告掲出審査ガイドライン
https://www.kotsu.metro.tokyo.jp/about/yoko_yoryo/pdf/b_yoko_yoryo08.pdf
台湾のアダルトグッズ通販サイト
https://www.drqq.toys

キャリアと文化の心理学

(2) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー

土元哲平

筆者はこれまで，大学生・大学院生の人生移行(転機)におけるキャリア支援に関する研究に取り組んできた。特に，教師と学生という関係性に焦点をあて，オートエスノグラフィーというアプローチを用いて，教員志望学生の人生移行を促すためのキャリア支援を検討してきた。本稿では，筆者の博士論文『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』 (土元, 2020)の研究成果の概要を紹介する。なお，本稿は博士論文の要約に加え，その後の研究進展を踏まえて一部内容の修正・補足を行っている。

博士論文研究の目的

転機は，ある人の生き方・キャリアにとって重要な意味を持つ，特定のきっかけや経験の結びつきを指す。転機に類する表現として，「禍を転じて福となす」(戦国策)という故事成語がある。これは，「わざわいをうまく処理して，かえって幸福な結果が得られるようにする」という意味である(新漢語林　第 2 版)。転機という用語における「転」は，ある状況が他の状況へと変化すること(特に，好転すること)を，「機」はその「機会」を示している。筆者の博士論文研究の主題は，「転機」の過程と，転機を促す「キャリア支援」の理解であった。人がある出来事を，どのように「転機」として意味づけ，成長のための媒介としていくのか，そのための他者(特にキャリア支援者)の働きかけはどのようなものかを明らかにしていくことがこの研究の主要な関心であった。具体的には，以下の 2 点を目的とした。

1. 筆者自身の転機経験および転機におけるキャリア支援経験を記述的に理解する
2. 大学生・大学院生(特に教員志望学生)の転機におけるキャリア支援への示唆を得る

なお，「キャリア」という用語には，“フルタイムでの就労経験”という職業的な側面に焦点化した定義や，「生涯の過程を通じて，ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」(Super, 1980, p.282)のような広い定義がある。本研究においては「キャリア」を，これらの意味だけでなく，**「他者との関係の中で『成長』してきた経験」という意味としても用いる**(特に第 6 章)。ここでいう他者には想像上の他者，歴史上の偉人，本，なども含まれる。TAE(Thinking At the Edge)には，「体験と言語シンボルを丁寧につきあわせ，既存の言語シンボルに個人が発見する複雑な意味を含ませて」(得丸, 2010, p.12)いくことで，新しい意味や単位を創造していくという志向がある(得丸, 2010)。すなわち，こと

ばの意味や定義が複数存在することは問題ではなく，むしろ，**経験を意味深く意味づけたり，新しい意味を創造するために必要**であると考える。

博士論文研究の考え方の基盤と全体構成

本研究では，人生の転機(移行)の経験と，転機を促すキャリア支援に関する研究を行う。そのために，文化心理学という考え方を基盤として転機研究の視座や方法を検討し，オートエスノグラフィー研究の視座や方法を活用して現象に迫っていく。文化心理学では「人が文化に属する」のではなく「文化が人に属する」と考える(木戸, 2019)。すなわち，外的に与えられ，個人と独立に存在する“容器”としての文化ではなく，個人が(時には他者とともに)主体的に創り上げる“道具”としての文化を考えるのである。

文化心理学，転機研究，オートエスノグラフィー研究の関係は，これまであまり顧みられてこなかったが，転機は個々人の人生にとって重要な意味を持つ，自己変容のプロセスであることから，オートエスノグラフィーとして，主観的な意味に迫っていくことの意義がある。このような着想をもとに，この博士論文においてオートエスノグラフィーによって筆者自身の「転機」の文化理解を試みる。

なお，本研究は全 3 部から構成される。第 1 部(第 1 章，第 2 章)では，文献研究を行い，本研究で実施する研究の理論的・社会的背景を整理した。第 2 部(第 3 章から第 6 章)では，筆者の経験を対象とするオートエスノグラフィーの実践研究を行った。第 3 部(第 7 章)では，総合考察を行った。以下では，各章ごとの概要について示していく。

第 1 部　第 1 章　社会的背景：転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ[1]

「転機」は，キャリア論においても中心的な概念である。従来の転機研究では，個人と社会文化的問題が切り離されてきた。そこで第 1 章では，転機研究の展開をレビューし，現代のキャリア情勢や，文化心理学の理論的進展を踏まえた上で，転機研究の新しい視座を探ることを目的とした。まず，転機研究の主要な論点を，転機の「発達的アプローチ」と「偶発性アプローチ」に整理した。「発達的アプローチ」では，キャリア成熟や自己効力といった，転機に対する個人の心理的な “準備” に関わる重要な知見だけでなく，心理的危機とその変容のプロセスに関する知見が蓄積されてきた。一方，「偶発性アプローチ」は，社会環境が複雑かつ不確実なものに変化したことに伴い展開されてきたものであり，個人が偶発的な出来事を主体的に成長の機会にするための個人の態度が扱われてきた。

以上の整理を踏まえて，第 1 章では，転機研究の今後の展開として，**転機を社会と個人との相互作用において生じる“媒介”(物語や記号)としてみなす「個人と社会との相互作用」ア**

[1]　この章は，土元・サトウ (2019)を一部修正したものである。

プローチを提案した。転機の物語は単に個人の成長のための信念を示しているだけでなく，個人の信念と社会的規範との関係の中で作用し，成長という行為を可能にしたり，制約を与えたりする側面があると考えられる。また，転機は特定の瞬間であり重要な意味を持つというだけでなく，他の未来の行為をガイドする機能を持つ(つまり，過去の転機が現在の転機に影響することがある)。このような転機の意味の，人生を通した移行過程に焦点を当てることが重要である。従来のアプローチに基づく転機研究では，転機が未来の行為に対して及ぼす影響については十分に扱われてこなかった。「個人と社会との相互作用」アプローチによって，未来の転機が，過去の転機との関係や，社会的関係の中で生み出され変容していく様相を理解することが可能になる。

第 1 部　第 2 章　理論的背景：オートエスノグラフィーの方法論と文化心理学

本研究で用いた**オートエスノグラフィーは，研究者が有している文化**(own culture)**を記述的に探究する学問領域・研究アプローチを指す。**オートエスノグラフィーの対象は狭い意味での「研究者自身の経験」に限定されるものではなく，「研究者を含むシステムの経験」(つまり，他者を含む)を指す。したがって，オートエスノグラフィーにとって重要な点は，研究者が有している(own)文化――それは個人が有する文化だけでなく，他者と共有する文化もある――を理解することであり，その理解のために自ら動く(auto)ことであると考えられる。

オートエスノグラフィーは，1970 年代後半に文化人類学や社会学の領域で提唱され，2000 年以降，様々な方法論が花開いてきた(図 1)。2020 年には専門雑誌『Journal of Autoethnography』が発刊されるなど，社会科学の領域で大きな注目を集めている(図 1)。

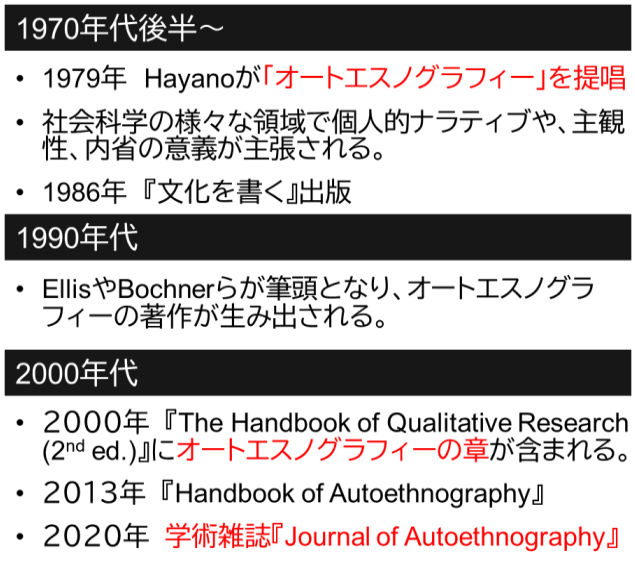


図 1　オートエスノグラフィーの歴史

一般的に，心理学は自然科学を志向し，その研究対象を客体化する傾向が強いものの，歴史的に振り返るなら，一人称的(主観的)な経験を理解するための方法は試みられてきた。しかしながら，心理学の視点からのオートエスノグラフィー実践や，その方法論に関する体系的整理・議論はほとんどなされてこなかった。また，現在オートエスノグラフィーは，「喚起的」か「分析的」かという，スペクトラムとして捉えられているが(図 2)，2000 年代以後に現れた様々な志向のオートエスノグラフィーを，この 1 次元で捉えることには限界がある。

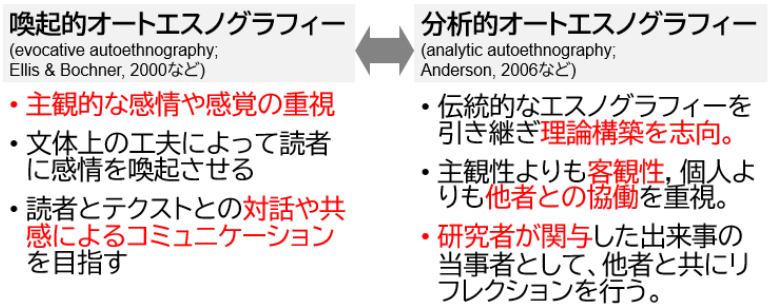


図 2　オートエスノグラフィーの主流の方法論

そこで第 2 章では，オートエスノグラフィーの方法論的志向の特徴を整理すること，および文化心理学とオートエスノグラフィーとの接点を探ることの 2 つを目的として，先行研究をレビューし理論的検討を行った。結果的に，オートエスノグラフィーの方法論を整理する枠組みとして「研究関心」(個人－文化)と「視点」(主観的－相互主観的)という二次元を設定し，各象限を「自叙伝的」「相互行為的」「エスノグラフィー的」「熟慮的」志向と設定した(図 3)。

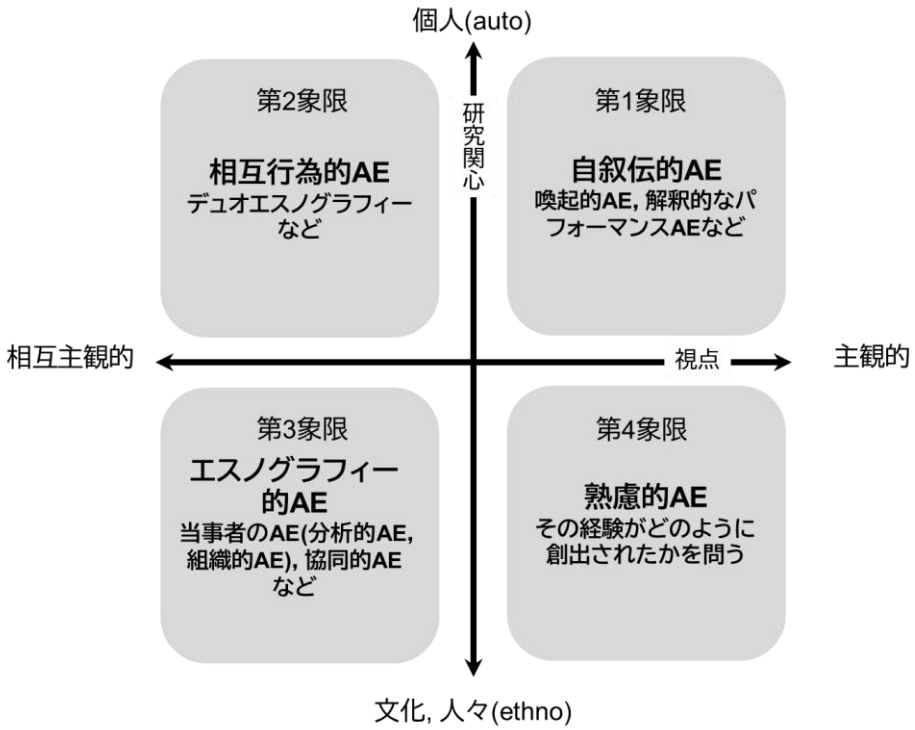


図 3 オートエスノグラフィーの各方法論における研究関心(縦軸)と視点(横軸)
(注:AE＝オートエスノグラフィーを表す。)

ここで熟慮的オートエスノグラフィーとは，個人的経験の記述に留まらず、ある経験がどのように創出されたか(資源やきっかけ，プロセス，意味，アイデンティティ等)を問うことで個別の経験の普遍化や一般化を目指す志向をいう。相互行為的オートエスノグラフィーとは，研究者が他者とともに特定の経験を探究し、その研究プロセスにおける対話をもとに、経験を理解しようとする志向をいう。その上で，「相互行為的」志向における，研究者の視点の相対化による心理的現象を組織化する過程の理解と，「熟慮的」志向における経験の創出過程における文脈の精緻な記述が文化心理学との接点であり，これらの志向における方法論的課題であることを指摘した。

第 2 部　第 3 章　オートエスノグラフィーの構成

第 1 部の結果から，研究者が持つ独自の観点を分析的に深めたり，他者の経験にも転用可能なものとしていくためには，単一の視点だけでは限界があると考えた。本研究では，「視角の体系的トライアンギュレーション」(Flick, 1992; Flick, 2017/2007)を参考に，複数の理論的・方法論的の視角からオートエスノグラフィーを記述する方略をとった(表 1)。

表 1　筆者が「有する文化」の分析のための視角

	研究1	研究2	研究3
理論・方法論	文化心理学	ナラティブ論	体験過程理論
方法	Auto-TEM，対話的自己理論	支援者インタビュー	TAEステップ，メタファー

研究 1(第 4 章)では，筆者のキャリア選択のプロセス及び，それをガイドした社会や文化，他者(すなわち，具体的なキャリア支援経験)に焦点を当てる。そのために，文化心理学の方法である複線径路等至性モデリングによるオートエスノグラフィー(Auto-TEM)，対話的自己論を用いる。筆者の転機を含んだキャリア選択はどのような過程をたどり，そこにはどのような社会的・文化的なガイドが見られたのかについて明らかにしていく。

研究 2(第 5 章)では，筆者の転機にとって重要な他者であった A 先生に，日常的なキャリア支援実践と，筆者の修士課程時における支援について「支援者インタビュー」を行う。そこで生成される語りから，大学教員の日常的なキャリア支援に対してどのような示唆が得られるかについて検討する。

研究 3(第 6 章)では，TAE ステップおよびメタファーを用いる。筆者の経験した転機に関する主観的な意味感覚(フェルトセンス)を出発点として，転機を促すキャリア支援について検討する。また，どのようなキャリア支援が転機を促すと考えられるのか，その主観的理論(「よいキャリア支援」理論)を生成する。

第 2 部　第 4 章(研究 1)　教員志望学生のキャリア選択過程 ──Auto-TEM を用いた人生径路の探究

第 4 章では，キャリアの分岐点において個人がどのようにキャリア選択を行ったか，人生全体の文脈の中でその選択はどのような意味を持つかを明らかにするために，「教師になる」というキャリア選択の過程を題材として，その記述的理解を試みた。そのために，オートエスノグラフィーのアプローチを用いた複線径路等至性モデリング(Auto-TEM)と対話的自己理論による分析を行った。Auto-TEM による分析を通して，大学院生があるキャリア相談における転機において「教師になる」意味を問い直し，「大学教員・研究者として学生の学びをデザインしながら学問を探求したい」という目標(等至点)が見出される過程を一つのモデルとして提示した。

本研究から得られたキャリア選択支援への示唆として，学生が「点的目標」ではなく「域的目標」を目指すことで，レジリエンスを高めることに繋がるという点を指摘した。また，本研究の限界およびキャリア選択への示唆として，キャリア支援においては現実に人が歩んでいる径路だけでなく，その径路に影響を及ぼす「影の径路」についても探究していくことが必要であることを指摘した。最後に，Auto-TEM では，個人の人生径路や，それに関わった社会的諸力を可視化し分析するための概念ツールをガイドとして用いることで，「亀の目」(人生径路を歩む主体の一人称的視点)と「鳥の目」(人生全体のプロセスに関与した集合的文化)の双方の視点から，個人の人生径路と社会との関係とを見ていくことが可能であるという点で，キャリア研究・キャリア教育の方法として意義があることを指摘した(図 4)。

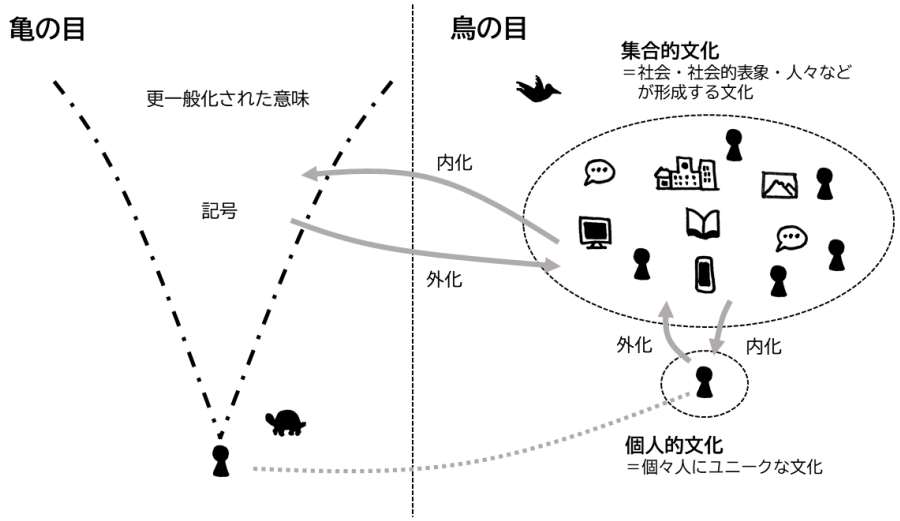


図 4　「鳥の目」と「亀の目」(ジトゥン(2015)をもとに，T. Zittoun 氏の助言を得て作成)

第2部　第5章(研究2)　大学教員による日常的なキャリア支援 ―「支援者インタビュー」による検討

第 5 章では，大学教員による日常的なキャリア支援がどのように行われているのか，どのような支援が学生のキャリア発達を促すために有効かについて検討することを目的とした「支援者インタビュー」による研究を行った。具体的には，筆者が修士時代の指導教員であった大学教員(A 先生)のキャリア支援の枠組みを理解することを目的とした。本研究では，まず A 先生が自身のキャリア支援実践をどのように自己認知しているのかという「実践モデル」を A 先生と筆者の共同で構築した。そのモデルから，A 先生は，学生にとっての他者や社会に対する〈やりたいこと〉を，学生と共に構築するための支援を行っていることが明らかになった。

「やりたいこと」という語はキャリア研究の文脈において多用されてきた。一方，A 先生は「自分のためじゃなくて，社会のためとか人のため」の〈やりたいこと〉を，学生が〈自分で動く〉過程で見出すことが重要であると語っていた。本研究では，こうした A 先生の考え方をもとに，従来のキャリア研究と A 先生の〈やりたいこと〉の差異について検討した。その結果，これまでの「やりたいこと」の議論を，(1)「能動的」か，「受動的」か，(2)「自己関心駆動型」か「社会関心駆動型」かによって区分できた(図 5)。ただし，図 5 は，学生の自己理解としての区分ではなく，大学生，大学院生を指導する大学教員の視点から見た「やりたいこと」の区分である(つまり，「教員-学生」の関係性の中で学生から語られたり，表現される「やりたいこと」)。この区分を用いれば，学生が能動的に「やりたいこと」を見いだしたとしても，それが自己志向的で社会に結び付けられていない問題 (「やりたいこと志向」，フリーター問題など，第 2 象限)や，就職活動のような社会からの方向付けによって，受動的に「やりたいこと」を作り出すことになり，自己のアイデンティティと乖離している問題を整理できる(第 4 象限)。

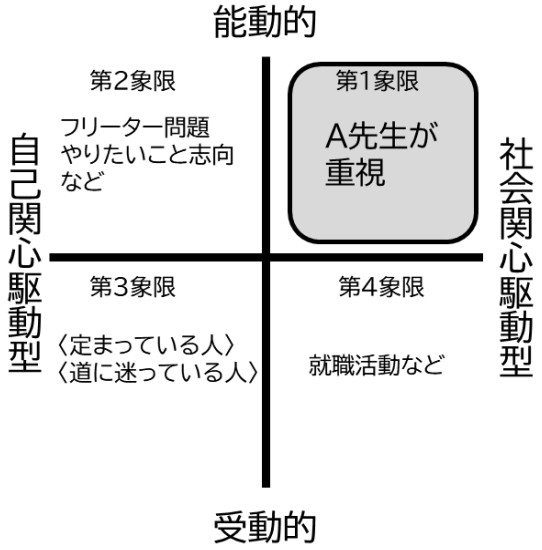


図 5　大学教員の視点からみた学生のやりたいこと」の区分

最後に，「支援者インタビュー」の利点として，支援者の語りを身体的に理解しやすいこと，インタビューの実践自体が，インタビューでの対話や研究を促進する「促進的記号」になること，一方で改善すべき点(欠点)として，研究者の恣意的な解釈が不可避的に含まれていること，インタビューの文脈を捨象してしまうことを指摘した。

第 2 部　第 6 章(研究 3)　成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚──TAE ステップを用いた理論構築[2]

第 6 章では，筆者にとっての「成長の瞬間」を生み出した「よいキャリア支援」の意味感覚がどのようなものか，明らかにすることを目的とした。また，そのような成長の機会を生み出すことが可能な支援のあり方について考察した。「よいキャリア支援」理論を生成するための基本的な分析方法としては，TAE ステップを用いた。さらに，読み手が理論を直観的に理解できるように，その理論をメタファーによって表現・記述した。

結果として，「よいキャリアについての自らの信念」という原初的テーマから，次の「よいキャリア支援」理論を導いた。

「よいキャリア支援」理論

①夢の受け止めは誠実な他者の夢への向き合い方である
②誠実に他者の夢と向き合うことで，自分と他者の夢の間に繋がりができる
③繋がりができることで，お互いに夢への自覚を持つことができる
④夢への自覚を持つことが人々の成長にとって欠かせない

この理論は，被支援者が「夢を自覚」すること，他者との「夢の繋がり」をつくること，そのために，支援者・被支援者ともに「夢を受け止める」ことが重要であるということを示している。ただし，この理論は，筆者にとっての「主観的」な言葉の結びつきを示しており，他者にとって直感的・身体的に理解できるものではない(例えば，「夢」という語と「自覚」という語の結びつきは，主観的である)。そこで，この理論を他者からの理解に開かれたものにするために，「夢に誠実に向き合い(夢への自覚)，他者と夢の繋がりをつくる」観点を，「卓球ラリー・メタファー」として表現した(図 6)。

[2]　この章は，土元・小田・サトウ(2020)を一部修正したものである。

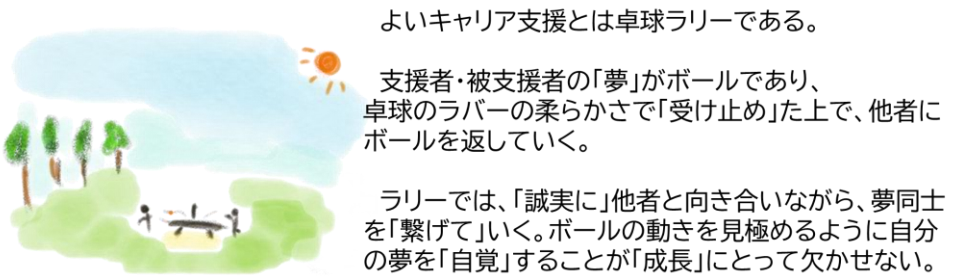


図 6　卓球ラリー・メタファーによる理論拡張

卓球ラリー・メタファーにおいては，偶発的かつ複雑なキャリア環境にありながら，個人が主体的にキャリアを方向づける様相を描けるだけでなく，ナラティブ論に基づくキャリア支援における「解釈」「対話的関係」「主観的時間」といった重要な側面を記述することができると考えられる。意味感覚の言語化は，個々人に暗在するユニークな身体知を，他者と共有し「交差」(Gendlin, 2004)[3]するための方法として意義があることが明らかになった。

第 3 部　第 7 章　総合考察

第 3 部　第 7 章(総合考察)では，以上の知見を踏まえ，総合考察を行った。

「転機のオートエスノグラフィー研究」の展望

「転機」は，これまで社会学のテーマとして扱われてきた。社会学の転機研究は，量的調査が主流であり，「人々」の転機がその研究の対象となっていた。しかし，これらの研究では「多くの人にとって共通の転機における意味や役割」という限定的な側面を扱ってきた。ただし，転機を理解する上では，転機に対する主観的意味に肉迫していくことも必要である。「今，ここ」を生きている個人がどのようにして，ある出来事を転機とみなすようになるのか，また，その転機にはどのような意味づけがなされているのかを理解することが重要である。

社会への還元や具体的な問題解決が要求されることの多い現代の社会科学の立場からは，オートエスノグラフィーのように自分を研究することの意義を正当化するのは，障がいや

[3] ここで，交差とは，ある体験から見出した形式を取り出し，別の体験にあてはめて感じてみることである(得丸, 2010)。Gendlin (2004/2004)によれば，自分自身の特別な用語を作りだしそれを保つことができれば，他の人の用語とそれらを「交差」させることができ，それによって，自らの用語の持つ力と暗黙の複雑さがいっそう豊かになるという。

病いの当事者研究などの部類に入らない限りは難しいとされている(井本, 2013)。しかし，研究の意義は社会的カテゴリによってのみ正当化され得るものではない。なぜなら，個人にとって主観的に重要な意味があり，その人の人生を劇的に変容させる出来事を研究することは，心理学にとって基本的かつ本質的な問いだからである。この点が，転機研究とオートエスノグラフィーとの接合点となる。

それだけでなく，オートエスノグラフィーの実践は，その人自身のライフを新しい視点から見つめ直すことに繋がる。オートエスノグラフィーは，「特定の個人を対象としたアクション・リサーチ」であり，その人の癒やしや自己理解としての意味を持つ実践である(Ellis & Bochner, 2006/2000)。この意味で，オートエスノグラフィーの物語，特に転機を題材とした物語は，その人の人生を進めていくために重要な「生成的物語，つまりライフ(生，人生)を変化させていく物語」(やまだ, 2000)となる。オートエスノグラフィーは，これまでの経験を時には他者とともに意味づけ，人生のナラティブにしていく実践である。その実践自体が，その人の人生を変える「転機」となり得るといえる。

転機を促すキャリア支援への示唆

ここまでの研究成果を踏まえ，「転機を促すキャリア支援」のモデルを提案した。転機において「能動的」かつ「社会関心駆動」の目標を生み出すことが重要であることが明らかになり，研究 1 から 3 までの成果が，そのような目標生成の転機を促す具体的支援として位置づけられた(図 7)。

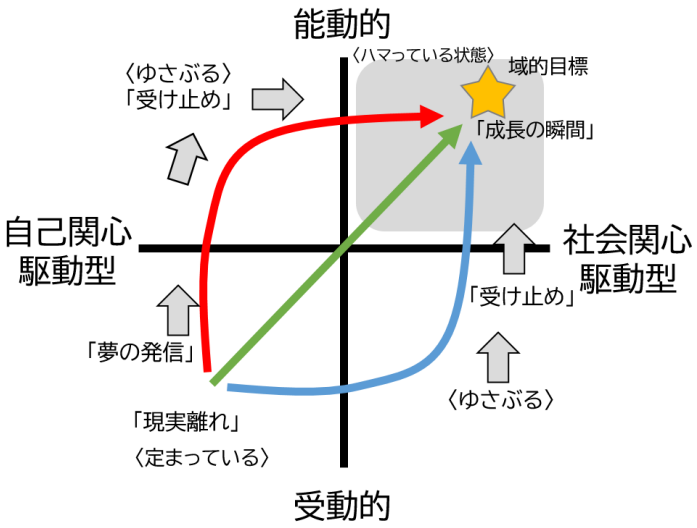


図 7　「転機を促すキャリア支援」のモデル

これらの支援は，TEM でいう社会的方向付け(SD)や社会的助勢(SG)に相当する。学生が分岐点(転機)において，「能動的・社会関心駆動型」のキャリア選択をすることは容易では

ない。ともすれば，「周囲の友人が公務員になりたいと言っているから，自分も公務員を目指す」ような「受動的・社会関心駆動型」の目標や，「自分がやりたいことにとにかく挑戦する」ような「能動的・自己関心駆動型」の目標に留まってしまう学生もいるだろう。そうした目標を，学生の成長に結びつけるためには，支援者からのガイドが必要である。本研究で示したガイドは，その一例だといえる。

オートエスノグラフィー研究への示唆――他者に開かれた自己理解

この博士論文でのオートエスノグラフィー実践の通奏低音をなす考え方は，**「他者(社会)に開かれた自己理解」**としてのオートエスノグラフィー実践である。オートエスノグラフィーは，「自己陶酔的」「ナルシスト的」な記述になる可能性があると指摘される(Anderson, 2006; 沖潮(原田), 2013)が，そのような記述は，本研究が目指してきたオートエスノグラフィーではない。ここでは，本研究からオートエスノグラフィー研究への示唆を述べる。

そのために，Valsiner (2016)による「I(主体としての自己)-Me(客体としての自己)-世界」の関係を示すスキームを援用する(図 8)。Valsiner (2016)は，ここでの I と Me(内的ループ)，Me と世界との記号の調整(mediation)のプロセスが「文化」であるという。ここで重要なのは，**自己は「客体としての私 Me」を媒介として「世界とその中にいる他者」と関係している**という点である。換言すれば，内的自己(I)の持つ記号は，外的自己(Me)との調整関係にあるが，社会とは関係しづらい(Valsiner, 2016)。

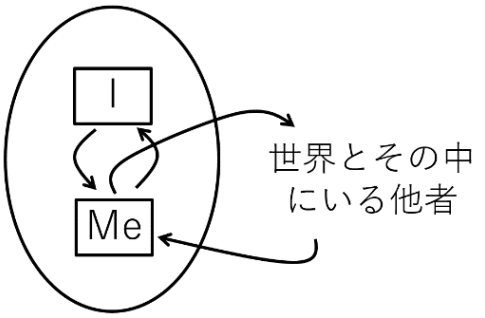


図 8　Valsiner の文化心理学における「I-Me-世界」の関係スキーム(Valsiner, 2016)

この図からは，I にとっての記号だけで自分の経験を伝えても，他者にはその記号が理解できないということが示唆される。例えば，筆者は研究 3 で「夢の自覚」ということばを用いたが，こうした「主観的なことば」のみで他者に自分の主観的な経験を伝えようとしても，十分に理解されない(その他者が記号として理解できない)場合がある。経験の主体 I の記号のみでの語りは，社会との関係性を欠いたものであり，「自己中心的」なものである。

もちろん，I の持つ独特の感覚を理解することは重要であるし， I と Me を往還する中で得られる気づきもある。ただし，本研究では I の持つ記号のみを「ありのまま」伝えるのではなく，Me のことばに「**翻訳**」(他者に開かれ，これまでの主観的なことばとは異なること

ばで表現)する方法を考えてきた。オートエスノグラフィーが目指す「自己理解とともに，他者理解が生まれてくる」(Ellis & Bochner, 2006/2000, p.135)側面は，I としての自己理解だけでなく，Me と世界(他者)との関係を含んだ自己理解だと考えられるからである。

オートエスノグラフィーでは，主観的なことばを社会へと関係づけていく必要がある。そうでなければ，単なる自伝(autobiography)である。つまり，オートエスノグラフィーでは，他者(社会)に自己の経験を伝えるためには，社会と関係している Me のことば(つまり，「社会的なことば」)が必要になる。言い換えれば，Me のことばで語るということは，ある「社会」と関係する Me のポジション(I-ポジション)から自分の経験を語るということでもある(対話的自己理論(Hermans & Kempen, 2006/1993)を参照)。

それでは，I としての自己が持つ独特の感覚や意味を，いかに Me としてのことばに「翻訳」できるだろうか。そのためには，自己(I)のことばを客体化・相対化しなければならない。そこで，質的研究の諸方法が有用である。近年，様々な質的研究法が登場し，そのような I としての意味を公共化するための方法が複線化している。ただし，それぞれの方法が，どのような過程で自己の経験を組織化でき，どのように他者理解を深めていけるかについては，十分に明らかになっていない。これは，**自己の経験を他者と結びつけ，豊かにしていくためのキャリア教育／研究**としてオートエスノグラフィーを活用していく際に重要な課題であり，今後の研究が求められる。

引用文献

Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, **35**(4), 373–395.

Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 733–768). SAGE. (エリス C.・ボクナー A. P. (2006). 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性――研究対象としての研究者(藤原顕, 訳). デンジン N. K.・リンカン Y. S. (編) 質的研究ハンドブック 第 3 巻 (平山満義, 監訳) (2nd ed., pp. 129–164). 北大路書房.).

Flick, U. (1992). Triangulation Revisited: Strategy of Validation or Alternative? *Journal for the Theory of Social Behavior*, **22**(2), 175–197.

Flick, U. (2007). *Managing Quality in Qualitative Research*. SAGE. (フリック U. (2017). 質的研究の「質」管理(上淵寿, 訳). 新曜社.).

Gendlin, E. T. (2004) Introduction to "Thinking At the Edge". *The Folio*, **19**, 1–8. (ジェンドリン E. T. (2004). 「TAE (辺縁で考える)」への序文(村里忠之・村川治彦, 訳). http://previous.focusing.org/jp/tae-intro.html

Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement.* San Diego: Academic Press. (ハーマンス H.・ケンペン H. (2006). 対話的自己――デカルト／ジェームズ／ミードを超えて (溝上慎一・水間玲子・森岡正芳, 訳). 新曜社.).

井本由紀. (2013). オートエスノグラフィー. 藤田結子・北村文 (編) ワードマップ 現代エスノグラフィー――新しいフィールドワークの理論と実践 (pp. 104–111). 新曜社.

木戸彩恵. (2019). 文化心理学の基本的射程. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 文化心理学――理論・各論・方法論 (pp. 3–13). ちとせプレス.

沖潮(原田)満里子. (2013). 対話的な自己エスノグラフィ――語り合いを通した新たな質的研究の試み. 質的心理学研究, 12, 157–175.

Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **16**(3), 282–298.

得丸さと子. (2010). ステップ式質的研究法――TAE の理論と応用. 海鳴社.

土元哲平・サトウタツヤ. (2019b). 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. キャリア教育研究, 37(2), 35–44.

土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 立命館大学大学院文学研究科 博士論文(未刊行).

土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚――TAE ステップを用いた理論構築. 質的心理学研究, 19, 46–67.

Valsiner, J. (2016). *An Invitation to Cultural Psychology*. SAGE.

やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味――ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編) 人生を物語る――生成のライフストーリー (pp. 1–38). ミネルヴァ書房.

ジトゥン T. (2015). 移行, イマジネーション, そして TEM(木戸彩恵, 訳). 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編――複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp. 97–100).

フランスのソーシャルワーク 第二回

フランスの児童福祉の特徴・価値とその背景

安發明子(在パリ ライター/通訳)

「日本とフランスの児童福祉は何が違うのか、フランスはどうして今の福祉に至ったのか」これは日本でフランスの話をすると必ず出る質問である。論文 1 つではとても書ききれない壮大な問いだが、毎度聞かれるので今回はいくつかの切り口から考察してみたい。全体像ではないので足りない切り口も分析も多く存在することを了承いただきたい。
フランスの児童福祉の現場でキーワードとして使われている価値「自己の開花(épanouissement)」「自己を築きあげる(se construire)」「心地よく過ごす(bien-être)」それに対する「不具合(mal-être)」「傷ついている(abîmé)」、これらの価値はどこから出てきたのか？「尊厳を守られていない暮らしをしている人がいたとしたらそれは国に責任がある(L'Etat a la résponsabilité contre la condition de vie indigne)」と言われるようになったのはいつからなのか？
「フランスの児童福祉の世界においてどのようにして価値が形成され共有されてきているのか」について考察したい。

問題提起

筆者は 1900 年代終わりに首都圏で中高生時代を過ごした。そのとき、とても優秀だった地元の同級生が家を出て車上生活をしていたり、中学時代から 18 歳までに三回も中絶を経験したり、アルコール中毒になったり、苦労を余儀なくされていることに衝撃を受けていた。2000 年に大学に入学してからは児童自立支援施設で学習ボランティアを始めたが、そこでは自分と歳の変わらない若者たちが大学に行くという選択肢もなく、仕事を始めては搾取されたり不当な扱いを受け、苦労していた。国内で十数か所の施設を訪問したが「私もここで育ちたかった！」と思えるようなところに当時は出会えなかった。家庭環境に恵まれなかったらその不運をリカバリーする福祉は十分なく、ハンデを負ったまま自己努力で将来を築くことが求められているように感じた。大学卒業後生活保護の窓口で働いたが「あの家庭を我々の血税で暮らさせるべきではない」と文句を言い

に来る区民も日常的にいた。

大学時代からスイスの児童福祉関連の施設に調査のため毎年訪れていたのだが、以下の 2 つが特に両国の大きな違いであると認識するようになった。

- 子どもが一個人として尊重されている
- 一般的に子どもの福祉に対する関心が共有され、実務に携わる人の間で価値観が共有されている

2011 年にフランスに移住してからもこの 2 つの認識は変わっていない。日本からの出張者に通訳として同行するとき、物乞いやホームレスに対して「働けよ」と吐き捨てる人や「仕事がないということですか？」と私に質問をする人がいる。その後十数年で日本の児童福祉は大きな変化があったが、それでもまだ社会的資源が人によって大きな差があることの認識や、問題が起きたときに動員できる資源の差があることの一般的な認識は日本では薄いと感じる。

日本の厚生労働省が出している指針を読むと理念としてはフランスとほぼ同じであるように思える。しかし、現場でのジレンマや疑問について話を聞くと子どもの権利や意思が尊重されていないという意見が多く出たり、理念と実際の取り組みの差があるようである。子どもの事例を聞いて憤りを覚えることが数々ある。政策決定から現場職員に至るまで価値に対する理解が十分共有されていないことが原因であるように思う。
フランスは地方分権で実施主体は民間団体が多いので場所による違いは大きく、私が主に調査してきたパリ市やセーヌ・サン・ドニ県がフランスの全てを表しているわけではない。それでも、不遇や不幸をリカバリーし幸せを築いていく若者たちに出会い、ここで育ちたかったと思える施設や機関に多く出会った。ケース会議に参加しても夢が描けることが多い。フランスではどうして現場職員の間でも一般においてもある程度価値が共有されているのか、マスコミの報道でさえ現場の声がよく反映されたものが多いのかを長年考えてきた。フランス人に聞いても「人権に対する意識が変わったから」「福祉国家だから」という回答で日本との違いを説明する論拠にはならない。

5 つのステップで分析を進めていく。

1. 子どもという存在と、子どもの意思の尊重
2. フランスにとっての子どもの存在—「国の子ども」(社会的養護の歴史より)
3. 福祉構造—「ミルフィーユ状の構造」と「届ける福祉」(ソーシャルワークの歴史より)
4. 価値の共有
5. 一般の認識や福祉の位置付け

1. 子どもという存在と、子どもの意思の尊重

ある児童福祉施設の職員が「子どもは守るべき花ではない、点火するべき火だ」と古代ギリシャの詩人アリストパネスの言葉を引用していたが、フランスの子どもと向き合う職員のスタンスを良く表している。子どもという存在がまずフランスと日本では大きく違う。

子どもは親の所有物ではない

子どもという存在自体に対する認識についてまず書きたい。
子どもはキリスト教が広まる前は大地の恵みで家族の亡くなった先祖の代わりとして与えられたと認識されていたとか、キリスト教の時代になってからは神と人間をつなぐものとされたなどの記述が歴史書にはあるが、特に現代の児童福祉の現場全般に色濃く感じられる影響として、1900 年代を生きた精神分析家フランソワーズ・ドルト(1908-1988)の思想が引き継がれていることが特徴であると感じる。実際には彼女が活躍する以前、1900 年代初頭からフランスの児童福祉分野で心理士や精神科医は大きな影響力があったが、彼女は特にラジオにも毎週出演し子育てに関する悩みに答え、その時間は商店はシャッターを閉め、タクシーはお客を乗せず業務を休止してラジオを聴くほど全ての親たちに人気があったそうだ。彼女は小児病院にて赤ちゃんたちに話しかけることで乳児死亡率を減らすことができることを証明し、子どもの意思を尊重すること、子どもは子どもに合った言葉で説明すれば理解できること、子どもは自分の人生に責任があり自分で決めて生きていくのが重要であることを説いた。「子どもには真実を話すこと。子どもは直感として真実を知っている。子どもは大人と全く同じ平等な存在である」としている。

筆者の観察によると、児童福祉の分野(産科、保健所、保育園、施設、児童相談所、学校等)で職員の間で共通認識として、子どもは親の所有物ではない、親は教育的役割を期待されている「養親」のようなもので、親は子どもの教育の第一のキーパーソンであり、その役割が果たせるよう専門家がサポートをしようというスタンスがある。

子どもを一個人として扱い、意思表示できる力を育てる

思想としては理解したつもりでいても、実際に筆者がフランスで出産した際、生まれた直後の新生児に「こんにちは、私は看護師の○○よ、お母さんは手術を受けて疲れているの。だからあなたもお昼寝して休むのよ」などと話しかけていることに驚いた。道で出会う人も母親にではなく赤ちゃんに直接話しかける。泣いていると「人生生きるに値するものだよ」と赤ちゃんはおじいさん言われたりする。3 ヶ月半から通い始めた保育園でも、大きい子どもがおもちゃを奪っていくと「嫌だったら嫌だと怒りなさい！」と先生はまだ首もすわっていない赤ちゃんに言うのだ。オムツを替えるときも「オムツを替えるから抱っこしてもいい？ズボンを脱ぐから少し寒いよ」など全て説明して了解を得ている。誰がいつ迎えに来るか、もうすぐで長期休暇になるから保育園に来なくなることなど、全て丁寧に説明していた。

子どもに携わる職業に就く人たちは子ども自身が主張できるようになることを重視する。小児精神科医のニコール・ゲドネーは乳児・幼児期にケアをしてくれる人との間の愛着関係である「アタッチメント」は生きるための道具であり、安心して成長できると「これは嫌だ」と言うことができるようになり、「自分を生かせる場所かどうか」も自分で判断できるようになるとしている(Guedeney, 2010)。つまり不具合を主張することができるのは信頼できる環境で育つからできるようになることで、自分を発揮していける場所かどうか自分で判断できることも重要な力であるとしている。「泣いていなかった」から困っていなかったのではなく、泣いても助けてもらえないことに適応するため泣かなくなることもある。だからこそ、子ども自身の意思を大人は理解し環境を整える役割があるとされている。

このように子どもを一個人として扱うという社会的な土台があるので、社会的養護の世界でも子どもの意思を尊重することは重要視されている。保護の理由は新生児であっても、適切な言葉で説明できる心理士などによって説明される。施設入所の 9 割は司法判断によるものだが赤ちゃんでも裁判には出席し、裁判官は赤ちゃんにも話しかけ説明する。保護された子どもはエデュケーター[1]に連れられて施設や里親選びに行き、見学をし面接を受けて子どもとエデュケーターで決める。5 歳以上の場合は入所の際「計画書(projet personnalisé)」に入所の目的など子どもの言葉で記入し子どももサインする。入所にあたっての子どもの希望、今後の予定など子どもの意向は記録に残される。入所時と約半年ごとに関係者全員の会議があるのだが、もちろんその場にも子どもは招かれる。

2007 年の法律[2]で「子どもについての全ての決定において、1.子どもにとっての利益、2.子どもが物質的、知的、社会的及び情緒的に必要とするもの、3.子どもの権利、が優先される」と再確認されている。

エデュケーターや警察の未成年保護班など専門職の役割は、どんなに小さくても子どもの意向を的確に読み取ることであり、その訓練を受けている。
特別養子縁組についても子どものための養親であって養親のための子どもではないと必ず出生後 2 ヶ月は専門性のあるスタッフの元で育ち、子どもの特性やニーズに合った養親が選定される。子どもの意思を理解し尊重できるようコーディネートすることがプロフェッショナルであると考えられている。
アフリカや海外領土の家族の中には家父長制が色濃く、子どもは家族の役に立たなければならないと子どもについての考え方が違うのを現場で見ることがある。5 人兄弟の家庭で長女に下の子どもの世話や、家事をさせているのに対し裁判所は長女を「現代の奴隷(esclavage moderne)」にあたるとして保護する命令を下した。フランスの子どもの存在についての考え方はまず福祉を理解するうえで押さえるべき点である。

[1]国家資格。3 年間専門学校で学ぶ。理論 1450 時間、研修 2100 時間、4 個所の研修先から合格をもらうことが求められる。児童保護、障害、アルコール依存や路上生活者の支援を学んでいる。社会的教育者として、不適応を起こしている子どもやティーンエイジャーの教育を専門とする。身体的精神的困難を抱えている成人の自立支援もおこなう。

[2] https://www.legifrance.gouv.fr/jorf/id/JORFTEXT000000823100?r=bQfsrTeKyn
« L'intérêt de l'enfant, la prise en compte de ses besoins fondamentaux, physiques, intellectuels, sociaux et affectifs ainsi que le respect de ses droits doivent guider toutes décisions le concernant ».

ただ、補足したいのは、大人であっても個への尊重は日本よりも意味の重いものであるように感じる。親子が同じ世帯に住んでいても、子どもが成人し就労していない場合は両親が経済的に豊かであったとしても子どもだけ生活保護を受けることができる。生活保護受給家庭で家賃の滞納が続いていることがわかっていてもそこから家賃の天引きや直接納付はしない。子どもがいる場合立ち退きになって子どもの環境が保たれないことを防ぐため裁判所で家庭の金銭管理のサポートを得る(AGBF Aide à la Gestion du Budget Familiale)決定を下すことはあっても、あくまでも本人の生き方を尊重していて先回りしたり代わりに何かをすることはしない。

親であることの支援

親は子どもの教育の第一のキーパーソンであり、その役割が果たせるよう専門家がサポートをするという現代的なスタンスは「親であることの支援」(soutien à la parentalité, renforcer la compétence parentale)と言われ、その担当部署もある。連帯・保健省内社会的団結部「家族と親であることデスク」(Ministère des solidarités et de la santé, Direction Générale de la cohesion sociale, Bureau des familles et de la parentalité)である。
社会的養護でも「在宅措置(PAD placement à domicile)」がおこなわれるようになってきている。司法決定で自宅に措置し、そこにエデュケーターが通うという仕組みである。
連帯・保健省のレポートにおいても、「親であることの支援」は優先的に予算を割くべき分野であり、93%の親が「0 歳から 3 歳の子どもを育てるのが難しいと感じるときがある」、半数以上が「親であることが難しいと感じている」と発表している(2020)。

しかし、親であることが簡単ではないという共通認識は最近できたものではない。歴史学者ロマネの論文によると 2 世紀前半の医者も「女性は妻であることと乳児の母親の両方の役割を果たすことはできない」としていると指摘する。フランスでは長い間新生児は乳母のもとに預けられていた歴史がある。キリスト教では授乳期の性交が認められていないことも父親が乳母に出すことを後押し

した(Romanet, 2013)。
どのような社会階級においても、乳児を乳母に預けるということが 19 世紀まで広くおこなわれ、母親が子どもを育てることは 20 世紀になるまで一般的ではなかった。母親が授乳していては生活のための仕事を継続することができないのと、貴族階級にとっては 1859 年の文献で説明されているところでは「授乳は位の高い女性にとってあまりに動物的すぎる役目である」ことが理由とされ、貴族階級にブルジョワ階級も従っていた。14 世紀のパリでは既に乳母への報酬額も定められていた。17 世紀から 18 世紀にかけては特に幅広い習慣であり、1780 年にパリで生まれた 2 万 1000 人の子どものうち実親に育てられたのは 1000 人のみという記録も残っている。授乳しないことで女性は 8 人以上出産したり、毎年出産する女性もいた。しかし、1865 年にパリ市で生まれ乳母に預けられた子どもの 71%が 1 歳を迎える前に死亡しているという調査結果が発表され、1874 年以降乳母に預けられている 2 歳未満の子どもは公的機関が生命と健康を守るため監視するという決定がなされた(Romanet, 2013)。
母親自身が仕事しながら子どもを育てられるよう、そして国家が子どもの発育をフォローできるよう保育園が作られ始めたのは 1840 年以降のことである。3 歳以降を対象とした幼稚学校に至っては 20 世紀後半を待たなければならない。

歴史的文脈の中で古くから妻であること、仕事をすること、そして乳児を育てることは両立し難いという認識があった。そして筆者が家族手当基金[3]へ聞き取りした内容によると、特に 70 年代以降、女性の就労や家族のスタイルの変化に伴い、複数の大人で子どもを育てるという概念(pluriparentalité)がうたわれるようになり、児童手当などの金銭的支援だけでなくサービスの充実がはかられ、国が子どもの健康を守る役割を担うことが任務とされてきたとのことである。

[3] 家族手当基金 CAF Caisse Allocations Familiales. 児童手当や生活保護を含む経済支援と保育園など家族のサポートをするサービスを実施する機関。

2. フランスにとっての子どもの存在－「国の子ども」

土台として以下の 3 点がある。

- お金がなくても子どもを産み育てることができる
- お金がなくても子どもが望む教育を受けさせることができる
- 予測しなかった事態が起きてもそれが子どもの育ちに影響を与えないで済む体制がある

お金がなくても子どもを産み育てることができるというのは、妊娠期の検査が無料、出産が無料、それ以外の生活面においても経済状況が悪い場合は各種サポートがあるということである[4]。

お金がなくても教育を受けられるというのは、3 ヶ月半からの保育はライフスタイルに合ったものが収入の 1 割で受けられる、3 歳からは義務教育で無料、大学や大学院も収入のある家庭で年間学費 3 万円、専門学校は無料のものが幅広くあるということだ。勉強机代や、家族旅行代、学習障害などある際の特別なサポートなども申請すれば費用が出る。無料でできる習い事や週末のお出かけ、長期休暇中のキャンプへの参加など提供されているアクティビティの選択肢も多い。家庭の経済状況に子どもの進学は影響を受けないことが目指されており、実際手厚い手段が提供されている。

更に補足すると、「子どもの貧困」という問題提起のされ方はしない。土台に子どもにとって貧困がハンデにならないようにという仕組みを作っているからだ。貧困については、親の支援とケアをおこなう。

予測しなかった事態が起きても子どもの育ちに影響を与えないというのは、無料匿名で出産でき養子に出す方法があったり、親が入院したり逮捕されたときに里親に預けたり全寮制の学校に入る方法、親子ゲンカしたとき子どもが安心して家出できるシェルターなど、不測の事態に備えた仕組みがあることを意味している。

「福祉国家だから」という言葉がよく現場では使われるが、どの家庭で育っても子ども一人一人が十分な資源の中育っていくことができ、学問や才能を伸ばしていけるような社会にする、というのが国の役割と認識されている。それは、日本で家族の自助努力、家族の責任とされ福祉は足りないものを補足していくよ

[4] パリ市においては住宅事情の悪化にともない 1 年間仮の住宅を転々とせざるを得ないという事態も起きつつある。

うなイメージであるのと大きな前提の違いがある。
旅行や文化活動などと言うと日本の生活保護の「健康で文化的な最低限度の生活」のイメージから「旅行もいいのですか？」と聞かれることがある。フランスは 1998 年の法律で具体的に示している[5]「就労、職業訓練、住居、健康、教育、文化、社会保障、過剰債務、市民権、スポーツ、バカンス、レジャー、交通」を国民皆が享受することができるとしている。かつ、その実施状況について政府は 2 年に一度評価をおこない監視を続けている。

「国の子ども」

「国の子ども」という概念は今でも児童福祉の世界に根付いている。
フランスでは宗教的に婚外子や未婚の母が認められなかった背景からこのような境遇の子どもがいることが早くから認識されており、それを度重なる近隣国との戦争の中で国力として利用できるよう「国の子ども」として救済の制度を整えてきた歴史がある。ただ子どもを守ろうということではなく、19 世紀末まで子どもは「労働力」という意味で守る必要があった。

「国の子ども」として国にとって力となるように育てた歴史とその経験から手厚くなったケアについて、社会的養護を中心に発達心理学者ギデッティらによる著作をもとに簡潔に歴史を辿る(Guidetti, 2004)。

(社会的養護の子どもを国の力となるよう引き受ける)
中世では教会が遺棄された子どもを預かっていて、労働力として貰い受ける人がいた。乳児死亡率を下げる目的で、小児科分野の発展のための医療の被験者としても利用された。18 世紀には国家が人口増加を目指す段階になり、健康に関する政策がとられるようになった。この段階になって生存率だけでなく、子どもをとりまく環境の改善にも関心が持たれるようになった。
1789 年のフランス革命によって子どもは「国の子ども(enfant de la patrie)」として一個の権利のある存在と認められるようになり、1793 年の法律で遺棄され

[5]https://www.cnle.gouv.fr/loi-d-orientation-du-29-juillet.html
Le champ couvert par la loi d'orientation inclut l'emploi et la formation, le logement, la santé, l'éducation et la culture, la protection sociale, le surendettement, la citoyenneté, le sport, les vacances, les loisirs ou encore les transports.

た子どもも「全ての市民と同じように助けられる権利がある」と明記される。同年の取り決めでは「国は遺棄された子どもの身体的精神的教育を保障しなければならない」としている。1811 年の決定により国が成人まで扶助し確認する「未成年の社会的支援」(assistance publique aux mineurs)がおこなわれる。親権者のいない子どもたちは「enfant de l'assistance」と呼ばれた。ナポレオン政権下においてもこれらの子どもたちは国に属するものとされ、国に仕えることが求められた。この流れは 20 世紀初頭まで続く。ギデッティらも「子どもたちは国にとって有益でなければならず、農民として、兵士として、または遠い植民地での開拓民として生きた」と記している。
当時のこれら子どもたちを社会はどのように見ていたのだろうか。社会学者ドゥ・リュカ・バリュースは「子どもが放浪していることは社会的秩序が保たれていないことの象徴、もしくは荒廃の象徴とされた」「ブルジョワ社会は心配な子どもたちを国のプロジェクトに組み込みフランスの国力にしようとする一方で、国にとっての負債としての考え方も持っていた」と書いている(De Luca Barruse, 2012)。

(親権の絶対性を否定、子ども個人の権利を守る)
児童保護の法律は 1889 年と 1898 年に制定される。最初は貧困家庭や子どもの人数が多い家庭、婚外子が施設に措置されるが、1880 年代になると不当な扱い(maltraitance)が社会的な関心を集めるようになる。これまで対象は婚外子など放棄された子どもが主だったのが、道徳的に放置されている(moralement abandonné)の子どもも保護するべきなのではないかということも注目を引くようになる。この風潮は『レ・ミゼラブル』(1890)で有名なヴィクトール・ユーゴー、エミール・ゾラ、『家なき子』(1878)のエクトール・マロ、ジュル・ルナールなど、不遇な環境を生きる子どもに注目した作品が輩出されたことからも時代状況をうかがい知ることができる。社会の子どもたちへの見方が変わる。
19 世紀には児童労働している 5 歳以下の子どもの死亡率が 40%であることを受け、8 歳未満の児童労働を制限する法律が 1841 年にでき、12 歳未満も 1874 年に禁止された(Guidetti, 2004)。
1889 年の法律で初めて親が養育することができない場合や、非行や不当な扱いがある際に子どもを分離措置すること、場合によっては親から親権を剥奪することができると定められた。1935 年の法律で親による体罰が禁止され、教育支

援の実施が民間団体に委託されるようになった。親権が絶対的ではなくなり、子ども個人の権利が認められたのである。
それまで「非行」は閉鎖的な施設に入れる扱いだったが、児童保護の扱いに変わる。それは、それまで、非行傾向(罰)、不幸な境遇(保護)、普通ではない(精神病院)と分けられていたことが、実は同じ境遇から来る子どもたちであることがわかり、家庭から支援しようという方針転換がおこなわれたのである。
つまり、必要なのは罰ではなく再教育であり、そのために親の教育能力や環境を確認し方針を決めるための調査が家庭内まで及ぶようになる。家庭内での再教育が可能と判断されると職員が家庭に出入りして教育支援をおこなうようになる。閉鎖的な施設での教育で失敗してきた反省からの方針転換であった。
ただ、歴史学者ロレによると当時はまだ予防的な支援や家族のサポートは十分ではなく、できれば受けたくないと思われているマイナスのイメージを伴うものであったとしている(Rollet, 2001)。

(民間団体の力を生かすことと家庭への支援の強化)
1901 年のアソシエーションについての法律[6]を経て、それまで支援活動をしてきたアソシエーション(この論文では民間団体と訳す)が慈善活動ではなく、社会活動としての地位を得て、ますます活躍することとなる。これら民間団体に国は財政支援を強化し、子どもたちを取り巻く福祉が手厚くなる。
その後1928年に健康保険、1945年に妊産婦幼児保健(PMI Protection Maternelle et Infantile)ができ、より専門家が親子と密接に関わり親のサポートをするようになった。

(予防と家庭への教育的サポート)
1945 年の非行に関する法律は現在のフランスの児童保護分野に大きな影響を残している。「予防」を支援の要としているからである。健康についても、非行も、家族の機能不全も、予防を目的とした支援を早期に開始するという姿勢がとられるようになった。裁判所も非行については教育的措置(mesure educative)をおこない、フォローを確実にすることを目指すようになった。社会的養護分野では家にいたままエデュケーターがサポートする在宅教育支援(AEMO, AED action educative en milieu ouvert)がおこなわれるようになった。

[6] Loi du 1er juillet 1901 relative au contrat d'association
https://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do?cidTexte=LEGITEXT000006069570

予防の取り組みとして「路上エデュケーター」が誕生するのもこの時期である。最初は裁判官や精神科医が仕事帰りにメトロの出口にたまっていた若者たちを連れて帰りシャワーを浴びご飯を食べさせ地域内の仕事を紹介することから始まった。その後急速に成長し「特別予防(prevention spécialisée)」として全国に広がる。「自由の中でこそ若者は自由というものについてより良く学ぶことができる」として施設や精神病院や刑務所に送られる子どもたちを減らすことを目的とした。ここでも予防と「届ける」姿勢が強調される。1959 年から健康省の通達で周知され、1972 年に正式に法律で制度として認められ各県から予算が出るようになった。

1946 年と 1948 年に子どもの権利に関する法律が見直されるが、ロレは「国は質の高い市民が必要になり、子どもたちは貴重な富であると気づいた」ことによる見直しであると書いている(Rollet, 2013)。

児童相談所(L'aide sociale à l'enfance)ができたのは 1953 年である。1958 年と 1959 年の法律[7]によって未成年の加害と被害(保護)両方を扱う「子どものための裁判官(Juege des enfants)」が創設された。

70 年代には脱施設の大きな流れの中で、保護するだけでなく質を求める動きも強化され(bientraitance, bienveillance)、どのように子どもたちがサポートされているかを重視するようになる。里親から施設という流れが、今度は施設の小規模化と在宅教育支援の方向へと舵を切ることとなる。

1986 年の地方分権の強化(décentralisation)についての法律で児童保護は国ではなく県議会(Conseil general)に託され、各県の現状に合った取り組みをすることが求められるようになる。1989 年の法律で滞在許可のない家族についてのサポートも追加された。

その方法や質は経験の中で改善を重ねてきている。保育園から心理士を配置する、社会的養護の子どもには心理士が細かくフォローするなど心理面は手厚い。フランソワーズ・ドルトが精神分析家であったことや、路上エデュケーターを始めたのも精神科医で精神科の入院をする必要がないように地域生活の中で若者を支援する目的であったようにフランスの児童福祉と心理は切っても切れない関係である。しかし背景には失敗の歴史もある。

[7] l'ordonnance du 23 décembre 1958 relative à la protection de l'enfance et de l'adolescence en danger
https://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do?cidTexte=JORFTEXT000000886585

海外領であるレユニオン島から社会的養護の子どもたちを本土に労働力として連れて来て農村に養子縁組に出すという取り組みを国が主導で 1982 年までおこない、その 1600 人の子どもたちの多くが精神病に苦しみ、差別や失業を経験し国に提訴したという経験(Jablonka, 2007)も、現在の文化的背景の違う子どもに対する手厚い心理サポートや「出自を知る権利の尊重」などに影響を及ぼしているのではないかと考えることができる。

近年の改革としては 2007 年 3 月 5 日の児童保護改革の法律[8]が現場への影響力は大きかった。5 つの原則が発表された[9]。

- 予防の強化と児童保護のミッションの明確化
- 危険があるときの情報伝達の方法の強化と、その調査方法の改善
- 社会的保護と子どもに関する司法のつながりの強化
- 子どもの必要としていることに応えられるように支援の方法の改善と多様化、教育に関する支援ができるよう配慮すること
- 児童保護分野の変遷から子どもを守ること

在宅教育支援により力が入れられるようになった。また、医療機関にかかった患者へ医師の決定内容の説明をするインフォームドコンセントと同じように、当時者自身が十分説明を受けること、児童相談所の記録にアクセスできること(18 歳未満は保護する立場の人と一緒に、18 歳以降は自分自身で)なども定められた。

2020 年には連帯・保健省が「最初の 1000 日—ここから全てが始まる」というレポートを出し、妊娠 4 ヶ月から 2 歳を迎えるまでの重要な時期に重点的に投資することの重要性を説明し「科学の発達によって得られたこれらの結果は親に罪悪感を抱かせるものであってはならない。親たちをより良くサポートする責任を政府に求めるものである」としている。

子どもを国の子どもとして、支援の対象を子どもから親まで、そして問題のある子どもや家族だけではなく予防という観点から子ども全員に広めてきたという

[8]https://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do;jsessionid=FF2D16C72071515AB15146B6B7A5CAB6.tpdjo10v_1?cidTexte=JORFTEXT000000823100&categorieLien=id

[9] 1. Développer la prévention et clarifier les missions de la protection de l'enfance, 2. Renforcer le dispositif d'alerte et d'évaluation des risques de danger pour l'enfant et mieux articuler la protection sociale et la protection judiciaire de l'enfance, 3. améliorer et diversifier les modes d'intervention auprès des enfants pour mieux répondre à leurs besoins, 4. prendre certaines dispositions relatives à l'éducation et 5. protéger les enfants contre les dérives des secteurs.

背景をここに見ることができる。今回は周辺諸国の様子や諸外国からの影響については記述できなかったのでまたの機会にしたい。

学校から生まれた福祉の必要性

「国の子ども」という概念は学校とも大きな関係がある。フランスでは小さい子どものときから落第・飛び級制度がある。その学年で履修するべき内容が十分習得できていないともう一年同じ学年をやり直す。行動障害など専門的な教育をおこなう学校に入ることもある。今では中学校と高校の卒業資格を得る試験だけが残っているが以前は小学校を卒業するにも試験があった。つまり、全員を進級させることよりも、一人一人の子どもを着実に質の高い市民に育てることが優先されたのである。近年では子ども 1 人の一年間の教育費は国にとって 50 万円近くの負担になることから落第をあまりさせないようになり、読み書きが十分できないまま進級してきている中学生がいることなどが教育・福祉現場では問題になっている。

現在の「教育省」という名称になったのは 1938 年でそれまでは 1698 年以降長い間 Le Ministère de l'Instruction publique であり、それまで地域や宗教単位だった「人間形成」「導き」「教養」を国がおこなうという意味合いの機関名であった。

落第があるということは、全ての子どもの学びを確認するので専門職が必要であり、落第の可能性がある子どもには落第しないよう年度内に軌道修正できるように学習障害などそれぞれ専門特化したケアを勧めたり学校側は試行錯誤しなければならなくなる。

例えば調査先で勉強が熱心なのにどうも結果が伴わないという子どもがいた。学校のソーシャルワーカー[10]がコーディネートして専門医をまわったところ、耳は聞こえているのに A 音だけが聞こえていないということがわかった。子どもの中で聞いている世界と読み書きの世界とズレが生じていたのである。もし両親だけに判断を任せていたら、問題点を突き止めるのにもっと時間がかかり子

[10] ソーシャルワーカー資格で就く。学科は教員の担当、児童保護は SSS、教育相談員、心理士、学校医、看護師が児童福祉と役割分担している。生徒の個人的・社会的成功のために話を聞き情報提供しサポートする。学校内、家庭、校外でのこと全ての相談に対応する。生徒にとって情報提供を受け、自分の権利について知り、相談にのってもらい、手伝ってもらい、守ってもらうことができる。校外の機関につないでくれる。

どもは苦労を強いられていたのではないかというケースだった。フランスでは「統合・同化・組み入れる」という意味の integration ではなく「包み込む」という意味の inclusion という言葉を使う。子どもが学校教育に合わせるのではなく、学校がどのような特徴のある子どもも包み込めるものでなければならないという考えだ。それは簡単なことではないので専門職が増えていった経緯がある。一般的な学校にそぐわなかった子どものための特別なケアや受け入れ機関も必要という形で専門家が増え専門が細分化されていくことになる。
逆に地方の優秀な生徒はパリの進学校へ入学させるようにしていた。
子どもの利益を優先(l'intérêt de l'enfant)という言葉は今でも福祉や教育分野で一般的に使われているが、それは「子どものため」というよりも「質の高い市民を育てる」という意味も含まれていると考えることができる。
一方で日本では、例え中学 3 年生の履修内容を習得していなくても中学を卒業することができる。自分に障害があることに大人になってから気づいたという人もいる。日本の学校において福祉職がそこまで必要のなかった理由は教育制度の違いによるものであろう。
筆者は 2005 年に日本の国家一種試験を受け文部科学省で採用面接を受けた際「教育が画一的でありそれに合わない子どもを排除している、もっと多様な子どもの現実に合った教育の形を模索できないか考えている」と目の前にいる 3 人の面接官に言った。そのときの面接官は学生の反応を伺うためかもしれないが「1 億円をバカ 1000 人の底上げに使うのと天才 1 人に使うのでは後者の方が国力になる」と言った(更にその人は「君のような大学に行った人にはわからないだろうけど、何をしてもバカはバカのままなんだよ」とも言った)。フランスの論理では、30 年後のことを考えると、1000 人に予算を割いて育て、良い看護師、良い教師、1000 人全員に良い労働者になってもらおうという考え方になる。「教育と福祉は未来のために価値のあることである」と現場の職員たちは信じて疑わないが、それは、日々の仕事の中で、悪い環境にいると人は悪くなり、良い環境にいると人は良くなるという当然のことを見てきているからであろう。
犯罪が起きて刑務所で過ごしたり、アルコール中毒になったりすると国にとって年間 50 万円では済まないコストがかかることになる。そういった理由から、フランスの学校は学ぶ場であるだけでなく、子どもの状態を見守りリカバリーができるようにする場所なのである。

福祉は「皆に共通の権利」

現在では福祉は生活保護も含め「皆に共通の権利(les droits communs)」という表現がされる。社会的養護であっても教育と同じように皆に提供される福祉の延長線上に位置付けられている。

児童福祉や社会的養護は「家庭や学校の代替」ではなく、親の持つ力を引き出す、子どもの力を引き出すことを目的としている。複数の大人で子どもを育てる pluriparentalité という概念である。児童福祉では、直訳すると「回復能力や打たれ強さ(レジリエンス)の後見人」(tuteur de résilience)つまりその大人に出会うことで困難を乗り越える方法を学べるという人、社会的親(parent social)に出会うことを重視する。全てを親に求めるのではなく、信頼できる、複数の尊敬する大人に出会い支えられながら成長するのが良いという価値観である。これは特に、非行傾向がある子どもや犯罪文化に染まっている子どもについて、そこから脱出するときに「レジリエンスの後見人」がいる場合がほとんどであることがわかっている。不具合の症状がある子どもほど、さまざまな活動を提案し、多くの大人に出会えるようにする。

例えば、中学校でいつもの仲良しグループと休み時間に一緒に過ごさなかった女子生徒がいた。その報告は教育相談員[11]に共有され、生徒は面接に呼ばれる。友人との関係性が不安定であることについて、昼休みに開催しているアトリエに参加するよう提案した。彼女が選んだのは演劇と音楽。毎週決まった曜日に、外部から来ている講師と学校の心理士と一緒にアトリエに参加する。そして地域内の習い事ができたり週末お出かけに連れて行ってくれる場所にも申し込みをした。そのようにして彼女が他の友達や大人たちに出会い世界を広げていくこと、毎週会う中で担当の大人たちが彼女と知り合い、支えることを目的としている。

個々人へのケアではなく家族全体がシステムで影響し合っている関係性なので

[11] CPE (le conseiller principal d'éducation)国家公務員で修士号の上国家試験で採用される。中学、高校、職業高校で生徒の生活面、欠席や遅刻に関すること、保護者とのやりとり、暴力や問題があったときの対応を担当する。教師は学科担当、ソーシャルワーカーは外部とのやりとりを担当するため、生徒本人や保護者と直接話をするのは CPE の役割である。

全体へのアプローチをする「システミックアプローチ」が現場ではとられ、例えば不登校の子どもに学校に行くことへの支援をするのではなく、不具合の症状(symptôme de mal-être)として家族の構成員全員へ働きかけし、家族の不具合をケアしていくなかで症状も改善されていくと考える。

日本で言う「エンパワメント」に近い、個々の力を引き出す方法がとられる。特に先ほども書いたように近年は子ども個人を福祉でフォローする際「個人的なプロジェクト(projet personnalisé)」が話し合われ支援の軸とされる。施設入所の際も家庭に戻るかどうかではなく「この子どもの人生計画として何が最適か」という視点で親も子どもも支援する。そのために施設には子ども担当のエデュケーターとは別に親担当のエデュケーターを置いているところもある。

しかし社会学者デュベは国の姿勢に以下のような批判をしている。社会内に個人の場所を作るのではなく、個々人を武装させようとしていると指摘する。社会は教育や職業訓練、個人のエンパワメントにこだわり、個人が資源(ressources)を有し、自身が選んだものについて取り組むことができる(capacités d'agir)ことを目指そうとしている。公共政策は『契約』や本人の『プロジェクト』、『本人の計画のサポート』という言い方をし、本人たちが福祉のメカニズム、権利の範囲内に止まざるをえない現実から目をそらさせようとしていると述べている(Duvet, 2010)。
経済学者のドレも、社会福祉の様々な仕組みがあるにも関わらずフランスはヨーロッパの中でも代々フランス人の出身者と移民出身者の貧富の格差が一番大きい国の 1 つであると指摘している。そして、子ども時代に貧困を経験している人にとって大人になって同じく貧困状況に陥るリスクは高いとしている(Dollé, 2008)。
実際に、筆者が調査をする中でも、難民でフランスに到着したばかりの若者や、親の離婚で転校を繰り返し学力に遅れのある若者に職業訓練コースの入学手続きをしても中途の転入だと限られたコースしか選択肢がなくクリーニング技術やエアコン整備などまず必ずしも本人が望んだコースに入れるわけではない。さらに、職業訓練コースの場合は研修先に雇われて実地研修の単位を取らないと履修できないが、雇ってくれるところが見つからずコースの中止と変更を余儀なくされる若者も出てくる。そして児童相談所が生活を保障する 18 歳までに

取れる資格が優先されるため、必ずしも高い所得に結びつかない内容になる可能性も高い。施設から医学部に進む若者はいるが、一般家庭に比べると早く手に職をつけさせるプレッシャーは大きい。同じ資格でも難民で来たばかりの若者とフランス人だと就職に有利なのは後者だ。
なのでデュベが指摘した、恵まれた仕事や住居が得られるのは一部の人だけであるという現実はそのままであり、個人が資格をとったり自己の暮らしを改善する努力をする機会を与えることで不平等を隠しているようなものである、個人ではなく社会の問題であるのに個人の努力で変えていける幻想を抱かせているというのは筆者の観察した現実に一致する。

良い市民を育てる＝個人の労働力を伸ばす

ここまでで国が子どもたちを国の力として育てようとしている考えが確認できたと思うが、それは成人しても同じであると言える。例えば新型コロナウイルスにより 2020 年 3 月以降多くの人が期間限定失業[12]に置かれることになったが、その期間にスキルアップ研修を受ける際は国が 1500euro を支払うとした。通常時から語学学校、資格取得や研修は無料のものがいくつも用意されている。16 歳から 25 歳までを対象にした市民奉仕活動(Service civique)というものは国が用意する公のための任務をする代わりに報酬が得られるものである(障害のある人は 30 歳まで)。高齢者施設での活動から、カンボジアでの健康・母子医療まで内容は幅広い。
筆者がフランスに到着しビザを申請した際「市民化講習」の受講が義務であった。フランスに到着したばかりの外国人を対象にしたものだが、丸一日の講習で学ぶ内容は「仕事をして税金を払い、その税金で病気や障害のある人や高齢者などを支える」というものだった。図書館や学校が無料である理由、病院が 3 割負担である理由とその仕組み、障害や病気のときは保障があること、相談窓口がどこかを知り、福祉国家とは何かを学んだ。最後に仕事のあてがまだない人にはソーシャルワーカーが個別に紹介された。

[12] 3 月の外出禁止政策以降、コロナを理由に解雇することを認めないと政府が発表し、雇用主は期間限定失業を利用して事業活動をしなくても従業員給与を負担せず解雇もせずに済む制度をとっている。普段の給料の 84%カバーする期間限定失業保険で暮らしている人が 4 月は 860 万人、9 月時点で 100 万人。
https://www.ouest-france.fr/economie/emploi/chomage/pres-d-1-3-million-de-salaries-en-chomage-partiel-en-aout-un-chiffre-en-baisse-6985618

実際にはもちろん生まれた環境がいい人は強靭なネットワークを持っていてキャリアアップには断然有利である。しかしフランスにとって「学歴、キャリア、給料」は個人固有の富に止まらず、「個人の学びもスキルアップも国の力」という考えだからこそ国が投資している。「資源がある人は収入を多く得ることができるが、その分税金で支え合うのが福祉国家」という認識が共有されているためか「血税」という言葉は使われず福祉を利用する人への批判も表だって言う人は少ない。

3. 福祉構造—「ミルフィーユ状の構造」と「届ける福祉」

「ミルフィーユ状の構造」「予防的観点」「届ける福祉(aller vers)」
その背景としての医療社会、大衆教育、キリスト教と階級、第一次世界大戦

フランスの児童福祉の特徴として「ミルフィーユ状の構造」「予防的観点」「届ける福祉(aller vers)」の三点がある。

「ミルフィーユ状の構造」とは、例えば子どもを取り巻く機関がさまざまあり、重複して同じ家族をサポートしていることもあるが「どこかしらがつながっていればいい」「どこかに話せる人を見つけられればいい」という考え方であるということだ。

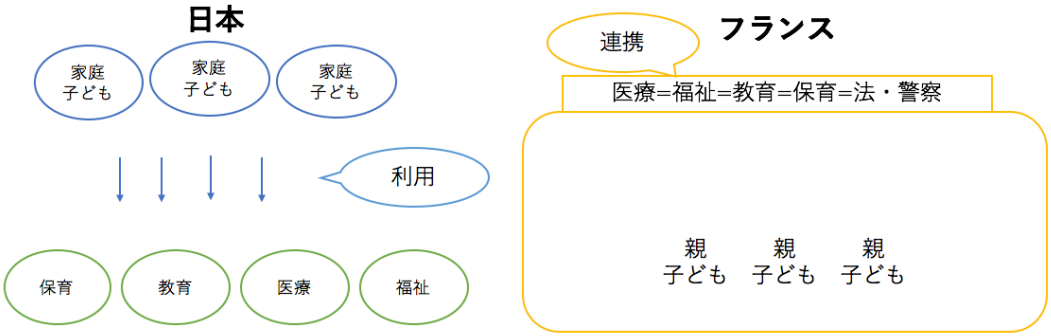
「予防的観点」と「届ける福祉」とは、ソーシャルワーカー[13]など福祉の専門家が病院や保育園や学校や市営住宅などに配置されていて、親や子どもが助けを求めなくても、専門家の方から助言をすることができる環境づくりをしているという点である。例えば学校だとしたら、友達を叩いた、授業中に眠くなる、洋服が汚い、などに専門家が気づき、支援ができないか提案する。届ける福祉(aller vers)とは「問題がある」「助けが必要」と認識し行動にうつせる人もいるが、それができるとは限らないので、感知し働きかけるのが専門家の役割だという考え方である。

例えば「福祉を受けていない赤ちゃんがいる家がある」などの情報があると、市営住宅の入り口やスーパーの前の広場などに一週間限定で福祉事務所が支所を

[13]国家資格。大学卒業と同じレベルで高校卒業後 3 年間を要する。理論に 1749 時間、研修に 1820 時間、合計 4 個所の研修先から合格をもらわなければ卒業することができない。

置いて区長なども丸一日そこにつめ、通る住民全員に話しかけるといった取り組みはよくおこなわれている。学校ソーシャルワーカーや路上エデュケーター、区の住宅担当者や福祉事務所のソーシャルワーカーなど多業種が一緒に住民たちの質問に答え情報提供する。当の赤ちゃんがいる家庭と出会うことができたら、母子 3 組とソーシャルワーカーの旅行を開催してより深く知り合える企画をしたりする。筆者が「日本では自分から助けを求めない人がいるということが問題になっています」と言うとソーシャルワーカーは「これまでこういう福祉が受けられるよと提案して断られたことはない、助けを求めない人がいるということは福祉で提供する内容の説明の仕方や使った言葉が悪かったのではないだろうか？」と言う。

図：「届ける福祉」(筆者作成)

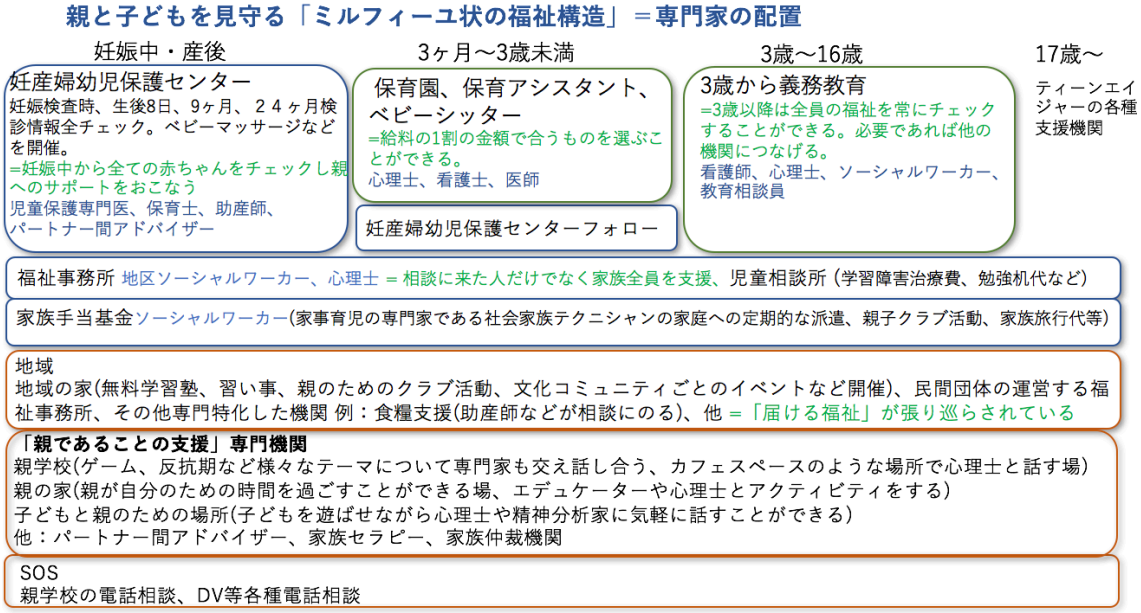


日本では家族が福祉や保育を利用する選択をするので親の決定権が強く、利用しない家族も出てくる。
それに対しフランスでは国が専門家を通して福祉も家庭に届けていて、全ての子どもの状況がチェックされている。支援の内容は専門家が提案し、子ども自身も選び取れる福祉が複数ある。親と専門家で意見が対立する場合は司法に判断を仰ぐ。

これらの背景として、福祉活動をおこなっていたのが元々活動家や宗教団体であり、国が福祉を引き受けてからも既に活動してきた彼らに委託する形で実現していることが背景であると考えられる。今でも福祉の実施主体の 2/3 は民間団体であると言われている[14]。

[14] フランスの福祉の 2/3 を担う民間団体をフランスではアソシエーションと呼ぶ。アソシエーションは「恒常的な形態で利益の分配以外の目的のためにその有する知識と活動を共同のものとする」グループである。福祉分野とは限らない。10 人に 8 人がアソシエーションの活動に参加するか関係者であるとされている。有給職員は 120 万人いる。

図：「ミルフィーユ状の構造」下の赤枠の多くを民間団体が担う(筆者作成)

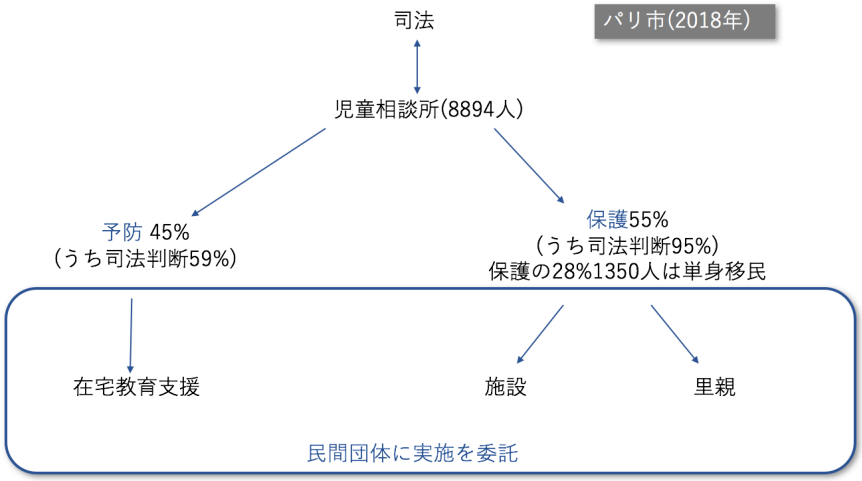


民間団体の中には目的の特化した団体も多い。例えば「心のレストラン」はお金がなくても食べ物に飢えることはないようにしようとあるコメディアンが 35 年前に始め今でも全国的に続いている活動だ。スーパーの入り口で袋を配り、買い物客がレジを通ったあとにその袋に入れて寄付するという方法などで寄付を集めて無料で利用できるレストラン、スーパーを展開している。そこにはソーシャルワーカーや助産師もおり、食料支援をきっかけとして他の支援にもつなげている。

例えばパリ市の社会的養護の子どものフォローをする在宅教育支援、措置されている子どもを預かる施設の運営はほぼ民間団体であり、里親の事務所をいくつか持っている以外は市(児童相談所)は子どもの委託先の選定やその後の支払い、継続の有無の話し合いしか担当していない。財源は県であるにも関わらず、子どもは県や市の職員にはほぼ会うことなく、民間団体の職員を通じてのみ支援を受け、支援を終了することがある。

https://www.legifrance.gouv.fr/loda/id/LEGITEXT000006069570/2020-10-22/

図：パリ市の児童相談所で一年間に扱う子どもについて(CRIP 資料より筆者作成)



(注：里親については少数であるが市が担当しているものもある)

「予防的観点」と「届ける福祉」についてはソーシャルワークの源流をたどると医療社会的アプローチが源泉となっていることがわかる。ソーシャルワーカー養成校の教師をしていたル・ブッファンらの本から歴史をたどる(Le Bouffant, 2005)。

(医療社会的アプローチ)
ソーシャルワーカーは元々、様々なスタイルのものが存在していた。1932 年に国家資格となり資格のない者は活動できなくなり、公的機関での採用も始まるのだが、その時期でもまだ、資格取得には「一年目は看護士、2 年目は医療社会(medico-social)、三年目にやっと社会的支援を学ぶ」という内容だったことから見られるように公衆衛生の観点が色濃い。
1900 年代初めには 4 種類のソーシャルワーカーが存在し、やがて統合された。

１つは富裕層の女性たちによる援助事業で、工業化により大都市の中で劣悪な労働環境、衛生状態、住居の状態を経験する人たちが現れ、彼女たちは子どもの衛生状態や乳児の死亡を防ぐことを目的として家庭に通った。貧困や病気は社会的な事情によって起きているため、従事者たちは不公平があることへの反発や社会構造を変えるための活動として捉え訪問看護士として予防活動に取り組

んだ。伝染病が蔓延しないよう伝染病にかかっている子どもがいたら学校から連絡がいき、訪問看護士は子ども自身が治癒しても家族全員の健康と家の衛生状態が改善されなければ再発の心配があることから積極的に家庭内での支援をおこなった。
今でも子どもの症状などに対し親から相談がなくても専門家が助言し、家族全体への支援に繋げるスタンスは変わっていない。それに対し、医療化(medicalisation)であるとする批判もある。行動障害、学習障害など診断名をつけ、特別なプログラムの押し付けをすることに対する反発である。

2 つめはイギリスのセツルメント運動に影響を受けてブルジョワ階級のカトリック家庭が庶民階級の住む地域に移り住み無料診療や相談窓口などを創設するというもので、大衆教育(éducation populaire)とも言われる。
今でも所得の低い世帯の多い地域には「地域の家」(maison du quartier)と言われる社会的施設が多く存在し、当時と変わらず学校のない時間に子どもを預かって文化的な活動をするなど教育の機会を提供している。

３つ目は神父が社会階級の和解のために貧困層の元に行くことの重要性を説いて、地区ごとに割り振られた担当地区でソーシャルワークをおこなうというものである。
今でも、特に所得の低い世帯の多い地域にはキリスト教を母体とする民間団体が事務所を構え、福祉事務所と同じように地域住民の相談に乗っている。病院への付き添いなど福祉事務所よりきめ細やかなサービスをおこない寄付からなる現物支給もおこなっている。地域に根付いたネットワーク、教会を通じた人脈で支え合おうという取り組みは国が福祉を引き受けるようになってからも残り、公的機関の福祉と補完関係にあり、ミルフィーユ状の福祉を形成している。

4 つ目は第一次世界大戦の時期に兵器工場など工業分野の労働者である女性の衛生状態や労働環境改善を目的としたソーシャルワークであり、特に保育分野が発展した。(Le Bouffant, 2005)

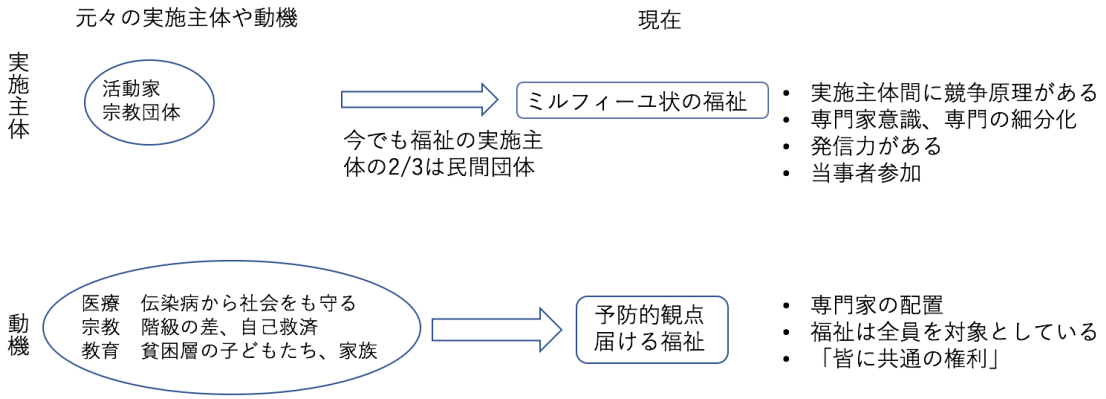
フランスの特徴は国による福祉が成立する前から活動してきた団体が多く、宗教色のない活動家集団も多かったことである。伝染病の蔓延予防や貧困対策、社

会秩序の改善を目的とした有志たちによる活動だったことから、予防的観点を持ち、対象者にソーシャルワーカーが近づいていくというスタイルであり、当初からフランスの福祉は「問題が起きてから対応する」というものではなかったと考えられる。

民間団体の存在による競争原理とソーシャルワーカーの職業意識

以下のように考えられるのではないだろうか。

図：フランスの福祉の特徴(筆者作成)



民間団体が活発で、アカデミックな研究を自らの取り組みの科学的裏付け、評価として利用し、積極的に発信する。民間団体同士の競争がある中で新たな取り組みが生まれ専門が細分化していく。ロビー活動とも言える、行政の担当者への働きかけや、一般への発信もしている。
そして、国の指針として施設から県や国の政策決定という段階まで当事者参加を求めるよう定められているが、実際民間団体ではより良い取り組みができるよう積極的に当事者に意見を求めている。
民間団体は大企業のようなもので、例えば Groupe SOS という民間団体は、全国で 550 の施設を運営しており、1 万 8000 人の従業員を抱え、年間 1100 億円の収入を公的な財源から得ている。児童福祉施設だと措置費は県が財源、旅行やアクティビティの費用は寄付を得ていることが多く、県に対しても民間企業に対しても PR をする必要があるということである。児童相談所は子どもにとっ

て望ましい委託先を複数の施設と里親から探すので、そのようにして競争と自然淘汰がされている。公報・財源を得るための担当・企画・コーディネートなど様々なセクションを持っている。大きな団体だと画期的な取り組みや研究結果を毎年発表している。

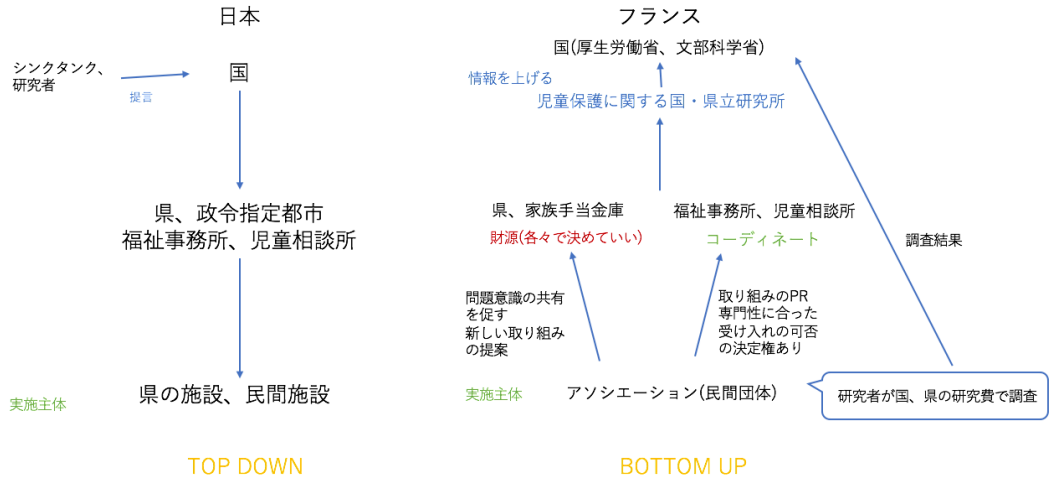
しかしその姿勢は民間団体に限ったものではない。公的機関においてもソーシャルワーカー一人一人が自分たちで現状を分析し新たな取り組みを提案していく力、政策決定側への働きかけまでが求められていて、活動家としての自負を持って取り組む職業とされている。自分たちのことを militant(ミリタン)と言うことが多いが、社会を良くするための活動をライフワークとして続ける人という意味だ。
職員自身が研修を受け続け、試験的取り組みで試行錯誤を続けること、さまざまな見方をクロスさせるために他機関との連携だけでなく同じ機関内でも 2 人でケースを担当したり心理士がサブ担当についていることが多く、 1 つのケースを複数で担当する。
そして外に開かれていることを強調する機関も多い。私のように外部の人や研究者を積極的に受け入れることで仕事の仕方に刺激を得、考える機会を得ようとしている。「外部の人が来ないとルーティンになりがちである」と言う管理職は多かった。
個人的支援だけでなくグループ支援をおこなうことなど多機能(plurifonctionnelle)であることも価値として重視されている。
支援するために分析する力、企画を立ち上げ動員していく方法を学ぶ機関も存在する[15]。公的機関で働くソーシャルワーカーのミッションとしても課されているが現場で得られた社会的分析をもとにした「グループに共通の利益のための社会活動」プロジェクト[16]と呼ばれる。
例えばいじめが問題になったとき、あるソーシャルワーカーは教職員と校長合わせて 12 人と加害者被害者の親や有志の親 12 人が一緒に 9 時間のプロフェッショナル向けいじめ対策研修を受け、9 時間かけてその後話し合う機会を設けた。話し合いには子ども裁判官や警察の未成年保護班なども招待する。ソーシャルワーカーはこのように問題解決の方法をコーディネートする能力も求められ

[15] ANTSAG Association Nationale pour le Travail Social avec des Groupes et des interventions sociales collectives.
[16]グループに共通の利益のための社会活動 ISIC Intervention Social d'Intérêt Collectif. Christina de Robertis の 著作に詳しい。

ている。
現場の自由度が高く、現実に合った臨機応変な取り組みをすることができることが利点だが、機関や県による違いは大きいということでもある。

筆者は 2000 年代半ばに日本の首都圏で生活保護の担当をしていたが、採用面接後に人事に再度呼び出されて「限られた予算の中で先人たちが最善を追求して今の仕事の仕方があるので、もし少しでも変えていきたいという気持ちがあるとしたら今辞退してほしい」「ここはもっとこうしたらいいのではということを言わないと約束できますか？」と言われ採用のために「はい」と言わざるを得なかったことを昨日のことのように覚えている。日本では公務員が主に福祉を担って来ており、決められた手続き通りに行うこと以外のイレギュラーさが排除されてきたことも両国の大きな違いにつながっているだろう。

図：ボトムアップ型フランスの社会的養護の構造(筆者作成)



フランスでは福祉の現場・アカデミックな研究・政策決定側の三者間の行き来や流れが活発である。
児童保護分野では児童保護に関する研究所 ONPE(Observatoire National de la Protection de l'Enfance)が国と県から半々の出資で賄われ、国、地方自治体、公的機関、民間機関の調査を収集、分析し、研究・評価をおこない、毎年国会にレポートを提出している。他にも、CIFRE(Convention Industrielle de formation par la recherche)という制度で福祉分野の調査テーマで博士論文を書く学生に博士

の 3 年間給与を支払うというものがあり、家族手当基金などでは毎年新たに 3 人、生活保護分野などでも募集がある。また、博士課程の学生や研究者は県や民間団体から調査要請を受け協力費をもらう機会もある。このように常に外からの目で現場を見る人がいて、現場のソーシャルワーカーもアカデミックの研究の近くにいるという環境である。私の調査先の施設などでも他の研究者と会う機会は度々あり、脳科学、心理、さまざまなアプローチから現場で調査し、施設にフィードバックしていた。

フランスの社会的養護について社会学者デュベは以下のように分析している。社会的養護分野の子どもたちの社会への統合は国によってではなく、機関によっておこなわれてきた。機関同士は新しい価値の創出と発展のため競争関係にある。「民間団体や組合、諸々の集団の代表者たちが社会の要請を順次制度化し、一番弱い立場にいる集団を次々と保護に取り込み、社会の統合を進め、社会的権利をつくり、福祉国家を作り上げている[17]」(Duvet, 2010)。

4. 価値の共有

国のスタンスを分かりやすく伝える努力

現場職員の間での価値の共有についてまず書きたい。先ほどまでの章で、ボトムアップの政策決定や、公務員であっても専門職として採用され専門職としての意識が高いこと、アカデミックの世界に近いことなど書いてきたが、価値を共有する努力も十分なされている。

まず重要であることは「不登校」「家出」など検索したときに政府の出しているホームページが出てきて、仕組みが誰にでもわかるようになっていること。日本のようにブログや様々な情報が混在しないよう、正しい情報が検索結果でまず出るよう SEO 対策(検索エンジン最適化)を徹底している。取り組みのメディア露出も多い。連帯・保健省が手がけている調査の結果などは夜 8 時の 30 分間の

[17] « Ce sont les associations, notamment les syndicats et les partis représentatifs, qui fabriquent l'intégration sociale en institutionnalisant progressivement les demandes sociales, en créant des droits sociaux, en forgeant l'Etat providence, en protégeant successivement les groupes les plus démunis »

ニュース番組でも紹介されている。
そして、国が出している指針や報告書も読みやすい言葉で書かれているので、現場に対する認識、価値や使われている言葉が共有されている。筆者は日本の大学を出て公務員として働き日本語には困らないはずだが日本の省庁が出している書類を見つけ出し、読んで理解するのには苦労し、統計を読解するのも大変難しいと感じる。これでは現場の人たちの共有バイブルにはなりにくいのではないかと思う。

フランスの省庁の発信する情報はまず価値が明確である。
連帯・保健省が2020年9月に発表した「最初の1000日―ここから全てが始まる」というレポートにおいても「全ての子どもの才能の目覚めを促し、最善の条件の中で自己を開花させていけるよう(s'éveiller et s'épanouir)支えることは社会の義務であり国が約束することである」とまず文頭に書いてある。2019年に発表した「児童保護と予防の国家戦略」もサブタイトルは「一人一人の子どもに同じチャンスと同じ権利を保証する」と書かれている。

価値の伝え方が具体的でもある。
連帯・保健省の社会問題観察機関 IGAS が出した「『親であることの支援』についての政策評価報告書」にも「親であることを支援することが効果的であるだけでなく、国にとって必要なものである」と書かれている。フランスでは親であることの支援に年間約 180 億円、家族支援を含めると 370 億円投資している。親であることの支援は、子どもが社会的養護が必要になることに比べ 9 千分の 1 のコストで済むとしている。児童相談所によるフォローが必要になると、平均的な支援期間で計算すると在宅フォローで子ども 1 人あたり約 67 万円、施設(里親)入所になると 1 人平均約 2700 万円かかることになるとしている。効果について、親であることの支援を受けた親は、受けていない親より子どもの学校での状況が改善し、欠席日数が減り学業も改善するので落第の割合が減り国の教育費のコスト削減につながること、次に、子どもの親離れと自立、親との関係が良好になることから、親も社会からの孤立を防ぐことができること、子どもの将来の社会的経済的環境が良好であることなどを挙げている。

不登校は「月半日を 4 回休む」、学校システムからの早期退出は「高校卒業資格または国が定めた職業資格を得ずに社会に出た者」という定義だが、学校システ

ムからの早期退出について(高校卒業資格をとるのは難しいので日本との違いがあるものの)「長期失業、低給料で不安定な就労、健康面、自尊心の低さ、人生の QOL の低さ」のリスクを高めるとしている。本人たちの才能の価値を引き出さないことは社会的な損失であり社会の調和を揺るがすものであるため「現在に投資し、未来のコストを削減する。社会の調和を守る」ための予算が必要としている。学校システムからの早期退出者の国にとっての損失は週 2865 億円(2,3milliards euro)、1 人あたり生涯平均 2740 万円から 2860 万円(220 000-230 000euros)社会扶助費がかかる。全体で 1540 億ユーロ(154 milliards d'euro)の社会的コストである。それを、5 年間で学校システムからの早期退出者を半数にすることができれば、この半額ものコストを減らすことができるとしている[18]。そうして、学校には早期退出や不登校を防ぐため、様々な専門職の予算が下りる。ある一学年 110 人(22 人 x 5 クラス)の中学校では児童福祉の専門職として教育支援員 2 人、教育アシスタント 10 人、ケンカや恋愛関係のもつれを専門とする仲裁専門家 1 人、休み時間や放課後の学習を担当するスタッフ 8 人、ソーシャルワーカー、心理士、看護師[19]がそれぞれフルタイムでいる。遅刻や欠席がある生徒や希望する生徒は、生徒が選んだ教育アシスタントまたは教師がチューターになり生活全般の相談にのる。成績ではなく収入に応じて生活費を補う奨学金が出て、さらに靴やスポーツ用品など学校生活に必要な物を買う費用は必要があれば支払われる。

価値のすり合わせと連携

価値が共有されるよう情報伝達と連携の努力もおこなわれている。フランスではまず重要事項とされることについて特別な部署が設けられる。「児童保護に関する研究所(ONPE)」、「子どものリスク情報統合局(CRIP)」などである。例えば CRIP はリスク状態にある子どもについての情報を整理する機関(日本で言う虐待通報があったときの情報整理に相当)だが、リスクとは何かについての認識のすり合わせができるように、県内の産科をまわって助産師や看護師に研修を開

[18] https://www.education.gouv.fr/la-lutte-contre-le-decrochage-scolaire-7214
統計論文　file:///Users/anfamingzi/Desktop/agir-contre-le-d-crochage-scolaire-alliance-ducative-et-approche-p-dagogique-repens-e-44216.pdf
[19] CPE conseiller principal d'éducation, AED (assistant d'éducation), Médiateur violence, surveillant, assistante sociale, psychologue, infirmière.

いたり、学校現場をまわったりして価値や認識の共有を図っている。子どものリスク情報を伝えるのは義務だが、特にその後どのような流れで手続きがされ、親子はどうなるのか詳しく説明すると言う。「その後学校と親の関係が悪くなるのでは」「子どもが取り上げられて親が怒るのでは」などといった先入観を持たず、子どもと親のためになるケアをすることを理解してもらうことが重要であるからだと言う。

「子どもと家族を守り予防する会議」CPPEF(Le comité prevention protection enfance famille)は各区で毎月開かれている会議で、地区担当児童相談所職員、区内の学校の校長と児童福祉専門職、妊産婦幼児保護センターや医療機関や小児精神医療専門機関、民間団体などが参加する。それぞれの機関で気になっているケースについて話し他の機関からアドバイスをもらい、2 ヶ月後にその後の経過を報告し合うものである。何がリスクであるかのすり合わせ、どういうサポートが可能かの模索ができる場である。

「サポート」概念

日本においては画一化された、ピンポイントな支援が特徴としてある。「就労支援」「母子支援」などがそれである。画一化された視点で支援すると、「働いているか」など物の見方も画一化されてしまう。例えば筆者が働いていた福祉事務所では、生活保護の受給者に対し就労可能性をランク付けし、就労可能と事務所が判断した人には毎週面接をおこなっていた。どこに面接に行ったかリストを提出させ、実際その場で面接を受けたと申告のある先に電話をして行ったかどうか確認するよう上司からは指導されていた。本人はそのような経験を続けたくないので無理にでも就ける仕事に就くという結果も見られた。

フランスでは違う考え方をする。本人が働かないとしたら、それはソーシャルワーカーの実力によるものではなく本人の歴史の中に事情があるものなのでソーシャルワーカーの責任ではない。自身の抱える問題について自覚するのに何年も要する人もいるが、その人のリズムを尊重しその人が望んだときに希望している支援をすることをよしとしている。生活保護を申請する人は仕事がないだけでなく、背景にさまざまな事情がある人がいるので「サポートすること」(accompagnement)がソーシャルワーカーとしての任務であると言う。生活保護

は支援のきっかけにすぎず、その人が何を困難としていて何を必要としているかに１つ１つ寄り添っていくことであると言う。連絡できる人が誰もいない人にとって､たった１人の何でも相談できる人になれたらいいという考えである。目的や目標をソーシャルワーカーが一方的に決めつけるのではなく、サポートを受ける人の意思を尊重している。

必要とされているものを当事者に聞く

当事者に希望する内容を聞いて支援を決めるという姿勢は一貫している。児童保護の国家戦略の中にも当事者を施設から県会議、国会に至るまでアドバイザーとして招き、意見を聞くように書かれている。
例えばパリ市ではコロナ禍に高齢世帯が気軽に外出できない状態が続いていることについて支援策をとることになったが、その方法は各区に任されている。ある区では 25 の民間団体それぞれの代表者と当事者が 1 人ずつ参加し、高齢支援とは言っても近親者を亡くした人の支援や障害や精神保健やアクティビティなどさまざまな専門性を持った団体があるなかでそれぞれの当事者からの意見も聞いてその区に一番適した新たな支援策を練っている。ソーシャルワーカーは当事者の声をまとめコーディネートする役割も担っている。

5. 一般の認識と福祉の位置付け

「連帯」が暮らしの中にある

１つめに、暮らしの中に「連帯」が組み込まれている。「自由・平等・博愛」を掲げている国だけに無視することはできない概念であるという感覚は共有されている。志が高いかどうかに関わらず、駅の周りや広場や大通りは支援物資を受け取りやすいためホームレスが集まりやすく、生活の中で目にする機会があるので小さい子供のときから何回か親に質問して知る内容である。地下鉄の中では身の上を語り小銭を分けてくださいと席をまわる人たちもいて子どもたちの耳にもそのストーリーは入る。

私の娘は公立の、家から最寄りの保育園に生後 3 ヶ月半から入ったが、その保育園は先に紹介した全国で福祉施設を 550 箇所持っている Groupe SOS という民間団体の運営で、ホームレス支援施設からアフリカでの活動までしているので年中支援物資の募集が保護者たちに伝えられていた。また、クリスマス前になると地下鉄のホームに緑のサンタのポスターが貼られるので娘は不思議がって「赤いサンタさんが来ない子どもたちに私もおもちゃあげたい」と緑のサンタに使わなくなったおもちゃの寄付を 2 歳から始めた。特に年末はデパートや商店街で様々な民間団体がクリスマスカードやカレンダーや機関誌を販売しているので、子どもたちも日頃にも増して福祉団体を見聞きする機会が増える。寄付やボランティアは思い立つ必要がないくらい身近にあるのだ。

テレビのニュースでも、火事や交通事故、難民などのニュースがあると画面に寄付の送り先が出る。新聞も同じだ。ニュースを見て困難を知るだけでなく、自分がアクションをとることができるようになっている。また、視聴率の高い夜 8 時に放映される 30 分間のニュース番組でも普段から福祉的取り組みが紹介されることが多く、特にコロナ禍などは毎日のように報道されたので「連帯」の意識の高まりが促された。

2 つめに、市や国が窓口になっている。ボランティア活動などとネット検索してもパリ市など公的機関のホームページが出て、そこから自分の得意分野や地図上で近くにあるボランティア団体を知ることができる。パリ市のボランティア研修に参加しても実際講師を務めているのは民間団体の人たちであるが、パリ市が窓口になっているため入りやすく、実際自分に何が合うか選びやすくなっている。



コロナ禍においては国が市民の能力を活かすことを目的としたインターネットサイトを開設した。サイト上で何かの役に立ちたい人は登録し、ミッションを探すことができ、企業や支援団体はミッションを提案することができる。医療用品

の工場での生産の手伝い、配布の手伝い、医療機関や公的機関でのサポート、お年寄りや障害や病気で自宅にいる人に定期的に電話をしたり、彼らの買い物をするなどのボランティア活動が募集され、10 月時点で 32 万人が参加し、4200 の機関でボランティア活動を募集したとホームページには書いてある。活動の幅は自然保護活動から難民支援まで広がっていっている。

富裕層にとってチャリティは切っても切れない関係で、フランス語では象徴資産(capital symbolique)と言いチャリティ活動をしていることは社会階級の高さを表す重要なポイントである。企業にとっても個人にとっても寄付をした分について控除申請することができるので利点もある。例えば個人の場合 6000 円寄付したことを申告すると 4800 円税金が免除されるので実質 1200 円の支出で 6000 円分貢献できることになる。
筆者はカンヌの貴族の別荘でパーティーのサービス係をしていたことがあるが、世界各国のお金持ちが夜な夜な集いお金の話をする中で、筆者が福祉をライフワークとしていることを話すと誰もが熱く自分が支援している団体や自分が代表を務めている活動について語っていたのが印象的だった。福祉分野に関する無知や無関心を「恥」と思っている節もあり熱心に話を聞こうとする。イギリスで言う Noblesse oblige に通じるところもあるだろう。階級の格差がはっきりしていることもあり自己責任論を聞く機会もない。
児童福祉施設で調査をしていても近隣の企業との結びつきは強い。BNP パリバ銀行という大手銀行が、銀行でおこなうパーティーに施設の子どもたちのアート作品を飾り職員が買って子どもたちの活動費にできるようにしたり、金銭的支援だけではなく企画参加などさまざまな形で参加していた。

移民社会と社会不安

もちろん他にも「連帯」につながる要因はある。
フランスは帝国主義時代からの歴史、海外植民地を有していたことなどから移民を多く受け入れてきた。現在パリ市児童相談所でフォローしている 9000 人のうち約 5000 人が施設にいて、うち 1350 人は未成年単身移民である。2000 年はフランス全体で未成年単身移民が 1000 人いたのが、2018 年は一年で 1 万 7000

人新たに児童相談所が保護した[20]。95%が男子でアフリカのフランス語圏から来ている。現在全国に約 4 万人いて、15 歳くらいで入国するので、1 人あたり 18 才まで約 610 万円コストがかかっている。
翌日から学校に通え、できる限り職業訓練を受け資格を得られるようにしている。それでも就職は不利である。母国で成功する道がない場合、海外での成功にかけ、借金などをしてやってくるが、受け入れ国でも底辺の仕事しか得られない。職業訓練など無料で受けられても、彼らにもチャンスのある社会構造になっているとは言えない。
2005 年にはパリ郊外で大規模な暴動事件が起き、近年のテロ事件でも犯人のほとんどは移民一世または二世であり個人に学業や職業訓練や資格を与えるだけでは解決しない問題があることを証明している。
パリ郊外の施設では移民の子孫がほとんどを占めるところもある。職員は「時限爆弾を抱えているようなものだ」と言う。いくら子どもが順調に成長し夢を描いても世の中の理不尽が大きすぎて、子どもたちの中に怒りが鬱積しているのを日々感じているそうだ。

結論

パリ市のホームページには「理解し、できる範囲の行動を起こす」と書いてある。元々キリスト教の慈善活動や活動家たちが担ってきた福祉を、国がこれら既に福祉をしてきた団体に業務委託する形で成り立っているので、そもそもソーシャルワーカー本人たちが問題意識を持って発信し、まわりを巻き込みながら活動してきたという下地がある。筆者は渡仏前はキリスト教文化が背景にあることが一般の理解を得やすくしているのではないだろうかと考えていたのだが、実際例えばセーヌ・サン・ドニ県では福祉の担い手であるソーシャルワーカーや里親などもキリスト教の背景がない人の方が多い。
ソーシャルワーカー一人一人の社会的活動家意識(militantisme) と、当事者をアドバイザーとして前面にたてること、アカデミックな研究を活動の改善に生かすこと、地域・周囲を巻き込んでいくことなどが社会全般への価値の共通につながっているのではないだろうか。現場ソーシャルワーカー、当事者、研究者、政策決定側の距離が近く、やりとり、行き来が多い。そして一般市民への働きかけ

[20] https://www.lemonde.fr/blog/jprosen/category/ase/

も様々な方法でおこなっていることで一般の連帯の精神とアクションを維持することができていると考察する。
国も市民一人一人の力をつけることに予算を割き、その先の「連帯」を掲げている。福祉が一部の人のためだけではなく皆に共通の権利であり全員を対象としているので、もっと身近であり、自身も経験があり「大変なとき自分や家族も助けてもらった、自分もできることはしよう」といった意識もある。
実際にお金がなくても子どもを育てられ、子どもが望む教育を受けさせることができ、蓄えがなくても怪我や病気、老後はそれぞれサポートがあるため生きていける安心感があることがフランスの福祉の強みだ。土台がしっかりある上にミルフィーユ状の福祉が用意されている。ただし、階級間の格差が生んだ不具合への対応として生まれた福祉は個々人にチャンスを与え能力を身につけさせることを目指す性質のものであるが、就職や暮らしにおける階級間の差をなくす性質のものではないことは留意する必要がある。
社会的養護に日本の 10 倍予算を使っていてもカバーしきれていない問題はたくさんある。児童福祉分野でも現場の職員たちは不満が大きく「予算が足りないためしたいのにできないことばかり」だと言い筆者が調査に行くと「フランスから学ぶことなどあるのか？」と不思議がるが、フランスには不平等があることを認識し一部であっても困っている人がいたら問題を改善するための手立てを用意しようとしてきた歴史がある。事後対応として絆創膏を足していくのではなく、予防しようとしている。それは家族の自助努力に任せ、福祉が最低限で子どもに与えられる選択肢さえ家族に左右される日本と大きく違うので伝える価値があることだと思っている。

注：筆者はパリ市とパリ市の北にあるセーヌ・サン・ドニ県をメインに調査してきている。制度の運用面が他県、他団体では異なる場合がある。

謝辞：ソーシャルワーカーの養成校である Institut Régional du Travail Social Paris Ile-de-France の Dr.Philippe Fabry 先生、長年社会的養護と不登校支援に取り組んできた不登校支援校校長 Abdel Ajenoui 先生に本論文の執筆内容について助言いただいた。ここに深謝の意を表する。

引用：

資料

IGAS (Inspection générale des affaires sociales), 2013, Evaluation de la politique de soutien à la parentalité (MAP - volet 1) Tome 1 Rapport, RM2013-015P.

Ministère des solidarités et de la santé, 2020, « Les 1000 premiers jours - Là ou tout commence », Rapport de la commission des 1000 premiers jours.

Ministère des solidarités et de la santé, 2019, « Stratégie Nationale de prévention et de protection de l'enfance, 2020-2022, Grantir à chaque enfant les mêmes chances et les mêmes droits ».

文献

DAMON Julien, « Les S.D.F. de qui parle-t-ton ? Une étude à partir des dépêches AFP », Population 2002/3 vol.57, pp 569-582.

DERVILLE Grégory, Rabin-Costy Guillemette, 2014, *La protection de l'enfance,* Maxi fiches, DUNOD, Paris.

DE LUCA BARRUSSE Virginie, « Vicieux mais utiles, les enfants abandonnés au XIXe siècle. Déclinaison d'un modèle de l'enfant d'Etat » *Modèles d'enfances : successions, transformations, croisements,* Archives contemporaines, 2012.

DOLLE Michel, « La transmission intergénérationnelle de la pauvreté », *Regards croisés sur l'économie* 2008/2 (n° 4), p. 97-106.

DOLTO Françoise, 2007, *La cause des enfants, En respectant l'enfant, on respecte l'être humain*, Pocket.

DREANO Guy*,* 2015, *Guide de l'éducation spécialisée*, Dunod.

DUBET François, « Intégration et cohésion sociales » *Penser les questions sociales et culturelles contemporaines : Quels enjeux pour l'intervention sociale ?* Sous la direction de Manuel Boucher, L'Harmattan, Paris, 2010. p.243-251.

GUEDENEY Nicole, GUEDENEY Antoine, 2016, *L'attachement : approche clinique et thérapeutique*, Elsevier Masson.

GUIDETTI Michèle, LALLEMAND Suzanne, MOREL Marie-France, *Enfances d'ailleurs, d'hier et d'aujourd'hui,* Curcus, Armand colin, 2004.

JABLONKA Ivan, 2007, *Enfants en Exil, Transfert de pupilles réunionnais en métropole (1963-1982),* Seuil.

LE BOUFFANT Chantal, GUELAMINE Faiza, 2005, *Guide de l'assistante sociale*,

Dunod.
PASCAL Henri, 2015, *Histoire du travail social en France*, Presses de l'EHESP.
PERROT Geneviève, 2008, « Les savoirs en service social avant 1950 », Vie sociale, 2008/3 n.3, pp33-43.
ROLLET Catherine, BONNET Doris, DE SUREMAIN Charles-Edouard, *Modèles d'enfances – Successions, transformations, croisements*, éditions des archives contemporaines, Paris, 2013.
ROMANET Emmanuelle, 2013, « La mise en nourrice, une pratique répandue en France au XIX^{e} siècle », *Transtext(e)s Transculture.*
VERDIER Pierre, NOE Fabienne, 2001, *Guide de l'Aide Sociale à l'enfance*, Dunod.

コロナ禍の中、「幾度となく会い、語りあうことの意味」を考える

本間　毅

新潟市　退院支援研究会

（taiinshien@ozzio.jp　HP:http://tsk2017.com/）

2020 年 11 月 13 日～15 日に、はじめて Web 開催された「対人援助学会第 12 回大会」において、私は 11 月 14 日の企画ワークショップ①を担当し、『幾度となく会い、語りあうことの意味』と題して事例検討を行ないました。当日は、ワークショップの参加者から今大会の主題『コロナ禍と対人援助』にふさわしい声が多く寄せられました。締切りは 11 月 25 日と頃合いもよし、皆さんの素晴らしい意見を発表する場には、『対人援助マガジン第 43 号』が相応しかろうと勝手に判断して、参加者の意見と私からの回答を加筆し寄稿することにいたしました。発言者は本学会の会員に限らないため、文中の括弧内に苗字のイニシャルと職種を記載させていただきます。

この研究に商業的利益相反事項は無く、文章に関する全ての責任は私に帰します。

【はじめに】

よく、「不安」は対象のない漠然とした心象のひとつで、具体的な対象があるのは「心配」だと言われます。例えば、「家に帰るのは何となく不安だし、玄関の段差で転ばないか心配だ」というふうに。しかしクライエントの心の動揺には「心配」のように聞こえる「不安」やその逆の場合があり、クライエント自身もその違いに気付いていないことがあります。近づきつつある患者さんや家族の「死への不安」を、患者さんに治療方針の提案を行なうだけでなく、直接手を下すこともある医療者が、「特定の疾患や臓器に対する心配」と誤解してしまうと、結果によらずクライエントだけでなく医療者も不幸にしてしまうことがあります。だからこそ、医療者に限らず専門家を自認するものには、クライエントの心配を解決できる得意分野の技量を磨く努力と、クライエントとともに不安解消への道筋を見据える眼差しが求められます。

意見（K さん　社会福祉士　精神保健福祉士）

業務上の情報以上に、不安や心配を他者に「伝えること」は難しいと思います。人は自分が伝えて欲しいことを、伝えて欲しいように聞く傾向があり、仕事上の自分の役割に関することだと責任もあるので、それが優先になってしまうような気がします。講師などをしていると、後で「私はそんなこと言った？」と思う場面がありますが、人は自分に都合良く、聞きたいように聞いている可能性がありますね。

回答(以下、筆者)

他職種カンファなどで見かけるのですが、専門職の説明で箇条書きに作成したメモのような説明用紙をひとつふたつと読み上げて「ハイおしまい、次はあなたの番ね」というのは、実に問題があります。聞いてもらいたい相手に、論旨というか理由がはっきりしない「説明のための説明」が多いのではないか。これまで聞く人のことはあまり考えず、パターナリスティックに行なわれてきた専門分野の説明も、互いに支持的・援助的あるいは母性的な配慮に依拠する場面が多くなってゆくことが求められるようになるでしょう。
このことには、コロナ禍がなければ気付かないまま終わっていた可能性があります。チーム全体が十分に機能し、上手に役割分担がなされていれば不要な心配ですが。

【事例検討の対象者】

今回私は、乳児期に罹患した髄膜炎の合併症である水頭症に対し、7 回の手術を受けたにもかかわらず障害が徐々に重くなり、コロナ禍の約半年前に 50 年余りの生涯を終えた「髄膜炎後の水頭症」男性患者 M さんと、医療者や家族だけでなく、過去と決別しようとしない自分とも「幾度となく会い、語りあった」M さんのお母さんについて検討します。

「水頭症」という医学用語の説明ですが、脳の中にある「脈絡叢（みゃくらくそう）」という場所で造られ、硬い骨格に守られた脳や脊髄を浮かべている脳脊髄液の循環や吸収に異常を生じ、脳室が拡大する病気が「水頭症」です。脳脊髄液の流れが滞る「非交通性水頭症」では、激しい頭痛や嘔吐、意識障害が出現します。脳脊髄液の流れが保たれている「交通性水頭症」でも無症状と言うことは少なく、多くは歩行や認知機能の障害、尿便失禁が見られます。頭部 CT などの画像検査を行なうと、水頭症患者では健常者に比べ、脳の内部にある脳室という場所が拡大していることがわかります。

【M さんの経過】

生後半年頃に発熱し、ぐったりして母乳を飲まなくなった M さんを、お母さんは、自分で2時間くらいかけて自動車を運転し、新潟市内の基幹病院に受診させました。この時、「どうしてこんなに悪くなるまで M 君を放っておいたのですか」と小児科医に言われ、お母さんはとても責任を感じたそうです。ただちに紹介された脳外科で、水頭症という状態になっているので脳脊髄液の流れを改善する手術（以下、シャント手術と記載）を受けるように勧められ、お母さんは大急ぎで入院の準備に取り掛かかりました。手術は無事に終わりましたが、M さんのその後の発育は、お母さんの目から見ても、周りの子供や丈夫な兄達より大幅に遅れていたそうです。

10 代～20 代を自宅と施設で過ごした M さんは、作業所で段ボール箱の組み立てなどの軽作業をして工賃を得ていました。しかし、40 代になるとけいれんなどの症状が悪化し、本格的に施設へ入所する頃までに、日常生活動作(以下、ADL)は低下し、入院を繰り返して計 7 回シャント手術を受けました。50 歳間近になり、内服薬は増え食事形態の調整などの医療管理が複雑になってきたため、私が勤務することになった法人で長期療養病棟と介護老人保健施設を利用していました。この時期の ADL は排泄を含み全介助で、体調と覚醒がよい時に限り、かろうじて意思の疎通がはかれる程度の病状でした。

食事や服薬でむせることが多くなっても、お母さんは経口摂取に拘り、経管栄養は希望しませんでした。雨や大雪の日もお母さんは休むことなく M さんを見舞い、看護師やリハビリスタッフの労をねぎらうことを忘れず、M さんの好きなおやつや音楽の CD を持参し続けました。お兄さん達は家族ぐるみで、つかず離れずお母さんを支援していましたが、その頃からお父さんの認知機能は徐々に低下し始め、M さんを探しに外へ出ようとするので、夜もゆっくり休めないとお母さんは病棟スタッフにこぼしていました。この期間、ご家族に対し、「終末期を視野に入れた事前意思の確認」はなされていません。

【病状変化と、私が行なった説明の概要】

新たに赴任した私が M さんを担当するようになって 3 ヶ月が過ぎた頃から、M さんは誤嚥が増え、その後 2 ヶ月間にわたり肺炎と尿路感染を繰り返しました。抵抗力の低下に伴い、喀痰や尿から多剤耐性菌が複数検出されるようになり、食事と薬剤の経口摂取を中止して、酸素吸入を行ないながら点滴からけいれんや吐き気止めの薬剤と抗生物質を投与しましたが、嘔吐やけいれんなど脳圧亢進を疑わせる症状が増強し、頭部 CT で水頭症の悪化を確認しました。お母さんに付き添って来院したお兄さん達にも M さんの病状と検査所見の変化、入院中の病棟は病状が安定した患者さんを対象に介護保険で運営する長期療養病棟で、制

度や人員配置から行える医療行為に限界があることを説明し、脳外科の専門医がいる S 病院への転院と再手術の希望を確認しました。しかし、脳外科で検査や治療を受けるか否かはともかく、まずは M さんを S 病院へ搬送すべきではないかなど、ご家族にいただく同意の内容とタイミングについても現場スタッフの声は一様ではありませんでした。

質問（前述　K さん）

病棟チームの中で、手術や脳外科の専門治療を早く受けてもらった方が良いという人が一人でもいたらどうしますか。

回答

私は、もとは整形外科医で一般的なリハビリテーション科医です。私が脳外科の専門家なら別ですが、私の立場では、そのような意見があれば無視することはできません。なので、ご家族の意向は考慮せず転院してもらうのではなく、どうするかご家族とも相談して決めるのが良いと判断しました。

【ご家族の返事（代理意思決定）】

お兄さん達は「私たち家族は全員転院を希望しません。一番の理由は、これまで治療して下さった脳外科のスタッフには申し訳ないのですが、何度手術を受けても弟の水頭症は根本的には良くならず、いつまで経っても病状が安定しないと実感しているからです。それと認知症の父がようやく介護サービスを受け始めたところなのに、転院や手術で母の健康まで損ないたくないこともあります。正直に言って、これまでも弟の治療をすべて中止してもらいたいと思った時さえありました。父と弟自身は自分の考えを伝えることができませんが、多分 S 病院への転院を望んでいないはずです。これから先はあまり時間が残されていないと思いますので、どうか最期までこちらの病棟で治療を続けて下さい。」と返答されました。お兄さん達の返事を聞き、お母さんは言葉もなく大きく頷いていました。すでに何度も、M さんのいわば「生命と人格の尊厳」を勘案し、家族の中で話し合った結果なのだと、私は考えました。

意見（O さん　保育士）

私の夫のお母さんが亡くなる前、医師の病状説明と治療方針の確認に際し、「医師に求められている解答」をすべきなのか、「家族として本当に考えている解答」をしても良い

のかとても悩んだ思いがあります。「説明に対していろいろな意味を含む『分りました』を待つ時間が必要」と医師に言ってもらえるのは回答する側としては有り難いことです。私は、いわゆる「模範回答」ができない自分に嫌悪感を憶えてしまったことさえあります。

回答

今年のことですが、私はベテランの同僚に、「医師がものごとをコメディカルや患者・家族と相談して決めるとはなんたることか。あなたには医師としての威厳がない。」と言われたことがあります。その時、私は密かに快哉を叫びました。何故なら、そのとき自分の長年の修練の成果を知り得たからなのです。私は子供の頃から「老けている」とか「大人びている」と言われることが多かったのですが、それではいけないと思い、意識してさまざまな分野の書籍をあさり、もっと威厳を減らせないかと経験を積み続けた。お陰で今や、JR の駅や空港で海外の方や、高齢者どころか若い女性にまで気軽に声をかけてもらえるようになりました。残念ながら、医学の分野では 10 年前に絶対に間違い無いと確信して発言したことが、実は完全に誤りだったと言うことは少なくないのです。医療者とクライエントが互いに納得して回答に至るためには、「今回は、お互いに保留」の方が正しい場合もあると思います。有り難いことに、最近の若い医療者は、医師や看護師に限らず、クライエントの話を非常に良く聞いてくれるようになったと感じています。電話の受け答えもしっかりしているなと感心することが多いです。この点では、私はとても明るい未来が待っていると考えています。でもコロナ禍が続き、若い医療者の心身の疲労が続くと、周りや自分自身が見えなくなることもありますから、私たち年長者が彼等をいろいろな形で支援する必要があります。

【脳外科医からのコメントと、水頭症慢性期の実際】

担当の脳外科医には、ご家族への説明の前後に、文書で M さんの容態と私達が行なっている治療の内容、家族の意向を伝えました。「ご家族が希望されるなら、今までより麻酔と手術の危険性は高くなりますが手術も検討します。でも、それはご家族の理解と協力が前提になります。」という返事をもらいました。脳外科医のコメントを伝えると、ご家族はその内容を予想していたようで、以降も転院は希望せず一層熱心に面会を続けました。私も病状の変化にはその都度、説明と家族の意向確認をするよう心がけました。それでも自分達の判断に間違いはないか悩んだお母さんは、M さんの経過をよく知るご自分の内科かかりつけ医に相談し、「専門医を受診しないと決断した M さん一家は、極めて賢明だと思いますよ」と言われたそうです。

意思の確認が困難で排泄も含む ADL が全介助、つまり水頭症の典型的な症状である「認知機能や歩行能力の低下と尿便失禁」が普段からある M さんの水頭症が、いつ頃から悪化したのかは不明でした。それに M さんの水頭症は経過が長く、再発と再手術、さまざまな合併症を繰り返しているので病態は極めて複雑です。変化がなくとも、定期的に専門医を受診して CT などの画像検査を行なえば、ある時点で異変に気付いた可能性はありますが、新潟のように気候が不安定な地域で、数ヶ月に一度の検査のため、家族に専門医受診の付き添いを強い続けることにはさまざまな問題があります。不安を抱え受診し、疲弊して帰院する家族の様子を見れば、専門医と主治医の間で「次回は何かあったら受診」という案に落ち着くのは仕方がないことです。

意見（H さん　もと脳外科医　リハビリテーション科医）

脳外科に 8 回目の手術を前提にした受診をするか否かは、最終的にはご家族の意向を最優先すべきだと私も思います。手術の適応は非常に悩ましいところです。それに、M さんと過ごした家族の 50 年間に医療者が気軽に踏み込めるものではありません。むしろ患者さんと家族が適切な判断をするために援助することこそが我々の仕事なのでは、と最近のコロナ禍の中で気付かされたと思います。

意見（N さん　緩和ケア内科医）

医療者の中だけで通用する常識みたいなものにとらわれず、誰にでも理解できる言葉で患者さんや家族を支援する、場合によったら、残される家族に焦点を当てて支援することも終末期医療に限らず、我々に託された課題なのだと思います。これからも活きてゆかなければならない方達をどう支援してゆくか、と言うことですね。

回答

2000 年頃から、『科学的な根拠に基づく』というフレーズが世の中の合い言葉のようになり、医療界に限らず言語化や数値化ができて、合理的に見えるものに価値があり、そうできない非合理的なものは価値が無いという風潮が世の中を席巻して来たのではないかと思います。歴史的に見ても、人間は非合理的なもののために生き、死ぬことがあったということを忘れてはいけません。洋の東西によらず、我々は生と死に同じく花を手向けてきたわけです。

【お母さんの「止まってしまった時間」】

お母さんの過労を心配した、やはりひとりの母でもある看護師が、「お母さんが倒れたらMさんが寂しがるので、その前に休みを取りませんか」と勧めても、お母さんは必ずといってよいほど、「ありがとう。でも今さら言っても仕方がないけど、全てはあの子の異変に気付かなかった私の責任だから」と応え、50 年経ってもお母さんの自責の念は拭い去られていないようでした。「息子が熱を出して、N 病院に連れて行ったときから私の時間は止まってしまったの」と言ったお母さんにとって、Mさんのお父さんやお兄さん家族との時間は普通に流れても、Mさんとの時間の流れは完全に遮断され、再び動き出すことは無かったのでしょう。

乳児が髄膜炎に罹患した責任をその母親に求めることはできません。しかし私の経験でも、Mさんのお母さんに限らず世のお母さん達は、お子さんの病気や怪我の医学的な説明を理解できても、心でそれを受け入れることができず、責任を感じ、必要以上に自分を責めてしまう傾向があります。その後の水頭症の再発と再手術の大変さ、他のお子さん達より不自由な生活を過ごすMさんの姿は、いずれもお母さんにとって思い出には昇華できない、外傷に匹敵する記憶になったのでしょう。

急病の治療を受けた患者さんや家族が、後になって「最初に受けた医師の説明など、全く憶えていない。何が何だか分からないうちに治療が始まった」と言うことがあります。一般の方には理解し辛い言葉や情報が一度に押し寄せ、次から次へと書類に署名・押印を求められている現実は勿論ですが、家族の急病という強いストレスに耐え、自己を保つために「解離」や「健忘」という、こころの防衛的な働きを生じている可能性を念頭に置く必要があります。でも「自己防衛機制」とはいうものの、これは一種の病的な心理状態であるという配慮も我々に求められます。

意見（O さん　保育士）

私が言うのも何ですが、本間さんが「敢えて医療関係者以外の研究者が多い対人援助学会で問題提起を続けている意味は大きい」と言っているのを聞いて安心しました。仕事の場面だけでは無いのですが、常日頃から感じているのは「共感することの大切さ」で、「どうしてこんなになるまで放っておいたのですか」なんて発言、お医者さんだろうが、必要なわけがありません。そんなことは、言われなくてもお母さん本人が感じてしまうことだろうと、医療に携わる人達が想像できないのはとても悲しいです。誰も言わなくていいのに、言っても事態は良い方向に向かないのに、みんな言いたがることはありますね。

養護施設で働いていても、母が加害者とみなされて子が離されて、その母へアプローチする職員が、母を加害者として対応していたら、何も解決しない。そのことが、ずっ

と私の中で引っ掛かっていて。保育園でも、先生たちは、母親の短所に見えることばかりに目がいって。力不足に見える母たちでも、自分なりの一生懸命でやっていて、「大変よね、無理しないでね」の一言があれば頑張れるのに、と思うことが多いです。

意見（H さん　助産師）

お母さんが自分を責めてしまう気持ちはよく分ります。そして、そのお母さんの気持ちが「何かを手放したように」に変わったのは、自分の家族が亡くなった時のことを思うと何となく分るような気がします。お母さん個人に問題があるように見える場合でも、支援者が自分に関わる経験を通して見直してみると、その大変さに驚くことがあると思いますね。

回答

例えば、コロナウイルス感染者の情報開示は、患者さんが「さらし者」になっているように思えることがありますが、それは市民が自分たちのおかれた環境を正しく理解し、感染を蔓延させないために大切な手続きでもあります。問題は、感染者の動向を事実として究明はするが、感染者や市民の感情をフォローすることにも配慮をしているかどうかです。育児・保育の話しに戻りますが、子供がいつかできる可能性があるカップルから、婚姻関係にかかわらず子供を授かった方達の妊娠と出産、その後の育児と周辺の生活変化などを気軽に対人援助のスキルがある保健師に相談できる「ネウボラ」[1] というシステムが、オープンダイアログで有名なフィンランドにはあります。少子高齢化を喫緊の課題に挙げる我が国でも見習うべき取り組みであり、国のシステムとして健全に運営されるようになれば、波及的に社会保障費の適正利用にもつながるのでは無いでしょうか。

【医療者の説明とクライエントの認識の差】

急ぎ治療方針を決定する必要があるときの説明こそ、クライエントがその内容を理解できることは勿論、選択肢のどちらかにウエイトを置きすぎ無いことが大切です。そのためには、こちらが求める回答を押しつけないように配慮しながら、いろいろな意味を含む「分かりました」のひと言を待つ時間を惜しんではいけません。また、一人では解答し難い問題は、責任のある複数の家族に説明すると不安が分散し、考えがまとまりやすくなることがあります。「手術を受けないともっと大変なことになると言われて何度も手術を受けてきました。でも、手術はうまくいったと言われたのは有り難いのですが、結局は良くならな

かったです。手術がうまくゆくのと、息子が良くなるのは別なことなのでしょうか」と M さんのお母さんは私に問いかけました。医療者が理解を求め説明していることを、クライエントは自分の価値観と言葉で解釈し、認識するという点にも注意したいものです。

臨床の現場では、病気や怪我を「治して欲しい」とクライエントに言われても、学術的・経験的に考えれば良くならない可能性の方が高いと予想される場合があります。このような時、特に無言で「必ず治せるはずですよね」と問いかけられる時の医療者側の葛藤を、何らかの病気を治療中の患者さんと家族だけではなく、いずれ患者さんやその家族になりうる健康な市民にも分かりやすい形で伝えておく必要があります。これは医療が無力であると宣言することとは違います。誠意を持って、医療は全能ではない、それより「私たちの生と死について一緒に考えよう」と呼びかける姿勢が大切なのだと思います。医療者に限らず、弱い立場にあるクライエントを支援する対人援助職にとって、「全能感」はけして漂わせてはいけない雰囲気だと申し上げたい。

この項で、私は常よりも断定的な物言いをしています。何故ならば、それは私の 36 年間に亘る臨床経験に対する自分自身への箴言でもあるからです。

【M さんとお母さんのこころを想像する】

話しを M さんに戻します。色白で面長、眉目秀麗な M さんが時に見せる恥ずかしそうな笑顔はスタッフの心を和ませ、お母さんの希望もあり大半の病棟スタッフが M さんに子供の頃からの愛称で呼びかけていました。相手への敬意を忘れず、当人やご家族が不快に思わなければ、このような呼びかけを「自己愛同一化」や「逆転移」と切り捨てるのは適切でありません。短いおつきあいでしたが、私は M さんの表情や顔色から「自己の成り立ちや病に対する怨み」のようなものを感じることは無く、むしろ「今日も楽しそうだな」と思う日が殆どでした。紳士たる者、かくあるべし。そんな M さんも度を超した愛着は好まず、時には顔を背けて怒りの表情を見せ、うなり声を挙げて顔を赤らめ歯を食いしばり、猛烈な抗議をしました。意思表明が困難な患者さんの、素直な「感情」や「意思」の表現は尊重されるべきです。

一方、病棟でお母さんに会えば、M さんが赤ちゃんの時に髄膜炎になり新潟市内の基幹病院へ駆けつけた時のエピソードに始まり、最後は決まって M さんの苦難は全て自分の至らなさが原因だった、という話になります。しかし肺炎や尿路感染を繰り返し、どうやら病状変化が不可逆的な状態に変わりつつあると、私がお兄さん達にも説明した時期から、お母さんの中で「どんな無理をしてでも、息子にできることは全てしてあげたい」と言う気持ちに微妙な変化が生じ、M さんの終末を見据えて現実を直視するようになった、と私は感じました。この時期、複数の同僚が私と同じ印象を受けたそうですが、そのように我々が感じる根拠はどこにあったのでしょう。「自分も女性であり母であるから」という意見があ

りましたが、私はその条件を満たしていません。お母さんの、状況に即した判断の変化に共感することができたのは、その時の私達が、キャロル・ギリガン [2] の述べるように、普遍的な原理に照らし善悪を判断する男性的な道徳判断よりも、お母さんやほかのご家族のように困難な状況に取るべき援助関係を基軸とした視点とも言える女性的な道徳判断の方がふさわしいと判断したからかも知れません。

意見（Obさん　循環器内科医　リハビリテーション医）

小さな子供の頃、というか胎児の頃から心臓の重篤な奇形を持って生まれる方もいます。そのような患者さんの家族には「危険性があり、成功の可能性が高くなくともできることは何でもして欲しい」と言う方がおり、M さんのお母さんのお気持ちは医師である私もよく理解できます。むしろ、M さんとお母さんのようなこころの変化を遂げられない方は多いと思います。

意見（O さん　保育士）

MSW をしている夫のお母さんが入院した時に、主人は医師には医師の立場があって、そういう母性的というか、誰かをフォローする部分は必要じゃない、というスタンスでした。夫の職場での立場もバイアスになっているのは分ります。でもそれじゃ、私みたいなクライアントには何も伝わらないし、病院のスタッフに対する信頼も生まれないと思います。自分の経験を踏まえ、Mさんのお母さんが、本間さんたちスタッフを信頼できたことが、何よりの力になったのだと私は確信しています。日々進歩する医学の知識を持った上で、科学的ではない部分にも目を向け、更に患者さんやそのご家族の苦悩に寄り添って、何年経っても価値のあせない、人と向き合う為の最善の方法を模索し続けることは大切だと思います。本間さんが「M さんのお母さんの心の変化はどこにあったのだろう？」と投げ掛けておられた部分がその後も常に頭の中にあって。立場が変われば「事実」や「根拠」が大事になるのは分りますが、その場面で使う言葉ひとつで相手の捉え方は変わることにも注意を払うべきだと思います。先の回答の中で、子育て環境が孤立しない為の取り組みがされているフィンランドの例についても教えてもらいましたが、そのシステムが運用される上で「相手の意見を批判したりせずに、不安や葛藤を汲み取って安心させようとする姿勢」が大切だと思いました。本当にそこが大きいと思うのです。

回答

O さんが指摘された「不安や葛藤をくみ取って安心させようとする姿勢」は、「ネウボ

ラ＝アドバイスの場所」が、社会制度でもあり信頼と支援を生む対話を根本にしていることからも理解できますね。

お二人にご指摘いただいたことは、私自身がもう少し時間をかけて検討すべき内容を含みます。ユング派の心理学者である河合隼男先生が事例検討について、クライエントとの守るべき秘密を開示することのすまなさ、それを客観的に考え客観的に表現せざるを得ないすまなさ、生木をそのまま家の材料に使えないように、対象を少し乾燥させるくらい時間をおかなければならない、ある意味クライエントを殺してしまうすまなさ[3]について述べています。M さんが亡くなって時間の浅い今の段階で明らかにできない部分がありますから、回答のようなものに安易に飛びつかないということも大切です。

【書き換えられた物語】

「今まで 50 年以上この子を看てきましたが、夫のこともありますし、どうか先生、今度ばかりは、私たちを最期までこの病棟にいさせて下さい」と言ったお母さんは、それまでほとんど口に出さなかった認知症のご主人のことも話して下さるようになりました。「元気な頃は、夫はあまりあの子のことを心配していないような顔をしていました。でも、あの人は誰よりも息子のことを気にかけていたのです」さらに、「私が息子より先に死んでしまったら、息子の嫁達にまで面倒をかけてしまうので、私は何とか息子より長生きをしなければならないのです。」そんなお母さんの言葉に対し、私たちができることは、ただ耳を傾けることだけでした。

そのひと月後、呼吸困難や痙攣は水が引くように収まり、M さんは醒めることのない永遠の眠りにつきました。

【エピローグ、この研究の説明と同意】

ご家族とともに、安らかな表情で M さんが病院を退院してからしばらくして、お母さんは両手に沢山のお菓子が入った袋を持ち、病棟に挨拶に来られました。お葬式だけでなく、ご主人やお孫さんたちの世話で忙しいだろうに、お母さんはいつもよりほんの少しだけおめかしをされ、丁寧にお辞儀をしてから、お菓子とともに喪主である長男さんのお手紙を差し出されました。その手紙は、これまで M さんの療育に携わった学校の職員やお友達、病院関係者へのあたたかい感謝の言葉に始まり、「弟にとっては苦難の多い生涯だったかも知れませんが、私たち家族は弟から数え切れないほどの幸せをもらいました。いっぱい頑張ったね、ありがとう」という M さんへの呼びかけで締めくくられていました。

私と担当看護師が、M さんとご家族の物語を我々の学びのテーマにさせてもらいたいとお願いしたところ、慈愛に満ちた笑みをたたえながら、お母さんは即座に同意して下さいました。面談、対話、そして告白も一度きりで人の温もりやその場の雰囲気を切り離すことができない「生けるものの声」です。それを繰り返し、他者や過去の自分自身とやりとりした最後の最後の段階で、お母さんは M さんの死を受け入れ、つらい記憶をかけがえのない思い出に昇華されたように私には思えました。私たちは、改めて貴重な学びの機会を与えて下さった、M さんとお母さん、そしてそのご家族が過ごした大切な 50 年に心から感謝いたします。

意見（H さん　助産師）

出産を援助していると、特定の宗派や教義ということではありませんが、人が感じ、思う「宗教性」はとても大切なのではないかと思う場面が少なくありません。

回答

自分の身近な人に病気や災厄が降りかかるとき、何かおすがりできる対象があれば「宗教でもモノでも何でも良いので」と思うのは人の常でしょう。階下へ降りようと足を踏み出した人が、そこにあるはずと思っていた階段がなかったら大変なことになる。「ここから先に階段はない」と黄色いテープを貼りめぐらせ、看板を出すような役割を果たすのが宗教なのかも知れません。そんなものは科学的でも何でも無い、取るに足らないと、援助をする人が思ってしまうのはとても危険なことです。

意見（O さん　保育士）

本間さんは宗教学的なお話や男性的道徳観、女性的道徳観にも目を向けられていたからその視点に便乗させてもらうと、キリスト教の「無条件の愛情と受容の精神」は、人の不安や恐怖を和らげる気がします。昔、指導を受けた養護施設の施設長さんが「人間は愛されていると実感することが大事」と強調されていたことを思い出しました。

回答

M さんのお母さんが、お兄さんたちと一緒に私がした病状説明を聞いた時、本当に「不可逆的な、もう取り返しがつかない病態」と思ったかどうかは難しいところです。いや、むしろ「一縷の望み」を捨てきれなかったでしょう。一方で、お母さんの下には 50 年という長きに亘り、さまざまな情報が沢山集まっていたことは確かなので、私にとっても

何がお母さんの気持ちを変えるきっかけになったのか興味深いところではあります。

神学者の R.オットーが言う「ヌミノーゼ」[4] や浄土宗系仏教の「他力」[5] と同質の、ある方向と力を持った言葉が、感受性が極限まで高まったお母さんの心に届いた瞬間に変化を生じさせたのかも知れない。この事例検討をまとめるにあたり、参考にしたのは浄土真宗の『王舎城の悲劇』[6) 7) 8)] をもとにした「阿闍世コンプレックス」[9) 10)] という概念です。母の「今、自分が子供を持つことが適切なのか、でなければこの子を」という葛藤と、子の「自分の成り立ち、あるいは成り立ち以前」に対する怨みがこの心理的複合体の主要な意味合いと考えてもよいでしょう。私は、お母さんが M さんやご家族を思う気持ちは、M さんが亡くなった今でも変わらないと思います。ただ、M さんの病と生命に対するお母さんの気持ちが変わったと、我々医療者側が感じるようになった「きっかけ」について考えてみたい。ひとつは数年に亘る M さんの療養を支えたスタッフには、合理性や科学性、あるいは道徳に基づいた理屈より、M さんのお母さんやお兄さん達の感覚や情念に近い、前述の C.ギリガンの言う母性的な倫理観に基づく判断が浸透した環境に身を置いていたのではということ。次に、お母さんの M さんに関わる感受性は極限のさらにその先端まで研ぎ澄まされ、「何ものか」が夕立を連れ去る稲妻のようにお母さんに働きかけた可能性。確かに、私を含む病棟スタッフはその稲妻を引き寄せた「避雷針」の役割を果たした可能性はあります。我に返り、翻心することを「雷に打たれた」と言いますが、お母さんに、そのような状況が形成されたのでしょう。

人間としても医師としても私よりはるかに優れた多くの方達が、50 年という時間をかけて心血を注ぎ治療した M さんとそのお母さんに、最後に現れた私という存在や、その言動がきっかけで大団円をもたらしたとはとても考えられません。せいぜいが「避雷針のさび」というところでしょう。ひょっとして、それこそが私が修練の果てにたどり着いた「威厳の無さ」のなせる業だったのなら、これ以上に有り難いことはありません。

【結語、コロナ禍に思う】

コロナ禍により、我々は余暇の過ごし方から研究活動まで見直しを求められ、初めてビフォー・コロナの時代に繰り返してきた「度を超した背伸び」という過ちに気づきました。いつの間にか始まり、終わりが見えない「飢饉や旱魃」のような危機の中、コロナウイルス感染者や、各方面の最前線で奮闘している方達に対する差別や、「自粛」を盾にしたヘイトクライム的な言動に共鳴した者がいる一方で、弱い立場にある障害者や高齢者への配慮を求める草の根的な取り組みから、困窮する他者に直接手を差し伸べようと行動した勇気ある人々が多く存在したことにも目を向ける必要があります。

コロナ禍の現在、差し入れやお見舞いはおろか、わずかな時間の面会すら厳重に制限される医療機関や介護・福祉施設では、感染の可能性がさほど高くない方達さえ「入院や入

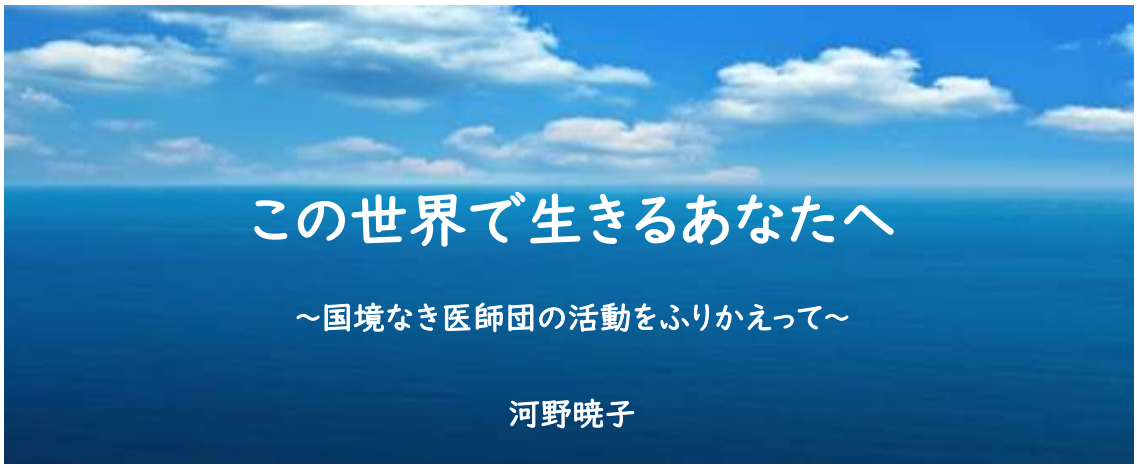
所は今生の別れ」とばかり涙にむせび、高齢者や障害者が家族や友人との別れを惜しむ光景を日々、目の当たりにしています。私は今回の事例を通し、コロナ禍で難しくなった、「幾度となく会い、語り合うこと」の意味について考え、気付いたことが二つあります。

一つは、実際に会って語り合う回数や時間より、人々の喜びや悲しみの根底を流れる、夢や思い出と同じ要素の「何ものか」が、お母さんのこころの有り様を変える上で重要な役割を果たしたのではないか。それはおそらく、過去のお母さん自身に「許し」として働きかけたのだろうということ。二つめに、コロナ禍で、特にMさんのお母さんのような境遇の方は感受性が極限まで高まり、醸成されたその「何ものか」がリモートでも、あるいはリモートだからこそ伝わりやすくなっているのではないかということです。

「すべて神聖なものは夢や思い出と同じ要素で成り立ち、時間と空間で我々と隔てられているものが、現前していることの奇蹟なのです。しかもそれら三つは、いずれも手で触れることができない点でも共通しています。」これは、Mさんに面差しが似た、作家三島由紀夫の長編小説『豊饒の海』[11]の一節です。禍福はあざなえる縄の如し、コロナ禍が少しでも福に転じることを願いつつ、二人の紳士Mさんに感謝して、私の事例検討を終えます。

参考文献

1. 髙橋睦子(2016)「ネウボラ　フィンランドの出産・子育て支援」かもがわ出版, pp14～82.
2. ファビエンヌ・ブルジェール(2020)「ケアの倫理―ネオリベラリズムへの反論(原山哲・山下りえ子訳)」文庫クセジュ, pp13～49.
3. 河合隼男(2011)「カウンセリングの実際（心理療法コレクションⅡ)」岩波現代文庫, pp136～138.
4. R.オットー（2010)「聖なるもの（久松英二訳)」岩波文庫, pp18～22.
5. 蓮如(1981)「昭和新刻　御文」法藏館, pp53～56.
6. 永原智行（2014)「阿闍世のすべて　悪人成仏の思想史」法藏館, pp5~12.
7. 三明智彰(2014)「親鸞の阿闍世観　苦悩と救い」法藏館, pp15～88.
8. 高崎直道（2014)「『涅槃経』を読む」岩波現代文庫, pp291～317.
9. 小此木啓吾（1991)「日本人の阿闍世コンプレックス」中公文庫, pp11~78.
10. 小此木啓吾・北山　修編（2005)「阿闍世コンプレックス」創元社, pp213～331.
11. 三島由紀夫(2018)「豊饒の海　(一)春の雪」新潮文庫, p61.



この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

Aさん、お元気でしょうか。パレスチナも寒い季節を迎えているかと思いますが、体調を崩されたりしていないでしょうか。私は夕日を見るといつもナブルスの町を思い出します。小高い山々に囲まれたすり鉢状の町は、夕方になると美しいピンク色の夕日に染まっていましたね。そんな美しい夕日が沈み、夜が訪れるのは怖かったことでしょう。夜はイスラエル軍が町に入って来て、家々を襲撃する時間でした。あなたの夫も、夜中に突然侵入してきたイスラエル兵に拘束され、それ以来あなたは気分が塞ぎ、食べられなくなり、よく眠れなくなっていましたね。そんな恐ろしい暴力から数カ月後、私たちは出会いました。私は国境なき医師団の心理士として、心理ケアのためにあなたを訪問するようになりました。もう10年以上経ちますね。

私がパレスチナに派遣された当時、国境なき医師団は、ガザ地区とヨルダン川西岸のナブルス、ヘブロンで、イスラエルーパレスチナ紛争による暴力被害者へ、医療ケアと心理社会的ケアを行なっていました。パレスチナは苦難の歴史を歩んでいたのですよね（今もその最中だと思いますが）。1948年のイスラエル建国で、70万人以上のパレスチナ難民が発生しました。中東戦争とインティファーダを経て、1994年からガザ地区とヨルダン川西岸がパレスチナ自治区として認められていきました。でも、自治区とはいうものの、実際にはイスラエルによる入植地が増え続けていましたね。ナブルスの周辺にもイスラエルの入植地がありました。町に繋がる道路全てに、イスラエル軍による検問所が設置されていたために、ナブルスに入るにも、ナブルスから出るにも、検問所を通らねばなりませんでしたね。誰もが「天井のない監獄だ」「ガザが大きな監獄なら、ナブルスは小さな監獄だ」と話していましたね。検問所では、移動のできない人と車がいつも長蛇の列を作っていて、パレスチナの人々のやり場のない怒りが渦巻いているようでした。

国境なき医師団における私の仕事は、紛争による暴力被害者へ心理ケアを提供することでした。とはいえ、すべての人に心理ケアが必要なわけではなく、パレスチナの人々は、半世紀以上続く紛争下の暴力に順応しながら暮らしているようにも見えました。町の通りには店が並び、子どもたちは学校へ行っていましたし、時間になればイスラム教のお祈りが始まり、ラジオからは流行りの音楽が流れていました。

イスラエル軍の検問所を通過できない、イスラエル軍が突然道路を封鎖するなどの暴力は、ナブルスの日常になっていましたね。近郊の村からナブルスの学校へ通う学生は、検問所を通過できずに欠席せざるを得ないこともありましたし、急病人の搬送ができず、命の危機にさらされる人もいました。そのような日常に加えて、もっと激しい暴力もしばしば起きていましたね。あなたの夫がされたように、夜中にイスラエル軍がやってきて、パレスチナ人を拘束したり、パレスチナ人の家を滅茶苦茶に破壊したりしていました。目の前で、夫や父親や息子が暴力的に連行される姿を見た家族は、強い憤りとともに、恐怖と無力感を覚えたことでしょう。イスラエル兵の暴力によって、殺されてしまう人もいましたね。自治区とは名ばかりで、イスラエルによる一方的な暴力行為が行われていることを、私はナブルスで目の当たりにしていました。

紛争下の日常的な暴力に順応していた人でも、新たな暴力にさらされると、よく眠れない、食べられない、不安でたまらない、小さなことに過敏になるなど、心理的な反応を示すことがありました。とても怖い思いをしたのだから当然なことです。このような反応は、大抵はしばらくすると治まっていきます。国境なき医師団のパレスチナ人ソーシャルワーカーが、暴力被害者やその家族を訪問するのは、暴力発生から数カ月が経ってからでした。その時、心理的な困難を抱え続けているため、心理ケアを受けたいという人に、私のような海外から派遣されてきた心理士が心理ケアを提供していました。私はパレスチナ人通訳と一緒に、相談者と会っていました。A さん、あなたはそんな相談者のうちのお一人でした。

初めてあなたを訪ねた時、案内してもらったお部屋はとても薄暗く、寒かったのを覚えています。パレスチナの建物は石造りで頑丈ですが、電気や灯油を節約するために日中でも薄暗く、冬は室内でコートが脱げないくらい寒いですね。あいさつを交わした後、あなたは硬い表情でポツポツと語り始めました。詳しいやり取りは覚えていないのですが、あなたの夫がイスラエル軍によって何度も拘束されていると聴き、私はあなたの恐怖や不安を受け止め、ひとりで子育てをしている苦労をねぎらったと思います。話の途中であなたは、「イスラエル軍による暴力は何度も受けている」と、子どもの頃に負った大けがの痕を私に見せました。「今まで誰にも見せたことがなかった」とおっしゃっていましたね。この日の訪問を終える時、「あなただから心理ケアを受けようと思った。ヨーロッパとかアメリカとかの心理士が来たら断ろうと思っていた」と、あなたから言われました。あなたには、欧米人がイスラエル側の人間に見えていたようです。国境なき医師団はどのような国や政権からも中立を保っているのですが、そうはいっても、簡単に信用することはできなかったのでしょう。

たしか、私はあなたを 7 回くらい訪問したと思います。3、4 回目の訪問で、あなたは「好きだった刺繍を再開したの」と、見せてくれました。パレスチナの伝統であるその刺繍は、白地に黒や赤の糸で花や木をモチーフに美しい模様が描かれていました。夫が初めてイスラエル軍に拘束された時も、あなたは刺繍をしながら気持ちを落ち着かせていたとのことでしたね。あなたと子どもが暮らす部屋には花や植物が置かれ、壁は刺繍のタペストリーで飾られるようになり、あなたの表情にも魂がこもってきているように感じました。夫が拘束されている状況は変わりませんし、あなたが子どもの頃に負った大けがの痕も元に戻ることはありません。それでも、凍っていたあなたの生活が溶け始め、再

び息を吹き返していました。最後の訪問で、A さん、あなたは私に刺繍をプレゼントしてくれましたね。夫が最初に収監された時に作っていたものでした。もちろん、そんな大事なものを受け取るわけにはいかないと私は断りましたが、「どうしてもあなたに持っていてほしい」とのことでした。私はその刺繍を今も大切に持っています。

こうしてあなたにお便りを書いていると、当時の記憶がよみがえってきます。あの頃のナブルスは、パレスチナ人同士の対立も表立ってきていましたね。紛争は目に見える暴力だけでなく、人と人との関係を破壊していくものです。突然夫が連行されたあなたの計り知れない不信感、孤独感や心細さを、私は改めて感じています。

私は今、紛争下における心理ケアとはいったいどんなものだったのだろうかと、ふり返っています。パレスチナでは、心理ケアを求める人々が大勢いました。それには、パレスチナで起きていることを知ってほしい、自分たちの苦しみを世界へ伝えてほしいという思いが含まれていたように思うのです。私は証人になることを求められていたのではないか、と考えています。

A さん、あなたのように自分ではどうすることもできない環境で生まれ、やり場のない怒りや悲しみを抱えている時、世界は不信に満ち溢れていたかと思います。そんなあなたへ、真摯に耳を傾ける者が海を越えてやって来ることは、あなたをエンパワーしていたのではないでしょうか。紛争下において人と人とが出会い、信頼できる関係を紡ぐことは、心理ケアの効果以上に、どれほど尊く意義深いものだったかと感じています。

A さん、あなたにけっして出すことのないお便りを書きました。

どうかご家族ともどもご無事でいらっしゃること、一日も早く紛争が終わり、誰もが笑顔で過ごせる日が来ることを祈っています。



夕日に染まるナブルスの町



イスラエル軍による破壊

＊個人が特定されないよう、A さんについては省略、改変してあります。

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

第43号の新連載は、河野暁子さんの「この世界で生きるあなたへ～国境なき医師団の活動をふりかえって～」。そして本間毅さんの「コロナ禍の中、幾度となく会い、語り合うことの意味を考える」の二つです。

執筆陣が増えて、ますます多方面の対人援助コンテンツが溢れてゆきます。11年も続けていると、様々な場所で本誌のもたらす意味が花開いているように思います。これからも人々の暮らす舞台全体に目配りの効いた連載を招きたいと思います。遠慮なく、執筆希望をお知らせ下さい。「連載すること」と「学会員になって頂くこと」だけが条件の執筆募集を常時行なっています。

43号の原稿締め切り直前が妻の百ヶ日だった。時の経つのが早いのか、そうでもないのか。2020年はコロナに振り回された一年だったが、私には忘れられない年でもあることになった。

そして長らく続けてきた東日本大震災家族応援プロジェクトが、ひとまず十年の最終年予定だった。しかしコロナ禍によってスケジュールは大きな変更を余儀なくされ、2021年に最終年を持ち越すことにした。

では2020年をどう過ごすか、思案の結果、昨今の必然のようにzoom開催が実行された。結果としてこれが、2021年以降、つまり10年を経た後の東北、特に福島との関わり方の今後の形を提示してくれた。村本邦子さんの連載にいずれ登場することになるだろうが、対人援助の営みは、様々な想定外を乗り越えて、息長く静かに積み重ねられていくものである。

編集員（チバ　アキオ）

ASMR（Autonomous Sensory Meridian Response）自律感覚絶頂反応(じりつかんかくぜっちょうはんのう)の話を息子たちがしている。心地よい音が話題になっている。これを書いている今、私がヘッドホンで聞いているのは台所での料理の音。グツグツ煮込み、包丁でまな板についた野菜を集める音、水を切る音…。はじめはそうでもないが、少し時間がたちメインのしていることに意識の集中が向くと、どこに今いるのかを失い、音に付随した記憶が脳の端に浮かんでいることに気づく。台所の音は、子どもの頃、熱を出して学校を休んでいるときを思い出す。勝手に気分は夕方。でも外を見ると真っ暗な20時過ぎの大学。家ですらない。若い頃はリラックスをしたくて、図書館でよく環境音の CD を借りた。カセットに録音したり、100 円均一にも置かれるようになると集めたり。秋田への帰省のため日本海沿いを車で走る時は、あえて車内を波の音にしたり、山道が続くときは小鳥のさえずる森の音にしたり。そんなことが長距離ドライブのストレスを軽減する。音を消すには音というのが一つのマスキング手段。タイヤの音、風切り音、エンジンの音に飽きるので、そういった音がちょうどいい。寝床で、湖を船で行く本を読んでいるときには湖のBGMもよかった。秋の虫の声、カエルの田んぼでの合唱、温泉の音…様々な音を YOUTUBE で聴いている。

コロナ禍で人の往来が減った生活が続く。行く場所が減ると景色も会う人も限定的で、当然日常にきく音も減っているだろう。音は近くにいかないと聞こえないものもある。日常生活に現れる他者が減ったことを「ズーム」で少しでも取り戻し、音を失ったことを「ASMR」でも埋める。これまでは当たり前に休みになると祖父母の家を訪問。当然そこで聞いてきた生活音がある。いつもなら訪問する年末年始。さて、どう過ごすか。ラインのビデオ通話では母が「もう会えないかもしれないね」と手をふる。何も起こらない時代も場所もないことを経験し、それでも前に進む私たち。

対人援助学マガジンの新展開プランが上がっている。ズームや音がキーになりそう。そんなプランも聞こえてくるのも今だからこそ。

編集員(オオタニ　タカシ)

マガジン 42 号の執筆者短信で、執筆者の小池英梨子さんが『えっ！？もう前回のマガジン発行から3 ヵ月も経つの？！って毎回思ってしまう』と書いておられたのを見て思わず笑ってしまいました。同じように思ったことのある執筆者の方も多いかもしれませんし、編集員の私も同じ感覚です。

日々の仕事とは別に、少し長めの周期性がある仕事を持っておくことが実は大事なのかもしれない、と思うようになりました。周期性のある仕事は、定期的に特定の

誰かと顔を合わせる機会にもなります。3 カ月に一度編集長と出会うのもそうですし、年に一度足を運ばせて頂いている福祉施設でもお馴染みの面々との再会があります。お互いのこれまでの経過も知っている関係の中で、“最近どうですか？”と近況の報告をし合い、また次の再会を予定してお互いの日々の中に戻っていく。お互いに変化したもの、蓄積したものも感じながら、一緒に時間を重ねていけることの豊かさを感じます。何となくですが、船が港に寄港するイメージが思い浮かびます。

昨年末に『執筆者と読者の集い』を企画・開催しました。いつも読んでいる連載の執筆者の方と直にお会いできるのは、感慨深いものがありました。コロナの影響で今年は前回のような合宿スタイルでは実施できませんが、このような企画も定例化できれば、1 年に一度の定点になるかもしれません。いつかお目にかかれる日を楽しみにしながら、今回も無事に紙面でご一緒できたことをとてもうれしく思っています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻43号

第11巻　第3号

２０２０年１２月１５日発行

http://humanservices.jp/

第44号は2021年03月15日
発刊の予定です。
原稿締切2021年02月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

この四人は京都府の児童相談所勤務時代、四万十川ゴムボート下りに初挑戦した面々である。左から、飯田博は亡くなった。川崎二三彦は子どもの虹研修センターで、今や日本の児童虐待ムーヴメントに、欠かせない人である。私はここにいて、鎌田得宏は今、京都市内の保育園に勤務している。

近年、アウトドアブーム、ソロキャンプブームで道具の話がやたら賑やかである。この当時、モンベル KK がまだスタートしたばかりで、浮かぶ防水バッグがえらく高かった記憶がある。

三十年も前、私がそそのかしていいおっさん達が揃って、四国の川を太平洋に向かって漕ぎ下った。これを皮切りに、いくつかの川を下りにいった。

川遊びは楽しい。特に水量の確保された当時の四万十川は、水中メガネで透明度の高い水中を見ながら流されていると、空を飛んでいるような気分にさせてくれた。

（２０２０／１２／１５）